



第30回  
全国 棚田サミット  
千枚田  
in 別府 

～ 棚田でウェル 想いと願いをコメて ～

報告書

# 第30回 全国 棚田サミット in 別府

～ 棚田でウエル 想いと願いをコメて ～

## 目次

開催風景 .....	2
共同宣言 .....	10
大会概要 .....	11
大会日程 .....	12
後援団体・来賓紹介 .....	13
開会式典 .....	14
事例発表 .....	21
シンポジウム .....	32
第1分科会 .....	45
第2分科会 .....	70
第3分科会 .....	90
第4分科会 .....	122
現地見学会・観光エクスカーション .....	141
閉会式典 .....	143

# 開催風景

## 開会式典



**主催者挨拶 小相澤 隆幸**  
 全国棚田（千枚田）連絡協議会会長  
 長野県上田市市長 土屋陽一 代理  
 上田市副市長



**開催地挨拶 長野 恭紘**  
 第30回全国棚田千枚田サミット  
 実行委員会会長  
 別府市長



**開催地挨拶 佐藤 樹一郎**  
 大分県知事



**来賓祝辞 古川 康 様**  
 棚田振興議員連盟事務局長  
 衆議院議員



**来賓祝辞 岩屋 毅 様**  
 前外務大臣  
 衆議院議員



**来賓祝辞 高橋 謙司 様**  
 内閣府地方創生推進事務局局長



## 当日会場の様子



オープニング ● ひめやま幼稚園



事例発表 **テーマ** 内成棚田の会活動報告 「内成棚田の保全維持活動について」 後藤 利夫 氏 内成棚田の会



シンポジウム ● 全国棚田（千枚田）サミット30回記念シンポジウム

【コーディネーター】中島 峰広 氏 早稲田大学名誉教授・棚田ネットワーク名誉代表



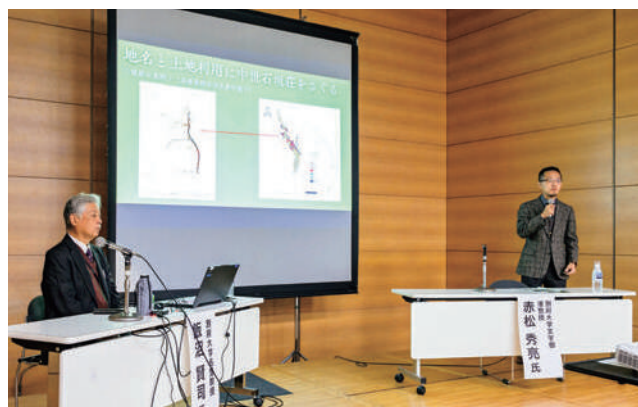
## 第1分科会 棚田ツーリズムの未来形 ～観光・健康・地域再生をつなぐ～

【コーディネーター】 齋藤 圭 氏 別府大学講師



## 第2分科会 石垣の記憶、内成の現在<sup>いま</sup> ～棚田から読み解く別府の景観史～

【コーディネーター】 飯沼 賢司 氏 別府大学名誉教授・赤松 秀亮 氏 別府大学准教授



**第3分科会 農村と都市をつなぐ “おいしい交流” ～棚田の風景を味に変える～**

[コーディネーター] 大坪 史人 氏 桃山学院大学准教授



**第4分科会 スマート農業で次世代に残したい農の豊かさ**

[コーディネーター] 濱 侃 氏 千葉大学助教



# 開催風景

## 現地見学会・観光エクスカーション・棚田マルシェ



閉会式典



共同宣言 **川島 千明氏**  
 内成榎田の会



御礼の挨拶 **長野 恭紘**  
 第30回全国榎田千枚田サミット実行委員会会長  
 別府市長

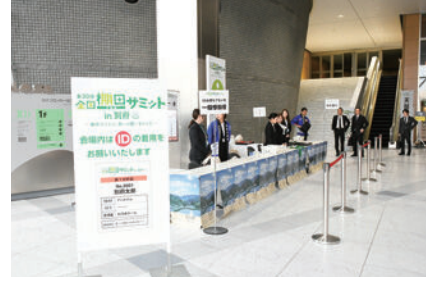
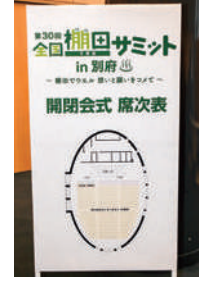


次期開催地  
 挨拶 **中野 祐介氏**  
 静岡県浜松市長



# 開催風景

## スナップ





## 第30回全国棚田（千枚田）サミット 共同宣言

私たち、棚田を守り、棚田に生き、棚田を愛する者たちは、大分県別府市に集い、「棚田でウエル 想いと願いをコメて」をテーマに、多くの課題を共有し、話し合い、理解を深め合う事で課題解決の糸口とした全国棚田（千枚田）サミットを開催しました。

棚田は、先人たちが幾世代にもわたって築き上げてきた日本の誇るべき歴史的・文化的遺産であり、その多面的機能は食料生産にとどまらず、美しい景観の形成、生物多様性の保全、水源涵養、国土保全など、私たちの生活に多大な恵みをもたらしています。しかし、過疎化や高齢化、有害鳥獣被害、気候変動などの課題に直面し、多くの棚田地域が存続の危機に瀕（ひん）しています。

このような状況の中、棚田地域振興法に基づく地域指定・計画認定、「つなぐ棚田遺産」の選定に加えて、担い手不足に対応するための二地域居住の促進など、棚田地域の更なる振興と発展を支援する棚田地域振興法の期限が5年間延長されました。

棚田は、先人たちから受け継いだ貴重な遺産であると同時に、未来世代へと引き継ぐべき国民共有の財産です。棚田の未来は、私たち一人ひとりの想いと行動にかかっています。この別府の地で新たに芽生えた絆を大切に育み、全国の棚田地域の発展に向け、想いと願いを込めて、ここに宣言します。

- 一 私たちは、棚田地域振興法の理念に基づき、地域の実情に応じた持続可能な棚田の保全と活用に取り組みます。棚田地域の未来を担う多様な人材の確保と育成に努め、地域内外からの新規就農者の受け入れを図ります。同時に、地域住民、行政、企業など多様な主体との連携を強化し、幅広い層の参画を促すことで、棚田の多面的機能を最大限に発揮させるとともに、棚田地域の活力を高めます。
- 一 私たちは、棚田での農業生産性向上と労働負担軽減のため、スマート農業の導入を進めます。同時に、先人たちから受け継いだ伝統的な農法や知恵を大切に継承し、新旧の技術を融合させた持続可能な棚田農業を目指します。
- 一 私たちは、都市住民や観光客など、多様な人々が棚田地域と関わる機会の創出に取り組みます。農業体験、エコツーリズム、教育旅行の受け入れなどを通じて、棚田の魅力を広く発信し、関係人口の拡大と地域経済の活性化を図ります。
- 一 私たちは、気候変動がもたらす影響に適応し、棚田の防災・減災機能を強化する取り組みを進めます。伝統的な水管理技術の継承と現代技術の融合により、災害に強い棚田づくりを推進し、国土保全に貢献します。

令和7年11月2日

第30回全国棚田（千枚田）サミット 参加者一同

**開催日程** 令和7年11月1日（土）～2日（日）

**開催地** 大分県別府市

**主催** 全国棚田（千枚田）連絡協議会

**主賓** 第30回全国棚田（千枚田）サミット実行委員会

**テーマ** ～棚田でウエル 想いと願いをコメて～

**開催趣旨** 大分県別府市にはつなぐ棚田遺産に選定された5箇所の棚田（天間棚田、内成棚田、大所棚田、堂面棚田、東山の棚田群）があります。

棚田は食料生産、伝統・文化、美しい景観、教育、国土保全など様々な機能を持っていますが、人口減少や高齢化の影響、地理的不利性などの理由により、棚田の保全はもとより地域コミュニティの維持が困難な状況になってきています。

全国の棚田関係者と先進事例の共有や、課題についての意見交換を行うことで、棚田の魅力を再発見し、棚田に関わることでより良い生活、人生につながることを発信するために、「第30回全国棚田（千枚田）サミット」を開催します。

**参加者数** 約1,000人

第30回全国棚田（千枚田）サミット  
オープニングムービー



## 大会日程

### 令和7年11月1日（土）

時間	内容	場所
9:30～	オープニング	ビーコンプラザ レセプションホール
10:00～	開会式	ビーコンプラザ レセプションホール
10:30～	事例発表 「内成棚田の保全維持活動について」	ビーコンプラザ レセプションホール
11:00～	シンポジウム 全国棚田（千枚田）サミット30回記念シンポジウム	ビーコンプラザ レセプションホール
14:30～	第1分科会 棚田ツーリズムの未来形 ～観光・健康・地域再生をつなぐ～	ビーコンプラザ レセプションホール
	第2分科会 石垣の記憶、内成の <sup>いま</sup> 現在 ～棚田から読み解く別府の景観史～	ビーコンプラザ 小会議室31
	第3分科会 農村と都市をつなぐ“おいしい交流” ～棚田の風景を味に変える～	ビーコンプラザ 中会議室
	第4分科会 スマート農業で次世代に残したい農の豊かさ	ビーコンプラザ 国際会議室
18:30～	参加者交流会	杉乃井ホテル 杉乃井ホール

### 令和7年11月2日（日）

時間	内容	場所
9:00～	閉会式	
10:00～	現地見学会・観光エクスカーション A. 内成棚田コース（昼食なし） B. 2つの棚田を巡るコース（昼食付） C. 2つの棚田と志高湖を巡るコース（昼食なし） D. 堂面棚田と別府観光コース（昼食付） E. 別府観光と天間棚田コース（昼食付） F. 天間棚田と別府観光コース（昼食付） G. 地獄めぐり・地獄蒸しコース（昼食付）	市内各所

後援団体

内閣府、総務省、農林水産省、国土交通省、環境省、文部科学省、全国知事会、全国都道府県議会議長会、全国市長会、全国市議会議長会、全国町村会、全国町村議会議長会、一般社団法人 全国農業会議所、一般社団法人 全国農業協同組合中央会、一般社団法人 全国消費者団体連絡会、日本生活協同組合連合会、全国土地改良事業団体連合会、一般財団法人 都市農山漁村交流活性化機構、一般社団法人 全国農業会議所 全国農業新聞、公益社団法人 全国農業共済協会、株式会社 日本農業新聞、大分県、大分県市長会、大分県町村会、大分県市議会議長会、大分県町村議会議長会、べっぴん日出農業協同組合、全国農業協同組合連合会 大分県本部、一般社団法人 大分県農業会議、大分県農業共済組合、大分県土地改良事業団体連合会

来賓紹介

- ◆ 棚田振興議員連盟事務局長 衆議院議員 古川 康 様
- ◆ 棚田振興議員連盟事務局長代理 参議院議員 進藤 金日子 様
- ◆ 前外務大臣 衆議院議員 岩屋 毅 様
- ◆ 衆議院議員 吉川 元 様
- ◆ 農林水産大臣政務官 衆議院議員 広瀬 建 様 (代理 秘書 武藤 享様)
- ◆ 参議院議員 古庄 玄知 様
- ◆ 参議院議員 吉田 忠智 様
- ◆ 内閣府地方創生推進事務局局長 高橋 謙司 様
- ◆ 農林水産省農村振興局農村政策部長 河村 仁 様
- ◆ 農林水産省九州農政局局長 緒方 和之 様
- ◆ 大分県知事 佐藤 樹一郎 様
- ◆ 大分県議会議長 嶋 幸一 様
- ◆ 大分県議会議員農林水産委員会委員長 森 誠一 様
- ◆ 大分県議会議員 戸高 賢史 様
- ◆ 大分県議会議員 猿渡 久子 様
- ◆ 大分県議会議員 榎田 貢 様
- ◆ 大分県農林水産部部長 瀧野 勇 様
- ◆ 別府市議会議長 小野 正明 様
- ◆ 別府市議会副議長 安部 一郎 様
- ◆ 観光建設水道委員会委員長 阿部 真一 様
- ◆ 観光建設水道委員会副委員長 松川 章三 様
- ◆ 別府市議会議員 野口 哲男 様
- ◆ 別府市議会議員 松川 峰生 様
- ◆ 別府市議会議員 市原 隆生 様
- ◆ 別府市議会議員 吉富 英三郎 様
- ◆ 別府市議会議員 加藤 信康 様
- ◆ 別府市議会議員 森山 義治 様
- ◆ 別府市議会議員 三重 忠昭 様
- ◆ 別府市議会議員 森 大輔 様
- ◆ 別府市議会議員 美馬 恭子 様
- ◆ 別府市議会議員 日名子 敦子 様
- ◆ 別府市議会議員 重松 康宏 様
- ◆ 別府市議会議員 谷口 和美 様
- ◆ 別府市議会議員 森 裕二 様
- ◆ 別府市議会議員 中村 悟 様
- ◆ 別府市議会議員 塩手 悠太 様

## 【主催者挨拶】

全国棚田（千枚田）連絡協議会会長  
長野県上田市市長 土屋陽一 代理

## 小相澤 隆幸

（上田市副市長）



皆さん、おはようございます。

ご紹介をいただきました、全国棚田連絡協議会の会長を務めております、長野県上田市から参りました、上田市副市長の小相澤隆幸と申します。

本来であれば、土屋陽一市長がこの場でごあいさつ申し上げる予定でございましたが、一昨日より体調を崩しましたため、大事を取りまして私が代わって参りました。

どうかご理解を賜りますようお願い申し上げます。

これほど多くの皆様にお集まりいただき、また公務ご多忙の中、多くのご来賓の皆様にご出席賜りましたこと、誠にありがとうございます。

先ほどビデオでもご覧いただきましたが、棚田地域をどのようにしていくかということにつきましては、国会議員の先生方、棚田振興議員連盟の古川先生、進藤先生をはじめ、多くの国会議員の皆様、そして地元大分県の佐藤知事、内閣府、農林水産省の皆様方の日頃からのお力添えをいただいております。

本日はご出席いただき、改めて心より御礼申し上げます。

そして全国各地から、この別府にお集まりいただきました皆様に、私の立場からも心より歓迎を申し上げます。

ようこそお越しくださいました。ありがとうございます。

まず、去年は私も長野県上田市で第29回全国棚田サミットを開催させていただきました。

皆様のご尽力により、500名を超える方々にご参加いただきました。

横のつながりを広げながら、大変力強いチームワークが生まれたのではないかと感じております。

本日と明日、第30回を迎える全国棚田サミットが、ここ別府市で、「棚田でウエル 想いと願いをコメて」というテーマのもと開催されます。

別府市には、先ほどご紹介がありましたように、「つなぐ棚田遺産」に選定された棚田が5つあると伺っております。

今年度は、棚田地域振興法が棚田振興議員連盟の皆様をはじめ、多くの方々のご尽力により改正・延長されました。

新たなステージへ踏み出す年であり、さらに30回という節目の年でもあります。

多くの棚田を有する大分県別府市で本サミットが開催されることは、大変意義深いことだと感じております。

全国の棚田地域、そして中山間地域では、担い手不足や高齢化、有害鳥獣被害など多くの課題が山積しております。

先ほどのオープニングでは、未来の担い手である園児の皆さんに参加いただき、本当に感動的なエールをいただきました。

思わず胸が熱くなる思いでございました。

実は昨年、上田で開催した際も、オープニングで棚田近くの豊殿小学校の児童生徒の皆さんが歌う「棚田ラブソディ」を流させていただきました。

後日、古川先生をはじめ国会議員の先生方にもお聞きいただきました。

そして本日は、上田の棚田から小学校5年生の彩音さんが、学校を休んでまでこの場に来たいということで、会場に駆けつけてくれています。

彩音さん、どこにいるのでしょうか。先生、少し立って手を挙げてもらえますか。

あ、いらっしゃいました。真ん中ですね。手を振ってください。

ありがとうございました。

古川先生からもお話がありましたように、未来を担う子どもたちは確実にいます。

この子どもたちに棚田を引き継ぐためにも、私たちが頑張っていかなければならないと改めて感じております。

昨年から、いわゆる「令和の米騒動」とも言われる動きがあり、米の価格が大幅に上昇しました。

しかし今後この状況がどのように変化していくのか、まだ予測が難しい状況です。

資材価格や人件費の高騰もあり、棚田の維持・活動を進めるうえで大きな課題となっています。

このサミットを契機として、棚田地域の振興に向けた活発な議論や交流が進み、多くの成果が生まれることを期待しております。

最後になりますが、本日この別府市でサミットを開催するにあたり、別府市の長野市長をはじめ関係者の皆様には、これまで準備の段階から多大なご尽力をいただいたことと存じます。

本当にこのサミットを、今日と明日の二日間、皆様とともに成功へ導いていきたいと考えております。

準備に携わってこられた皆様に、心より敬意と感謝を申し上げます。

## 【開催地挨拶】

第30回全国棚田千枚田サミット実行委員会 会長

別府市長 **長野 恭紘**



皆様、おはようございます。

第30回全国棚田千枚田サミット実行委員会会長であり、別府市長を務めております長野でございます。

本日は、私どものこの別府市において、記念すべき第30回全国棚田千枚田サミットを開催できますことを大変うれしく思います。

全国からこのように多くの皆様にお越しいただきましたことを、心より歓迎申し上げます。

本当にありがとうございます。

まずは、天候にも恵まれましたことを大変うれしく思っております。

もし天気が悪ければ、地元の国会議員の先生方から「お前の行いが悪いのではないか」と言われ続けるところでございましたので、ひと安心していただいております。

また、オープニングでご出演いただきましたひめやま幼稚園の皆さんのウェルカムパフォーマンスにより、すでにサミットは半分成功したのではないかと感じております。

皆様の心をしっかりとつかんでくれたのではないかと思っております。

改めて、皆様を心から歓迎申し上げます。

そして、多くのご来賓の皆様にもご列席いただきましたこと、心より感謝申し上げます。

さらに、多くの関係者の皆様、棚田関係者の皆様、生産者の皆様のお力添えのおかげで、本日を迎えることができました。

この場をお借りして、改めて深く感謝申し上げます。

今回、第30回という節目のサミットのテーマは、皆様の前に掲げられておりますとおり、「棚田でウエル 想いと願いをコメて」でございます。

「ウエル」がカタカナになっておりますのは、さまざまな意味が込められているためでございます。

先ほどのオープニングムービーでも紹介されましたように、well-beingの意味、welcomeの意味など、多様な思いを込めております。

棚田には、災害防止や食料確保という役割だけでなく、観光、教育、文化など、非常に多様な役割があると考えております。

オープニングムービーを拝見しながら、現場で懸命に努力されている皆様の思いに、私たちも何とか応えていかなければならないと強く感じたところでございます。

実は昨年8月の台風10号により、棚田地域は大きな被害を受けました。

棚田は、現状を維持するだけでも大変な状況であるにもかかわらず、甚大な被害を受けたわけでございます。

このサミット自体が開催できるのか、棚田農業を続けることを諦める方が出てしまうのではないかという思いもございました。

しかしながら、先祖代々受け継いできた棚田を、そして未来の子どもたちへ残していく棚田を、私たちが諦めてどうするのか。

そのような使命感を持ち、棚田を守り、そしてこのサミットをきっかけとして明るい未来へつなげていきたい。

その思いで、皆様とともに準備を進めてまいりました。

今回、エクスカージョンでは別府市の5つの棚田を実際に訪れていただく機会もございます。

ぜひ現地に足を運び、別府の棚田の魅力を体感していただければと思っております。

私自身、つい3日前まで瀬戸内国際芸術祭を訪れるため高松に行き、小豆島にも渡ってまいりました。

小豆島の中山千枚田の皆様は、本日この会場にいらっしゃいますでしょうか。

あ、いらっしゃいますね。

ようこそお越しくださいました。

小豆島の中山千枚田では、井口さんという前自治会長の方に大変丁寧にご案内いただき、中山農村歌舞伎の舞台なども見学させていただきました。

その際、「別府のような観光地でも棚田を守るのは大変なのですか」と尋ねられました。

しかしながら、先ほどの映像にもありましたように、棚田は維持するだけでも大変であり、さらに災害からの復旧、そして未来への継承という大きな課題があります。

一人、あるいは一つの組織だけで取り組んでも、決して解決できるものではありません。

行政も先頭に立ち、生産者の皆様、棚田関係者の皆様とともに、棚田を守り続けていく決意でございます。

この第30回サミットが、その大きなきっかけとなることを願っております。

改めて、本サミット開催に向けてご尽力いただいたすべての関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

そして、未来へつながるキックオフとなる素晴らしいサミットとなることを祈念申し上げ、私のごあいさつとさせていただきます。

ありがとうございました。

## 【開催県挨拶】

大分県知事 佐藤 樹一郎



皆様、おはようございます。

ご紹介いただきました大分県知事の佐藤でございます。

第30回全国棚田サミットが、ここ大分県別府市において盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げますとともに、全国各地から大分、そして別府へお越しいただきました皆様を心から歓迎申し上げます。

全国棚田連絡協議会会長を務めておられます長野県上田市の土屋市長、また副市長をはじめ、棚田振興にご尽力いただいている皆様、そして来賓としてご臨席いただいております棚田振興議員連盟の古川事務局長、国会議員の皆様、関係機関の皆様におかれましては、棚田振興に対し日頃より力強いご支援とご尽力をいただいておりますことに、改めて心より敬意と感謝を申し上げます。

また、実行委員長であります長野別府市長をはじめ、準備に携わってこられた皆様にも深く感謝申し上げますとともに、本大会の成功を心よりお祈り申し上げます。

大分県でございますが、耕地面積の約7割が中山間地域に位置しております。

起伏に富んだ地形や豊かな自然を生かし、日本一の生産量を誇るカボスやほおずき、西日本一のネギ、さらに県のオリジナル品種であるイチゴ「ベリーツ」など、大分県を代表する農産物が数多く生産されています。

とりわけ棚田地域では、昼夜の寒暖差を生かして風味豊かな米づくりが行われております。

しかしながら、先ほど映像でもご覧いただいた通り、棚田を含む中山間地域や農業・農村では、高齢化や人口減少など多くの課題に直面しています。

こうした状況を踏まえ、昨年、県の長期総合計画の部門計画として「おおいた農林水産業元気づくりビジョン2024」を策定いたしました。

このビジョンでは、中山間地域における農産物の供給機能はもちろんのこと、国土保全、水源涵養、自然環境の保全、良好な景観の形成など、多面的機能の発揮を重視し、地域の特性を生かした農業・農村の活性化を進め

ていく方針を掲げております。

また県では、会員制ボランティア組織である「豊のくに棚田サポートくらぶ」を設立し、棚田の保全や振興を側面から支援する取り組みも進めています。

さらに県内には、農林水産省の「つなぐ棚田遺産」に認定された地域が10か所ございます。

これらの地域では、地元住民の皆様を中心に、田植え体験や稲刈り体験などの活動を通じて、都市部の住民との交流を進めながら棚田の保全に取り組んでいます。

本サミットでは、生産面や観光面に関する事例発表、分科会などが予定されています。

全国共通の課題や、各地域で工夫を重ねて取り組んでおられるさまざまな事例について、情報共有や意見交換が行われることと思います。

その中で新たな気づきが生まれ、「自分たちの地域でも取り組んでみよう」という新しいアイデアにつながることを大いに期待しております。

このような取り組みを通じて、棚田地域の貴重な景観や文化が、子どもたちの世代、そして孫の世代へと継承されていくことが大変重要であり、私たち皆で取り組んでいく必要があると感じております。

別府市は皆様ご存じの通り、大分県を代表する観光地であり、別府八湯と呼ばれる八つの温泉を楽しむことができる世界的にも有名な温泉都市です。

皆様はサミットのことでお忙しいことと思いますが、この機会にぜひ別府の魅力や食の魅力、そしてエクスカーションで訪れる棚田の美しさを体感していただき、その魅力を全国へ持ち帰っていただければ大変ありがたく思います。

結びに、全国棚田連絡協議会のますますのご発展、本サミットの大成功、そしてご出席の皆様のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げ、お祝いのごあいさつとさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。

ありがとうございました。

【来賓祝辞】

棚田振興議員連盟 事務局長  
衆議院議員

古川 康 様



皆様、おはようございます。

ただいまご紹介を賜りました、超党派の棚田振興議員連盟で事務局長を務めております衆議院議員の古川康でございます。

本来であれば、鶴保会長がぜひ出席したいとのことでしたが、やむを得ない事情により欠席となりました。

私の選挙区は佐賀県でございますが、「大分から近いのではないか」と言われながらも、実際には2時間半ほどかかりました。

改めて、交通インフラのさらなる発展の必要性を感じたところでございます。

本日、全国から多くの皆様にお越しいたいただき、第30回全国棚田サミットを開催できますことを大変うれしく思っております。

開催にあたりご尽力いただきました全国棚田千枚田協議会の土屋陽一会長をはじめ関係者の皆様、そして何より本日お越しいただいた皆様に対し、心より敬意と感謝を申し上げます。

棚田という存在は、万葉集にも登場いたします。

当時は「棚田」という言葉ではなく、「山田」という表現で記されています。

奈良時代頃から、山の水を利用して田をつくるという営みがこの国で続けられてきました。

さまざまな歴史の変遷を経ながら形を変えつつも、長い年月にわたり、その営みは継続されてきたわけでございます。

しかしながら、今から約30年前に棚田サミットが始まった当時は、「この営みを将来にわたって続けることができるのだろうか」という問題意識がありました。

当時は「棚田」という言葉自体が現在ほど一般的ではなく、そもそも棚田とは何か、というところから議論が始まったと伺っております。

こうした中で、まず棚田の価値を検証していこうということで、「棚田百選」が実施されました。

その盛り上がりを受けて、私は自民党の議員でございますが、自民党の中でも「棚田を守るための法的枠組みが必要ではないか」という議論が進められました。

その結果、超党派の棚田議員連盟が発足し、令和元年に棚田地域振興法が制定されることとなりました。

この法律は全会一致で成立し、その後5年が経過いたしました。

そして5年ごとの見直しを経て、今年4月から改正法が施行されております。

今回の見直しにおいては、これまでの5年間の実績を踏まえ、何が不足しているのか、さらに何を強化すべきかという点が議論されました。

その中で例えば、指定棚田地域内の土地の処分手続きについて、より迅速化してほしいという声などもいただきました。

また、先ほどのムービーにもありましたが、地域にお住まいの方だけでなく、外部から関わってくださる方々の存在も非常に重要であります。

これを最近では「関係人口」と呼んでおりますが、さらに最近の考え方としては、「二地域居住」という形で棚田地域に関わっていただく方々を増やしていこうという動きもございます。

そのため、二地域居住の取り組みを棚田地域振興法の中にも位置づける形で制度化をいたしました。

このように、棚田というものが、我が国の大きな政策の中に位置付けられつつあることを実感しております。

本日も、国の関係省庁から多くの幹部の皆様にご出席いただいております。

農業という観点では、農林水産省が中心となって取り組んでおります。

しかしながら、この棚田地域振興法の主務大臣は内閣総理大臣であります。

本日は内閣府からも関係者が出席しております。

つまり、これは一つの省庁だけの取り組みではなく、内閣総理大臣をトップとして関係省庁が連携し、棚田地域を守っていくという国家的な取り組みであるということでございます。

また、この法律は単に棚田でのお米の生産を守るだけのものではありません。

棚田地域全体を振興していく、すなわち地域の暮らしや文化、環境を含めた地域全体の価値を守り、発展させていくことが大きな目的となっております。

こうした営みを次の時代へつなげていくことが重要であり、私は棚田地域で営まれている農業の営みは、まさに国宝級の価値があるものだと思っております。

その国宝級の財産を、皆様の力によって次の時代へとつないでいきたい。

今回の法律改正が、実際にどのように役立つのか、あるいはまだまだ不十分な点があるのか、ぜひこのサミットを通じて、現場の皆様のご意見をお聞かせいただければ幸いです。

本日は、多くの国会議員の先生方にもお越しいただいております。

大変ありがたく思っております。

皆様方の代表として、国政の場において棚田地域の振興のためにしっかりと取り組んでまいりますことをお約束申し上げます、私からのごあいさつとさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。

## 【来賓祝辞】

前外務大臣  
衆議院議員 **岩屋 毅** 様



皆さん、おはようございます。

ただいまご紹介をいただきました、岩屋毅でございます。

本日は、この別府市において第30回全国榎田千枚田サミットが盛大に開催されますこと、誠におめでとうございます。

私はこの別府が地元でございますので、演台にお並びの皆様を、長野市長とともに心から歓迎申し上げます。

また、長野県上田市の市長様、そして実行委員会の地元別府の長野市長をはじめ、本サミットの開催にご尽力されました関係者の皆様に対し、心から敬意を表したいと思っております。

先ほど、榎田振興議員連盟の古川事務局長から榎田地域振興法についてのお話がありました。

この法律が制定されてから数年が経過しましたが、その間、全国各地において、今日お集まりの皆様がさまざまな取り組みを進めてこられたことと思っております。

今回のサミットを通じて、そうした知見や経験を互いに共有し合い、さらに活動を活性化させていただきたいと心から願っております。

榎田は、確かに景観として非常に美しいものであります。

しかし、それ以上に私が思いをいたしますのは、この榎田を長年にわたって耕作してこられた先人たちのご苦労であります。

山の斜面に田んぼをつくるということ自体、大変な労力を伴う作業であります。

そして、その場所で耕作を行い、収穫を行い、そのたびに斜面を上り下りしながら作業を続けてこられたわけでもあります。

榎田を眺めるとき、私はそのような先人の努力の積み

重ねを強く感じるのであります。

実は、10日ほど前まで外務大臣として海外を訪問しておりました。

アメリカ大陸やヨーロッパの穀倉地帯に行きますと、どこまで行っても地平線しか見えないような大平原が広がっています。

それを見ると、日本でいう平野は、世界的に見れば決して広いものではないということを実感いたします。

我が国の国土の約7割は山や森林であります。

その中でも大分県は、全国で最もトンネルが多い県であります。

それだけ起伏に富んだ地形であるということでもあります。

そのような土地において、先人たちは努力を重ねながら耕作を続けてこられました。

その営みの中から、地域独特の文化や祭りが生まれ、そこには日本人の勤勉さ、器用さ、そして創意工夫の精神が育まれてきたのだと思っております。

先ほど古川事務局長からは「国宝級の価値」というお話がありましたが、私は、世界遺産という言葉になぞらえるならば、「日本の世間遺産」と言えるのではないかと考えております。

この大切な財産を、皆様の方でしっかりと守り続け、日本の素顔とも言えるこの風景を次の世代へと引き継いでいただきたいと心から願っております。

結びに、皆様の今後ますますのご活躍と、本サミットの大成功を心よりお祈り申し上げ、私のごあいさつとさせていただきます。

本日は誠におめでとうございます。

## 【来賓祝辞】

内閣府地方創生推進  
事務局局長

高橋 謙司 様



皆さん、おはようございます。

ただいまご紹介にあずかりました、内閣府で地方創生推進事務局長を務めております高橋謙司と申します。

第30回全国棚田サミットの開催にあたり、一言お祝いのごあいさつを申し上げます。

はじめに、本日のサミットの開催に向けて準備にご尽力いただきました全国棚田(千枚田)連絡協議会の皆様、また地元別府の皆様、心より御礼申し上げます。

皆様のご尽力に深く敬意を表しますとともに、こうして多くの方々のご出席のもと、本サミットが盛大に開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

棚田につきましては、先ほどからご紹介がありましたように、農産物の供給にとどまらず、国土の保全、水源の涵養、生物多様性の確保、良好な景観の形成、さらには伝統文化の継承など、さまざまな機能を有しております。

このように多面的な価値を持つ棚田は、後世に引き継いでいくべき国民的財産であると考えております。

こうした多面的な役割を担うことから、私ども内閣府においても担当させていただいているところでございます。

国といたしましても、令和元年に議員立法により制定されました棚田地域振興法に基づき、関係省庁が連携しながら、地域の創意工夫によるさまざまな取り組みを支援しているところでございます。

この棚田地域振興法につきましては、先ほど古川先生からもご紹介がありましたとおり、本年3月末に法の期限を迎えましたが、本日まで来賓としてご臨席いただいております国会の先生方のご尽力により、法改正が行われ、5年間の期限延長がなされたところでございます。

これにより、引き続き全国各地における棚田地域の振

興に向けた取り組みをしっかりと支援していくための枠組みが整えられたものと考えております。

また内閣府では、今年度、地方創生交付金という地域の取り組みを支援する制度を活用し、さまざまな事業を後押ししております。

例えば高知県においては、棚田の農道整備や観光客誘致に向けた取り組みへの支援を行っております。

また、兵庫県や山口県においては、都市部の大学のサークル、例えば神戸大学や山口大学の学生の皆様と連携し、棚田の保全や耕作放棄地の復旧に取り組む事業などを採択し、応援させていただいております。

地方創生の取り組みの主役は、現場で日々活動されている自治体の皆様、地域住民の皆様、NPOをはじめとする関係団体の皆様、そして民間企業の皆様など、多様な担い手の方々でございます。

現場の皆様のお声を丁寧にお伺いしながら、私どもとしても棚田地域の振興に向け、引き続きしっかりと取り組んでまいりたいと考えておりますので、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

結びに、本サミットのご成功と、皆様方のご健勝ならびにご発展を心より祈念申し上げ、私のごあいさつとさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。

## 事例発表テーマ

## 内成桐田の会活動報告「内成桐田の保全維持活動について」

後藤 利夫 氏 内成桐田の会

ただいまご紹介にあずかりました、「内成桐田の会」の後藤と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

先ほど皆さんにお配りしたこのざぼんサイダーを少し飲んで、口を潤したいと思ひます。

とてもおいしいので、途中でまた飲むかもしれませんが、その際はご容赦ください。

ありがとうございます。

本日は、このように法被を着た内成の皆さんも多く集まってくれました。誠にありがとうございます。

今朝は朝5時に起きてこちらへ来ました。内成は少し遠い場所にありますので。

本日は、東洋のナポリとも呼ばれる別府にお越しいただき、本当にありがとうございます。

一番遠くから来られた方は、北海道の方はいらっしゃいますでしょうか。

あ、いらっしゃいませんね。

鹿児島や沖縄など、遠方からお越しの方が多くいらっしゃるようです。

本日は特に遠方から来られた皆さまには、ぜひ温泉に入ってゆっくりと過ごしていただき、おいしいものをたくさん召し上がって、心身ともにリフレッシュしていただければと思ひます。

それではこれから、内成桐田の保全維持活動について発表させていただきます。

発表時間はおおよそ25分ほどになりますので、その間どうぞお付き合いください。

少し見えにくいので、前の方に移動させていただきます。

まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は昭和31年生まれの申年です。

実は昨日、10月31日が私の誕生日でした。

たくさん拍手、ありがとうございます。

今日はこれが誕生日プレゼントのようで、大変うれしく思っております。

生まれも育ちも、ずっと内成です。

いわば土着の人間でございます。

現在、4反で22枚の田んぼを管理しています。

4反で22枚ですよ。

これを一人でやっていますので、なかなか大変です。

趣味はDIYとスポーツ観戦です。

ありがとうございます。

これも誕生日プレゼントのようでうれしいですね。

特にですね、別府市出身の今宮選手、それから大分市出身の川瀬選手が頑張っていますね。

いいところで活躍しています。

この中に阪神ファンの方がいらっしゃったらすみません。

阪神もまた来年頑張らしましょう。

それでは次に進みます。

まず、別府市の紹介を少しさせていただきます。

大分県は九州の東部に位置しており、その中に別府市があります。

別府市は別府湾に面した大分県中央部に位置しています。

応援隊長は「べっぴん」で、内成はその中でも南に位置してい

ます。

少し操作が不慣れで、うまく扱えず申し訳ありません。

別府市の人口は約11万人で、大分市に次いで人口の多い都市です。

また、日本有数の国際観光温泉文化都市として知られており、全国に9か所ある中で九州では別府市だけです。

去年は、市制100周年を迎え、さまざまなイベントが開催されました。

市内には、「別府八湯」と呼ばれる温泉があります。

また、100を超える国と地域から約3000人の留学生が学んでいます。

障がいのある方々も生き生きと暮らす、多様性のあるまちが別府です。

いいですね、市長。

ここからは、私が個人的に選んだ別府の魅力を紹介いたします。

あくまで私の独断ですので、「あそこも紹介してほしい」と言われてもご容赦ください。

まず、温泉に浸かってください。

砂湯、泥湯、足湯、むし湯、そして杉乃井ホテルの桐湯。

桐田を見たあとに桐湯に入っていたかとよいと思ひます。

次に「見る」ですが、別府温泉まつりがあります。

それに合わせて火まつりが開催されます。

また、別府公園、そして別府唯一の湖である志高湖があります。

それから、地獄めぐり。

その中の一つが海地獄です。

さらに、竹細工伝統産業会館。

竹細工の分野では、日本で初めて人間国宝になられた生野祥雲斎という方がおられます。

この方は内成出身で、内成の竹を使って人間国宝になりました。

「遊ぶ」では、別府競輪、ロープウェイ、ケーブルラクテンチ、城島高原パーク、そして別府タワーがあります。

別府タワーは別府のシンボルで、タワー六兄弟の三男と言われている。

ちなみに東京タワーは五男と言われている。

食べ物では、天井、地獄蒸し、だんご汁、とり天、プリン、冷麺などがあります。

そして先ほど皆さんに配ったざぼんサイダー。

これは内成のオリジナルで、今日配ったものはサミット用の特別仕様です。

夜は、別府八湯麦焼酎を飲んでゆっくりお休みください。

それでは次に進みます。

県内には桐田が全部で10か所あります。

海側から順に堂面、大所、天間、東山、内成です。

「つなぐ桐田遺産」を契機に、「湯のまち桐田マルシェ」というイベントを毎年開催しています。

第1回は堂面桐田、第2回は天間桐田、そして第3回は現在芝生広場で開催しています。

時間があれば、ぜひ立ち寄りていただきたいと思います。

(棚田紹介)

これが天間棚田です。

続いて大所棚田。

そして堂面棚田で、ここから別府湾が見えます。

次に東山棚田群です。

これは東山、城島、枝郷、山の口、椿の5地区で構成されています。

そして内成棚田です。

ここから、内成の紹介をさせていただきます。

内成は別府市の最南端に位置し、約800年前の鎌倉時代に開墾された地域です。

昭和31年に別府市へ編入されました。

現在は70軒、約150人が暮らしています。

JR東別府駅から約8キロの場所に位置しています。

組織としては、自治会の中に棚田を守る活性化協議会と棚田の会があります。

また、消防団などの関係団体があります。

観光名所として、大神峰神社があります。

877年建立で、年4回のお祭りが行われています。

また、樹齢1000年とも言われる大イチョウがあります。

大分県の特別樹木に指定されており、別府市には3本あります。

そのうちの1本がこのイチョウです。

さらに石城寺の湧水と水分石があります。

大きな木の根元からこんこんと水が湧き出ています。

昔、水争いが起きた際、大きな石が落ちてきて集落同士の争いが収まったと言われています。

これが水分石です。

いつ落ちたのかは、はっきり分かっていません。

内成棚田は標高130メートルから350メートルの高低差の中に、約1000枚の棚田があります。

現在、正確な枚数を調べるため各家庭にアンケートを配布して調査中です。

総世帯数は70軒、農家数は45軒です。

就農者の平均年齢は67歳で、主に稲作が中心です。

農地面積は42ヘクタール、そのうち稲作は20ヘクタールです。

用水路は15本、ため池が3か所あります。

水田1枚の平均面積は約3アールで、とても小さな田んぼが多いのが特徴です。

(課題)

昭和の終わりには耕作面積は50ヘクタールありました。

平成の終わりには30ヘクタール。

現在は20ヘクタールまで減少しています。

農家数も70軒から54軒、現在は45軒となっています。

地域計画では、10年後には耕作者がいなくなる農地が全国平均で32%、大分県では52%と言われています。

内成も同様に、将来的に大きな課題になると危惧しています。

現在の課題は、平均年齢67歳で後継者が激減していることです。

高齢化により、気力・体力・将来性の低下が見られます。

さらに、イノシシなどの有害動物による被害も大きく、モチベーションの低下につながっています。

稲刈りの直前に荒らされると、これまでの苦労が水の泡になります。

また、水路や農道の老朽化、自然災害によって利便性や安全性も

低下しています。

その結果、休耕地が拡大しています。

こうした課題を解決するため、

内成棚田の会と内成活活性化協議会が連携してさまざまな活動を行ってきました。

(活動紹介)

それでは、活動紹介をさせていただきます。

内成棚田の会は、平成11年に棚田百選に選ばれたことをきっかけにスタートしました。その後、平成13年から14年にかけて組織体制づくりを進め、平成15年には棚田保全活動を本格的に稼働させました。

平成27年には、これまでの活動が認められ、農林水産大臣賞を受賞しております。

また、令和4年には「つなぐ棚田遺産」に認定され、令和7年には組織改正を行いました。現在は、会長以下役員7名、会員39名の計46名で活動しております。

活動状況ですが、棚田果樹園に関する取り組みのほか、各種団体を対象とした体験会も実施しています。

また、APU、すなわち立命館アジア太平洋大学との連携も行っております。

そのほか、各種団体の受け入れ交流会、棚田オーナー制度、水路や農道の整備などについても、内成活活性化協議会と連携しながら活動を進めてまいりました。

これが棚田果樹園の写真です。

ここは、もともと「百枚田」と呼ばれる場所で、非常に小さな田んぼがたくさんありましたが、荒れている状態でした。

それを、農業委員会の指導のもとで復活させ、プラムや梅、渋柿、カボスなどを植えました。

写真は、プラムの花が満開になった状態です。

実は、市内の旅館がこのプラムを持ち帰って、地獄蒸しにしてジャムを作っております。

そのジャムの名前がとてもよくて、「棚田のルビー」といいます。ぜひ一度食べてみてください。おいしいですよ。

これが棚田での田植え体験会の様子です。APUや県の「棚サポートくらぶ」との連携行事として行いました。

今年も先日、稲刈り体験会を実施し、多くの方に参加いただきました。

こちらは、各種団体の受け入れの写真です。

世界文化遺産であるフィリピンのバナウェ棚田の皆さんが来られたときのものです。

世界文化遺産ですので、やはり棚田の規模がまったく違いますね。

これが、その向こうの棚田の写真です。

ただ、向こうも若い人たちがどんどん流出し、休耕地や耕作放棄地が増えているということで、いろいろと悩みを抱えているようでした。

それから、これが市民農園の運営の様子です。

これまでに30を超える家族や団体の方々に利用していただきました。

ここからは、内成活活性化協議会という組織について、少し説明いたします。

中山間地域等直接支払制度の導入にあわせて、平成11年に発足しました。

第1期は不参加でしたが、第2期以降は継続して参加しており、

現在は第6期を迎えております。

会長以下役員18名、会員42名、計60名で日々活動しております。

活動状況としては、共同機械の管理運営、休耕田の復活活動、共同棚田の生産維持活動、有害動物対策、レガシープロジェクト、ヤギによる除草放牧などを行ってきました。

共同機械の管理運営では、平成28年にミニライスセンターを新設しました。

たとえば、乾燥ともみすりを行った場合には、玄米30キロにつき650円をいただいております。

地区外の方については、もう少し高い料金となっています。

また、農業機械の購入、貸与、維持管理については、トラクター、田植え機、コンバイン、もみすり機など、20種類40台を保有しており、個人へは有料または無料で貸し出しております。

ちなみに、トラクターは1時間500円、コンバインはもみ1袋100円という形で運用しております。

小さい機械については無料で貸し出しております。

これがミニライスセンターの写真です。

もみすり担当者6名で、順番に対応しています。

こちらは、あぜ塗り機を新規購入したときの写真です。

安全面や機械の故障防止のために、安全講習会も実施しております。

これに参加しないと借りられない仕組みになっています。

それから、休耕田の復活活動については、このように荒れた場所を皆で草刈りし、種をまき、苗を植えて花畑にしています。

共同棚田の生産維持活動については、高齢で田んぼを作れなくなったところを協議会が借り上げ、皆で田植えから稲刈りまで行っています。

ただ、この活動も現在ではなかなか難しくなってきました。

有害動物対策については、内成全体を金網で囲おうという方針で取り組み、全体で16キロにわたって囲いました。

ただ、道路や川を完全には横断できませんでした。

車が通る、水が流れる、そういった部分からまたイノシシが入ってくるといことで、その点は少し残念でした。

レガシープロジェクトについては、ヒマワリ、コスモス、マリーゴールドなどの花を植え、3年間にわたって取り組みました。

あわせて、写真コンテストや絵画、俳句など、さまざまなコンテストも実施し、入賞者には内成の棚田米を提供しております。

これがチューリップを植えた棚田です。

そして、こちらが俳句コンテストの様子です。

また、ヤギによる除草放牧にも取り組みました。

休耕田の草刈りが大変なので、ヤギの力を借りようということで、3匹のヤギを導入し、うっちゃん、なっちゃん、たなちゃんの名付けました。

内成棚田にちなんだ名前です。

やってみたのですが、最初は食べてくれました。

ただ、動物もやはり、やわらかい草やおいしい草ばかりを選んで食べるんですね。

そのうち、結局えさを与えるような状況になってしまい、牧場の方へ戻しました。

残念でした。もう少し頑張ってくれたらよかったのですが。

このように、それぞれいろいろな活動を行ってきましたが、まだまだ課題が多くあります。

その課題を少しでも解消していかなければならないということで、これからの保全・維持活動についてご説明したいと思います。

まず、就農者、人の問題についてですが、先ほども申し上げたとおり、後継者が少なく、個人で棚田を守るのには限界があります。

共同作業も難しくなっています。

そこで、営農法人、JA、大学、企業、個人など、外部の力を借りて支えていただくしかない状況になってきました。

ただ、そのためには参入方法や受け入れ体制の整備が必要であり、ここにも多くの課題があります。

次に、有害動物、特にイノシシの問題です。

ここにはクマはいませんのでその点はまだよいのですが、イノシシもクマと同じように農作物を食べます。

内成全体を金網で囲ったのですが、すでに17年が経過しており、老朽化が進んでいます。

また、箱わなを設置し、年間で猟師の方が100頭ほど捕獲してくださっていますが、それでも被害はなかなか収まりません。

そこで、金網の補修やルート変更による更新を行い、侵入を防止すること、さらに猟師の増員や箱わなの増設によって個体数を減らしていこうという考えです。

次に、水路関係です。

15本ある水路のうち、約半分ほどが水量不足の状態にあります。

また、水路の老朽化によって漏水も発生しています。

加えて、昨年の台風被害により、現在も下流部の補修中です。

そのため、水路のU字溝の延長補修を、地元と行政が引き続き進めています。

あわせて、台風被害についても早期の本復旧を進め、恒久対策を早く実施してほしいと考えております。

次に、機械の問題です。

補修や購入の負担が大きく、機械はかなり高額です。

そのため、経済的な圧迫から「もう稲作はやめた方がいいのではないか」という声もありますし、共同機械であっても使用時期が重なって不便だという声も多くあります。

そこで、共同保有する台数を増やすことや、使用計画をより詳細にすること、あるいは田植え時期や品種を変えて重複を解消することも必要ではないかと考えています。

それから農道の問題です。

農道は狭く、急勾配で、未舗装のところも多く危険です。

補修材料費を協議会から支給して改善している箇所もありますが、十分ではありません。

また、行政による水路補修にあわせて農道補修も行っていますが、まだ十分には進んでおりません。

そこで、水路や田畑の災害復旧工事とあわせて、農道補修も同時に進めていただきたいと考えています。

さらに、狭い田んぼは手間と労力の負担が大きいです。

草刈り、耕運、田植え、稲刈りなど、どれも大変ですし、水管理や農薬散布にも時間がかかります。

そのため、棚田地形の水田についても土地改良の対象として、補助事業を進めていただきたいと考えております。

ここまで、6項目の課題とその対処策について申し上げましたが、いずれもまだ一案に過ぎず、十分とはいえません。

今後は、地域、各種団体、行政なども含めて、さまざまな課題に対して知恵と工夫を出し合いながら、一緒になって取り組んでいきたいと考えております。

引き続き、ご協力をお願いしたいと思います。

(まとめ)

現在、日本では農地の大規模化によって生産量が増えています。

しかし、小規模農家を守らなければ日本の農業は衰退し、食料確保が難しくなると考えています。

棚田は単なる食料生産の場ではありません。

伝統文化、美しい景観、教育、国土保全など、多くの役割を持っています。

これからも、内成棚田の美しい景観と地域活動を次世代へつないでいくため、引き続き努力していきたいと思います。

長時間ご清聴いただき、誠にありがとうございました。



## 自己紹介

- 後藤 利夫
- 1956年(s31)生まれの申年
- 生まれも育ちもず～と内成
- 現在4反22枚の田んぼで一人農業
- 趣味はDIYとスポーツ観戦
- 好きな花はユリ(花言葉: 純粋・無垢)

## 別府市の紹介

別府市宣伝部長の「べっぴん」で～す。

いっしょに、ひやします。おんせん湯おおいだ

内成棚田

- 人口=11万人
- 日本有数の国際観光温泉文化都市
- 昨年市制100周年を迎えイベント開催
- 市内8か所の別府八湯温泉
- 100を超える国と地域から3000人の留学生
- 障がい者が生き生きと暮らす多様性のまち

## 私が勝手に選ぶ観光情報

### 湯につかる

- 杉乃井ホテル棚湯
- 海浜砂湯
- 地獄蒸し工房足湯
- 鉄輪むし湯
- 明礬温泉泥湯

## 見よう

- 別府公園
- 扇山火祭り
- 温泉祭り
- 志高湖と由布岳
- 海地獄
- 別府竹細工伝統産業会館

## 遊ぼう

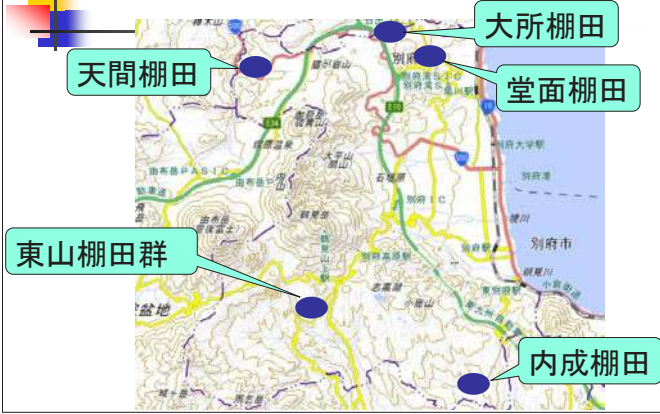
- 城島高原パーク
- 別府タワー
- 別府競輪
- ラクテンチ
- 別府ロープウェイ

## 美味しい

- 天丼
- 地獄蒸し
- 麦焼酎
- 別府冷麺
- 団子汁
- 地獄蒸しプリン
- とり天
- ざぼんサイダー

## 別府市の棚田

- つなぐ棚田遺産に5か所認定 (R4/県10か所)



## 湯のまち棚田マルシェ

つなぐ棚田遺産認定の記念とPRで毎年5つの棚田を持ち回り開催中！



堂面棚田



天間棚田

### 天間棚田

津房川上流の棚田

枚数 200枚  
面積 25.5ha  
標高 450m



### 大所棚田

別府市最北部の棚田

枚数 150枚  
面積 8.7ha  
標高 270m~330m



### 堂面棚田

別府湾を望む趣向明細な棚田

枚数 200枚  
面積 9ha  
標高 60m~160m



### 東山の棚田群

(東山、城島、枝郷、山の口、椿)

別府市の南西部を飾る棚田群

枚数 900枚  
面積 41.9ha  
標高 500m



### 内成棚田

別府温泉の裏庭にある棚田

枚数 1000枚  
面積 41.7ha  
標高 130m~350m

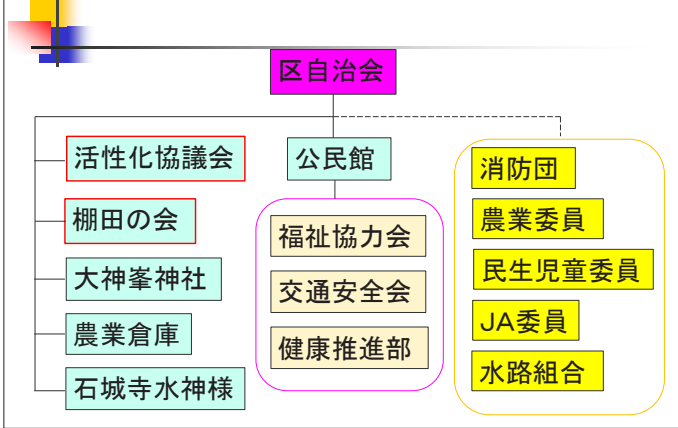


## 内成の紹介

- 別府市の最南端
- 800年前の鎌倉時代に開墾
- S31年別府市へ編入
- 現在70軒、150人が暮らす山間部農村



## 内成の組織



## 内成の観光名所

### 大神峯神社

877年建立  
年4回のお祭り



### 大銀杏



樹齢1000年  
大分県特別保護樹木

### 石城寺湧水と水分石



大きな木の下から湧水



大石が落下して水を左右に等分するする  
いつ頃かは？

## 内成棚田の概要

- 標高130m~350mの高低差に≒1000枚の棚田が広がる



- 総軒数70件 農家数45軒
- 就農者平均年齢67歳
- 産業: 稲作中心(畑作・しいたけ)
- 農地面積: 42ha
- 稲作面積: 20ha(≒1000枚)
- 用水路15本、堤3箇所
- 水田1枚の平均面積: 3a(300m<sup>2</sup>・約90坪)



春の棚田



夏の棚田



冬の棚田



秋の棚田



## 内成棚田の変化

	耕作面積	農家数
昭和(終盤)	50ha	70軒
平成(終盤)	30	54
令和(現在)	20	45

地域計画結果で10年後に耕作者が居なくなる農地の割合  
全国平均32% 大分県52% ⇒⇒⇒ 内成もっと増えるか？

## 現状の課題

- 平均年齢67歳、後継者激減  
高齢・気力・体力・将来性低下！
- 猪・鹿の有害動物に荒らされる  
モチベーション低下！
- 水路・農道の老朽や自然災害  
利便性や安全性低下！

休耕田  
が拡大



## 3大課題解決として

### 内成棚田の会 内成活性化協議会

組織・団体として内成の将来を見据え、いろんな活動を実施してきた

## 内成棚田の会

- H11年7月 農林水産省「棚田百選」認定  
(由布川奥詰、軸丸北、山浦早水、両合、羽高 → 大分県6地区)
  - H13年～H14年:組織・体制作り
  - H15年～棚田保全活動を本格始動
  - H27年 「農林水産大臣賞」を受賞
  - R4年 「つなぐ棚田遺産」に認定
  - R7年 組織改正
- 会長以下役員7名、会員39名 計46名

## 活動状況(営農・交流関係)



- 棚田果樹園の草刈り・剪定・収穫
- 各種体験会 (APU:立命館アジア太平洋大学との連携)
- 各種団体受け入れ交流会
- 棚田オーナー・市民農園の運営
- 水路・農道整備

\* 内成活性化協議会と連携

## 棚田果樹園の草刈、剪定、収穫

1haの荒地が農業委員会の指導で復活



## 田植え体験会

APUや県棚田サポートクラブとの連携行事



## 各団体視察受け入れ



## 市民農園の運営



## 内成活性化協議会

- 中山間地域等直接支払い制度の導入で  
H17年8月発足 (1期目は不参加)  
2期(H17年度~H21年度 5年間)  
3期(H22年度~H26年度 5年間)  
4期(H27年度~R1年度 5年間)  
5期(R2年度~R6年度 5年間)  
6期(R7年度~5年間活動予定)
- 会長以下役員18名、会員42名 計60名

## 活動状況(営農関係)

- 共同機械の管理・運営
- 休耕田の復活活動
- 共同棚田の生産維持活動
- 有害動物対策
- レガシープロジェクト
- ヤギの除草放牧



### 共同機械の管理運営

#### 所有設備・機械



- ミニライスセンター(H28年新設)  
乾燥+粃摺(650円/玄米30kg)
- 農業機械の購入・貸与・維持管理  
\*トラクター、田植機、コンバイン、粃摺機  
ほか20種類40台保有し個人へは有料  
又は無料で貸し出し  
トラクター(500円/時間)  
コンバイン(100円/粃1袋)

### ミニライスセンター 乾燥機(2台)&粃摺機(1台)



粃摺り担当者6名で順番に対応中

### 畦塗機の新規購入



安全講習会参加者のみに使用を限定

### 休耕田復活活動



綺麗なひまわり畑に変身

みんなで草刈り中



### 共同棚田の生産維持活動



みんなで手植え中

### 有害動物対策



内成金網包囲作戦(H25年16km)  
道路や川を横断設置できないのが残念!

## レガシープロジェクト

コンテスト賞品



年度	花物	植栽面積	イベント
H29	ヒマワリ、コスモス、マリーゴールド	50a	鑑賞会 写真コンテスト
H30	前年度プラス ⇒菜の花	70a	絵画コンテスト
R元	前年度プラス ⇒チューリップ	100a	俳句コンテスト



内成を訪れた方が一句読んで投函！

赤白黄色のチューリップの花が咲きました



## ヤギの除草放牧

3匹のヤギ命名公募  
(ウッチャン、ナツちゃん、タナちゃん)



ヤギ小屋の屋根

## これからの保全維持活動

### 就農者

後継者が少ない

- \* 個人で棚田を守るのは限界！
- \* 共同作業は厳しい！



- ♡ 営農法人・JA・大学・企業・個人他の外部の力を借りて支えて頂く
- ♡ 参入方法や受入れ体制の準備が必要

### 有害動物

特に猪に荒らされる

- \* 内成全体を金網で囲ったが老朽化(17年)
- \* 箱罠設置で≒100頭/年捕獲  
被害が収まらない！



- ♡ 金網補修やルート変更更新で侵入防止
- ♡ 猟師増員と箱罠増設で個体数の減少

### 水路

水量不足あり

- \* 水路の老朽で漏水あり！
- \* 昨年の台風被害で仮補修中！



- ♡ 水路U字溝の延長補修(地元・行政)
- ♡ 台風被害の早期本復旧で恒久対策

### 機械

補修・購入の負担

- \* 経済的圧迫で稲作をやめた方がよい！
- \* 共同機械でも使用時期が重なり不便！



- ♡ 共同保有台数の増加と使用計画の詳細化
- ♡ 田植え時期や品種変更で重複解消

### 農道

狭い・急勾配・未舗装で危険

- \* 補修材料費を協議会から支給あり
- \* 行政の水路補修に合わせて農道補修あり  
しかし・・・進まない！



- ♡ 水路・田畑の災害復旧工事の同調工事として農道補修も進めて頂きたい

## 狭い田



手間と労力が負担

- \* 草刈り・耕耘・田植え・稲刈り等大変！
- \* 水管理や農薬散布に時間がかかる！

♡ 棚田地形の水田も土地改良の対象として補助事業を進めて頂きたい



## まとめ

- 農地集約大規模化で生産量は増加するが小規模零細農家の生産保護をしないと、日本の農業の衰退と食料確保が難しい。
- 棚田は食糧生産の圃場だけでなく、伝統・文化・美しい景観・教育・国土保全等の多面的機能を持っている。

これからも、内成棚田の美しい景観と、これを守る地域活動を次世代につなぐため、引き続き頑張っていきます！

## シンポジウムテーマ

### 全国棚田（千枚田）サミット 30 回記念シンポジウム

【コーディネーター】中島 峰広 氏 早稲田大学名誉教授・棚田ネットワーク名誉代表

ナカシマと紹介されました。

私のお隣の宮崎県延岡市の出身です。

九州では私のことを「ナカシマ」と呼びますが、上京して東京に行きますと、絶対にナカシマとは言わず、皆「ナカジマ」と言うんですね。

これはたぶん棚田とも多少関係があって、「ナカジマ」という東日本の棚田は土坡の棚田が多い。

土坡というのは、土でできた棚田のことですね。

一方で、「ナカシマ」という西日本の棚田は、石積み棚田が多いんです。

このような特徴が、棚田にはあります。

それでは、棚田の話というより、この棚田サミットを振り返るといって話をさせていただきたいと思います。

では、次のスライドをお願いします。

棚田サミットの誕生ということで、ここには司馬遼太郎の話が書いてあります。

ところが、この司馬遼太郎よりも半世紀、約50年前に棚田に関心を持った外国人がいました。

その話は昭和15年、つまり第二次世界大戦が始まる前のことです。

このときに登場するのが、当時の東京大学教授であった東畑精一です。

その弟の東畑四郎は、戦後の農地改革を実際に進めた人物で、いわば非常に優秀な兄弟でした。

確か三重県の出身だったと思います。

その東畑精一が、昭和15年に『米』という本を中央公論社から出版しています。

その中に、「日本のピラミッド」という話があるんです。

どういう話かという、東畑が昭和初期、1925年頃だったでしょうか、アメリカで開かれた経済学会に出席しました。

日本の学者が向こうへ行くと、当然すべて英語です。

英語が多少できるとしても、周りが皆英語で話していると、とてもついていけません。

それで随分疲れたので、三日目だったと言っていました。もう休もうかなと思っていたところ、ディナーミーティングがあるとされた。

しゃれた名前ですね、ディナーミーティング。どんなものだろうと思って出席したそうです。

会場では、五、六人ずつテーブルを囲んでミーティングが行われていました。

その同じテーブルに、若いアメリカ人が一人いた。

そのアメリカ人が東畑に向かって、「あなたの国には偉大なものがあります。世界のピラミッドにも比すべき偉大なものがあるのをご存じですか」と聞かれました。

東畑は、「この人は何を言っているのだろう」と思った。

奈良の大仏のことかなあ、などと思い巡らしたそうです。

すると、その若いアメリカの地理学者が言うんです。

「それは、日本全国いたるところにある棚田ですよ。」

「あれはまさしく、エジプトのピラミッドにも比すべき偉大な遺産です。」

そういう具合に、棚田を絶賛したわけです。

この話を、東畑は昭和15年の中央公論社の本に書いています。昭和15年です。

戦後の世代にはなかなか想像しにくいかもしれませんが、その翌年の昭和16年には第二次世界大戦が始まります。

そして戦後は深刻な食糧難の時代になります。

九州でもそうでした。

私は延岡で育ちましたが、なかなか大変でした。

とにかく米を作れ、食糧を確保しろという時代で、棚田の「た」の字も出てこない、そういう状況だったわけです。

それから半世紀ほど経って、次の話につながります。

1985年頃、小説家の司馬遼太郎の作品『街道をゆく』というシリーズで、棚田の存在が大変有名になりました。

その「街道をゆく」の中に、橋原街道という話があります。

橋原というのは、高知県の西の外れ、愛媛県との県境にある町です。

この橋原街道がなぜ有名かというと、坂本龍馬が土佐を脱藩した際に通った道だからです。

龍馬は橋原を通り、カルスト台地を越えて愛媛県側へ出て、脇川を下り、長浜から長崎方面へ脱出していきます。

その街道沿いにある、橋原の神在居の棚田について、司馬遼太郎が論じているんです。

司馬遼太郎は、確かノモンハン事件に関係した軍人だったという記憶があります。

戦車隊長だったかもしれませんが、そこは少し記憶が曖昧です。

その同期会が高知県で開かれました。

当時、高知県の職員だった同期の配慮で、その会が開かれたそうです。

そのとき、実は司馬遼太郎はまだ橋原の棚田を実際には見ていませんでした。

町史の口絵に載っていた棚田の写真を見て、「これはすごいなあ」と感じた。

そして同期会の宴席で、橋原街道沿いにある神在居(かんざいこ)の棚田について話をします。

神在居というのは、神々しい名前ですよ。

まるで神様がいらさうなような集落です。

その棚田について、司馬はこう言いました。

「橋原の千枚田はえらいものやな。」

「万里の長城も人類の遺産だけれど、橋原の随所にある千枚田も大きな遺産やな。」

そういう話をしたわけです。

ちなみに、先ほど出てきたアメリカの学者は、トレワースというウィスコンシン大学の地理学者です。

ウィスコンシン州というのは、五大湖のミシガン湖の湖岸にある州です。

かつて、「サッポロ、ミュンヘン、ミルウォーキー」という言葉がありました。

これは、いずれも北緯42度から43度あたりに位置し、世界的なビール産地として知られている都市です。

そのミルウォーキーにある大学の教授が、先ほどのトレワース

だったわけです。

さて、司馬遼太郎がそういう話をしたとき、その席には橿原町の町長も同席していました。

高知県の職員の配慮で、町長がその場に呼ばれていたのです。

その話を聞いた町長が、司馬遼太郎の言葉に強く反応しました。

それが、中越準一という橿原町の町長です。

町長は、「この神在居の棚田を使って、何か町おこしができないだろうか」と考えました。

そして1992年、現在では全国で100か所ほど行われていると言われる「棚田オーナー制度」を、橿原町で始めたのです。

それを始めると同時に、もう少し棚田を使って町おこしができないかということで、農林水産省に相談に行きました。

すると農水省から、特別な制度があるわけではないが、カンントリーミュージカル「ふるさときゃらばん」を手掛けている石塚克彦という面白い人物がいるので、会ってみてはどうかという話がありました。

そこで橿原町の町長は、この石塚さんに会い、「棚田を使って町おこしをしたいが、何か良い知恵はないだろうか」と相談します。

その結果、二人で考えたのが「棚田サミット」です。

そして1995年に、この棚田サミットを立ち上げることになりました。

つまり、棚田サミットの第1回は橿原町で開催されたということです。

これをきっかけに、棚田というものに対して世間の関心が徐々に集まるようになりました。

ブームとまではいかなかったかもしれませんが、棚田に対する大きな関心が生まれたのは確かです。

次の写真が、橿原町の神在居の棚田です。

左側にいるのが、当時の町長・中越準一。

右側が、カンントリーミュージカル「ふるさときゃらばん」のリーダーである石塚克彦です。

写真の下を通っているのは、宇和島へ抜ける国道です。

ただし、坂本龍馬が通った当時はもちろんこのような道路はありません。

上の方を見ていただくと、あそこに集落がありますね。

そうです、あれが神在居の集落です。

坂本龍馬は、あの集落を通して脱藩していったわけです。

こうした歴史的な背景も含めて、この棚田を活用して町おこししようということで、第1回棚田サミットが開催されました。

サミットは、1995年9月28日と29日の2日間にわたって開催されました。

まず、全国棚田連絡協議会の設立が行われ、その後、首長等会議、現地見学会、全体交流会が実施されました。

さらに、「ふるさときゃらばん」によるミュージカル公演も行われました。

タイトルは、「男のロマンと女のロマン」という作品です。

会場は、橿原町にある昔ながらの芝居小屋でした。

基調講演は、東京農工大学の千賀裕太郎先生が務めました。

当時はまだ助教授でした。

実は、私はこの千賀裕太郎先生に誘われたことがきっかけで、棚田に関わるようになったのです。

続いて、事例報告が行われました。

報告者は、新潟県安塚町の町長・矢野学。

安塚町は、現在の上越市です。

それから、佐賀県西有田町の農林商工課長。

さらに、橿原町の「千枚田ふるさと会」の会長。

これは、地元の棚田を守る団体の代表です。

その後、千賀裕太郎先生がコーディネーターとなり、パネルディスカッションが行われました。

パネリストは、主に高知県の関係者でした。

後ろから二番目にいる田村俊夫さんという方は、現在全国で行われている棚田オーナー制度の第1号のオーナーになった人物です。

現在も、この橿原の千枚田に住んでいるそうです。

左側の写真は、棚田サミットの総会と首長等会議が行われた会場です。

右側の写真は、ミュージカル公演と、その後に行われた全体交流会の様子です。

交流会が行われたのは、「ゆすはら座」という劇場です。

ここは畳敷きの会場です。

ですから、交流会では皆が畳の上に座り、あぐらをかいて交流するという形でした。

もう、かなり賑やかな雰囲気でした。

今でもよく覚えています。当時ここで選出されていた中谷さんという政治家が来ていました。

先ほど登壇していた前の防衛大臣を務めていた岩屋さんは、実は私の大学の後輩です。

その前の防衛大臣は、確か中谷さんだったと思います。

この地域は、中谷さんの選挙地盤でした。

そのため、会場では人が入り乱れるような状態で、足の踏み場もないほどでした。

皆がお互いに酒を注ぎ合いながら交流している。

そんな光景を、今でもよく覚えています。

そういう雰囲気の中で、第1回の交流会が行われました。

そして1995年にサミットが開催された後、全国的に棚田への関心が高まっていきます。

ここに挙げている4か所は、現在行われている棚田オーナー制度の中でも、最初期に実施された地域です。

奈良県の明日香村・稲渕集落。

1996年に、この4地域でオーナー制度がスタートしました。

明日香村では、役場職員が中心になって取り組みが進められました。

明日香村の一番南に、橘寺というお寺があります。

橘寺は、聖徳太子が生まれたと伝えられている有名な寺です。

その寺の御曹司である高内良叡という人物が、世界を旅するヒッピーのような生き方をしていた人で、なかなかユニークな人物でした。

彼が中心となり、明日香村で棚田オーナー制度を立ち上げました。

保存会の名前も、「ルネッサンス委員会」という名前でした。

保存会なのにルネッサンスですから、なかなか面白い発想です。

こうしてオーナー制度が始まったわけですが、私はこの制度を三つのタイプに分類しました。

一つ目が、体験・交流型。

二つ目が、作業参加・交流型。

三つ目が、就農・交流型です。

これは、年間に棚田に来る回数で分類しました。

年に3回程度来るものが体験・交流型。

4回から9回が作業参加・交流型。

10回以上になると、就農・交流型。

つまり、本格的に農作業に参加するタイプです。

奈良県の明日香村は、作業参加型です。

長野県の千曲市の姨捨。

姨捨の方は今日は来ていますか。

いらっしゃらないようです。

三重県の丸山千枚田の方はおられますか。

これもいらっしゃらない。残念ですね。

熊本県山都町の菅。

山都町の方はどうでしょうか。

あ、いらっしゃいました。

ここで拍手をいただきました。

このように、橿原町の取り組みを参考にして、各地でオーナー制度が始まっていきました。

特に山都町の菅の人たちは、新聞で柵田サミットの記事を見て、橿原町まで視察に来たそうです。

九州からフェリーで八幡浜に渡り、そこから橿原町へ向かった。

そして柵田オーナー制度を見て、自分たちの地域でも始めることになったのです。

この4地域が、柵田オーナー制度の先進地域といえます。

明日香村の場合は、地域全体が文化財保護の対象になっており、土地の売買が自由にできません。

多くの土地が県有地として管理されており、その耕作されていない土地を利用して柵田オーナー制度が行われています。

その後、第2回から第7回まで柵田サミットが続いていきます。

第2回は、佐賀県西有田町（現在の有田町）。

有田町から来ている方はいらっしゃいますか。

ああ、おられました。第2回の開催地ですね。

第3回は、長野県更埴市（現在の千曲市）。

第4回は、新潟県安塚町（現在の上越市）。

第5回は、三重県紀和町（現在の熊野市）。

第6回は、九州の浮羽町（現在のうきは市）と星野村（現在の八女市）の共同開催。

そして第7回が、石川県輪島市で開催されました。

まず、第2回から第7回までのサミットはどのようなものだったのか、どのような形で行われていたのかといいますと、当時の名の知れた芸人や、いわゆる学者の方々を招いて基調講演を行い、その後は交流会のような形で進める、というスタイルでした。

第2回は、女優の浜美枝さんと、東京大学名誉教授の木村尚三郎さんでした。

木村尚三郎さんは、のちに柵田学会の会長にもなられる方です。

第3回は、女優の岸ユキさんと、東京大学名誉教授の今村奈良臣さんでした。

今村さんは、当時東京大学の教授を務めておられた方です。

それから第4回は、ミュージシャンの坂田明さん。

第6回は、俳優の柳生博さんと作家の立松和平さんの講演。

そして第7回は、立正大学教授で評論家でもある富山和子さんをお招きして開催しました。

このように、著名な方々をお呼びして開催していたわけですが、芸人の方はどうしてもギャラが高いわけです。

そのため、ギャラばかりが高くて、必ずしも実のある内容とは言えないのではないか、という声も出てきました。

そこで、「こういう形はやめよう」ということになりました。

そして第8回のサミットが、千葉県鴨川市で開催されることになります。

このときの企画段階から、私たちも関わることになりました。

高野さん、ちょっと上がってきてください。

ああ、大丈夫ですか。

高野光世といいます。

私と一緒に柵田ネットワークをずっと引っ張ってきた人物です。

それから、木戸さん、どこにいらっしゃいますか。木戸さん、ちょっとこちらへ。

このお二人は、柵田ネットワークの中心メンバーです。

私と一緒に活動してきました。

そしてこの方たちは、第1回から第30回まで、サミットすべてに出席しています。

鴨川のサミットでは、企画段階から私たちが参画しました。

最初は、これを仕事にしようと思ったのでしょうか、電通の社員の方が周りをうろろしていたのですが、そのうち「これは仕事にならない」と思ったのか、いつの間にかなくなってしまいました。

このサミットでは、特別記念講演として、当時の千葉県知事である堂本さんに登壇していただきました。

実は、これは私が知恵をつけたんです。

「県知事を呼べばいいじゃないか。県知事ならギャラはいらないし、ひよっとするとお土産を持ってきてくれるかもしれない」ということで、堂本さんに記念講演をお願いしました。

そしてこの時は、分科会を10設けました。

今年は3つか4つくらいだと思いますが、当時は10の分科会を設けたわけです。

1つ目は、私が担当しました。

「オーナー制度の運営と柵田」です。

2つ目は、先ほど紹介した千賀裕太郎が担当し、

「地域づくりと柵田」です。

3つ目は、高崎経済大学の吉田俊幸さん。

当時は米の専門家として知られていた方です。

テーマは「米流通と柵田米」。

4つ目は、東京学芸大学の小泉武栄さん。

テーマは「環境教育と柵田」です。

5つ目は、宇都宮大学の水谷正一さん。

これは生き物の話で、「生物多様性と柵田保全」です。

6つ目は、農政ジャーナリストの岸康彦さん。

以前は日経新聞の記者だった方です。

テーマは「ボランティアと柵田」。

それから、信州大学教授の木村さんが「柵田の圃場整備」。

柵田の圃場整備の専門家です。

そして、テレビなどでもよくご覧になったと思いますが、

『インサイダー』編集長の高野さん。

テーマは「田舎暮らしの現実と課題」。

9番目は、東京農業大学の麻生さんで、「柵田景観の保全と活用」。

そして最後は、九州の方はご存じの方も多いと思いますが、

農と自然の研究所代表の宇根豊さん。

テーマは「日本の農業の再生と柵田」です。

このような組み合わせで、第8回鴨川サミットを開催しました。

そしてこのとき、サミットの形が大きく変わることになります。

これをきっかけに、基調講演と分科会というスタイルが定着しました。

つまり、サミットの一つの型がここで出来上がったと、私は記憶しています。

これは堂本さんの講演の様子です。

下の写真は、第6分科会、岸康彦さんの分科会の様子ですね。  
このような形で行われました。

その後、第9回から第11回までのサミットですが、第9回は岐阜県恵那市、第10回は佐賀県相知町（現在の唐津市）で開催されました。

この頃は、規模が少し縮小して、10分科会を設けることはできませんでした。

それでも、4～6分科会という形で、鴨川のスタイルを踏襲しながらサミットは開催されました。

第9回の恵那市では、基調講演として大分県竹田市の方が来られました。

九重の後藤さんという方です。

分科会は6つで、京都大学教授の金田さん（キンタ）、私、高崎経済大学の吉田さん、宇都宮大学の水谷さん、信州大学の木村さん、そして小田切徳美さんが担当しました。

小田切徳美さんは、現在は明治大学農学部の教授ですが、当時は東京大学におられました。

第10回の相知町のときは、先ほどごあいさつしました古川さん、当時の佐賀県知事です。

古川さんに基調講演をお願いしました。

分科会は、中島、横川、田中、千賀、そして宇根が担当しました。

古川さんについて少しお話しすると、ご本人はあまり自慢されませんでした。榎田連絡協議会では毎年、議員会館を回ってロビー活動を行っています。

実は、榎田振興連盟という議員連盟があります。

現在の会長は鶴保さんですが、当時、古川さんは事務局長でした。

その前は、保利耕輔さん（佐賀県選出の国会議員）が会長で、副会長は和歌山県出身の西さんという参議院議員でした。

このお二人が引退された後、振興議員連盟が少し弱くなってしまいました。

そこで、玄海町のサミットのときに、佐賀県ということもあり古川さんに来ていただき、私は古川さんに直接お願いしました。

「連盟が後継者不在で弱くなっているの、ぜひ立て直してください」と。

その結果、古川さんが議員連盟を立て直し、現在も事務局長を務めておられます。

榎田にとっては大きな恩人と言えると思います。

第11回は、愛知県鳳来町（現在の新城市）で開催されました。

このときは、木村尚三郎さんが基調講演を行いました。

そして、小田切さん、愛知大学の藤田さん、千賀、そして中島が担当し、4分科会の形で鳳来町サミットが行われました。

これは唐津市・蕨野の榎田です。

石垣の高さが8.5メートルもある榎田です。

当時の役場の職員が、榎田百選に選ばれたすべての地域に情報発信を行い、「うちには石積みで高さ8.5メートルの榎田があるが、これより高いものがあったら報告してほしい」と呼びかけました。

すると、どこからも報告がなかったんです。

そこで、「うちは日本一だ」ということになったわけですね。

まあ実際には、もっとよく探せばあるのかもしれませんが。

実際、私自身も一つ見つけましたし、皆さんの地域でも、「いや、うちの方が高いよ」というところがあるかもしれません。

右側の写真は、現在は新城市ですが、当時は鳳来町でした。

鞍掛山の山麓にある四谷の千枚田です。

これは本当に見事な景観で、日本の榎田景観の中でも一級品では

ないかと思います。

少し行くのに不便ではあります。

豊橋から飯田線で1時間ほど行き、そこからさらにバスで30分ほどかかる場所にあります。

かなり辺りな場所ですが、一度ご覧になれば、今でもほぼこの写真に近い景観を見ることができると思います。

そして次に大きな出来事がありました。

第12回サミットを宮崎県日南市で開催した時のことです。

連絡協議会の場で、「次はどこが開催しますか」と問いかけたのですが、どこも手を挙げなかったんです。

「これで終わりなのか」という空気になりました。

なぜ手が挙がらなかったのかというと、当時は平成の大合併が控えていたからです。

各自自治体が、自分たちの将来がどうなるのか分からない状況で、サミットを引き受けるとは言えなかったのでしょう。

そういう事情もあって、誰も手を挙げなくなってしまいました。

そこで連絡協議会の理事会では、「このまま終わるのか」という議論になりました。

「もし終わるのだとしたら、せつかく先輩たちが立ち上げたものなのに申し訳ない。もっと続けようではないか」という話になったんです。

しかし、「続けるとして、どうやって続けるのか」という問題が出てきました。

そこで、誰かが全国の市町村を回って、「榎田サミットを開催してください」と説得する役割を作ったらどうか、という話になりました。

しかし、首長がそんな役割をやるわけはありません。

そこで、「先生しかいないんじゃないか」ということになり、私とその役を引き受けることになりました。

それ以来、第30回まで、全国の市町村を回って、「榎田サミットをやってください」とお願いして歩きました。

もちろん、1回訪問しただけでは決まりません。

別府市も、2回ほど来たのではないのでしょうか。

それでも、市長さんが引き受けてくださり、本当にありがたいことでした。

こうして、サミットは続いていくことになりました。

このあとも皆さんご存じかもしれませんが、来年は浜松市で開催されます。

浜松市の皆さん、どうぞよろしく申し上げます。

その次が甲賀市。

甲賀市の皆さんも、本日お越しになっています。

さらに第33回が沼田市です。

皆さん、こうして次の開催地へきちんと引き継ぐために参加しておられます。

その後については、まだ決まっていません。

ただ私は、連絡協議会にも言っているのですが、年齢が上皇陛下と同じなんです。

皆さん、上皇陛下の年齢をご存じですか。

今90歳で、もうすぐ92歳になります。

実は、私は上皇陛下より1週間早く生まれているんです。

つまり、私ももうすぐ92歳ということになります。

何とか、こうして続けております。

ただ、自分でも「だいふ衰えてきたな」とは感じています。

ちなみに、この間に自治体から「うちが開催します」と手を挙げ

てくれたのは、第19回の有田川町だけでした。  
それ以外はすべて、私が訪ねて行ってお願いして回ったものです。

第12回の日南市サミットは、そういう状況でしたので、とにかく節約に節約を重ねて開催しました。  
内容は、基調報告とパネルディスカッションのみ。  
私がコーディネーターを務めました。  
今のような分科会は、一切ありませんでした。  
当時、「棚田に行こう！」という歌がありました。  
これはなかなか良い歌で、しばらくサミットでも流れていました。  
日南市の方、いらっしゃいますか。  
ああ、いませんか。隣なのに残念ですね。

その次に引き受けてくれたのが、栃木県の茂木町です。  
ここは、なかなか内部事情が複雑でした。  
古口会長が、サミットのプログラムを作ったのですが、町長に就任すると、その内容をすべて変更し、自分の案で進めることになりました。  
そのため、内容としては少し寂しいものになりました。  
現在も県知事をされている福田さんが講演を行い、事例発表も地元の方だけでした。  
全国から講師を呼ぶことは、ありませんでした。  
また、古口町長はその後サミットに顔を出すこともありませんでした。  
サミットを引き受けてくださったことには感謝していますが、茂木町については少し印象が薄い開催地になっています。

第14回が長崎市と雲仙市の共同開催。  
第15回が新潟県（木戸さんの地元）です。  
長崎と雲仙の共同開催は、かつての星野村と浮羽の共同開催に続くものです。  
特に印象に残っているのは、長崎市郊外の外海町の夜の棚田の景色です。  
交流会を夜に行ったのですが、その棚田の夜景がとても印象的でした。

第16回は静岡県松崎町。  
ここは、私にとって因縁のある場所です。  
棚田百選を選ぶ際、私は選定委員だったのですが、松崎町を落としてしまったんです。  
理由は、棚田の放棄率が50%以上、ほぼ100%に近かったからです。  
「そんな場所を選ぶわけにはいかない」という判断でした。  
しかし現地では、それをきっかけに復田を進め、見事な棚田を再生しました。  
そこで、サミットを開催しようということになったのです。  
申し訳なさもあり、私は2回か3回現地に行き、集落の会合にも参加しました。  
そして、「ぜひ棚田サミットを開催してください」とお願いしました。  
基調講演は、川勝さんが務めました。  
分科会は、静岡大学名誉教授の杉山さんなどが担当しました。  
このときは、民主党政権の時代で、副大臣の篠原孝さんが来てくれました。

篠原さんは、棚田学会の設立当初からの仲間でもあります。  
私が直接お願いして、来ていただきました。

その後もサミットは続き、  
第17回 徳島県上勝町  
第18回 熊本県山都町  
上勝町は、葉っぱビジネスで有名な町です。  
当時人口は約2300人。  
今は1500～1600人ほどだそうです。  
宿泊施設もほとんどない小さな町でしたが、それでもサミットを引き受けてくれました。  
参加者は、徳島市に泊まり、バスで1～2時間かけて会場に来ました。

次は熊本県山都町。  
通潤橋で有名な場所です。  
熊本駅から2時間ほど。  
高千穂に近い山深い地域です。  
ここでは4分科会と首長会議を開催しました。

その後も開催は続き、  
第19回 和歌山県有田川町  
第20回 山形県上市  
第21回 佐賀県玄海町  
第22回 佐渡市  
第23回 波佐見町  
第24回 長野県小谷村  
第25回 山口県長門市  
第26回 大蔵村はコロナの影響で紙上開催となりました。  
第27回 高島市  
第28回 那智勝浦町  
そして昨年は、上田市で開催されました。

最後になりますが、私ももう90歳になりますが、これからも頑張ります。  
皆さんも、どうか棚田の保存のために力を尽くしていただきたいと思います。  
どうもありがとうございました。

## 第30回大分県別府市柵田サミット

2025年11月1日

大分県別府市

別府国際コンベンションセンター

### 柵田サミットを振り返って

NPO法人柵田ネットワーク名誉代表  
中島峰広  
(早大名誉教授)

## 1 柵田サミットの誕生

### (1)発端は司馬遼太郎

1985年8月、小説家司馬遼太郎は高知で開かれた兵隊時代の同期会に出席

この高知旅行は『街道をゆく』の「柵原街道」(坂本竜馬が長州へ脱藩した道)の取材もかねていたと思われる

同期会の宴席で元高知県職員の同期兵に、村誌の口絵写真でしか見たことのない柵原街道沿いにある**神在居**の柵田について

「柵原の千枚田はえらいものやな、万里の長城も人類の遺産だけど柵原の随所にある千枚田も大遺産やな」と絶賛した

この一言で柵田に火が付くことになる

### (2)サミットの開催

柵原町長・中越準一と劇団「ふるさときゃらばん」主宰・石塚克彦

①司馬の言葉は宴席で述べられたものだが、元県職の配慮で宴席に同席していた柵原町長・中越準一が反応した柵田で町おこしが出来ると思ったのである

1992年 神在居の柵田で柵田オーナー制がスタート

後述するように柵田の保全策として最も広く普及している

②さらに中越は「ふるさときゃらばん」の石塚克彦と協力して柵田サミットを立ち上げるのである

「ふるさときゃらばん」はカントリーミュージカル劇団として知られる

1995年 柵原町で第一回全国柵田サミット開催

これを機に、全国のマスコミが柵田を頻繁に取り上げ柵田ブームを作り出したのである



中越準一氏



石塚克彦氏



### (3) 第1回柵田サミットの内容

・開催日時：1995年9月28～29日

・28日 全国柵田連絡協議会設立と首長等会議

現地見学会、全体交流会

ふるさときゃらばんのミュージカル公演「男のロマン女のフマン」

・29日 基調講演 東京農工大助教授・千賀裕太郎「柵田は生きている」

事例報告①新潟県安塚町長・矢野学

②佐賀県西有田町農林商工課長・上瀧幸二

③柵原町千枚田ふるさと会長・新谷忠夫

パネルディスカッション コーディネーター：千賀裕太郎

パネラー：黒川宣之、小泉健、鍵岡正謙、田村俊夫、佐野牧子、中越準一



第一回柵原町柵田サミット  
総会・首長等会議

ゆすはら座  
観劇と懇親会



### (4) 先行する柵原にならい、各地で柵田オーナー制が始まった

①奈良県明日香村稲淵 1996年スタート

役場職員・橘寺の御曹司、高内良淑さんが仕掛け人  
作業参加交流型 面積1a 会費4万 全収穫 5回参加

②長野県千曲市城捨 1996年スタート

作業参加交流型 面積1a 会費4万 全収穫 4回参加

③三重県熊野市丸山千枚田 1996年スタート

体験交流型 面積1a 会費3万 白米15キロ 2回参加

④熊本県山都町菅 1996年スタート

就農交流型 面積0.8a 会費2万円 全収穫 10回以上参加

柵原町のサミットを新聞で知り、仲間数人が自家用車で白幡から八幡浜に渡りサミットに参加した

これら4地区が柵田オーナー制の先進地である



明日香村稲淵のオーナー制による田植え

## 2 第2回～7回大会

### (1)開催地

- 〈2〉佐賀県西有田町(有田町)
- 〈3〉長野県更埴市(千曲市)
- 〈4〉新潟県安塚町(上越市)
- 〈5〉三重県紀和町(熊野市)
- 〈6〉福岡県浮羽町(うきは市)・星野村(八女市)
- 〈7〉石川県輪島市

### (2) 高名な学者や芸能人による特別・記念・基調講演が柱

- 〈2〉女優・浜美枝、東大名誉教授・木村尚三郎
- 〈3〉女優・岸ユキ、東大名誉教授・今村奈良臣
- 〈4〉ミュージシャン・坂田明
- 〈6〉俳優・柳生博、作家・立松和平
- 〈7〉立正大学教授で評論家・富山和子

金はかかるがあまり実がなかった？ことを反省

## 3 画期的な第8回鴨川大会

### (1) 企画段階からNPO法人棚田ネットワークが全面的に協力

我々の仕事ぶりをみて、仕事にしようとうろろうしていた電通社員はいつのまにか姿を消した

### (2) 特別記念講演 千葉県知事・堂本暁子(ギャラなし)

### (3) 10分科会を設けた これまでのサミットで最高

- ①早稲田大学教授・中島峰広「オーナー制度の運営と棚田」
- ②東京農工大学教授・千賀裕太郎「地域づくりと棚田」
- ③高崎経済大学教授・吉田俊幸「米流通と棚田米」
- ④東京学芸大学教授・小泉武栄「環境教育と棚田」



- ⑤宇都宮大学教授・水谷正一「生物多様性と棚田保全」
- ⑥農政ジャーナリスト・岸 康彦「ボランティアと棚田」
- ⑦信州大学教授・木村和弘「棚田の圃場整備」
- ⑧インサイダー編集長・高野 孟「田舎暮らしの現実と課題」
- ⑨東京農業大学教授・麻生 恵「棚田景観の保全と活用」
- ⑩農と自然の研究所代表・宇根 豊「日本農業の再生と棚田」

これを機に、「基調講演と分科会」というサミットの一つの型が出来上がったように思う

## 4 第9回～第11回サミット

### (1) 第9回岐阜県恵那市、第10回佐賀県相知町(唐津市)、第11回愛知県鳳来町(新城市)

### (2) 規模は縮小(4～6部会)したが、内容は鴨川を踏襲するものであった

### (3) 第9回岐阜県恵那市

基調講演:大分県竹田市九重野地区協議会会長・後藤生也  
6分科会(金田(京大)、中島、吉田、水谷、木村、小田切(東大))

### (4) 第10回佐賀県相知町(唐津市)

基調講演:佐賀県知事・古川 康  
5分科会(中島、横川(九大)、田中(佐大)、千賀、宇根)

### (5) 第11回愛知県鳳来町(新城市)

基調講演:東大名誉教授・木村尚三郎  
4分科会(小田切、藤田(愛知大)、千賀、中島)



## 5 サミット存続の危機

第12回日南サミット以降の開催地候補なし

平成の大合併を控え、開催を名乗り出る市町村がなかった

理事会では終了するか継続するか議論

終了するのは立ち上げた町村に申し訳ない

存続することになったが、具体策はなく、誰かが開催の要請をすることになった。理事会は市町村の首長と個人会員の理事である私で構成。

その役は私しかいないということで中島に決定

爾来のサミット(第13回～第30回)は手弁当て私が各行政を訪ね要請し決定してきた

第30回以後も第31回浜松市、第32回甲賀市、第33回沼田市の開催が決まっている

この間、第19回有田川町サミットのみ中山正隆町長自身の申し出による

## 6 危機を脱して以後のサミット

### 【第12回日南サミット】

#### (1) 節約ムードのサミット

私が開催に関わった第13回～第29回サミットに比して最も予算規模の小さいサミットであった **1138万円**

#### (2) 内容は基調報告とパネルディスカッション

基調報告①NPO法人大山千枚田保存会理事長・石田三示

②高知県梶原町職員・下村千佳

③熊本県山都町菅振興会会長・渡辺正弘

④日南市坂元棚田協議会会長・古沢家光

パネルディスカッション:コーディネーター・中島峰広



全体交流会で翌年の開催地がPR!

日南市サミット閉会式

### 【第13回栃木県苗木町サミット】

私が行政を訪ねて決めた最初のサミット

市内の内紛(町長と耕地課長の対立)で一旦決まった計画案は課長の退職とともに廃棄され、町長の独断専行によるプログラムでサミットが実施された

基調講演: 栃木県知事・福田富一

事例発表: 宇都宮白揚高校(農業高校)

苗木町入郷石畑棚田(棚田百選)

那須烏山市国見棚田(棚田百選)

小口町長はその後のサミットに顔を出したことはほとんどない  
サミットの実施には感謝しているが、印象の薄いサミットであった

### 【第14回～16回サミット】

- (1) 第14回長崎県長崎市・雲仙市、第15回新潟県十日町市
- (2) 長崎市・雲仙市サミットは浮羽町・星野村につぐ2回目の共同開催だった

基調講演・5分科会のほか**首長会議**が開かれるようになった  
**長崎市旧外海町の夜の現地見学会**が印象に残っている

- (3) 新潟県十日町市サミットは全国一の棚田分布地での開催  
棚田ネットの仲間・木戸さん(十日町市松代出身、サミット皆勤)が十日町でのサミット開催を熱望、開催実現に尽力

基調講演、5分科会、首長会議

韓国・慶尚南道南海郡加川里(カチョンマール)の住民が参加、**現地見学会で棚田の多さに圧倒される**



第14回サミット  
長崎市外海町  
交流会開会式



長崎市外海町  
大中尾棚田の夜景

- (4) 第16回静岡県松崎町サミット

松崎町石部の棚田には負い目があった

**棚田百選選定の折、放棄率の高さから選ばなかった**

地元では落選後、奮起して復田

その地でのサミットの開催だったので、現地を数回訪ね懇願  
石部集落の全体説明会に2度も足を運んだ

基調講演: 静岡県知事・川勝平太

川勝氏は元早大教授。入試問題をともに作った同僚

分科会: 4分科会 静大名誉教授・杉山恵一など

首長会議

サミットに農林副大臣篠原孝(現・立憲民主党)が出席

篠原孝は棚田学会創設時からの仲間



第16回松崎町サミット  
第三分科会  
中井弘和(静岡大名誉教授)

第16回松崎町サミット  
第一分科会  
杉山恵一(静岡大名誉教授)



### 【第17回徳島県上勝町、第18回熊本県山都町サミット】

- (1) 上勝町は「葉っぱ産業」で知られるが、人口2,300人の町  
町内には宿泊施設も十分でなく(上限200名)、よく開催したと思う

徳島市に約200名宿泊

基調講演(県知事)、4分科会、首長会議

- (2) 山都町は通潤橋で知られる

江戸期に建設されたサイホン式石管水路橋

熊本駅からバスで2時間、宮崎県境に近い山間地

基調講演(県知事)、4分科会、首長会議

- (3) 両サミットとも交通の便の悪い町での開催であったが、**他の地域に比べても遜色のない内容であった**



第18回山都町サミット  
通潤橋

第17回上勝町サミット  
開会式



## 【第19回和歌山県有田川町サミット】

### 町長自らがサミット開催の手を上げた唯一の事例

百選の棚田あらぎ島を訪ねた折、町長に本庁に寄ってくれという伝言を受けた

本庁を訪ねると、サミット開催の申し出を受けた

第13回茂木町サミット以来初めての経験

基調講演：写真家・青柳健二（棚田写真の第一人者）

分科会（5分科会）、首長会議

中島が主催する棚田保存会意見交換会（棚田守り人ミーティング）が始まる。棚田保存会のメンバーに現状や問題点を語ってもらう

安倍首相夫人が出席、サミットを盛りあげた



第19回有田川町サミット  
全体交流会



第19回有田川町サミット  
基調講演 写真家・青柳健二

## 【第20回山形県上市市、第21回佐賀県玄海町サミット】

### (1) 山形県上市市

基調講演：結城富美雄

分科会（4分科会）、首長会議、棚田保存会意見交換会

山形県職員が各分科会を仕切った

蔵王山麓の棚田は区画整理された1枚が大きい棚田

県職に仕切られて、やや盛り上がり欠いたサミットになった

### (2) 佐賀県玄海町

西有田町、相知町に次ぐ県内3度目のサミット

基調講演：東京都立大学教授・涌井雅之

分科会（4分科会）、首長会議、棚田保存会意見交換会

百選の棚田 浜野浦の西海に沈む夕日の光景に感動



第20回上市市サミット  
開会式



第21回玄海町サミット  
現地見学会 浜野浦の棚田

## 【第22回新潟県佐渡市、第23回長崎県波佐見町サミット】

### (1) 新潟県佐渡市

安塚町（上越市）、十日町市につぐ県内3度目のサミット

基調講演：藻谷浩介「日本を変える里山のチカラ」

山陰の山村の暮らしが印象に残った

分科会 6部会（棚田まもり人ミーティング、首長会議を含む）

トキの見学が目玉になっていた

### (2) 長崎県波佐見町

基調講演：三善浩二「土の気持ち」都市が農村を支える時代へ

講演は笑いをとることに力を入れ過ぎていたように思う

分科会4部会、棚田まもり人ミーティング、首長会議

部会「世界の傾斜地の農地と棚田」に数名の外国人が参加



第22回佐渡市サミット  
（アンダー）30分科会



第23回波佐見町サミット  
第1分科会

## 【第24回長野県小谷村、第25回山口県長門市サミット】

### (1) 長野県小谷村

上勝町同様、人口3千人以下の町村でよくやった

事例ディスカッション 司会：信州大学助教授・内川義行

分科会8部会は鴨川の10部会に次ぐもの

出席者が少なく、首長会議が廃止された

### (2) 山口県長門市

基調講演：明大教授・小田切徳美「関係人口と農山村再生」

分科会は3部会のみ

「棚田守り人ミーティング」の開催を認めなかった。やむなく私的なミーティングとして行った

手弁当で山陽新幹線厚狭乗りかえ美弥線で3回も訪ねて説得力開催したが、虚しさを感じたサミットであった



第24回小谷村サミット  
全体交流会



第25回長門市サミット  
自主分科会

## 【第26回山形県大蔵村、第27回滋賀県高島市サミット】

### (1) 山形県大蔵村

2020年の開催はコロナにより中止

私のことを最もよく理解して下さった加藤村長ただだけに、誠に残念であった

結局、2021年に紙上開催という気の毒な結果に基調講演と4分科会を内容としたものだった

### (2) 滋賀県高島市

百選とつなぐ棚田遺産のある行政でのサミット

基調講演、3分科会、守り人ミーティング

コロナ後のサミットとして期待されたが、退陣前の市長で盛り上がりを欠いたように思う

## 【第28回和歌山県那智勝浦町、第29回長野県上田市サミット】

### (1) 和歌山県那智勝浦町

基調講演：島根県中山間地域研究センター・有田庄一郎

分科会3部会と守り人ミーティング

夜の「保存会意見交換会」に参加した人達は全体交流会に参加できなかった

### (2) 長野県上田市

基調講演を廃した分科会だけのサミット

3分科会と4ワークショップ

「守り人ミーティング」と参加者交流会が合体した全体会

司会を任せられたが、アルコールが入ってからの進行に苦勞した



## 7 まとめ

- (1) 第1回～第7回は有名人(芸能人)による特別・記念講演を主眼とするサミットであった
- (2) 第8回鴨川市のサミットは第一線の研究者をコーディネーターとする10部会を設け、基調講演と分科会を根幹とするサミットの形式が確立された
- (3) 平成の大合併を目前にして、第12回日南市後のサミット開催を引き受ける市町村がなく、理事会では個人会員の理事である中島が各市町村を回り、開催を懇願することにした
- (4) 第13回から第30回までのサミットのうち自主的に手を挙げて開催したのは第19回和歌山県有田川町のみである
- (5) 第26回山形県大蔵村サミットは2020年新型コロナ禍により延期、結局2021年に紙上開催となった。私の最も良き理解者であった加藤村長ただだけに誠に残念であった
- (6) 第30回別府市サミットの後は第31回静岡県浜松市、第32回滋賀県甲賀市、第33回群馬県沼田市まで決まっている

## 別府サミットの成功を願って



ご清聴ありがとうございました

## 意見交換会

【パネリスト】小相澤 隆幸氏 長野県上田市副市長

長野 恭紘氏 大分県別府市市長

【コーディネーター】中島 峰広氏 早稲田大学名誉教授・棚田ネットワーク名誉代表

【進行】高野 充世氏 棚田ネットワーク常務理事

【中島氏】

ようやく終わったと思っておりましたが、もう一仕事残ってありました。

どうぞよろしくお願ひいたします。

【アナウンサー】

よろしくお願ひいたします。

【中島氏】

はい、ええ、三者で行うと「鼎談」と申しますが、そんな大げさなものではなく、気楽に進めていければと思います。

【アナウンサー】

はい。

本日の進行は、この方にお願ひしたいと思います。

NPO法人棚田ネットワーク常務理事、高野光世様です。

それでは、改めまして4名の皆様、よろしくお願ひいたします。

ここからの進行は高野様にお願ひいたします。

【高野常務】

進行と言われましても、これまで経験がないものですから、とりあえずタイムキーパーのような形になるかもしれませんが、始めさせていただきますしたいと思います。

一応、事前に多少の質問内容について、「このような質問をします」という形で少し予習をしてみました。

まず中島先生は、第1回目からずっと、18回目以降は少し駆け足ではありましたが、そのような形でサミットを、開催地の選定も含めて見守ってこられたわけですが。その中で、実際にサミットを開催された上田市様にお願ひしたいと思います。

サミットを開催して、「開催してよかった」と感じられた点や、もし影響などがあれば、そのあたりについてお話をお願ひしたいと思います。

【小相澤 上田市副市長】

はい。

実は上田の場合、昨年開催したのですが、その少し前に地元の方から「ぜひ開催したい」というお話がありました。

私自身も担当を務めていたことがありましたので、昨年開催して本当によかったと感じております。

何がよかったかといいますと、私自身も実感しましたが、全国にこれだけ同じ悩みを抱えながら一生懸命頑張っている皆さんがいる、ということが分かったことです。

また、地域ごとに特徴ある活動があり、成功事例もあれば、そうでない事例もあります。

そのような中で、これからどのように進めていくべきかを、点ではなく面として、横の連携を取りながら仲間と共に考えていける、その心強さを感じられたことが非常によかったと思います。

また今日も、先ほど小学生、5年生が来たいと言ってきているという話を聞き、とてもうれしく、感動いたしました。

本当によいことが多かったと感じています。

今回も、上田から10名弱の皆さんが参加しておりますが、実は毎月勉強会も行っております。

そういう意味でも、本当に良いことばかりだったと思います。

【高野常務】

それでは今年開催の別府市様にお伺ひします。

これまで内成棚田は「棚田百選」にも選ばれており、ある程度知られていたと思いますが、今回さらに「つなぐ棚田遺産」として、天間棚田、大所棚田、堂面棚田、東山棚田群が加わり、合計5か所になりました。

この点について、どのような動きが始まっているのか、お聞かせいただけますでしょうか。

【長野別府市長】

はい。

別府市の場合、内成棚田が棚田百選に選ばれており、さらに令和3年度でしたか、「つなぐ棚田遺産」として新たに4か所を加えていただき、現在は5か所となっております。

本日は、大変気合いの入った皆さんが会場に集まり、熱気に満ちていると感じています。

率直に申し上げますと、別府という「観光」というイメージが強いと思います。

そのため私は、あいさつの際にはあえて「観光」や「温泉」という言葉を一切使わず、「棚田、棚田、棚田」と、棚田を前面に押し出してお話をしました。

ただ正直なところ、地元の方々の中でも「棚田」というイメージが、もしかするとそれほど強くない部分があったのではないかと感じています。

しかし近年、棚田マルシェの取り組みなどもあり、棚田という場所に行くこと、そこにはすでに日本の原風景が広がっています。

多面的機能など、さまざまな理屈や説明もあると思いますが、あの景色を見れば、「この原風景を守りたい」と自然に感じるのではないのでしょうか。

日本人であれば、多くの方がそう思うのではないかと感じています。

理屈抜きに、これを守っていききたいという機運は、棚田マルシェが始まり、棚田サミットの開催が決まったことで、確実に高まってきたと感じています。

また、子どもたちの野外体験や収穫体験などで棚田に足を運ぶ機会も増え、教育的な側面でも大きな意味があると思います。

後継者不足の問題は、どの地域でも同じ課題だと思えますが、外部の方々のお力もお借りしながら、これからこの地域で暮らしていく子どもたちが体験を通じて関わることで、少しずつでも棚田を守る活動への協力の輪が生まれてきているのではないかと感じています。

そういう意味で、この棚田サミットについては、上田市様も「開催してよかった」とおっしゃっていましたが、私たちも現時点では「開催してよかった」と感じることはばかりだと思っています。

【中島氏】

そのように言っていただけると、棚田を巡りながら活動している立場としても大変励みになります。

ありがとうございます。

【高野常務】

「開催してよかった」と感じていただけるのは本当にありがたいことです。

ただ、実際の現場ではさまざまな課題もあると思います。

実は昨晚、内成棚田の皆さんと意見交換の集まりがありました。

やはりどの地域でも共通して、後継者の問題を抱えているという話が出ました。

人的な問題も含め、行政や国の支援がどのように関わっていくのかという点も重要だと思います。

先ほども、棚田振興法が5年延長されるという話がありましたが、事例発表の中でも、どのような支援が受けられるのかという点が話題になっていました。

もちろん、支援がなかった場合どうなるのかということも考える必要があります。

そうした中で、棚田連絡協議会がロビー活動などを通じて果たしてきた役割は、非常に大きいのではないかと思います。

もし棚田連絡協議会がなかったら、どうなっていたのだろうか、ということも考えてしまうところで。

先ほどの先生の講演でも、時間の都合で最後は少し駆け足になりましたが、実は時間が足りず紹介できなかったスライドもいくつかあり、その中にはロビー活動に関する内容も含まれていました。

そういう意味で、棚田連絡協議会が果たしてきた役割、そして今後果たしていく役割について、現在連絡協議会の会長を務めておられる上田市様に、何かお考えをお聞かせいただければと思います。

【小相澤 上田市副市長】

はい。

私も現在64歳になりまして、リンゴ農家の孫として生まれ、以前は30畝ほどリンゴを栽培しておりましたし、今も1町ほどです米を作っております。

やはり農家の子どもとして生まれると、子どもの頃は訳も分からず手伝いをしながら、楽しそうに遊んでいるような感覚でした。

しかしそのうち、「やらされている」という感覚が長く続くようになりました。

ところが、自分が子どもを持ち、さらに孫を持つようになると、そうした感覚がだんだん薄れてきて、「父といつまで同じ田んぼで一緒にいられるだろうか」というように、自分の内面的な気持ちが変わってきていることを実感しています。

先ほどの中島先生のお話や、最初のムービーに映っていた皆さんのご苦労されている表情、しわなどを見ると、昔の父や祖父のことを思い出しました。

かつては、「こんなにやらされて嫌だな」と思いながら作業をしていた自分が、今では「大切なものを後世に伝えていかなければならない」と強く思うようになっている。

そのことが、自分でも不思議に感じています。

そして、こうして伝えていくことは、お金がなくても手弁まで続けていくような苦労もありますが、それでも楽しそうに取り組んでいる父たちの姿を子どもたちに見せることが大切だと思っています。

また、自分の子どもに親がいろいろと世話を焼くと、たいてい嫌

がられるものです。

私も仲の良い友人とよく話すのですが、「お互いに子どもを育て合おう」という話をしています。

つまり、「大事なことはお前が教えてくれ。うちはお前の子どもに教えるから」というようなことを、意図的に実践しています。

そのような中で、何をお伝えしたいかと申しますと、これは連絡協議会だけでできる話ではありません。

本日、農林水産省の方もいらっやっていますが、農水省が紹介している「農業・農村の多面的機能」に関する資料がありますよね。

私は、あの資料をよく講演などで紹介させていただいています。

私自身、現役時代に農政の分野をトータルで8年ほど担当しておりましたが、いろいろな場所で話をすると、農業や農村が持つ多面的な役割について、意外と知られていないことが多いのです。

例えば、きちんと耕作が行われていれば災害の防止につながることや、人の心を再生させる力があることなど、70代、80代の方でさえ、農業に関わっていないと知らないことが多いのが実情です。

しかし、国があのような形でさまざまな機能を紹介してくれているおかげで、「農水省もこうしたことを言っています」と説明できる資料として、非常に使いやすいものになっています。

また、中島先生をはじめ、各地域で活動している皆さんの、本当に涙が出るようなこれまでのお話を聞くにつけ、それらを次の世代につないでいく役割が、私たちの世代にあるのではないかと感じています。

ただ、それは一人ですることではありません。

力も足りません。

だからこそ、大きな組織としてまとめ、国の先生方の力もお借りしながら、この問題を国民の皆さんや世界に向けて発信していく。

そうした地道な積み重ねが実を結び、今日の保育園の子どもたちや、先ほどもありましたように5年生の子どもたちなど、そうした次の世代の心に、1人でも2人でも響く活動につながっていくのではないかと思います。

ですから、小さな活動であっても構いません。

そうした取り組みを続けていくことが必要なのではないかと感じました。

【中島氏】

そうですね。棚田を守るというのは確かに大変なことです、そのような思いを持って、皆で頑張っていきましょう。

【高野常務】

ぜひ、別府市とも何か…

【長野 別府市長】

もう中島先生が全部お話しされた方がいいのではないと思うほどですが。

私たち別府市として何か申し上げるとすれば、連絡協議会については、別府市もまだ新参者のような立場です。

今回サミットを開催し、来年は私が会長になると聞いています。

前回開催地が会長を務める仕組みのようで、私とその役目を担うことになるのですが、今のように棚田の役割についてしっかり語れるのか、不安もあります。

ただ、棚田というものは、日本において特有の存在であり、やはり守っていかなければならないと強く感じています。

しかし、実際にその場所に足を運ばないと、日常の中で棚田を意

識する機会はなかなかありません。

だからこそ、教育の面での取り組みが大切だと思います。

例えば、先ほどのひめやま幼稚園の子どもたちや、小学校・中学校の児童生徒との関わりなど、日頃から教育の場面で一緒に取り組むことを大切にしてきました。

また、同じ悩みを持つ人たちとつながることも重要です。

例えば大分県内で、すぐ近くに同じ悩みを持つ人がいるかという点、そう簡単ではありません。

だからこそ、全国の同じ課題を持つ方々とつながり、お互いのように取り組んでいるのか、先進事例を共有したり、「大変だけれども頑張ろう」と励まし合うことが大切だと思います。

実は、私の父も農業者で、現在は地熱を利用したバナナやマンゴーの栽培を行っています。

その様子を見てみると、農業がいかに手間がかかり、よほど上手にやらなければ利益につながらない仕事であるかということ、身近で実感しています。

さらに別府では、実際に災害も発生しました。

そのとき、棚田の地域の皆さんは、「サミットどころではない」「今をどうするかが先だ」というお気持ちだったのではないかと思います。

それでも、棚田を守るためには、地元の皆さんだけに任せるのではなく、農林水産省や自治体など、多くの人の力を合わせた総力戦が必要です。

棚田は、崩れるのは一瞬ですが、再生するには途方もない時間と労力がかかります。

だからこそ、壊れてしまう前に守っていかなければならない。

また、10年先の話をしても現場の皆さんには遠く感じられると思います。

そこで、まずは5年計画を立て、この5年で何ができるかを考えようという話をしています。

10年先ではなく、まず目の前の5年。

この5年でどのように希望を見出すことができるか。

そのことを、この棚田サミットを契機として、災害という経験も含めながら、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

これからも、大切な棚田を皆で守っていききたいと思います。

### 【高野常務】

すばらしくまとめていただき、ありがとうございます。

私は農業者ではありません。農家でもありませんし、親や親戚も農家ではありません。

先々代、ひいおじいちゃんが農家の長男だったのですが、都会に出てしまいました。

都会といっても昔の時代のことでありますが、そうした経緯もあり、私は農業の経験がありません。

そうした都市生活者ができることは何か、ということと考えながら、棚田ネットワークの活動を始めて、私どもも30年になります。

連絡協議会ができた年の12月に、何か応援できないかと思い、棚田ネットワークを立ち上げました。

棚田連絡協議会は1995年9月に発足しましたが、その年の12月に活動を始めたということになります。

今、SNSなどを見ても、農業者は国の人口の1%、つまり1%しかいないと言われていました。

残りの99%は農村を知らないとも言われています。

ゆうべも内成の方と少しお話をしていたのですが、発信に

ついて、農家の方々に「発信してください」と言っても、なかなか難しいのではないかと思います。

農作業がありますし、これからどうしていくかという課題もあります。

また、高齢の方も多い状況です。

では、私たちにできることは何だろうか。

やはり、その1%と99%をつなぐことではないかと思っています。

そんな偉そうなことを言っても、簡単にできることはありません。

それでも、農家でもなく、かといって単なる消費者とも言い切れない私たちができることは、つなぐこと、そして発信のお手伝いすることではないかと思っています。

そこでお願いしたいのは、農家の皆さんに、本音で語っていただきたいということです。

そうした言葉を、私たちは都市の人たちへ伝えていきたいと思っています。

日南の坂元棚田のオーナーの方々は、以前、「もてなさない、もてなされない」というスローガンを掲げていらっしゃいました。

農家の方たちは、都会から人が来ると、どうしてもおもてなしをしようと思います。

しかし、それだけで終わってしまうと、後になって大変な思いをされることもあるのではないかと思います。

ただ「棚田が美しい」「体験が楽しかった」と満足して帰られてしまって、それで本当につながりが生まれるのだろうか、という思いもおありだと思います。

だからこそ、「体験に来てくれたけれど、ただ楽しく体験して帰るだけではだめだよ」という思いを、必ずしもそのままの言葉でなくてもよいので、伝えていただければと思います。

やはり、本音を伝えることで、本当の理解というものが、一歩でも二歩でも進むのではないかと思います。

棚田ネットワークを30年間続けてきて、初期の頃から感じていたのは、やはり本音で語り合える関係にならなければならない、ということでした。

それが実際にできているかどうかは別として、そうした思いを持って活動を続けてきました。

あまり時間もありませんが、都市と農村をつなぐ役割を、都市に住む方々や、都市で棚田に関心を持っている方々にも担っていただければと思っています。

私たちも、そうした形で少しでも役に立てればと思い、これからも活動を続けていきたいと考えています。

それでは先生、最後に。

ということで、ちょうどよい時間になりましたので、このあたりで終わらせていただきたいと思います。

時間も押しているようですので、以上で4名の登壇者のお話を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

## 第1分科会

## 棚田ツーリズムの未来形 ～観光・健康・地域再生をつなぐ～

コーディネーター 齋藤 圭氏 別府大学講師

## 【アナウンス】

それでは、定刻となりましたので、これより第1分科会「棚田ツーリズムの未来形～観光・健康・地域再生をつなぐ～」を始めます。ここからの進行は、別府大学食物栄養科学部講師の齋藤先生にお願いしたいと思います。

それでは、齋藤先生、よろしくお願いたします。

## 【齋藤氏】

どうも皆さん、はじめまして。別府大学の齋藤と申します。

この分科会は、タイトルにあるとおり、「棚田ツーリズムの未来形～観光・健康・地域再生をつなぐ～」というテーマで進めてまいります。

なぜこのようなタイトルにしたかと申しますと、別府は、やはり温泉があり、観光のまちとして有名だからです。

しかし、先ほどの内成の報告会でもあったとおり、また長野市長のお話にもあったとおり、「なぜ別府でも棚田が危機に直面するのか」という点が触れられていました。

つまり、観光のまちであるからといって、必ずしも棚田と観光が結び付いているわけではないという現状は、見過ごすことのできない事実であると思います。

そこで今回の棚田分科会では、そもそもなぜ棚田と温泉観光がつながっていないのか、そのうえで、それらをつなげていくためにはどうしていけばよいのか、ということをまず考えていきたいと思えます。

そのうえで、農業というのは、やはりその地域を色濃く反映する産業だと思えます。

例えば、東京など都市部に近いところの棚田の収益システムと、都市部から離れた地域の棚田とでは、当然ながら収益モデルが異なってきます。

また、北海道から沖縄、あるいは鹿児島など九州南部まで見ても、採れる農産物は異なります。

棚田というと、どうしても稲作に注目が集まりがちですが、ほかの作物を作ろうとした場合でも、栽培するものはまったく異なります。

そう考えると、農業というのは、その地域の気候や土壌、さらには立地を考えなければならない産業です。

そのような中で、この別府という地域の立地的特性は何なのか。

そのうえで、別府という地域資源として棚田を活用していくには、どういった形がよいのかを話していきたいと思っております。

ただ、私が話すのではなく、今回は4人の登壇者の皆様にお話しただこうと思っております。

早速、一番上にあるとおり、別府には5つの棚田があります。

ほかの方々の発表にもあったとおり、別府の扇状地と言われる都市部をぐるっと囲むように存在しています。

すみません、ここで私自身の紹介をさせていただきます。

すっかり失念しておりました。

改めまして、はじめまして。私は、別府大学食物栄養科学部発酵食品学科で講師を務めております齋藤と申します。

改めまして、よろしくお願いたします。

発酵食品学科というと、食品系の専門だと思われるかもしれませんが、私の専門は地理学で、あわせて水の研究もしております。

前職は、この建物のすぐ近く、隣にある京都大学の地球熱学研究施設という温泉の研究所でした。

そのため、現在の職場に着任する前までは、温泉の研究が主なテーマでした。

具体的には、水の研究として、温泉がどのように流れているのか、どの標高に降った雨水が別府の温泉になっているのか、といった研究をしておりました。

そのほか、水質や河川水質など、さまざまなテーマにも取り組んでいました。

現在は、別府大学で地史や地理の科目も担当しております。

こうして話し始めると少しややこしくなるのですが、今日は観光の話でコーディネーターを務めます。

一方で、専門は水の話です。

そのため、最初にお話をいただいたときには、水の話から入ろうかとも思ったのですが、少し専門的すぎると感じました。

そこで今回は、私の専門である地理という視点から入っていきたいと思っています。

冒頭でも申し上げたとおり、まずは別府と棚田がどういう関係にあるのかを考えていきたいと思えます。

時間は10分から開始とのことですので、あと5分ほどでお話します。

別府市は、当然ながら観光温泉都市として知られ、火山性扇状地に湧く温泉が注目されています。

この扇状地に温泉が多く湧き、観光地として発展してきたわけですが、重要なのは、その周辺にある山々が山地であるという点です。

つまり、山があるわけです。

そのため、温泉街がある地域と棚田がある地域は、分断されるような形で存在しています。

理想を言えば、棚田があり、温泉街があり、海があり、それらをすべて一望できることが最も望ましいのですが、必ずしもそのような状況にはなっていません。

なぜかという、火山の山が隔てているからです。

そのため、交通の面から見ても、トンネルを通る、あるいは峠を越えるといった形を取らなければたどり着けないのが現状です。

これは、地理的条件として、扇状地部の温泉都市と山間部とを自然地理学的に分断しており、その結果として、交通・経済・社会の面で異なる発展経路を生んできた、ということなのです。

ただし、そのことは一方で、市街地開発の波を受けにくかった、という側面もあります。

結果として、伝統的な農村景観や水利技術、共同作業の文化を保持してきたとも言えます。

つまり、この別府の地形的な分断は、地域の隔絶という面では、たとえば交通が今ほど発達していなかった100年前、200年前であれば、非常に大変だったと思えます。

しかし一方で、それが多様な文化や景観を保存・温存する条件でもあったわけです。

ここが重要な点です。

先ほどの話に戻りますと、なぜ観光につながっていないのか、という問いがありました。

まさにここに理由があります。

そもそも、これまでは別の地域として考えられてきたのです。

つまり、農業・農村としての第一次産業の場と、観光という第三次産業の場とが分かれてきてしまったわけです。

それを今、どのようにつなげていくかがポイントになります。

申し訳ありません。そろそろまとめに入ります。

では、それをどうするか。

近年、別府では温泉を活用したウェルネス計画が進められています。これは別府市の報告にもあるのですが、長期滞在型、いわゆる湯治として、健康のために温泉に入ってもらおうという考え方です。

そうすると、長期滞在につながり、結果として滞在時間が長くなります。

その際に、棚田というものを体験してもらおう、という発想が出てきます。

温泉は、入浴して静かに過ごすという意味で、静かな癒やしをもたらします。

一方で棚田は、実際に動く、里山を歩くということで、動的な癒やしが得られるのではないかと思います。

さらに、棚田で採れたものを食べるという点で言えば、お米も含め、別府野菜という形での展開も考えられます。

たとえば京野菜や鎌倉野菜のように、都市郊外で育てられた野菜は新鮮であると同時に、ブランドとして認定されています。

別府の場合は、まさに温泉地ですから、温泉の恵みを地獄蒸しなどとも関連づけながら、野菜を味わうきっかけをつくること、さらにそれがどこで生産されているのかを知ることも含めて、大切なのではないかと考えています。

最後に重要なのは、農業法人化という視点も避けて通れないのではないかと、ということです。

なぜかと言うと、既に何度も話題に上がっているとおり、農業従事者の平均年齢は68歳です。

従来家族経営では、農業は家業として継ぐものという印象がどうしても強くあります。

しかし、農業に関心を持つ学生は実際にいます。

私のゼミ生を見ても、農業に興味がある学生は何人もいます。

ただし、問題は就職先です。

求人の方がない、という現実があります。

UターンやIターンを希望する学生がいても、就職先としての受け皿が農業には少なすぎる。

これは現状の課題です。

農業法人化を考えると、現場の方々の話を聞いても、「忙しい時期は忙しいが、常に雇い続けるほど人手が必要なわけではない」という声があります。

そのため、時間雇用のほうが現実的だという話にもなります。

そうしたときに、例えば農業だけではなく、観光従事者として働く形や、6次産業化なども含め、農業従事者と観光従事者の双方にとっての機会雇用として、この棚田での農業法人のあり方を考えられないか、ということが核になると考えています。

私が長々と話しても仕方ありませんので、ちょうど時間となりました。

今回は、こうした大きな枠組みの中で、4人の登壇者の皆様にお話をいただこうと思っております。

1人目は、大分ヤクルト販売株式会社の花田さんです。

花田さん、せっかくですので、前へ出てきてもらってよいでしょうか。

どうぞ。

ありがとうございます。

【花田氏】

おはようございます。ようこそ別府へ。

ヤクルトと書いてありますが、あまりヤクルトらしくないでしょ

うか。大丈夫でしょうか。

皆さん、お昼ご飯を食べて、一番眠い時間帯かと思います。しかも少し薄暗いですね。

ただ、この20分間は、「別府に来て良かった」と少しでも感じていただけるような話を聞いてもらいたいと思います。

よろしくお願いします。

【齋藤氏】

すみません。ありがとうございます。

2人目は、APUのカゼム先生です。APU、立命館アジア太平洋大学の先生をされています。

3人目に、小野先生、別府大学国際経営学部の先生。

そして最後に、佐藤さんですね。別府市観光協会の事務局長をされています。

この4人の登壇者の方々に、それぞれお話しいただき、実際に観光の視点から見たときに、別府の棚田との関係はどういうものなのか、また、実はもっとできることがあるのではないかと、他の地域ではどうなのかといった点について、さまざまに話し合っていきたいと思っています。

よろしくお話ししたいと思います。

【花田氏】

やはり齋藤先生は、お仕事が話すことですから、お上手ですね。

ただ、私も負けておりませんよ、皆さん。

面白いのは、話だけではなくて、顔も面白いんです。

はい。

昨日、一昨日、いや、違いました。3日前だったでしょうか。

顔面から転びまして、かなりけがをしているんです。

ただ、今日は少し化粧をしてきました。

きれいに映っているでしょうか。大丈夫でしょうか。

大丈夫ですね。良かったです。

「この人は誰だろう」といった感じかと思いますが、少し自己紹介をさせていただきたいと思っております。

私、“別府の一休さん”と呼ばれております花田と申します。よろしくお話しします。

良い拍手をありがとうございます。

お坊さんかと思われるかもしれませんが、いや、お笑い芸人……と言いたいところですが、少し近いかもしれません。

何をしている人間かと言いますと、大好きな別府でまち歩きガイドをしたり、ときどきメディアに出たりしながら、このまちの魅力を伝える活動をしています。

タレントではありません。

まったくの素人です。

ただ、お笑いタレントより面白いのではないかと、などと話すこともあります。

よく囁みますが。

自己紹介になっていませんでした。失礼しました。

会社はヤクルトです。

ただ、観光推進事業部に所属しております、別府の駅前で、観光案内所兼ガイド施設の「ARUCO・DE・BEPPU」を運営しています。

このネーミングを付けたのは私です。

どういう意味かと言いますと、大分の人は方言で「歩こうよ」というのを「歩こうえ」と言うんです。

それがとても良い響きだなと思って、「歩こ・DE」にしたら面白

いのではないかと思います、「ARUCO・DE・BEPPU」と名付けました。

「ARUCO」は、アルファベットで「A・R・U・C・O」と書くのですが、ポルトガル語では虹、あるいは架け橋という意味なんです。それを知って、本当に驚きました。

もうそこで運をかなり使い果たした気もするのですが、残りの力で今日はお話したいと思います。

少し長くなりましたが、私は熊本出身で、別府が大好きで、7年前にこちらへ移住してきました。

現在の会社ともご縁があり、このまちあるきステーション「ARUCO・DE・BEPPU」で3年前から活動しております。

何をしているかと言いますと、外部施設としてツアーを企画し、近隣のまちを紹介していくような取り組みをしています。

その施設の所長を務めています。

今映っているのは内成棚田ですね。今回、私もそこへ行ってまいりました。

ツアーの内容ですが、昨年9月に、「奥別府に行こう、見頃の彼岸花を」という企画を実施しました。

良い時期を選んだつもりだったのですが、行ってみると、彼岸花がほとんどありませんでした。

なぜかと言うと、昨年の夏も非常に暑かったからです。

この企画は半年前くらいに作ったもので、「9月中旬なら絶対咲いているだろう」と思っていたのですが、ほとんど咲いていませんでした。

それほど暑かったのです。

ただ、参加者は30代から70代までと幅広い年齢層で、お越しいただきました。

何をしたらと言いますと、棚田の見学はもちろんですが、現地に行って農家の方のところで収穫体験をし、それを使った食材で皆さんと一緒にランチを食べました。

そして、別府といえば温泉です。

温泉にも入っていただく、そうした内容を組み込んだツアーをつくり、およそ20名近くに参加していただきました。

その内容を少しお話ししたいと思います。

まず伺ったのが、松本農園さんです。

内成の少し手前にある農園で、お茶とカボスを作っています。

皆さん、カボスはご存じでしょうか。

実は大分県では、このカボスが非常によく採れます。

一方で、お隣の熊本ではあまり使わないんです。

ただ、大分県の方は本当に何にでもかけます。

例えば、お刺身や揚げ物はもちろんですが、なんと味噌汁にも入れるんです。

少し驚かれるかもしれませんが、柑橘系を味噌汁に入れるのか、と。でも、ぜひ試してみてください。

今日、別府に滞在される方もいらっしゃると思いますが、酸味が強く出るといより、味を引き立てる役割をするんですね。

私もすっかりはまってしまっていて、毎晩焼酎を飲んでいるのですが、焼酎に入れてもおいしいです。

特に大分の麦焼酎にはよく合います。

名物ですので、皆さん、ぜひ味わってってください。

そこで何をしたらと言いますと、カボスの木から皆さんで収穫をしました。

食べたり、料理にかけたりすることはあっても、実際に「もぐ」経験はなかなかないですね。

参加された方々は、実は県外の方ではなく、ほとんどが別府・大分に在住の方々でした。

食べたことはあっても、もいだことはない、という方が多かったです。

それを収穫していただきました。

現地のコーディネーターとして、今日も来ていらっしゃるんですが、川島千明さんという方がいらっしゃいます。

彼女はAPUの卒業生で、私とは以前からの知り合いなのですが、現地に移住してさまざまな活動をされています。

今回は彼女にお願いして、内成棚田の説明やご案内をしていただきました。

やはり、初めて行く方が非常に多かったんです。

そこに棚田があること、名前自体は知っているけれど、実際どんなところなのだろう、という方が多かったんです。

そして、実際に行かれた別府の方々が、「うわあ、こんな素晴らしい棚田があったなんて」とおっしゃるんです。

近すぎて、当たり前すぎて、かえって行ったことがない。もったいないことだと思います。

コーディネートしていただいた中で、太郎丸というところに直売所があります。

いわゆる無人販売所ですね。

100円を筒に入れて、農家の方々が置いてくださっている新鮮な野菜を購入できる場所です。

その後、皆さんで棚田の散策をしました。

写真を撮っている場所は、少し後ろの風景が見えにくいのですが、奥の方には大分市まで見えます。

このように、すり鉢状に広がる大変きれいな棚田なんです。

彼岸花は、その時は一輪か二輪咲いていたものを少し取り上げた程度で、ほとんどありませんでした。

ただ、本当に時期になると、棚田一面、畦道にも咲いて、とても美しい風景になります。

皆さんで集合写真を撮っているのが月見石駐車場という場所なのですが、少し上に行くと月見石があり、本当に息をのむような美しさです。

これなんです。

明日行かれる方もいらっしゃると思いますが、ぜひ高台にある月見石のところまで行っていただけたらと思います。

そして、こちらです。

カボスが出てきましたね。

何をしたらと言いますと、区長の園田さんが持っていらっしゃる箱がありますよね。

あれはニホンミツバチの養蜂箱です。ご自身で養蜂をされているんです。

私は知らなかったのですが、蜂蜜というと、とろっとしているイメージがありますよね。

ところが、違うんです。

本当に良いものは、さらっとしているんですね。

それを知らなくて驚きました。

女性の方も持っていますが、あの中には蜜が入っています。

収穫したカボスを切って、その蜂蜜を入れ、さらにサイダーを加えて、みんなで飲みました。

その後は、皆さんで調理もしました。

内成の棚田米を、このガス炊飯器で炊きました。

実は、私は前職がガス屋だったんです。

今は兄が社長をしているのですが、その兄に「炊飯器を貸してくれ」と頼んで、熊本からわざわざ持ってきました。

現地で借りればよかったですね、持ってきたんですね。

そして、その炊き立てのご飯で、皆さんでおにぎりを握りました。これが本当においしかったです。

先ほども申し上げたとおり、その日はとても暑かったです。涼しいだろうと思って、テントなどを用意していなかったんですね。

そうしたら直射日光が私の頭に突き刺さりまして、この作務衣の間も含めて、全部焼けてしまいました。

温泉に行ったときには、「あのお坊さん、どうしたんだろう」と少しざわつかれました。

そして、お米、さらに現地で採れた野菜を、お母さんたちがきれいに、おしゃれに料理してくれました。

皆さん驚かれていました。

「こんなにおいしいものが、私の家から車で15分のところで採れるなんて」と。

わざわざ大分でも端の方や南の方で採れた何々産の野菜を、高いお金を出して取り寄せていた。

でも、たった15分で、これだけのものがある。

これは大きな驚きとして受け止められ、このツアーは非常に高い評価をいただきました。

そして、別府といえば温泉です。

ここは城島高原ホテルさんで、遊園地に併設されたホテルです。

内成の棚田から車で10分から15分ほどでしょうか。

近いんです。

そこで、この温泉に入らせていただきました。

スタッフの皆さんが総出で迎えてくださって、驚きました。

入浴に來ただけなのに、皆さんでおもてなしをしようという気持ちが本当に強い。

そういうDNAを持った方が非常に多いのが、別府なんです。

私も含めてですが。

最後はお見送りまでしてくださいました。

ただお風呂に入りに来ただけなのに、旅の記憶を良いものにしてほしい、皆で盛り上げればきっとご満足いただける、そんなホスピタリティにあふれた方々でした。

皆さんも、城島高原ホテルさんにいらっしゃる機会があれば、ぜひ泊まってみてください。

温泉も広くて、とてもきれいです。

本当に素晴らしいので、おすすめしたいと思います。

そして、こちらが別府市民の憩いの場所、志高湖です。

ここから車で10分ほどでしょうか。

こういう場所があるんです。

先ほど先生もおっしゃっていましたが、別府というと温泉のイメージがあまりにも強い。

もちろん、それはそれで素晴らしいことです。

実際、温泉巡りを目的に来られる方も多くですし、11月初旬のような少し肌寒い時期は、温泉が最も気持ちよい季節です。

だから、観光のお客さんがたくさん来ます。

ただ、来てみると、海がある。山がある。

それは一目でわかります。

でも、少し車を走らせると、こんな湖があり、棚田があり、火山があり、高原があり、川があり、滝がある。

本当に何でもあります。

これが別府なんです、皆さん。

温泉は入口にすぎません。そして、温泉というのは自然の一部です。

これは意外と、別府に住んでいる人たち自身が十分に理解できていない部分でもあります。

「どうせ温泉しかない」といった言葉が、最初に出てきたりすることもあります。

しかし、そうではありません。

大自然の中で生まれ、その中に文化や歴史を内包しているのが別府なんです。

だからこそ、こうした半日のツアーであっても、別府に住んでいる方々から「やはり別府はすごいね」と言っていたけました。

私自身も、毎日のようにそう感じています。

私は熊本から移住してきた人間ですし、家族を熊本に残してまでこちらにきています。

それほど、この魅力を皆さんに伝えなかったんです。

ですから、今日この話を聞いて地元へ帰られた際には、「別府は温泉地というだけでなく、いろいろな自然があり、その一部として温泉がある、という話を聞いてきた」と、ぜひ周りの方に広めていただきたいと思っています。

真ん中に写っているのは、globeで30年ほど前にデビューされた、小室哲哉さんの3人組グループのメンバー、マーク・パンサーさんです。

今、この方は大分とご縁があり、「ツーリズム別府大使」として、別府や大分の魅力を世界に発信されています。

そして、なんと先日、別府の鉄輪温泉エリアに移住されました。

すごいことですよ。

一時代を築いた方が、別府に移住しているわけです。

もちろん拠点はいくつかお持ちですが、健康が一番ということで、今いろいろと取り組まれていて、SNSなどでも発信されています。

特に、温泉のある暮らしに憧れて別府に來られ、さまざまな活動を通じて、その魅力を世界にも広めてくださっています。

実はBSの番組もありまして、「グロ旅」という番組を毎週土曜日の夜10時から30分放送されています。

その中で、コーディネーターの川島千明さんの横で、手に持っているものがありますが、これは田植えをしている場面です。

マークさんは、ほかにも隣町の日出町でお米を植え、それを収穫し、「仏歌鬼舞（ふっかきまい）」というお酒も作られています。

本当にすごいことです。

このような方がどんどん増えて、別府は温泉だけではなく、自然の豊かな場所なのだということを広めてくださるのは、本当にうれしいことだと思っています。

これからも地元の皆さんと一緒に、地域の魅力をもっと深掘りしてお伝えしていけたらと思っています。

「ARUCO・DE・BEPPU」は駅前通りにあり、アーケードが2本あるうちの、海側のアーケード「ソルパセオ銀座」の角にあります。

別府にお越しの際は、インフォメーションも行ってありますので、ぜひ一休さんに会いに来てください。

熱い話を、しっかりさせていただきます。

私は知識人ではありませんが、感情を前面に出して、別府の魅力を伝えていきたいと思っています。

また皆さんにお会いできるのを楽しみにしております。

ありがとうございました。

【齋藤氏】

ちなみに私は、二日酔いの後に飲むカボス入りの味噌汁が大好きです。

実は味噌汁にもカボスを入れるんですよ。

私も県外出身ですが、そういうことを教えていただきました。

それでは次に、APUのカゼム先生にご登壇いただきたいと思います。

カゼム先生は観光学の第一人者で、日本の棚田にはどのような価値があるのかを、学術的な視点からお話しいただけるのではないかと思います。

【カゼム氏】

皆さん、こんにちは。ようこそ別府へ。

立命館アジア太平洋大学のカゼムと申します。

私は日本各地の棚田を訪ねて研究しており、現在も観光学の研究員・教員としてAPUで仕事をしております。

今日は、棚田観光と地域おこし、そして棚田を中心とした観光や観光計画を通じて、地域の方々と一緒にどのように元気な地域をつくっていくか、という観点からお話ししたいと思います。

まず、日本全国の中での「別府モデル」をお見せしたいと思います。

棚田は、里山の中でも最も重要な場所です。

里山の心と言ってもよいと思います。

里山と里海は日本の農村を考えるうえで大切な要素ですが、里山は里海よりも広い概念です。

農業景観の中で見ても、里山システムは日本の一つのモデルです。

世界中に里山に似た景観はありますが、日本の場合は「里山」として認識されています。

その中心にあるのは、お米づくりです。

お米がなければ里山で暮らすことはできない、とされています。

また、日本は山が多い国ですから、棚田をつくらなければ米づくりができない地域も多くあります。

昔から棚田をつくり、米をつくり、そこでコミュニティが形成されてきました。

棚田をつくるには、石垣をつくることも必要です。

しかし、それは1人ではできません。コミュニティで取り組まなければならないのです。

ですから、コミュニティの文化やアイデンティティの中には、棚田の意味が深く入っているのです。

そして、日本の里山とお米、その中でも棚田は、特に大切な存在です。

背景として申し上げますと、日本には「里山・里海アセスメント」があります。

これは2001年から2005年にかけて行われたもので、北海道から沖縄まで、日本の里山資源を評価した国連の事業です。

さまざまな国が自国の自然資源のアセスメントを行う中で、日本でもこの里山・里海アセスメントが実施され、里山というテーマが世界的にもよく知られるようになりました。

その里山の中で、特に重要な場所が、今日のテーマである「棚田」です。

里山のビジョンとしては、人と自然が調和した社会、“Societies in Harmony with Nature”という考え方があります。

つまり、環境にやさしい生活のシステムづくりです。

自然資源をたくさん取り過ぎると、里山システムは壊れてしまい

ます。

ですから、自然のキャパシティを考えながら、取り過ぎず、やり過ぎず、その範囲の中で資源を使っていく必要があります。

また、自然から取ったものは、再び自然へ戻る循環が大切です。

例えば、昔は山の落ち葉を集めて田んぼに入れ、棚田の肥料として使っていました。

別府でも、山でしいたけを作り、そのホダ木の下での栄養が水とともに流れて田んぼに入り、お米づくりにつながるといった循環がありました。

さらに、これまでの発表にもいろいろな文化の話がありましたが、棚田のある場所は、そうした伝統文化の場でもあります。

文化を大事にしながら、棚田の社会を見ていくことが重要です。

そして、多くの人と協力しながら棚田の活用や発展を考えていかなければなりません。

地域が経済的・社会的に元気でなければ、棚田も元気にはなりません。

その意味で、里山のコンセプトと棚田は非常によく合っていると思います。

ただ、今日のテーマは観光です。

里山づくり、棚田づくりの中に、観光をどう入れていくかが問われています。

日本の棚田は、北海道を除けば比較的小さな田んぼが多く、大量生産には向きません。

手間も多くかかります。

そして、今棚田で農業をしている方々は高齢化が進み、人口も減っています。

そのため、伝統的な農業だけで生活を維持することは難しいのです。

ですから、観光と伝統農業を組み合わせ、付加価値をつくる仕組みが必要になります。

そうすれば、棚田ももっと元気になるはずです。

では、どういう観光が考えられるか。

例えば、棚田の中に何人くらい入れるのか、大型バスで40人入れるのか、それとももっと小さいグループがよいのか。

そうしたキャパシティを考えなければなりません。

そのうえで、持続可能な開発、持続可能な観光開発、そして棚田の活用を考える必要があります。

棚田観光を進めるためには、まず棚田地域そのものを元気にしなければなりません。

つまり、棚田の周りのコミュニティが持続可能な生活を送れていることが前提になります。

そのうえで、エコツーリズム、村の観光、農業観光、自然観光など、棚田を中心にしたさまざまなアクティビティをデザインすることができます。

国連観光機関などでも、持続可能な観光のためには、経済・社会・環境の3つを大切にしなければならないと言われています。

もともと棚田は観光のためにつくられたものではありません。

ですから、観光は棚田の経済、環境、社会を守るためのものでなければなりません。

そうした観光デザインこそが、持続可能な棚田観光だと考えます。

別の国連機関でも、同じように経済、社会、文化、環境、そして持続可能な経済性が重要だとされています。

つまり、ビジネスとして成り立たなければ、続けていくことはできません。

柵田観光を地域の生活の中にどう組み込むかが、一番のポイントです。

ここに出ている写真は能登空港です。

能登半島は地震の影響で今大変な状況ですが、空港の中にも地域文化が見える工夫がされています。

こちらの写真も能登半島ですが、別府でも同じようなことはできると思いますが、すでに実践されている部分もあります。

山の奥の木材は、今はそのままではなかなかお金になりませんが、アクティビティとして活用すれば観光資源になります。

また、農業観光・柵田観光の目的地として考えるなら、環境の大切さを次の世代に伝える教育的な意味も含まれています。

内成柵田は、柵田百選にも選ばれており、別府には5つのつなぐ柵田遺産があります。

APUの学生たちも、何度も現地に行き来しながら、コミュニティと関わっています。

ここでは稲刈りや田植え、柵田ウォークなど、さまざまな体験が行われています。

別府温泉の観光客を柵田へ連れていき、そこに泊まれるような仕組みまで考えられれば、とても良いと思います。

例えば、内成には民宿のような形で活用できる場所もあり、APUの学生がコミュニティと一緒に管理しているところもあります。

自然資源を活用しながら、農業体験や景観観光など、いろいろなアクティビティをデザインすることができます。

ただし、どこまで柵田の中に観光を入れるか、どこまでならコミュニティにとってメリットがあるのかは、地域の方々と一緒に考えなければなりません。

ここで宇佐市の両合柵田の事例も紹介したいと思います。

両合柵田も柵田百選の一つで、村中橋などを含めた景観やアトラクションがあり、稲刈りや駒打ちなど、地域の方々と一緒に行う農業体験もあります。

まるで「柵田学校」のような形で、地域の皆さんが先生となってさまざまなことを教えてくれるのです。

まず、柵田観光は間違いなく里山観光です。

いろいろな文献を見ても、里山観光というテーマの中で、柵田観光が多く語られています。

そして別府の柵田には、まだまだ観光づくりの可能性があります。

別府温泉観光は既に有名ですが、それと柵田観光をつなげることで、柵田ももっと元気になることができます。

さらに言えば、温泉観光をより深く考えると、その周りにあるコミュニティや柵田が見えてきます。

温泉観光産業の方々と柵田コミュニティが対話を続けながら進めていけば、宿泊の長期化にもつながり、win-winの関係をつくることができます。

こうした形で柵田観光と温泉観光を一緒に考えることで、より持続可能なモデルになるのではないのでしょうか。

そのためには、柵田コミュニティ自身が観光開発の中に入り、観光計画の中にも地域の意見やアイデアを反映させることが必要です。

そうすることで、別府の持続可能な観光づくりが進んでいくと思います。

柵田がなくなれば、私たちの食べ物もなくなります。

だからこそ、柵田は守らなければなりません。

将来のことを考えると、お米や野菜など、柵田の農産物を守るために観光の力を活用すること、それが柵田観光だと思います。

柵田は観光のためにあるのではなく、観光が柵田のためにある。そういう考え方のもとで、さまざまなアクティビティをつくっていくことが、持続可能な柵田観光につながると思います。

ご清聴ありがとうございました。

【齋藤氏】

ありがとうございます。

また総合討論の際にお話しできればと思いますが、農村観光は、外国人にとって非常に価値が高く認識されています。

一方で、日本人はオーバーツーリズムのような観光しか経験しておらず、農村の価値にまだ十分気づいていないのではないかと、という面もあります。

例えば、数泊して何十万円もかけて来るような農村観光は、実際に国東市の事例などでもあります。

つまり、1人当たりの単価が高い観光にもなり得るわけです。

そのような観光の視点は、私たちにまだ十分ではないかもしれませんが、柵田観光の中には、そうした可能性を示すヒントがあるのではないかと考えています。

この点も、後ほど全体討論で議論できればと思います。

それでは次に、同じ別府大学で、国際経営学部にも所属し、同じく観光学をご専門とされている小野先生にお話しいただきたいと思います。

よろしく願いいたします。

【小野氏】

ご紹介いただきました、小野です。

齋藤先生と同じ別府大学ではありませんが、所属する学部・学科が異なりまして、私は国際経営学部国際経営学科の中にある観光地域経営コースで教員をしております。

小野貴史と申します。よろしく願いいたします。

この写真は、別府の柵田とはまったく関係ありませんが、バリ島のウブドという観光地にあるホテルから見えたライステラス、つまり柵田です。

なぜこの写真を出したかと言いますと、私はもともと別府大学で歴史を学び、その後、教育委員会で発掘調査をしていました。

その後、旅行会社に勤務し、営業、企画、添乗などの仕事をしておりました。

この写真は、その頃にバリへ行った際、20年ほど前に撮ったものです。

今回、柵田がテーマということで、そういえば昔撮った写真があったと思い出し、使わせていただきました。

その後、旅行会社勤務の最後の2年間は、非常勤として大学でも教えていました。

旅行の国家資格である旅行業務取扱管理者や添乗員資格などを、学生が取得できるような授業を担当していたのです。

その後、旅行会社を退職して専任教員となり、現在5年目になります。

研究者というよりは、実務家教員としてお話しできればと思っています。

別府の現状と課題については、先ほど齋藤先生からも説明がありましたので、詳しくは繰り返しません。別府は扇状地と山間部という二重構造、あるいは三重構造を持っており、そこに観光的・経済的な分断がある、ということです。

別府の柵田も、東山・内成・由布市挾間の奥詣など、位置関係と

して見ると、近いようで分断されています。

私自身は由布市側に住んでおり、そのあたりから大学へ通っているのですが、改めて考えると、普段の通勤の中で普通に棚田を見ていたんですね。

しかし、それは私にとって当たり前の景色であって、車を止めてじっくり見ようとまでは思っていませんでした。

そう考えると、やはりつなぐための核が必要だと思います。

そこで一つの解決策として、温泉ガストロノミーツーリズムを活用するとよいのではないかと提案したいと思います。

これは欧米で発展してきた、美食やお酒を楽しみながら歩くツアーに、日本では温泉を組み合わせたものです。

2016年、2017年頃から国内でもこうしたウォーキングツアーが行われるようになりました。

このツーリズムでは、その土地の気候風土が生んだ食材や、習慣、文化、伝統、歴史などを、ガストロノミーポイントというチェックポイントごとに味わいながら巡ります。

到着すると、その土地ならではのものを食べたり飲んだりし、場合によってはガイドが歴史や文化を説明する。

そうしたツーリズムです。

これを別府の棚田に応用すると、非常に面白いのではないかと思います。

そもそもガストロノミーツーリズムとは、地域に点在する食、酒、歴史、文化などの資源を、面として捉え、その地域全体を巡りながら体験していくものです。

長期滞在者のアクティビティにもなりますし、リピーターの増加にもつながります。

基本は地産地消です。

地域の特徴を生かすことで、他地域との差別化ができ、観光客に新たな価値や体験を提供できます。

また、観光資源が未開発の地域でも取り組めるのが特徴です。

「うちには観光資源がない」と言っている、歴史をひもとけば観光資源になり得るものはありますし、食もSNSなどを通じて発信されれば、いつの間にか観光資源になることがあります。

さらに、旅行内容をストーリーとして紹介しやすく、地域のブランド力向上やリピーター獲得にもつながります。

温泉ガストロノミーツーリズム推進機構という組織があるのですが、大分県とのつながりも深く、2016年の立ち上げには長野別府市長も発起人の一人として参加されています。

そして2017年には、別府市の後援により、日本で初めてとなる温泉ガストロノミーウォーキングが試験的に実施されました。

その後も別府や大分県内では何度も開催されており、2025年3月までに全国最多となる計13回が大分県内で実施されています。

この初回の試験実施では、別府の亀川や海岸沿いがコースとなりましたが、その際には東山饅頭がガストロノミーポイントで提供されました。

また、豊後高田でも棚田地域を舞台にガストロノミーウォーキングが実施されています。

私自身も着任翌年頃から、大学のゼミ生と一緒に大分市のガストロノミーウォーキングに参加してきました。

ここでは大分市内で採れるものを使った特産品や名物が提供されており、やせうま、とり天、にら豚、カボスジュースなどがガストロノミーポイントに並んでいました。

別の回では、別府駅前を出発して大分市内へ向かうルートもあり、最初のポイントでは温泉湯豆腐が提供されました。

そのほか、椎茸コロッケ、豊後牛、りゅうきゅう、関あじ・関さばなど、その土地ならではの食が非常に人気を集めていました。

さらには、クロメを使ったたこ焼きなどもありました。

こうした温泉ガストロノミーツーリズムやウォーキングを棚田地域に導入すれば、観光客に棚田を知ってもらおう非常に良いきっかけになると思います。

その際に重要なのが、地域のストーリーを語り、先導するガイド人材の育成です。

一休さんのように、地元の方がガイドとなり、現地で各分野の専門家が説明して下さることは、とても重要だと思います。

今後は、こうした人材育成がますます必要になってくるのではないのでしょうか。

さらに、齋藤先生が提案された「別府野菜」というブランド化も有効だと思います。

京都や鎌倉のように、別府の棚田地域で採れるお米や野菜を、認証制度なども含めてブランドとして売り出していく。

そして、ガストロノミーの場でそれらを使った料理を提供する。

これは非常に良い展開だと思います。

別府ならではの強みとして、温泉の蒸気を使う地獄蒸しがあります。

別府市内各地で行われている調理法ですが、野菜や海産物を蒸すことで、温泉成分による独特の塩味も加わり、ヘルシーな料理になります。

この別府野菜を地獄蒸しと組み合わせることで、とても魅力的な食体験が生まれるのではないかと思います。

さらに、棚田を歩くことそのものが健康につながります。

坂道もありますし、景観を眺めながら歩き、試食をし、時期によっては収穫体験や花の見頃、水面が張る時期など、いろいろな楽しみ方ができます。

この分科会のテーマには「観光・健康・地域再生」がありますので、ガストロノミーがどのように健康に寄与するのか、という点も大事です。

伝統的な健康資源である湯治による心身の回復、そして棚田ツーリズムによる動的な癒やし、農業体験によるリフレッシュ。

これらを組み合わせれば、別府ならではのウェルネスツーリズムの形になるのではないかと思います。

名称が必ずしも「ガストロノミーウォーキング」である必要はありませんが、すでに一休さんたちが取り組まれているような活動と十分親和性があると思います。

こうしたツアーは、一般的に7kmから8km程度歩くコースが多いのですが、別府ならではの形にアレンジできる余地も大いにあると思います。

どうしても、「別府は別府」という意識はあると思うのですが、私はもともと旅行会社の人間でもありましたので、市町村の垣根はあまり関係ないと考えています。

せっかくすぐ近くに、もう1つ棚田がありますので、この2つを歩いて結ぶようなコースもできるのではないかと思います。

それから、ビューポイントですね。先ほども一休さんのお話があったと思いますが、ここであれば月見石であったり、太郎丸の上の方から見る景色であったり、あるいは下の下畑の方から見上げる景色であったり、いろいろな場所から棚田の風景を楽しむことができます。

さらに、食の要素もあります。

棚田米、それから果樹であればプラムや柿などですね。そういっ

たものが内成地区にはありますし、ほかにも野菜などもあります。

また、自然景観としては柵田の景観、文化的景観、それからイチョウやお茶屋さん、お茶の小さな施設などもあります。

さらに、歴史や伝統という面では、お寺や神社などもあります。

こうしたものを組み合わせ、最後に温泉に浸かる。温泉は別府市内の温泉でよいと思いますが、こういった内容を1つのツアーとして作ると、非常によいのではないかと思います。

もう1つ、東山の方の柵田群でも考えることができます。

こちら、この区間を歩くと約6キロほどですので、別のツアーとしてこういったルートも設定できるのではないかと、ということです。

歩くルートの途中には、由布川峡谷という有名な峡谷があります。

その途中には、由布岳の絶景ポイントもあります。こういった景色が見える場所がありまして、これはちょうど今朝撮ってきた写真です。

私の通勤途中に撮ったのですが、由布岳には少し雲がかかっているものの、東山の柵田群の奥に由布岳が見えるんですね。こういった景色というのは、やはり歩きながらでないとなかなか気付かないものです。

私も普段通勤で通っていますので、車を止めてまで見ることはなかなかないのですが、普通に見えている景色ではあるんです。

ただ、写真としてしっかり収めることはあまりありません。

そういった場所が、実はいろいろなところにあります。

それから、2つの分断されたエリアをつなぐという点では、別府市では「おもてなしライセンス」という取り組みを、たしか昨年くらいから始めていたと思います。違っていたら、後で事務局長に訂正していただければと思います。

よくある地域検定のようなものですね。地元の観光事業者に対して実施されているもので、たとえばタクシー事業者やバス会社のガイドさんなどが、別府に関するさまざまな問題を解いて、合格するとライセンスを取得できる、という仕組みです。

こういったものを、観光事業者だけでなく、たとえば若い大学生が別府にいる間に取得する、といったこともできるのではないかと、思います。

そうすることで、現在別府市が取り組んでいる「湯けむりライドシェア」とうまく組み合わせることができると、思います。

今、タクシーは運転手さんが非常に少なくなっている状況ですので、この2つをうまく活用すれば、運転する人が観光の説明もできる、といった形も可能になるのではないのでしょうか。

そうすると、柵田へ向かう途中でも観光案内ができることになります。

それ以外にも、「ゆのくにクルーザー」という1人乗りの原付ミニカーがありまして、別府駅前まで借りることができます。

こういったものも、非常によい移動手段ではないか、と思います。

このあたりは少し話したいことが広がってしまうのですが、そういった人材育成について、私は国家資格や添乗員資格などを学生に取らせるようにしています。

そういったものも含めて、「おもてなしライセンス」なども活用しながら人材を育成していく。そして、その学生たちが内成の柵田にもさまざまな形で関わっていくというのは、非常によいことではないか、と思っています。

まとめになります、2つの分断されたエリアを、ガストロノミーウォーキングを活用してつなぎ、「柵田ガストロノミー」を実施するとよいのではないかと、ということですが、

また、その交通手段としては、「湯けむりライドシェア」を活用し、さらに「おもてなしライセンス」によって専門知識を持った人材を育成していく。

そういった形でこれらを統合していけば、柵田を維持しながら稼ぐことのできる地域資源として、次世代につないでいくことができるのではないかと、という未来像を描いています。

以上で終わりたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

【齋藤氏】

ありがとうございます。

私も今、SFCCをやっています、ライセンス……資格ではないですね、上級会員のようなのが欲しいなと思っているんですけども、やはりこういう、何か1つのプログラムがあると非常にうれしいと感じます。

すみません、今申し上げたかったのはそれだけです。

あとは……何でしたかね。

それは後で、総合討論のときにお話しします。

それでは次、最後になります。

最後は佐藤さんですね。別府市観光協会の佐藤さんです。

よろしいでしょうか。

佐藤さんに最後、ご講演いただくと思います。

先生、お願いします。

【佐藤氏】

はい。

皆さん、こんにちは。

別府市観光協会事務局長をしております、佐藤と申します。

今年で入社19年目になります。45歳で、別府生まれ別府育ちです。

今日は、少し見づらいかもかもしれませんが、別府にある5か所の柵田についてお話ししたいと思います。

ただ、柵田に限らず、農村地域にどのような地域課題があるのか、そしてそれを観光という目線で少しでも解決の糸口にできないか、という観点で資料を作成しましたので、それをもとに発表させていただきます。

私が、なぜこういうことを考えるようになったのかということですが、大分県の中津耶馬溪観光協会さんが、4年という時間をかけて、中山間地、特に山国地域という非常に過疎化が進んでいる地域を対象に、「サステナブルツーリズム」という形で事業を行っております。

今年、実際にそちらの方に参加して、現状がどうなっているのかを見てきました。

人はかなり流出しているのですが、山の中にはタラの芽やタケノコなどが、採り放題といっていいほど生えているんです。

ただ、いわゆる耕作放棄地という形になっていて、それを誰も手入れできない状態になっている。つまり、山がどんどん荒れていく、という現状があります。

そうした状況に対して、観光という目線から解決を図ろうと、中津耶馬溪観光協会さんが取り組んでいるわけです。

それに参加して、自分自身、別府で生まれ育ち、観光協会に所属して、お客様を呼んだり、お祭りを開催したりといった仕事をしていますが、実は別府にも同じような地域課題があるのではないかと考えたときに、ぱっと思い浮かんだのが柵田でした。

これまでも棚田のPRなどはしてきたのですが、実はその前に、PRする以前の段階として、現場はとても大変な状況にあるのではないかと、ということを感じたんです。

今年、実際に田植え、それから先月には稲刈り体験を、自分で行いました。

これまで生まれてから一度もやったことがなかったので、実際に体験しに行ってみたのですが、まず第一印象として、非常に大変な重労働だと感じました。

地域の方々ともいろいろお話をさせていただいたのですが、まず田植えの時期というのは、泥の田んぼに入ったことすらなかったですし、腰を曲げて手で植えるということも、当然ながら初めてでした。

それから、私は野菜などもあまり好きではなかったのですが、内成地区で体験した際に、地域のお母さんたちが作ってくれたちよっとした佃煮などが非常においしく感じられまして、これは観光の素材になるのではないかと思います。

また、稲刈りについても、皆さんにとっては当たり前のことかもしれないですが、私のようにやったことがない人間からすると、まず手で鎌を使って刈って、それを束ねて、竹竿に干すという一連の作業が、あまりにも重労働でありながら、同時にとても新鮮でした。

やったことがないことだからこそ、楽しい。汗をかくこと自体がすごく楽しいと感じました。

もちろん、これは農家さんにとっては日常生活の一部だと思います。

ただ、私たちのような側からすると、それは非日常の体験でもあります。

そういったものを、1つ観光の素材として考えてみることはできるのではないかと。そして、地域課題を解決するための糸口にもなるのではないかと、というふうに思っています。

やはり、担い手不足、維持管理、そして地域振興という課題が出てくると思います。

地域振興とは何かと言いますと、やはり地域にお金が落ちる仕組みであったり、どうすればお客さんに来ていただけるのか、ということになるのだと思います。

担い手不足の原因については、あくまで私自身の考えですが、地方における人口減少が大きくあり、その上に高齢化や後継者不足が重なっているのだと思います。

さらに、私自身が経験したことのない労働環境の過酷さ、知識や技能の習得、農地取得の難しさ、設備投資にかかる費用など、非常にハードルの高い部分もあるのではないかと考えました。

それから、維持管理とは何かという点ですが、これも今日、内成地区の方が午前中に発表されていたように、やはり農道、水路、鳥獣対策、そして棚田の機能維持といったところになるのではないかと、思います。

去年は台風の影響で土砂崩れが起きたり、河川が崩壊したり、水路が壊れたりといったお話もありました。

やはり、日常的に田植えや農業を行ううえで必要な機能を整備し、保全していくことは、非常に難しいのではないかと、思います。

水路も、放っておけば草が流れ込んだり、ごみがたまってしましすし、畦道も草刈りをしなければなりません。

農家さんにとっては当たり前の作業でも、私たちからすると、見たこともしたこともない作業の一つなのだと思います。

地域振興の課題についてですが、我々のような観光協会や、花田さんのような方がツアーを実施することは、知ってもらおうでも

もちろん必要ですし、収入を得る方法にもなり得ると思います。

ただ、一番大事なのは、実際の受け入れ先である地元の方々、それを望んでいるのか、また「もっとこうしたい」という意欲を持って進めていけるのか、という点だと私は考えています。

私自身も別府市民ではありますが、子どもの頃から、まず棚田があることを知りませんでしたし、別府に農業があるとも思っていませんでした。

この仕事に就いて初めて、こうしたものがたくさんあるのだと気づきました。

子どもたちについても、私の子どももそうですが、幼稚園のときに芋掘り体験などをすることはあっても、別府市内でそうした体験をした記憶はあまりありません。

今は市の方で、市民農園や棚田オーナー制度などもあると思いますが、子どもの頃からこうした農村地域の暮らしに触れることは、一つ重要な要素になるのではないかと思います。

やはり市民が、自分のまちにこうしたものがあるということを知ること、非常に大切なのではないでしょうか。

後継者がいなくなると、今日の午前中のお話にもありましたが、棚田の数は今後半分以下になるとも言われています。

そうした中で、毎日のように行けなくても、時期を絞って「自分の田んぼにしたい」と思う方が出てくる可能性もあるのではないかと思います。

それから、右上に企業連携と書いてありますが、中津では実際に大手企業が中山間地の耕作放棄地を活用して、食材を植えたり、地域のCSR活動として協力してくれたりしています。

また、都心部の一部企業に限られるかもしれませんが、リモートワークという形で、先日稲刈りのときにお会いした方の中にも、大手企業に勤めながら、本業はリモートワークで、副業として旅行代理店をしている方がいらっしゃいました。

そのような方々の拠点として、空き家対策も兼ねて、リモートワーク拠点を整備することも、一つの可能性ではないかと思います。

そうした場所に来ていただいた方が、日常生活を送る中で景色に触れ、農家さんや地域の方々との交流を深めていくことで、より良い関係が生まれるのではないかと、思っています。

また、人材の確保も重要です。

これは農家さんだけでなく、一般企業や我々にとっても同じで、人材確保は非常に重要な課題です。

観光協会として観光の面から何かできることはないかと考えたとき、観光はあくまで手段の一つにすぎないので、これをどうお手伝いできるかを考えています。

法人化などについては、別の部会で専門的な話があると思いますが、市民連携という観点では、都市部に住む我々は知らないことが本当に多いと思います。

しかし、棚田の景観を見たり、田植えや稲刈りを体験したりすると、現代社会ではなかなか触れられなくなっている部分を十分に感じることができるのではないかと、思います。

地域おこし協力隊や棚田オーナー制度も、全国で活用されていると思いますが、こうした制度を改めて生かしていくことも大切です。

また、企業連携として、研修やCSR活動、リモートワーク拠点の整備なども考えられます。

さらに、「学び舎連携」と書いてみたのですが、就職後のミスマッチで、入社してすぐ辞めてしまう方がいるという話は、ここ数年よく聞きます。

先ほど小野先生のお話にもありましたが、学生の中には農家さん

のところ働きたいと思っても、求人票に載っていない、つてがない、といった理由で進めない場合があります。

そこで、あえて「農家インターンシップ」のようなものを導入してはどうかと思っています。

実際に自分が思い描いているものと現実とは違ってしまう。

私自身、田植えと稲刈りをたった2回体験しただけでも、非常にきつい仕事だと感じました。

その一方で、自分で植えたものを自分で収穫し、それが食べられると思うと、非常にやりがいのある仕事だと感じました。

もちろん、その背後には草刈りなどの維持管理の大変さがありますが、そうした現実も含めて、これからの子どもたちに知ってもらうことは大切なのではないかと思います。

ただ単に店で売っているお米を食べられればよいということではなく、その背景には皆さんの働きによって生まれたものがあるのだと理解できるのではないのでしょうか。

後継者育成という点では、例えば「農家寺子屋」のように、地域の方々が生徒となって知識や経験を教えていく形も良いのではないかと思います。

知識や経験は簡単に伝わるものではありませんので、実際に教わる仕組みは非常に有効だと思います。

観光の目線と言えば、農家さんの日常は、都市部の市民や観光客にとっては非日常です。

旅行というのも、そもそも非日常ですよ。

普段一生懸命働いている中で、少し現実から離れて楽しみを得るために旅行に行く。

そう考えると、棚田地域や農村地域の暮らしそのものを、ある意味で非日常として捉え、商品化、あるいは体験化することも有効ではないかと思います。

維持管理の面でも、例えば水路を探索しながら掃除をすとか、刈った雑草を肥料づくりに活用すとか、防護柵づくりを体験するといったことは、普段の生活ではまず行わないことですが、生きていくうえで必要な体験にもなり得ると思います。

自然との触れ合いや、地域のお母さん方の料理のおいしさといったものも、今の時代にはなかなか触れる機会が少ないので、地域の方々との交流できる場も必要ではないかと思っています。

最後に、これは仕事でも子育てでも自分に言い聞かせていることですが、まずは小さな課題を一つずつ解決していくことが大切だと思います。

大きなことを掲げることはできても、いきなりそれを成功にするのは非常に難しいです。

どの分野でも同じことだと思います。

ですから、それぞれの地域課題に対して、何か一つでも小さなことから解決し、それを積み上げていくことが成功につながるのではないかと思います。

当然、1年や2年で簡単にできることではないと思います。

中津でも4年かけて少しずつ形になってきたという話がありました。

すぐに人口流出が解決するわけではないとしても、関心を持ってくださる方が増え、地域の方々ももっとやってみようという気持ちになっていくとよいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

## 【齋藤氏】

ありがとうございました。

最後にやはり、人材・人手・担い手不足という点が大きなテーマになってくると思います。

大事なのは、今日の一連の話の中でも見えてきたように、観光として人が来ること自体は、午前中の発表にもあったとおり、根本的な解決にはなりにくいということです。

観光客はあくまで観光客であり、棚田の維持そのものに直結しない部分があります。

ただし、今回の流れの中で一つ見えてきたこともあります。

別府市の特徴を踏まえると、単純な観光と農業ということではなく、観光で働く人、つまり観光従事者と、農業従事者とを、どうやってつなげていくのが大事なのではないかと思います。

そのためには、やはり私は一貫して、会社という形が必要ではないかと考えています。

なぜなら、人材が減っていく大きな理由の一つは、都市部へ吸い上げられているからです。

高度経済成長期以降、第二次産業や第三次産業が集積する平野部の開発地域へ、人がどんどん流れていったわけです。

その結果として、地方では人が減っている。

であれば、やはり産業として発展させていく必要があるのではないかと思います。

つまり、家業としての農業から、職業としてどう発展させられるのか、そこが根本的な解決につながる部分ではないのでしょうか。

若手が欲しいという気持ちはよく分かりますが、若手がいきなり一から経営者になれるとは限りません。

若手が次の経営者として育つためには、やはり企業として雇われる場が必要なのではないかと強く感じています。

それを踏まえて、残り時間20分ほどですが、ここからは総合討論に移りたいと思います。

登壇者の皆様、ありがとうございました。どうぞ前の方へお戻りください。

では、総合討論を始めさせていただきます。

総合討論については、実はそこまで深く構えずに、皆さんからのご質問を受けて、4人の登壇者の皆さんにお答えいただければ一番良いと思っています。

その都度、時間の中で私からも少し質問をさせていただければと思います。

それでは、少し唐突で申し訳ありませんが、早速ご質問のある方、お願いいたします。

## 【参加者】

私から申し上げたいのは、別府市長が来年、棚田連絡協議会の会長になるというお話もあり、大変期待が高まっているということです。

グリーンツーリズムの面でも、初代会長を務められるということで、今後の進展を期待しております。

ただ、現在、皆さん同じように問題解決ができていないのは、この棚田サミットが第30回を迎える中で、成功事例がなかなか見えてこないからではないかと思っています。

このまま繰り返していても、いずれ立ち行かなくなるのではないのでしょうか。

やはり地域課題を解決しながら、耕作放棄地、高齢化、空き家対策などにどうつなげていくかが重要だと思います。

その中で、私がこの8年間考えてきた中で大きな問題だと思っているのは、農地法、それから小坂地区における道路の狭さ、接道義

務、棚田に関わる崖条例、市街化区域・市街化調整区域の問題です。小坂地区は農業振興地域ではありませんので、そのあたりを連携しながら、棚田ウォーキングなどを進めていく必要があると思います。

APUにも近い場所ですので、ぜひ先生方にも小坂地区に来ていただきたいです。

そのうえで、本音で語り合いながら、企業として地域に産業を起し、農業と観光の連携を進めていけないかと考えています。

具体的には、少し突飛に聞こえるかもしれませんが、棚田でパーベキューをしたり、棚田でインスタントサウナをしたり、テイクアウトの喫茶店を出したり、ドローンを飛ばしたり、農村民泊をしたりといったことです。

要点が少し広がってしまったかもしれませんが、こうした法律や条例がある中で、どうすれば風穴を開けていけるのかをお聞きしたいです。

#### 【齋藤氏】

ありがとうございます。

つまり、法人化や、企業がどのように参入していけるのかということですね。

農地法も含めると、確かにネックになる部分があると思います。

私自身も今お話を聞きながら思ったのですが、例えば法人化の話になると、どうしても農家さんが主体にならなければならないという方向になりがちです。

しかし、例えば別府の観光業の方々が、規約改定などの課題はあるにしても、新規参入という形で農業分野に入ることも考えられるのではないのでしょうか。

結局は、どのような雇用の形を作っていくかがポイントになると思います。

そういった意味では、農家さん側だけに求めるのではなく、別の業態の会社が農業分野に関わるという考え方もあるのではないかと思います。

そうした目線に立ったとき、どのような課題があるのか、皆さんのいかがでしょうか。

#### 【佐藤氏】

観光協会の佐藤です。

法的な細かい部分については私も専門ではないのですが、先ほどお話のあった棚田でのパーベキューやサウナ、ドローンなどについて、地域の方々が中心になって「やってみよう」と気持ちを起こしていくこと自体は、とても良いことだと思います。

実は私も、今日の発表資料を作っているときに、棚田キャンプなども面白いのではないかと直感的に思っていました。

ただ、それを進めるうえでは、私たち観光協会が「こうした方がいい」「こうすると面白い」と言うだけでは意味がなく、やはり地域の方々と一緒に進めなければならないと思っています。

地域の方が本当に望んでいるのかという点が、非常に重要です。

例えば、棚田オーナー制度を活用して、そこで体験型の取り組みをつくっていくことも十分考えられます。

今のご発言では小坂地区のお話でしたが、堂面棚田地域なども含めて、地域の方々と協力できる形があれば、我々のような団体でもお手伝いできるのではないかと思います。

企業については、やはり農地法など法的な課題はありますが、地域の方々と一緒にやるということが、今後の棚田・農村地域の振興

につながるのではないかと考えています。

#### 【齋藤氏】

ありがとうございます。

そういえば、一休さんもキャンプのような企画のお話をされてましたね。

#### 【花田氏】

面白い話がありまして、ちょうど4年ほど前のゴールデンウィークに、熊本から妻と子ども3人が来たんです。

当時私はゲストハウスをやっていたり、隣の建物も一棟貸して使ってもらえるようにしていたのですが、そのとき、「どこに泊まるのか」という話になりました。

すると、ちょうど内成の方が、「田植え前の田んぼでテントを張って泊まりなさい」と言ってくれました。

「本当にいいんですか」と言っていて、チェックイン前にテントを立てに行きましたが、チェックイン後に戻って見たら、強風で全部吹き飛ばしていました。

そのとき地元の方が、「花田君、今日はうちの納屋に泊まりなさい」と言ってくれて、結局4日間、ゴールデンウィークの間ずっと納屋に泊まりました。

でも、その庭でパーベキューをさせていただき、地域の方と交流させていただいて、家族にとっては本当に特別な場所になりました。

しかも、その納屋は今、なんとカフェになっています。

つまり、「あのカフェに泊まったことがある」と自慢できるわけです。

そういう意味でも、キャンプはとても良いと思います。

#### 【齋藤氏】

ありがとうございます。

今のはすごく大事なお話だったと思います。

スペシャルな体験というのは、実は海外の富裕層が非常に注目しているものなんです。

先日、別府市で国際インバウンドに関するシンポジウムがあったのですが、オーバーツーリズムを回避するためには、いかに富裕層に来てもらうかという議論がありました。

そのとき話題になったのは、ラグジュアリー、つまり高級感がお金持ちの方々を呼ぶ要件なのかという点です。

しかし、実際にはそうではないと。

一番大事なのは、その人にしかできないような、特別な体験があることだという話でした。

まさに今のお話は、それに当たると思います。

価値としては数千円かもしれませんが、例えば地球の反対側から来た方にとっては、何十万円にも代えがたい体験になるかもしれません。

そうした可能性があるのではないかと思います。

そこで、カゼム先生にお聞きしたいのですが、外国人の目線から見たとき、棚田ツーリズムの価値、あるいは金銭的な価値について、何かお話いただけますでしょうか。

#### 【カゼム氏】

価値というのは、付加価値をどう考えるかということだと思います。

棚田はもちろん観光アトラクションとして楽しめるイベントや体

験の場になりますが、同時に生きている景観でもあります。

春夏秋冬、それぞれの季節ごとの棚田の姿があり、コミュニティの方々を通して、その棚田のための観光イベントをつくっていくことが大切です。

例えば夏なら、棚田や田んぼの中に入って草取りをする体験もあり得ます。

そうした活動を通じて、皆がやる気になり、コミュニティが元気になる。

さらに隣でカフェを開くなどすれば、地域の方にもメリットが生まれます。

つまり、一年を通して棚田のニーズを考え、その全体を含めて、観光を通じてどう守っていくかを考える必要があります。

単に一度イベントをして、写真映えする観光地にするだけではなく、本当の棚田のニーズを踏まえてイベントをつくり、持続可能な観光にしていくことが重要です。

また、棚田をブランドとして考えた場合、そこを訪れた方が帰った後もコミュニティとのつながりを保てれば、棚田のお米を送ってもらうなど、より高い価値につながる可能性があります。

さらに、地域の畜産農家から肥料を得るなど、もともとの地域システムも観光と一緒に守っていくことができます。

今、世界中で同じ問題があります。

若者は農業をしたがらない。

棚田は昔から守られてきましたが、一度農業をやめてしまうと、竹が生えるなどして、もう使えなくなってしまいます。

ですから、今の状態を維持しながら、その雰囲気を楽しめる形を観光でどうつくるかが大切です。

別府には既にたくさん観光客がいます。

例えば大きな旅館やインターコンチネンタルホテルの宿泊客が、日帰り体験ツアーに参加して棚田を見に行き、その後また高級な部屋に泊まる。

そうして滞在が1日増えれば、それ自体が価値になります。

外国の方にとって、日本のイメージは東京や大阪のような都会ですが、実際に棚田まで行けるかという、なかなか難しい。

そこで、自転車ルートや、トイレ、窓口、宿泊先などのファシリティを整えれば、外国人も棚田まで行けるようになります。

そうした仕組みがあれば、棚田の活性化は十分可能です。

## 【参加者】

明日香村では、観光協会の下に明日香ニューツーリズム協議会があり、海外からの稲刈り体験や田植え体験、中学生の生活体験・社会体験など、棚田で受け入れてきました。

ただ、経済効果はほとんどありません。

来てもらって賑わうのは良いのですが、受け入れ側のメリットがありません。

一方で、30年前から9月に行っている、以前は彼岸花祭り、現在は案山子祭りと呼んでいる催しでは、2日間で2000人ほど来場し、NPOの模擬店売上は50万円ほど、利益も30万円程度残ります。これが唯一、観光が村に経済効果をもたらしている例です。

観光は来てもらうこと自体はありがたいのですが、受け入れ側が必ずしも喜んでくれるわけではないことも知っておいていただきたい。

そのうえで、村の負担にならないような観光を考え、棚田制度と合わせて地域が活性化し、経済効果も出て、村の人たちが「それならやろうか」と思える仕組みをぜひ考えていただきたいです。

質問というより、要望です。

## 【齋藤氏】

ありがとうございます。

佐藤さん、観光協会の立場からいかがでしょうか。

## 【佐藤氏】

私が今日の発表でも申し上げたとおり、やはり地域の方々が望むのか、望まないのかが大切だと思います。

我々が「こういうことをしたいから、一緒にやりましょう」と言ったとしても、それがお金にならないことは十分承知しています。

我々も年間でいくつか祭りやイベント、花火大会を行っていますが、そこに実際どれだけお金が落ちたのか、どれだけ経済波及効果があったのか、どれだけ宿泊につながったのかを把握するのは非常に難しいです。

コミュニティが小さくなればなるほど、その効果が見えにくいこともあります。

それでも、何をやるにしても、私はまず地域の方々が第一だと思っています。

我々は、その上でサポートできる形が良いのではないかと思います。

地域が主体となってお金を生み、得る仕組みと一緒に考えていく方が良いのではないのでしょうか。

観光協会が主体になって手数料だけをいただくような形では、地域にとってはあまり意味がないと思います。

観光協会が儲かるのではなく、まず地域にきちんとお金が落ちることが大事だと私は思っています。

## 【齋藤氏】

ありがとうございます。

やはり、企業参入を考えるにしても、儲からなければ難しいですよ。

そもそも、ビジネスチャンスがなければ企業は入ってきません。

そう考えると、先ほどの特別な体験の話は重要です。

大人数を集めて収支を合わせるという考え方だけでなく、少人数でも大きなお金を落としてくれる方がいる可能性を考える必要があります。

特に海外の方にどのようなニーズがあるのか、どのような需要があるのかは、まだまだ分かっていない部分が多いので、そこから学んでいく必要があると感じます。

## 【参加者】

齋藤先生と花田さんに、それぞれ質問したいと思います。

齋藤先生には、法人化というお話がありましたが、棚田を守るために、変えていかなければならない部分もあると思います。

ソフト面、ハード面の両方があると思いますが、午前中のセッションでは、現場の方から基盤整備の要望もありました。

今後、棚田を守るためにどのような投資が必要なのか。

農業者側の投資もあるでしょうし、価値を生み出す企業側の投資もあると思います。

農業への投資を支援する法人という立場から、お考えをお聞きたいです。

花田さんには、ARUCO・DE・BEPPUの取り組みと、大分ヤクルト販売株式会社の事業との関係、また大分ヤクルトが棚田にどう関

心を持っているのかについてお聞きしたいです。

【齋藤氏】

私の方からというより、実際に現場で取り組んでいる方にお答えいただいた方が良いかもしれません。

どなたか、投資として何が大事かという点についてお話しいただける方はいらっしゃいますか。

【参加者】

冒頭で中島先生からご紹介いただいた、高知県梶原町の田村です。千枚田オーナー第1号です。

今のお話で言えば、やはり経営という視点が絶対的に必要だと思っています。

一昨年、農水省の農村振興管理局の課長さん御一行が来られた際、企業の方々も同行されていたのですが、そのとき「田村さんはどういう視点でこの役目を引き受けているのですか。単なる役目としてなのか、それとも経営として考えているのですか」と問われ、私は即座に「経営です」と答えました。

これからの榎田保存には、国の補助金や支援も必要ですが、保全団体の長や、その周囲の何人かは、やはり経営の視点を持たなければ、金融機関や一般企業からの投資は受けにくいのではないかと思います。

実際、私たちはそうした考え方のもとで、今年度から榎田の大規模改修に入っています。

【齋藤氏】

ありがとうございます。

実は、第4分科会では鹿島建設の方が、中山間地域にも対応できるスマート農業についてご登壇されています。

また、私の大学時代の同期にも、衛星画像や空中画像を用いたりモートセンシングの分野で、スマート農業に関わっている者がいます。

そうした視点から見ると、企業で第一次産業を行っているところは、今とても人気があるそうです。

人が集まるんですね。

うちの小さな小さな大学には、ローカルで、地域で働きたいという学生もいます。

そうした若い人材に、リモートセンシングやスマート農業に通じる技術を身につけてもらったうえで、そこに地元での経営が結びついていく。

そうした形が、今後進んでいくビジョンなのではないかと思えます。

それが手間の削減にもなり、その余剰効果として、さまざまなビジネスに参画するチャンスも生まれるのではないかと思います。

【花田氏】

ありがとうございます。

冒頭でも申し上げましたが、「なぜヤクルトなのか」というのは、いつもネタとして話しているところです。

実は、大分ヤクルト販売は株式会社で、別府に本社があります。

しかも、本社はホテルの中に入っていて、少し変わっているんです。

そのため、いろいろな事業部がありまして、私の所属する観光推進事業部のほかに、保育園事業部や、県北の施設運営なども行って

います。

ARUCO・DE・BEPPEUが立ち上がったのは、そのホテルの付加価値を高めたいという思いから、お声掛けをいただいたことがきっかけです。

私は3年前に入社しましたが、その前に自分で起業して宿を始め、まち歩きなども行っていました。

その流れで、「ぜひ一緒にやろう」と声を掛けていただき、今の会社に入ることになりました。

もう一つの質問についてですが、ARUCO・DE・BEPPEUは商店街の入口にあります。

別府の商店街は、昼間でもシャッターが閉まっている店が多く、それが長年の課題でした。

しかし、我々が入って以降、古い店舗が改修されたり、新たに店が開いたりする動きも出てきています。

ヤクルトという商品自体が、市民の皆さんに長年愛されてきたこともあり、地域に還元したいという思いが社長にもあります。

そのため、商店街活性化の意味も込めて、今の店舗を借りて活動しています。

もちろん、榎田を含め、別府には残していかなければならない資源がたくさんあります。

そこを、観光の力で何とか支えていけたら、という思いで今活動しています。

まだ2年ほどですので、本当にまだまだですが、社長はもっと大きな構想を持っていると思います。

私はその手となり、足となり、口となって、地域資源を支える活動ができたかと思っています。

きちんとお答えになっているか分かりませんが、そのような考えです。

【齋藤氏】

ありがとうございます。

申し訳ありません。私の進行があまりうまくなく、少し時間を過ぎてしまいました。

ほかにも手を挙げてくださっていた方がいらっしゃったのですが、すべてのご質問にお答えすることができませんでした。

大変残念ではありますが、これもちまして、第1分科会を終了したいと思います。

皆さん、ご清聴ありがとうございました。

【アナウンス】

ご登壇いただきました皆様、ありがとうございました。

今一度、大きな拍手をお願いいたします。

以上をもちまして、本日の第1分科会を終了いたします。

本日はありがとうございました。

第30回全国棚田（千枚田）サミット 2026/3/11





大所 堂面  
天間  
別府扇状地  
内成  
東山

## 棚田ツーリズムの未来形 ～観光・健康・地域再生をつなぐ～

齋藤 圭  
別府大学 食物栄養科学部 発酵食品学科 講師

コーディネーター紹介 2026/3/11 2

プロフィール  
齋藤 圭 (さいとう けい) Kei SAITOH  
別府大学食物栄養科学部発酵食品学科 講師  
1989年（平成元年）東京都生まれ。博士（地理学）法政大学。  
専門は地理学、水文学、陸文学。  
博士論文のテーマは塩湖でした。

大分県では、別府温泉の流動経路の推定や涵養標高の推定に関する研究を進めるとともに、世界農業遺産推進協議会と連携し、国東半島における河川・地下水の水質や流量に関する研究を推進している。

別府大学では総合科目「地域と世界農業遺産」を担当し、宇佐・国東半島の地誌などを中心に講義をしている。

別府市の地理的・地形的特性 2026/3/11 3

- 別府市
  - 活火山・鶴見岳の東麓に形成された扇状地上に市街地が広がる温泉都市
  - 扇状地が観光・商業の基盤
- 市内にある棚田地域
  - いずれも扇状地外の山間部
  - 扇状地とは山で隔られている

この地理的条件は、**扇状地（温泉都市）と山間部（農業集落）を自然地理的に分断し、交通・経済・社会の各側面においても異なる発展経路を生んできた。**

棚田地域は、都市開発の波を受けにくかったため、結果的に伝統的な農村景観や水利技術、共同作業の文化を保持してきた。すなわち、**別府の地形的分断は地域の隔絶であると同時に、多様な文化・景観資源を温存する条件でもあった**といえる。



ウェルネスツーリズムと棚田アクティビティ 2026/3/11 4

温泉を活用した健康増進・長期滞在型観光への転換

- 温泉入浴
  - 「静的癒やし」
- 棚田体験
  - 「動的癒やし」



新宿泊・ウェルネスとは？

「医療・美容・健康」をテーマに  
温泉の効果を「科学的根拠」により示し  
別府ならではの「特別な体験」を提供する

新しい観光のカタチ

なぜ「ウェルネス」なのか？

コロナ禍で観光行動に変化  
ウェルネスの市場規模は拡大  
ウェルネスは消費単価が高く滞在日数が高い  
ウェルネスは成長市場

市民も観光客もウェルネス

ガストロツーリズムと「別府野菜」構想 2026/3/11 5

温泉で癒され、棚田を歩き、棚田の恵みを味わう「三層的な体験」

ガストロツーリズムとは



農業法人化による担い手確保と雇用創出 2026/3/11 6

- 日本の基幹的農業従事者の平均年齢は68歳  
従来の家族経営では、「農業は家業として継ぐもの」という意識が根強い
- 農業に関心を持つ学生やU・Iターン希望者がいても、就業先としての受け皿がなく断念
- 農業法人化  
社会保険や給与制度の整備、労働時間管理の明確化など、農業を「家業から職業へ」
- 農業法人が観光分野と連携  
棚田体験や農家民泊、直販・加工などの関連事業を通じ、**農業従事者と観光従事者の双方の雇用機会を創出**



法人化のメリット：金銭法人  
法人化とは、「会社法」に基づき組織する。資本金は、「株式会社」「有限会社」「合同会社」が認められ、中小企業が多い。創業・開業しにくい事業を始めることも、生活実態に合った会社形態がある。

法人化は、さまざまな経営体制や事業内容などにより、農業者が任意で選択し得るさまざまな事業形態が実現します。

【自治体法人は、農業協（JA農業）が、農業協の専任だけでなく、農協、協賛、協賛（共同事業）や一部（農業・観光）に限り専任の専任から、農業協の専任を専任として専任の専任にも採用できます。】

登壇者ご紹介 2026/3/11 7

- 花田潤也 氏  
大分ヤクルト販売株式会社 経営企画室観光推進事業部長
- ヴァァファダーリ・カゼム 氏  
立命館アジア太平洋大学 サステナビリティ観光学部教授
- 小野貴史 氏  
別府大学 国際経営学部講師
- 佐藤大輔 氏  
(一般社団法人) 別府市観光協会事務局長

ご清聴ありがとうございました





## ツアー内容



- ・2024年9月『奥別府に行こう！見頃の彼岸花・初秋の内成棚田へ』催行
- ・ご参加の大多数が別府市、大分市在住
- ・年齢層30代～70代
- ・棚田見学や現地での収穫、料理体験
- ・別府ならではの！温泉も組み込んだツアー





第30回全国棚田サミット in 別府  
第1分科会

## 地域活性化に向けた 棚田ツーリズム

Rice Terrace Tourism for  
Rural Revitalization

2025年11月1日  
立命館アジア太平洋大学  
ヴァファダーリメジ カゼム



### 棚田—里山の心 Rice Terraces: The Heart of Satoyama

- 日本の農村景観は、里山システムでよく知られている
- The Japanese agricultural landscape is well known for its Satoyama system
- 日本人の主食は米である
- Rice is the staple food of Japan
- 山間や傾斜地に位置する里山の地形が、地域の人々に棚田を築かせた
- The Satoyama topography—located in mountainous areas and on slopes—led local communities to create rice terraces
- 棚田は日本の里山の象徴であり、里山の人々は棚田とともに生きる社会を形成している
- Rice terraces represent Japan's Satoyama identity, and Satoyama people form a rice terrace society

### 里山について About Satoyama

- 日本の里山里海調査によると、里山は日本のモザイク状に異なるタイプのエコシステムである
- According to Japan Satoyama Satoumi Assessment, Satoyama is a Japanese term for a mosaic of different ecosystem type
- 人の手によりエコシステムとして管理された2次林、草地、農地、ため池などは、健全な生活を提供する
- Secondary forests, farmlands, irrigation ponds, and grasslands along with human settlements which has been managed to produce bundles of ecosystem services for human well-being (JSSA, 2010)

### 里山イニシアティブ Satoyama Initiative

- ビジョン：自然と調和の取れた社会
- Vision : Societies in harmony with nature
- ミレニアム・エコシステム評価(MA)の主要な成果は2005年に公表され、その最終段階として地域および亜地域レベルでの補完的な調査が実施された
- The main results of the millennium ecosystem assessment were published in 2005 and the final stage of MA is completion of sub-regional surveys
- 里山および里海は、日本における初期の研究領域の一つであり、農山村や沿岸漁村など、人と自然の共生関係が残る地域社会に焦点を当てている
- Satoyama and Satoumi are among these original researches in Japan, focusing on the rural mountainous and coastal landscapes
- 環境省および国連大学サステイナビリティ高等研究所が主催したグローバル・ワークショップにおいて、里山イニシアティブの概念が定義された
- The concept of the Satoyama Initiative was articulated during a global workshop organized by the Ministry of the Environment of Japan and the United Nations University Institute for the Advanced Study of Sustainability

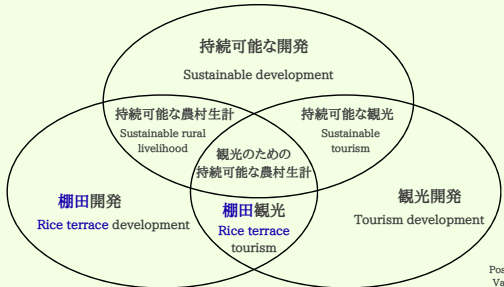
### 里山イニシアティブの観点 Perspectives of Satoyama Initiative

- 観点1:環境の許容限度と回復力の範囲内での資源利用
- Perspective 1: Resource use within the carrying capacity and resilience of the environment
- 観点2:自然資源の循環的利用
- Perspective 2: Cycle use of natural resource
- 観点3:地域の伝統や文化の価値と重要性の認識
- Perspective 3: Recognition of the value and importance of local traditions and cultures
- 観点4:多様な関係者の参加と協働
- Perspective 4: Multi-stakeholder participation and collaboration
- 観点5:地域社会・経済への貢献
- Perspective5: Contributions to local socio-economies

### 観光による里山支援 — なぜ観光なのか? Supporting Satoyama through Tourism / Why tourism?

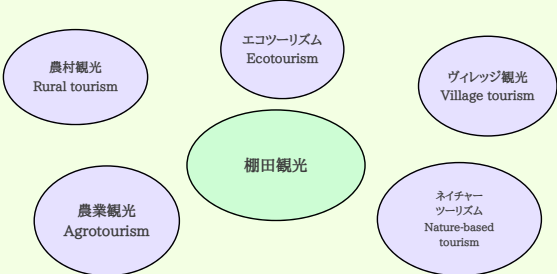
- 伝統的な農業は労働集約的である
- Traditional agriculture is labor-intensive
- 里山の人口は減少し、高齢化が進んでいる
- The Satoyama population is shrinking and aging
- 伝統的な農業だけでは十分な生計を立てることが難しい
- Traditional agriculture alone cannot sustain livelihoods
- 観光と伝統農業を組み合わせることで、里山の持続的な維持管理の可能性が高まる
- Combining tourism with traditional agriculture increases the potential for sustainable Satoyama management
- どのような観光を里山や棚田の地域に導入すべきだろうか。
- What kind of tourism should be introduced to Satoyama and rice terrace communities?

### 観光のための持続可能な農村生計 Sustainable Rural Livelihoods for Tourism



Post Shen (2009)  
Vafadari (2025)

### 棚田観光に関する観光形態 Types of tourism that are associated with rice terrace tourism



## 農村観光の定義①

### Definition of Rural Tourism #1

- UN Tourismによる定義
  - 観光開発による経済的・社会的利益の維持
  - 自然環境、歴史的環境、文化的環境、社会環境への望ましくない影響の軽減または緩和
  - 観光客のニーズと目的地側のニーズのバランス
- According to UN Tourism
  - Retain the economic and social advantages of tourism development
  - Reducing or mitigating any undesirable impacts on the natural, historic, cultural or social environment
  - Balancing the needs of tourists with those of the destination



## 農村観光の定義②

### Definition of Rural Tourism #2

- UNEPによる定義
  - 持続可能性の原則とは、観光開発における環境的、経済的、社会文化的側面を指す
  - 環境資源を最適に活用する
  - ホストコミュニティの社会文化的真正性を尊重する
  - 持続可能な長期的な経済運営を確保する
- According to UNEP
  - Sustainability principles refer to the environmental, economic, and socio-cultural aspects of tourism development
  - Make optimal use of environmental resources.
  - Respect the socio-cultural authenticity of host communities
  - Ensure viable, long-term economic operations



## エコツーリズムの定義

### Definition of Ecotourism

- 保全された環境と地域住民の社会福祉を向上させる自然環境を旅行する
- 周辺環境と文化を理解する
- 訪問者と宿主に良い経験を生み出す
- 自然保護のための直接的な金銭的利益を生み出す
- 地元市民に対して金銭的利益と権限を与えること
- Responsible travel to natural areas that conserves the environment and improve welfare of local people
- Environmental and cultural awareness
- Positive experiences for both visitors and hosts
- Direct financial benefits for conservation
- Financial benefits and empowerment for local people



## 別府市内成における観光アクティビティ

### Tourism activities in Uchinari, Beppu

- 田植え・稲刈り
- 地域イベントへの参加
- 棚田百選の風景を巡るウォーキングツアー
- エコツーリズム・農村観光を象徴する
- Rice planting and harvesting
- Attending community festivals
- Walking tours in Tanada Hyakusen landscapes
- They represent ecotourism and rural tourism



## 別府市内成における観光アクティビティ

### Tourism activities in Uchinari, Beppu



## 事例：宇佐市両合棚田における棚田観光

### Case study: Rice Terrace Tourism in Ryoai Tanada, Usa



## 総括

### Conclusion

- 棚田ツーリズム＝里山ツーリズム
- Rice terrace tourism is Satoyama tourism
- 別府における棚田には別府温泉ツーリズムと結びつく大きな可能性がある
- Beppu rice terraces have big potential to be associated with Beppu Onsen tourism
- 温泉観光にとどまらず、別府を訪れる人々が棚田を訪れ、滞在を延ばし、より多くの温泉を楽しむよう促す観光形態を作るとは、地域の観光産業にとってウィンウィンとなる
- Creating a type of tourism that goes beyond onsen — encouraging people visiting Beppu to explore rice terraces, stay longer, and enjoy more onsen creates a win-win for the local tourism industry
- 棚田管理者を観光開発プロセスに参画させ、温泉地域と棚田地域の対話を促す仕組みを作ることが、持続可能な棚田観光のために不可欠
- Creating a system that involves rice terrace managers in tourism development and fosters dialogue between onsen and rice terrace communities is essential for sustainable tourism



## 経 歴

1993.4  
1997.3

↓

別府大学文学部史学科  
(西洋史/考古学)

1997.4  
2001.2

↓

2001  
2021.3

↓

大分市教育委員会文化財課 (嘱託)  
佐賀県教育委員会文化課 (嘱託)  
株式会社大分航空トラベル

専任講師  
2021.4～

↓

別府大学国際経営学部 実務家教員


2年

→

非常勤講師  
2019～2020

旅行業務取扱管理者関連科目





## 自己紹介

**プロフィール**

小野 貴史 (おの たかし) Takashi ONO  
別府大学国際経営学部国際経営学科 講師

1974年 (昭和49年) 宮崎県生まれ

学士 (文学) 別府大学文学部史学科考古学専攻

総合旅行業務取扱管理者、総合旅程管理主任者資格、学芸員資格、高等学校教諭一種免許 (地理歴史)

大分市や佐賀県の教育委員会で埋蔵文化財調査員 (嘱託職員) として、4年間発掘調査などに携わる。2001年より株式会社大分航空トラベルにて営業・企画・添乗業務に携わる。2017年より営業課長。2019年より別府大学国際経営学部非常勤講師として旅行業務取扱管理者資格 (国家資格) に関する講義を担当。2021年3月に旅行会社を退職し、同年4月より現職。実務家教員として旅行業実務や観光資源論、観光マネジメントなどの講義を担当。津久見市と大分市の文化財保存活用地域計画協議会委員。

インドネシア・バリ島 (ウブド) 撮影: 院長 (小野)

## 別府の現状と課題： 「温泉都市」と「棚田地域」の地理的分断

- ・別府の二重構造：扇状地と山間部
  - ・扇状地 (市街地)：
    - ・鶴見岳の麓に広がる。温泉が湧出する「観光・商業の集積地」
    - ・観光客の多くが滞在するエリア
    - ・癒やしの形：温泉入浴など ⇒ 「静的癒やし」
  - ・山間部 (棚田)：
    - ・扇状地の外側、「山向こう」に点在 (内成棚田など)
    - ・伝統的な「農業景観」が広がるエリア
    - ・癒やしの形：景観、農作業体験など ⇒ 「動的癒やし」
- ・課題：観光・経済的な「分断」
  - ・これら2つのエリアは、地理的な隔りから観光ルートが分断され、経済的な連携も希薄
- ・本発表の目的
  - ・この「分断」を乗り越え、棚田を「維持しながら稼ぐ地域資源」へと転換する未来像を提案

別府・内成棚田 撮影: 院長 (小野)



## 「つなぐ」ための核=別府ガストロノミー

- ・課題：「温泉都市 (扇状地)」と「棚田 (山間部)」をどうつなぐか？
  - ・ = 「静的癒やし」と「動的癒やし」の融合
- ・解決の核：「ONSEN・ガストロノミーツーリズム」の応用
  - ・ 「地域の食・自然・景観・文化・歴史を『ウォーキング』で体感する仕組み」

ガストロノミー  
ツーリズム  
その土地の気候  
風土が生んだ

+

食材

+

習慣

+

伝統

+

歴史

=

食を楽しみ、その土地の  
食文化に触れることを目的  
としたツーリズム

欧米を中心に世界各国で  
取り組まれている

- ・別府棚田への応用
  - ・ この仕組みを別府の棚田エリアに導入する。
  - ・ 「温泉 (扇状地)」を起点に、「棚田 (山間部)」をめぐる、そこで育まれた「食」を味わう。
  - ・ これが、分断された2つのエリアを「つなぐ」鍵となる。

## ONSEN・ガストロノミーツーリズム

地域コンテンツの「点」を「面」に変え、地域に長期滞在させることが必要  
⇒ 有効な解決策のひとつが「ガストロノミーツーリズム」

温泉旅館という「点」を温泉地という「面」に変え、  
地域の食、酒、歴史、文化に触れ、長期滞在者やリピーターを増やす

↓

有効な解決策のひとつが  
**「onsen・ガストロノミーツーリズム」**

提供される食は当該地域内で生産・調理 (地域の農産物等を買ひ上げ、  
地元の料理人等が調理) される地産地消のものを使用

## ONSEN・ガストロノミーツーリズム

- ① 地域の特色を活かすことで他地域と差別化することが可能
- ② 観光客に新たな価値観や体験を与えられる
- ③ 観光資源が未開発な地域でも取り組める
- ④ 旅行内容の紹介が容易でストーリーを語りやすい
- ⑤ 地域のブランド力を高め再訪意識をもたらすことができる

### 大分県とONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構の絆

- 2016年10月 一般社団法人ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構の立ち上げに際し、長野別府市長が発起人として参加
- 2017年11月 別府市の後援により、第1回ONSEN・ガストロノミーウォーキングin別府を試験的に実施
- 2019年11月 ANAインターコンチネンタル別府リゾート&スパ開業を記念して初のプレミアム版を実施
- 2025年3月までに全国最多の計13回実施

### ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構の設立



### ONSEN・ガストロノミーウォーキングin別府の概要

#### 概要

- ・世界初となる「ONSEN・ガストロノミーウォーキング」が2016年11月19日別府市海岸沿いで実施
- ・約300名（定員300人）の参加者が別府の自然・名産・温泉を満喫
- ・別府ONSEN ENJOYオガミアという冒険イベントの枠内で実施
- ・予算：180万円（サイドイベント等への支払分）。お酒は地元酒蔵会社から無償提供



### 2017年～2019年大分開催



### 2021年～2024年大分開催



### 2022年3月 西大分



### 2023年3月 西大分



### 2024年3月 佐賀関



2024年12月 西大分

大会運営側スタッフ



撮影：発行者（小野）

ONSEN・ガストロノミーツーリズム 課題と今後の方向

- ①旅ナカのイベントやアクティビティとしての定着
  - ⇒ アルザスに習い、シーズン中の毎週末実施
- ②従来のワンデイイベントからの進化
  - ⇒ 一歩進んだ滞在型コンテンツへの進化（アルザスのファームステイ）
  - ⇒ **ONSEN・ガストロノミーステイ**（主にインバウンドや富裕層向け）
- ③いつでも楽しめる個人型コンテンツの開発
  - ⇒ ビンチョス巡り（スペイン・サンセバスチャン）の日本版「食べ歩き」企画
  - ⇒ **ONSEN・ガストロノミーホッピング**
- ④地域のストーリーを語り、リードする「まちあるき」企画
  - ⇒ **ガイド的人材の育成**

18

別府ガストロノミーの具体化：「別府野菜」と「温泉」の融合

- ・棚田の二面性：『景観』と『生産の場』
  - ・ 棚田は「見る」だけの美しい景観資源であると同時に、
  - ・ 清冽な水と寒暖差が育む、高品質な食材（米、野菜）の「生産現場」である
- ・核となる食材：「別府野菜」のブランディング
  - ・ 棚田で収穫される米や伝統野菜などを、共通ブランド「別府野菜」として定義・発信
- ・別府ならではの強み：「温泉（地獄蒸し）」との融合
  - ・ 山（棚田）の恵み：採れたての「別府野菜」、棚田米
  - ・ 里（扇状地）の恵み：温泉の蒸気で調理する「地獄蒸し」（魚介類、鶏肉など）
  - ・ → 2つを組み合わせ、棚田産を味わう「**棚田地獄蒸し御膳**」などのキラコンテンツを開発
- ・提案
  - ・ 棚田ウォーキング（健康）の中で、「別府野菜」の収穫体験と、棚田を眺めながらの試食（ガストロノミー）を組み合わせ体験型ツアーを造成

19

棚田ツーリズムによる「健康」の再定義

- ・分科会テーマ「観光・健康・地域再生」への接続
  - ・ ガストロノミー（食）は、いかに「健康」に寄与するか？
- ・別府の伝統的な健康資源：「静的癒やし」
  - ・ 温泉（湯治）による、受動的・静的な心身の回復
- ・棚田ツーリズムが提供する「動的癒やし」
  - ・ 棚田の美しい景観の中を「歩く」（ONSEN・ガストロノミーウォーキング）
  - ・ 農作業体験や収穫体験による、能動的・動的なリフレッシュ
- ・別府ならではの「ウェルネスツーリズム」の形
  - ・ 「静的癒やし（温泉）」と「動的癒やし（棚田ウォーク）」の融合
  - ・ さらに、棚田で育まれた「別府野菜（食の健康）」をその場で味わう
  - ・ → 心身両面から健康になる、滞在型の新しいウェルネスツーリズムを確立する



温泉（静） + 棚田ウォーク（動） + 別府野菜（食）

20

徒歩区間：約7.5km ツアー設定時間：3～4時間



ガストロノミーポイント：5～6箇所

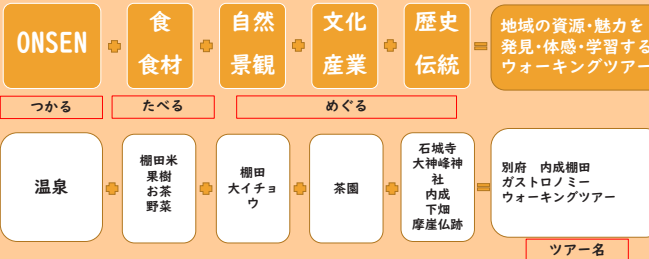
21

内成棚田



22

ONSEN・ガストロノミーツーリズム



おすすめポイント

23

東山の棚田群：約6km ツアー設定時間：3時間



ガストロノミーポイント：5～6箇所

24

## 課題① 物理的な分断（アクセス）の克服

- ・実行上の最大の課題：『分断』されたエリアへのアクセス
    - ・ 扇状地（温泉宿）から山間部（棚田）へ、観光客はどう移動するのか？
    - ・ = 「二次交通」「ラストワンマイル」問題
  - ・解決策：「別府市おもてなしライセンス」と連携したNPO運営
    - ・ 別府市の「湯けむりライドシェア」の活用
  - ・「湯けむりライドシェア」とは？
    - ・ 市民（NPO法人など）が主体となり、観光客や地域住民の「足」を担う仕組み
    - ・ 観光客の「行きたいところに、行きたい時に」応える、きめ細やかな交通サービス
  - ・棚田ツーリズムへの貢献
    - ・ 温泉宿から棚田の入口まで、観光客をシームレスに送迎
    - ・ これにより、「棚田ガストロノミーウォーキング」が初めて実行可能なツアーとなる
- ※ゆのくにクルーザー 原付ミニカー

## 課題③ 継続的な「担い手」の育成 （＝地域再生）

- ・地域再生の核：『人』をどう育てるか？
  - ・ 「おもてなしライセンス」＝おもてなしの品質保証
  - ・ さらに、棚田の魅力深く語り、次世代につなぐ『専門的な担い手』が必要
- ・解決策：『歴史×観光』の視点を持った人材育成
  - ・ 地域の歴史・文化を深く学び、それを観光の場で語る人材を育成する仕組み
- ・別府棚田への応用
  - ・ 基礎（入口）：「おもてなしライセンス」で、おもてなしの基礎を担保
  - ・ 専門（深掘り）：ライセンス保持者や農家、市民が、さらに専門的に学ぶ場を創設
  - ・ 学習内容：棚田の歴史、石積みの技術、水利、農法、そして「別府野菜」の調理法や温泉文化とのつながり
- ・効果
  - ・ 棚田の『ストーリー』を語るガイドが育つ
  - ・ これが持続可能な『地域再生』の「人」の基盤となる

## 国内旅程管理主任者資格実地研修 9/11



撮影：広報室、発表者（小野）

## まとめ：別府における棚田ツーリズムの未来形 『分断』から『融合』への未来像

- ・課題：温泉都市（扇状地）と棚田（山間部）の地理的・経済的『分断』
- ・解決策（提案）：地域資産の『融合』
  - ・ [観光] 温泉 + 棚田ガストロノミー
    - ・ （「別府野菜」と「地獄蒸し」の融合）
  - ・ [健康] 静的癒やし（温泉） + 動的癒やし（棚田ウォーク）
    - ・ （別府ならではのウェルネスツーリズム）
  - ・ [地域再生] 新たなインフラと担い手による持続可能な仕組み
    - ・ （交通：湯けむりライドシェア）
    - ・ （品質：おもてなしライセンス）
    - ・ （担い手：専門的人材育成）
- ・結論
  - ・ 温泉・農業（棚田）・食文化（ガストロノミー）の三層を統合し、『維持しながら稼ぐ地域資源』として棚田を次世代につなぐ
  - ・ これこそが、別府における「棚田ツーリズムの未来形」



## 課題② 質の高い「おもてなし」の担保

- ・新たな課題：『体験の質』の担保
  - ・ 交通（足）が確保されても、体験の「質」は誰が担保するのか？
  - ・ 棚田の魅力（歴史・農法・食）を語る「ガイド」
  - ・ 移動（ライドシェア）の快適性を担保する「ドライバー」
- ・解決策：「別府市おもてなしライセンス」
  - ・ 別府市が認定する「質の高いおもてなし」の規格
  - ・ SDGsや多様性への配慮、別府の歴史・文化への深い理解を含む
- ・棚田ツーリズムへの活用
  - ・ 「湯けむりライドシェア」のドライバーが本ライセンスを取得 → 単なる送迎ではなく、移動中も別府の魅力伝える「ガイドドライバー」に
  - ・ 「棚田ガストロノミーウォーキング」の現地ガイドも本ライセンス保持者が務める → 質の高い案内とホスピタリティを保证
- ・効果：『善意』から『品質保証』へ
  - ・ ボランティアの善意に依存するのではなく、市が認定した「プロの地域案内人」が観光客を迎える体制を構築する

## 旅程管理主任者講習・修了試験 8/7・8

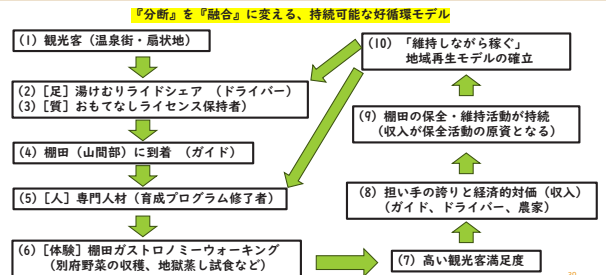
令和7年度 旅程管理主任者資格研修スケジュール

日程	研修	研修場
8/7 (木)	国内① 法考・約款	法考・約款 8:00-12:00(3H) 12:00-12:45(45分) 12:45-13:15(30分)
	国内② 国内旅業実務	国内旅業 13:15-13:50(35分)
	国内③ 国内旅業実務	国内旅業 8:00-12:00(3H) 12:00-12:45(45分)
8/8 (金)	国内④ 国内旅業実務	国内旅業 12:45-17:00(3H)
	国内⑤ 国内旅業実務	国内旅業 17:00-18:15(30分)
	海外・語学	海外旅業 8:00-12:00(3H) 12:00-12:45(45分) 13:45-14:00(15分)
8/12 (月)	海外・語学	海外旅業 14:45-17:00(2H) 17:00-18:15(30分)



撮影：広報室、発表者（小野）

## 棚田ツーリズムを支える「仕組み」と「人の好循環」



ご清聴ありがとうございました







■地域課題を考えるきっかけ

地域課題の解決

中津耶馬溪観光協会が4年かけて蓄積した「サステナブルツーリズム」に参加し、山国町の中山間地域にある人口減少や耕作放棄地を観光を通じた課題解決を体験。



別府にも同じような地域課題があるのではないかと

別府市の中山間地域にも同じような課題があるのではと考え、棚田に着目し、行政や地域の方の話聞き、田植えや稲刈り体験を実際に体験。

地域住民との会話の中で、観光を通じた解決できるのではないかと

■山国町サステナブルツーリズムの様子



■棚田で経験したこと（田植え・稲刈り体験会）

田植え体験会



6月に開催された田植え体験会に参加。市民、企業など約30名が参加し5枚の棚田を田植した。終了後は、地域の方々と交流を深める美味しい食事会を開催した。



稲刈り体験会



6月に田植えをした棚田での収穫体験会に参加。たわわに実った黄金色の稲穂がとても美しい様子だった。終了後は、美味しい棚田米とお母さんのおかずを堪能した。

■棚田（農村地）における地域課題とは？



担い手不足 ➔ 後継・育成



維持管理 ➔ 保全・再生



地域振興 ➔ 観光



担い手不足の原因は？

おそらく…



維持管理って？

おそらく…



地域振興の課題は？

おそらく…





まずは1つ  
小さな課題を解決して  
みよう

## 第2分科会 石垣の記憶、内成の現在<sup>いま</sup> ～棚田から読み解く別府の景観史～

コーディネーター 飯沼 賢司 氏 別府大学名誉教授  
赤松 秀亮 氏 別府大学准教授

### 【司会】

皆様、こんにちは。

本日は、第30回全国棚田千枚田サミット in 別府、第2分科会「石垣の記憶、内成の現在（いま）～棚田から読み解く別府の景観史～」にご参加いただき、ありがとうございます。

それでは、分科会を始める前に、本日のコーディネーターの先生方をご紹介します。

まず初めに、飯沼賢司先生をご紹介します。

飯沼先生は、1953年長野県ご出身で、早稲田大学文学部をご卒業後、同大学院文学研究科を経て、同大学文学部助手、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の연구원となられました。

その後、別府大学助教授、教授、大学院文学研究科長、文学部長、学長を歴任され、現在は同大学の名誉教授としてご活躍中です。

専門は日本古代宗教史、家族史、宗教史で、国東半島の荘園村落遺跡調査をベースに、1996年から環境歴史学を提唱し、人と自然の関心の歴史学に注目しつつ、日本の古代から中世を中心に研究を続けてこられました。

主な著書として、2004年『環境歴史学とは何か』、2014年『八幡神とは何か』、2015年『国東六郷山の信仰と地域社会』などがごございます。

続いて、赤松秀亮先生をご紹介します。

赤松先生は、1990年東京都ご出身で、2013年に早稲田大学文学部をご卒業後、2019年に同大学大学院文学研究科博士後期課程を修了され、博士（文学）の学位を取得されました。

専門は日本中世史、荘園村落史で、日本学術振興会特別研究員、早稲田大学文学学術院助教を経て、2020年4月より別府大学に着任され、2025年4月より別府大学文学部准教授としてご活躍中です。

大分県内の中世荘園遺跡を対象に、GISや現地調査を用いて景観の歴史の変遷を研究されており、近年は文化庁日本遺産「鬼が仏になった里『くにさき』」との連携を進め、2025年6月には別府大学の日本遺産サポーター大学登録を実現されるなど、学術研究と社会実践の両面から地域文化の未来を見据えた活動を続けておられます。

それでは、飯沼先生、赤松先生、よろしく願いいたします。

### 【飯沼氏】

それでは、私、飯沼の方から、まず少しお話ししたいと思います。

先ほどご紹介いただいたとおり、私たち二人は、ともに長く荘園研究に携わってまいりました。

フィールドワークにおいても荘園を継続的に見てきたわけですが、本日の棚田サミットとどのような関係があるのかという点について、冒頭で少しご説明の方がよいかと思いますので、自己紹介も兼ねてお話ししたいと思います。

これは、私が作成したスライドです。

赤松さんは、私の研究室の後輩に当たります。

本日は、私たちをご指導くださった先生も会場にお見えですし、また、この会を長く支えてこられた中島先生も後方にいらっしゃいますので、私自身、非常に緊張しております。

まず、私たちがどのように水田と関わってきたのかということについて、少しお話ししたいと思います。

写真をご覧いただきたいのですが、これは田染荘の写真を2枚用

意したものです。

上には「荘園村落遺跡調査から環境歴史学へ」と記しています。これは小崎という地区で、田染荘小崎、すなわち豊後高田市にある場所です。

現在では、大分県内の方であれば、田染荘をご存じの方もかなり多いのではないかと思います。

これは、実は大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館が調査したもので、会場にも海老澤さんがおられますが、海老澤さんがその資料館の開館時から長く関わられ、田染荘の調査を継続し、報告書を作成してこられました。

それが国東半島における調査の始まりでもあり、実は私たち二人にとっても、共通の出発点となっている場所です。

左側の写真は、現在も残っている伝統的な中世村落の景観を伝える小崎地区を、上方から見たものです。

ここは棚田とまでは言い切れないかもしれませんが、傾斜地の中に小さな田んぼが連なっている場所です。

一方、右側には、新たに圃場整備された水田が広がっています。中世の姿を残していた田染荘という荘園地帯が、近年の圃場整備によって大きく変化していったということになります。

私たちは、そのような圃場整備に伴って実施された荘園村落遺跡調査に、大分県立歴史博物館の流れの中で関わってきました。

この調査は1981年に田染で始まり、1986年に報告書が作成されました。

これを担当されたのが海老澤衷さんです。

海老澤先生は棚田学会にも長く関わってこられました。私はその海老澤さんの後任として、1987年にこちらへ参りました。

その後、国東半島の北側、都甲谷という谷でも、圃場整備に伴う調査を行いました。

この二つの調査は、伝統的な村落を総合的に調査したものというてよいと思いますが、その際、私たちは水田の調査を中心に据えて見てきました。

すなわち、水がどのように使われているのか、それが人々の生活とどのように関わってきたのか、という点です。

もちろん、私たちは歴史学者ですので、歴史資料だけではなく、美術や地学、あるいは考古学的発掘も含めて、総合的に調査を進めてきました。

1991年には、早稲田大学で「中世のムラと現代」というシンポジウムを開催しました。

それまでの田染や都甲谷の調査、さらに当時全国で進んでいた圃場整備に伴う調査も踏まえて議論を行ったわけです。

その頃までは、私たちはどちらかといえば、歴史の中での調査という意識が強かったのですが、1991年頃から、自然と人間との関係ということが、社会の中でも大きなテーマになってきました。

皆さんもご存じの「里山」という言葉が出てくるのも、ちょうどこの1990年代です。

私はその後、都甲谷の調査、そして豊後国都甲荘の調査報告書をまとめ、別府大学へ参りました。

この1992年という年は、私たちにとって非常に大きな意味を持っています。

なぜなら、世界遺産の中で、自然環境と人間との共同作品として「文化的景観」という概念が現れる年だからです。

非常に大きな転換期であったといえると思います。

また、その後、近年ではSDGsという言葉が盛んに使われていますが、その出発点の一つに、リオデジャネイロ・サミット、いわゆる地球サミットがあります。

このときに「持続可能な開発」という考え方が示され、それが現在のSDGsへとつながっていきます。

ちょうど1990年前後は、宮崎駿さんや高畑勲さんの作品、すなわちスタジオジブリの作品が次々と公開された時代でもあります。

若い方も、あるいは年配の方も、ご覧になったことのある作品が多いのではないかと思います。

赤松さんなどは、ちょうどそのような作品とともに育ってきた世代だと思います。

例えば、宮崎駿監督の『となりのトトロ』は東京郊外を舞台としており、自然と人間との関係性を考えさせる作品です。

また、私たちにとって非常に印象深いのは、1991年、すなわち先ほどのシンポジウムの年に公開された『おもひでぼろぼろ』です。

当時、早稲田にいた学生たちが、私たちのシンポジウムを聞いた感想として、「まさに『おもひでぼろぼろ』のイメージだ」とアンケートに記してきたのです。

私はその時点ではまだその作品を見ておりませんでしたので、何のことだろうと思って後に見てみました。

そうすると、山形県蔵王の麓の景観が、まさに田染荘を思い起こさせるような風景だったのです。

そこで初めて、私たちは自然環境と人間との関係性というものを、非常に強く意識するようになりました。

先ほど申し上げたように、1992年には世界遺産の中に文化的景観が登場し、1995年にはフィリピンのコルディリエーラの棚田が世界遺産に登録されます。

そして、同じ年に日本では第1回全国棚田サミットが開かれました。

これを年表として見ると、非常に興味深いのです。

世界の動きの中で、日本でも棚田を含む環境の問題が、確かに動き始めていたことが分かります。

さらに、私どもの大学では1997年に文化財学科を設立しました。

私はその創設に関わったのですが、その際、環境歴史学というものを基礎科目として取り入れました。

これは、自然と人間との関係史、あるいは自然と人間との共生を図る歴史学として提唱したものです。

1997年から表立って動き始めますが、実際には1996年から企画を進めていました。

そして、その年に公開されたのが『もののけ姫』です。

これもまた、自然と人間との葛藤や関係性を描いた作品でした。

つまり、歴史学者や研究者だけがそのような問題を語っていたのではなく、時代そのものが、その方向へ動いていたのだと思います。

さらに、1999年にはNHKスペシャル『映像詩 里山』が放送されました。

これは、琵琶湖周辺の田んぼ、すなわち棚田的な景観を舞台に、ナマズが田んぼに上がってきて産卵する様子を、動物の目線から映し続けた、非常に象徴的な作品でした。

そして2004年には棚田学会が創設されました。

私もその会場に行きましたが、そうした意味でも、私たちは棚田の研究と非常に深い関わりを持ってきたわけです。

さらに2005年には、それまでの流れを受けて、日本でも文化的景観という考え方が文化財制度の中に位置づけられました。

人間の生活や生業に関わる風景、とりわけ伝統的な水田や棚田の

景観が、文化財として認められるようになったわけです。

そして、最初に申し上げた田染荘は、2010年に重要文化的景観に選定されました。

この田染荘を通して、赤松さんもまた海老澤先生のもとで荘園研究を学び、別府大学へ来られました。

したがって、私たち二人はともに、荘園村落遺跡や水田をテーマとして、長く研究を続けてきたということになります。

最近では、赤松さんの学生たちも含めて、さまざまな場所でフィールドワークを行っています。

そのような二人がここでそろって話をする、というのが本日の意味でもあります。

私は、まず別府の典型的な棚田である内成の話をしたと思います。

一方、赤松さんは、この後詳しくお話しされますが、かつては棚田でありながら、現在はもはや棚田とは言いにくい場所を、歴史学者としてどのように見るか、というテーマでお話しされます。

この二つを軸として、本日は進めていきたいと思います。

つまり、なぜここに二人が立っているのか、その理由も少しご理解いただけたのではないかと思います。

それでは、私の話から始めたいと思います。

こちらは田染荘の写真です。

現在でも田染では田植えなどの実践を続けており、この地域でも、また内成でも、APUの学生さんたちが来て手伝うなど、さまざまな活動が行われています。

田染では、もう25年ほどになるでしょうか、そのような取組を継続してきました。

同様の活動は、県内各地でも行われています。

では、ここから内成の話に入りたいと思います。

これが内成の棚田です。

少し前、もう10年以上前に撮影した写真だったと思います。

本日のタイトルは「内成の棚田の歴史と文化的景観」です。

なぜ文化的景観なのかという点については、先ほどまでの話で、ある程度ご理解いただけたのではないかと思います。

それに加えて、内成棚田の魅力についても少しお話ししたいと思います。

内成が棚田百選に選ばれたのは1999年のことで、県内6地区の一つとして選定されました。

また、この棚田サミットの中でも話がありましたが、別府市内にはこのほかにも重要な棚田がいくつもあります。

天間棚田、大所棚田、堂面棚田、東山棚田などです。

別府は、どうしても市街地の方ばかりに注目が集まりますが、考えてみれば、その背後はすべて山です。

まさに海と山に挟まれ、急傾斜地の山を抱えた場所です。

本日は、そのようなもう一つの別府を探ってみようということになります。

こちらは夏の写真です。

これもやや古い時期の写真ですが、最近では棚田の維持が非常に困難になってきており、内成でも人がどんどん減っています。

この頃は、まだかなり水田が維持されていた状態ではなかったかと思えます。

そして、こちらは秋、9月頃、ちょうど彼岸花が咲く時期の様子です。

下の方まで棚田が続いていく景観を写したものです。

「内成のきれいな彼岸花が咲いたら撮りに行こう」と思って出か

けた際の写真です。

まず、ここにはさまざまな地域から来ておられる方がいらっしゃると思いますので、場所を確認しておきます。

別府市の最も南側に位置しており、その向こう側は、もう大分市です。

まさに境界に当たる場所です。

これは内成の地図を少し大きくしたものです。

上の方に石城寺というお寺があり、そこを頂点として小さな谷がずっと続いています。

この谷の中に、田代というところも含めて一帯が広がっており、それが内成です。

ただし、内成というのは、さらに左側にも続いています。

これは挟間側の内成で、内成という地域は歴史的な変遷を経て、現在では由布市側と別府市側に分かれるようになりました。

この点については後ほど少し触れますが、本日のお話では、主として別府市内成を中心に話を進めることになります。

それでは、私たちは歴史学者ですので、少し歴史についてお話ししたいと思います。

まず、弘安8年、1285年の『豊後国図田帳』です。

これは水田の台帳のようなものです。

なぜそのようなものが作られたかという、領主たちの所領を把握し、軍事的動員の基盤にもなる水田の状況を確認するための記録だと考えると、分かりやすいと思います。

この中に、内成に関する記載があります。

そこには「うちなしばたけ」と書かれており、当時は現在の「うちなり」ではなく、「うちなし」と読んでいたようです。

しかも、ここで使われている「畑」は、火偏の「畑」です。

これは中世ではかなり明確に使い分けられており、焼畑のように、火を入れて作る畑を意味します。

つまり、古い段階では、この「うちなし」の地域は焼畑的な土地利用から始まったことが、地名からうかがえるわけです。

その後、鎌倉時代になると、「畠」という字が使われます。

こちらは恒常的な畑、すなわち毎年安定的に耕作される畑になっていたことを示します。

そして、14世紀末になりますと、今度は「内梨子村」という形で、「村」として把握されるようになります。

村として把握されるということは、一定量の米や年貢を前提とした単位として認識されていたということですから、水田開発がある程度進んでいたと考えられます。

もちろん、鎌倉時代に水田がまったくなかったと断言するわけではありません。

ただ、本来は畑地が中心であり、少なくとも室町時代には水田が本格的に始まっていたと考えられる、というのが私の理解です。

また、農水省のデータによりますと、内成の平均勾配はおおよそ10分の1、すなわち10メートル進むと1メートル下がる程度です。

上の方では、さらにきつい斜面もあります。

先ほどの報告でもありましたが、千枚ほどあるとされつつも、実際の枚数はまだ正確には把握し切れていないようですので、私たちがも正確な数を知りたいと思っています。

基本的には、草で見えにくいところもありますが、石積みで組まれているとされています。

また、当時のデータでは、川の水源を利用しているとされており、開発起源については近世とされています。一般的にも、棚田は近世に成立したものと説明されることが多いのですが、本日は、そ

れがどのような段階であったのかという点も含めて、お話ししたいと思います。

なお、川の水源を使っていると、当時のデータでは記されており、開発起源は近世という、一般的に棚田は近世というふうに言われていますけれども、今日は、それがどのような段階なのかというお話を含めてお話ししたいと思います。

先ほどご紹介した佐藤さんの研究によりますと、内成の棚田を守る会の二宮清康さんの話を聞くと、古くからここは石工や大工が多かった。

石工は、鹿児島の方まで出稼ぎに行ったぐらい、伝統的な石積みが非常にこの地域には盛んだったんだということです。

したがって、石積みは近世が一般的であるんですけども、もっと古い段階からあったということを想像してくれる。

我々は、石積みというのは、一般的には近世以降だと考えています。

それについては、少し理由がありまして、城の構築とかそういうことを考えると、なかなか実は一般の村で本格的な石積みが行われていたとは考えられないんですね。

棚田がなかったということも申し上げているわけではなくて、石積み棚田というのがなかったのではないかと。

その後、佐藤さんはここにおられる海老澤さんを参考にされながら、海老澤さんが棚田のことを書いた『荘園公領制と村落』の中で書いたことを引用して、迫田型の棚田というのは、迫田型の棚田というのはどういうものかということ、湧水を利用しているというタイプのものということで、このタイプは始まりがかなり古いと。

これは県南の方に多い、大野荘とかそういうところの、県の南の方に豊後大野市というところがあるんですけど、そこに大野という、昔は大野荘といていたところがあり、そこに鎌倉時代から迫田を利用したものがあるんですけど、そういうタイプに通じるのではないかとということで、これもそうではないかということを想定して、もっと古い段階だということを考えております。

また、私は、もちろん鎌倉時代に若干はあったかもしれませんが、基本は室町時代になって開発はある程度始まってくるかな、ということを考えています。

この読み方はですね、オビラ、オビラでいいんですかね。

ここの山神社というところの、内梨のところの山神社の中に、こういう記載があります。

そここのところに、「べんさいし ぎゅうろうたろう つくるところ」、このお宮を造ったという、この「べんさいし」というのは何かということ、字を当てると、そこにありますように、弁才子、弁済使とかいう、これ、荘園制度の中にある役職に関わる語であり、だから、そういう仕組みが世の中に入っていくかな、室町時代あるいは荘園時代からの伝統をずっと引き継いでいくのがやっぱりあった、つまり、鎌倉時代ぐらいからの米を前提とした徴収があった可能性は、捨てるわけにもいかないなというふうに思っています。

ただし、その石積み技法という点においては、まだまだ実はあとになって、中世の棚田というのは限定されていたのかなというふうに思います。

次に、少し近世の状況を考えてみたいと思います。

正保四年、1647年の『豊後国郷帳』。ここは大分藩、日根野織部の正領だったということで、当時、四百九拾、四百九拾弍石ですね、で三合、かなりの開発が進んでいたということがわかります。

ここには大庄屋と、当時府内藩の中に書かれていたと、非常に重要だとわかる。

さらに、もうひとつ少し時代が下って、元禄10年になりますと526石、そして天保郷帳『旧高旧領』になりますと、これ幕末です。

1800年代の半ば近くになるわけですけど595、江戸時代を通じて少しずつ増えていって、100石ほど増してくる。

近世の内成というのは、徐々に徐々に開発が進んでいって、かなり当初からそれなりの開発があったということがわかる、ということが、この史料から大体想像がつくところでございます。

また、内成というのはですね、最初にお話ししましたが、別府市内内成と、もうひとつは広い段階で、現在は内成に入っていないんですけど、七蔵司という大分側ですね、ここも実はもともとは領域に入っていました。

それから挟間ですね、由布市挟間の内成地区となると、かなり広大な村であったということがわかります。

したがって、この石高の変遷をみて、先ほどいう別府市ですね内成の状況を簡単に判断するということとはできない、ということがまず言えます。

したがって、中世からみた、この地区がずっとひらけていたかという、そう簡単にはいかないですけども、ただ、あとで具体的なお話を少しする中で触れたいと考えています。

佐藤さんはですね、1500年ごろにはもう石積みの景観ができていたと、つまりこの石高が高いか低いかで断定されていますけど、ちょっと先ほど言いましたように、内成の広さ、領域というのはものすごく広いので、全体を合わせたところを考えると、そう簡単にはいかないかなというふうに思います。

私はやはり、石積みの景観は近世に入ってきて出来上がったのではないかと、つまり大体14世紀から原初の榎田が形成され、15、16世紀を通じて榎田開発が進んだ。

このときは土坡と言いまして、土積みの榎田をやはり造っていくという可能性があり、最終段階において近世の石積み技法が発展するんです。

この段階で田をさらに広げて、石積みで榎田が形成されていくという、そういう順番を辿ったのではなからうかということですよ。

ここで、皆さんの手元にも、ちょっと見にくいので資料があります。

この資料を見て、皆さんに字を読めというのは難しいので、皆さんのお手元にちょっと広い、図が両方入ってますから、それを比較してもらおうとわかんと思います。

1枚目、灌漑図ですけども、これは2006年頃に作成した図、まだ十分調査ができていない段階で、大雑把なところだけ、ここには内成の方もおられるんで、なかなか恥ずかしい面もあるのですが。

実は、内成の水源というのはですね、一番上のところに石城寺というお寺があります。

このお寺が非常に大事です。

すぐ石城寺の下のところに水分石という石が、これについては先ほどのお話にもだいたい出ていました。

その水分石のところから二つの①と②の水は水分ですね、そちらの皆さんの地図から見ると、右側の方と左側の方から、左側の方が②番と①番、これちょっとあれですけど、左側の方の①番でヤマギワというふうにいっているヤマギワ用水。

ここは、そこから水を分けたところに、こう用水路が、細い用水路がずっとあって、そしてそちら側、左手の方へずっと行って、何本かに分かれていったりする。

これは基本的には、この水路を使って、そのあとは引き落とすとして、田んぼを越えて、どんどんどんどん遠くにいくような形。

今度は、太郎丸の方に行って、太郎丸から反対、下の方にずっと引き落とすとしていく。

この二つの①と②が、実は水分石といって、左右に分ける実は場所です。

それから、もうひとつは、大イゼというのは場所が真ん中の中央くらい、③番目、ここから下の方の田んぼに、結構長距離な水路があって、ずっとそこに流れていく。

ここは割と緩斜面、上の方に比べると、斜面がだんだん傾斜が緩い場所です。

これは真ん中を通っている、ちょうど中央が谷川になっているんですね、その川から水を取っている。

こういう水路がいくつかあるんですけど、僕ら全部は把握できておりません。

それともうひとつは、④とか反対側の小さな谷から、上からやっぱり水を取るシステムがあって、ひとつは大神峰神社の方の上の方から下に落としていくような。

それから反対側とか、いくつか迫、それこそ小さな迫があるんですけど、そういうところから、というもので、大体榎田というのは水を取るというふうになっていった。

そのような把握ですが、地元の方、よろしいでしょうか。大体そういうことです。

そこで、水分石のちょっとお話をしたいと思います。

美しい榎田で有名なこの内成という、石城寺の下に水分石という石があります。

これは榎田の最上流のいちばん頂点に立つ所にこの水分石があって、湧き水が左右に分かれて、いったん沢の方に落とされて、そこから堰で水を供給という形になっています。

ここは湧水なんですけど、湧水を直接取るといっても、そうやって沢に落とすしながら、この水をまた合わせて、この水を水路に落として、そしてそこから入れていく形であります。

この水はですね、内成の全体を灌漑するわけではないんですが、非常に象徴的なものです。

ここでは、毎年7月20日と12月20日のあたりに、これは今はどうかわかりませんが、前、かつて私が調査したときですからずいぶん古い話ですけど、水祭りが行われておまして、内成の6集落の総代が集まって、そして神事が行われて、田植えと収穫を感謝する、そういう奉納儀式が行われてきたということですよ。

次に、これがですね、石城寺にあります梨洞山石城禅寺という縁起になります。

この縁起の中に、この地は、赤い字のところだけ、仁聞菩薩というものの実は伝承を持つ場所でありまして、この仁聞菩薩が創始したと。

この地は、往昔、水の乏しく、郷民恒にもって患トナス。

聞老と書いてあるのは、仁聞菩薩のことです。

仁聞菩薩がそれを憐れんで、便ち起り錫ヲ以テ地ニ卓ケバ清水随テ涌出リ、時ニ郷中東西ノ農夫水ノ多少ヲ争論ス、其ノ夜七尺有餘ノ三稜ノ巨石何ト無ク涌出シ卓然ト自立ス。

巨石が湧いてきたと。

で、3つ湧いたって書いてあるんですね、この伝承ね。今、石を見ると1つなんですけど、そのところに泉の口の中心のところに分流して東西ノ田畦ニ弥漫ス。

これはどういうことかということ、今の水分石がこういうふうにして実現した、ということ、農民たちが争ったと。

その水分石ってどんな石かということ、この石、石城寺というところ

ろの、これです。

これはちょうどお祭りのときに行つてですね、取材させてもらったり、撮らせていただいたものです。

ちょっとかなり古いものもありますけども、木があって、その木のちょうど下の所に岩があります。

もう少し大きな写真があります、これですね。

これ、石を挟んで左右にちょうど小さな溝が、ここで見事に水を分けています。

左と右にですね、水が分かれています。

それが先ほどの用水のところに分けていくという、非常に象徴的な場所です。

この内成のひとつの魅力というのは、そういう水分石の伝承というか、そういうところから、ただ棚田を見るだけではなくて、より深い昔からの歴史があるので、というところを感じる場所です。

また、こちらがヤマギワ用水の方に流れていく様子で、向こうから奥の方から流れてきて、そしてここで、谷の水と合わさって、そしてずっと流れていきます。

これがヤマギワ用水を辿っていったところですよ。

昔、私も学生を連れてこういう所を歩いたことがあります。

これが、用水を下の方から上の方を見た画像で、木の向う側が水分石になるんじゃないかと思ひます。

今度反対側に行くと、これはですね、ちょっと下りると、谷の方に本当に下りて行って、谷川の中に先ほどの水が流れ込んでます、一回。

そしてそこに堰があって、その堰からまた合わさっている。

面白いですね、谷水と湧き水を合わせるような感じで。

こちらは太郎丸の方から見た光景です。

さらに、もうひとつは大神峰神社の境内の中で、そこは湧き水ですよ。

下の谷川があって、そここのところから下の水田に供給しています。

これは大井堰ってあって、これは一番真ん中に中央に、両側がこうV字状の谷になっていてですね、一番中心の上が頂点が先ほどの石城寺で、そこから真ん中に谷があって、両側が田んぼですね。

その部分の真ん中が川ですよ。

この川の中にも堰が何か所かあって、その川の水が大井堰という所があるんですよ。

こちら側は、先ほど言った上の方よりも傾斜が緩い、そういう場所になります。

内成というところは、もうひとつ不思議な場所でありまして、国東は七不思議がありますけれども、ここには、かつて七つの社と七つの仏があったという話があります。

大神峰神社も、これ、宇佐八幡と関係がある古い社寺的な場所ですよ。

この一帯は、先ほど申しました仁聞伝承と非常に深い関わりがある。

そこには一宮から七宮まで、そして大応寺、蓮台寺、善光寺、東蓮寺、石城寺、極楽寺、西蓮寺といった寺があったとされています。

この小さな村の中に、なぜそれほど多くの寺社があったのか。

その背景には、やはり仁聞菩薩の伝説があります。

仁聞菩薩というのは、八幡大菩薩の応化、つまり化身とされる存在ですよ。

つまり、この地域は八幡山と非常に深い関わりを持っているわけですよ。

私、一方で八幡大菩薩の研究者でもありますので、その点は大変

興味深く感じます。

国東六郷山開山の始祖も、実は仁聞という人物であると伝えられています。

千燈寺の伝説でも、仁聞が大石の上で三七日の間座禅し、水が出たという話があります。

そうした意味でも、ここは中世の史料で見ても、宇佐八幡宮の神宮寺である弥勒寺との関係があり、さらに由原宮とのつながりもある場所なのですよ。

ただし、この地域の寺社について、私も全部を実際に現地で確認し切れているわけではありません。

というのは、戦国時代の終わり頃に焼き討ちに遭い、その後、廃仏も進んでしまったため、寺としてきちんと残っているものは少ないからですよ。

したがって、違っているところがあるかもしれませんが、その点はお承知いただければと思います。

これが大神峰神社、これは別府から行くと、最初にこの内成に入っていくときに、内成の入口のところにあります。

あと、いつか私たちが訪ねたい、二宮の石祠とかですね、石城寺、あるいは極楽寺のガラン様とか、あとはそれがあります。

だから、もうお寺としては残っていないですね。

これは太郎丸のガラン、それから蓮台寺、これはお寺として再建されましたけど、ここを見ると何て書いているか、御許山蓮台寺って、僕ら、御許山というところですね、宇佐八幡の裏山が実は御許山。

したがって、いかに八幡山と深い関係があるのかなど、改めて思う場所ですよ。

地形が山間地であって、なぜこんなに重要か。

もちろん水田開発も進んでいたんですけども、やはり生産性も平地と比較すると、山間部ですから高くはない。

そこをですね、北条氏が、あるいは大友氏が、なぜ重要視していたか。

あるいは、もうひとつ言うと、なぜここに宇佐八幡宮に関係する伝承や、お寺などが残っているのか。

それがですね、ひとつは、弥勒寺所領注進状というところですね、そういう史料があります。

この史料の中には宝満寺、由原という所が弥勒寺の所領として記載があり、別府から登る所のすぐ向こうに宝満寺というお寺がある。

その上に、もともとのお寺の跡が残っていますけれども、その一帯がまず重要な地域、すなわちお寺に関わる地域であるということですよ。

これが表というと、向こう側が由原ですね、これが裏、これ高崎山の真裏、どっちが裏か表かわかりませんが、そういう。

昔は、こちらが表だという説がありまして、高崎山の一帯は弥勒寺と非常に近い関係があるので、仁聞伝承が残ったと。

それから、もうひとつ重要なのは、交通上の要地だったということですよ。

宝満寺と朝見八幡宮とは非常に近い位置関係にあります。

もともと、別府から大分へ越える際、昔は高崎山を今の国道10号のような形では通れませんでした。

そのため、高崎山の裏を回るしかなかったわけですよ。

今でも東別府に近いところから登り始めて進んでいく道がありますが、それは内成の中、あるいは内成のすぐ近くを通るルートですよ。

さらに上へ行くと、鶴見峠、火男火売神社があり、そこから二つの道に分かれます。

鳥居に背を向けて左手へ進むと、りんご園と書いてある方向、す

なわち志高湖の方へ向かう道になります。

そして、それも最終的には先ほどの道と合流し、大分へ出ていきます。

この両方の道が、実は内成のすぐ近く、あるいは内成の中を通過していたわけで、古い時代からここは非常に重要な交通の要衝であったということです。

したがって、北条氏のような勢力にとっても、ここを押さえる必要があった。

つまり、ここは大分と別府をつなぐ重要な地点であり、宇佐神宮にとっても重要、弥勒寺にとっても重要な場所であったということです。

また、大友氏が最終的にここを得たのも、そのような理由によると考えられます。

大友氏にとって高崎山は自らの城に関わる重要な場所ですから、ここを押さえておかなければ、背後を突かれるようなことにもなりかねません。

その意味でも、ここは交通上、きわめて重要な場所だったわけですね。

これが内成の歴史的な位置づけです。

そのような背景の中で、あのような美しい棚田が形成されてきたのだ、ということ、少し歴史の面からお話しました。

では、私の話は以上にしたいと思います。

#### 【赤松氏】

それでは、飯沼先生に引き続きまして、赤松の方から「よみがえる中世石垣荘 別府が棚田だった頃」ということで、お話ししたいと思います。よろしくお願いたします。

今回、棚田サミットのお話をお引き受けしたときに、別府には内成や天間、堂面、東山のように、別府市と大分市、あるいは由布市との境界に有名な棚田景観が残っていることを改めて意識しました。

別府という都市は、ご存じのとおり温泉観光都市であり、駅の周辺には繁華街が広がり、人口も県内で2番目に多い都市です。

しかし、私はふと、別府の中心地自体が、もともとは棚田だったのではないかと思ったのです。

ところが、その頃の記憶というのは、すでにかなり忘れられています。

代々お住まいの方や上の世代の方々であれば、「あの辺り一面が水田だった」ということはご記憶かと思いますが、若い世代や観光客の方々には、別府がもともと棚田であったこと自体、あまり知られていないように思います。

そこで今回は、別府が棚田だった頃の話を通じて、今回のサミット開催地である別府の景観に、どのように棚田の記憶が残っているのかをお話したいと思いました。

あえて、棚田として有名な内成や天間ではなく、住宅地に注目してみようと考えたわけです。

先ほど司会の方からご紹介いただきましたが、私は普段、日本中世史の研究者と自己紹介することが多いです。

その中でも、荘園・村落史を研究していると申し上げることが多いのですが、村落は「ムラを研究しているのだな」と想像していただけでも、荘園というのは、なかなか分かりにくいかもしれません。

中学校の社会科で習い、高校で日本史を選択すればまた習い、小学校でも耳にすることがあるかもしれません。

つまり、人生の中で三度くらいは「荘園」という言葉を聞くはず

なのですが、それでも今ひとつ分かりにくい。

そのため、まずは荘園とは何かということからお話したいと思います。

まず時代区分ですが、古代・中世・近世・近代という分け方があります。

これはもともと西洋歴史学から輸入されたものであり、実はあまり日本人にはなじみがない面もあります。

一方で、日本史では政権所在地によって時代を区分するやり方が分かりやすいかもしれません。

私が研究している中世という時代は、平安時代の終わりから始まり、鎌倉・南北朝・室町・戦国あたりまでを含みます。

したがって、おおよそ1000年代半ばから1500年代くらいまで、約500年ほどの時代を研究対象にしているわけです。

荘園の発生はもう少しさかのぼり、おおよそ8世紀頃から始まるとされています。

そして16世紀頃まで続きますので、約800年ほど存在した制度だということになります。

今が2025年ですから、800年前といえば1225年、すなわち鎌倉時代です。

それだけ長い時間存在した日本の土地制度であったということ、を、まず押さえていただければと思います。

では、そもそも荘園とは何か。

結局のところ、荘園とは持ち主のいる土地です。

その持ち主とは、お寺や神社、あるいは貴族です。

そのような人々が持つ領地が全国に広がっていたわけです。

その成立は、おおよそ1000年代半ばから後半にかけて全国的に進み、日本の土地の半分以上が誰かの荘園になる時代が来ます。

私が研究している中世という時代は、荘園の全国的な展開とともに始まる時代なのです。

なぜ荘園が大事なのかと言いますと、大まかに言えば、上から下まで皆が荘園に関わっているということが大きなポイントです。

スライドをご覧ください。

まず、現在の別府について、私たちのような歴史学者の立場から見たときに、どのような課題が見えてくるのか、という話から始めたいと思います。

これは鶴見岳ロープウェイから撮影した別府の景色です。見ていただくとわかるように、本当にいつ見ても美しい景観だと感じます。

次の写真は地獄、そしてこちらは別府タワーです。

私自身、ロープウェイから見た景色だけでなく、さまざまなコンテンツが充実している街であり、さらに夜の街の人間の面白さも含めて、別府は非常に魅力にあふれた地域だと思っています。

市のホームページを見ますと、今年の年間観光客数は700万人とのことで、今年はさらに増えるのではないかと思います。

また、別府の湯けむりや景観は、文化庁の重要文化的景観にも選定されており、別府の景観を考えるうえで、歴史を無視することはできないと感じています。

そうなったときに、別府の歴史として何が知られているのかを少し考えてみると、やはり駅前には油屋熊八の像が立っていて、そこを起点に考えざるを得ないわけです。

普通に考えると、別府の歴史は油屋熊八から始まる、というイメージになるのは当然だと思います。

私自身も、そうした近代以降に築かれてきた別府の文化に強い親しみを持っています。

そして、明治末から昭和初期にかけて、別府はまぎれもなく観光

地化していきます。

さらに、敗戦後は高度経済成長期とともに発展していきました。

私の親の世代でも、東京などから修学旅行で別府に来たとか、別府に泊まったとか、白杵の磨崖仏を見に行ったりとか、そういう話を聞くことがあります。

つまり、明治から昭和にかけて観光地化が進み、その後も「別府といえば温泉、観光」というイメージのまま現在に至っているわけです。

そして、その先も観光振興の中で盛り上がってきたというのは間違いありません。

ですから、一般的に別府の歴史といえば、その部分が強くイメージされるのは当然ですし、おそらく皆さんにもご同意いただける部分ではないかと思えます。

ただ、その一方で、近代以前の歴史はあまり知られていません。

そもそも、現在の別府の中心部あたりが、長い歴史の中で本当にずっと中心だったのかというと、必ずしもそうではありません。

むしろ、現在の中心部というのは、明治以降の大規模開発によって繁華街をつくることのできるだけの土地が残っていた、本来はそれほど栄えていなかった地域だった可能性もあります。

そう考えると、長期的に見たときに、別府の中心部とはどこだったのか、ということをも、まず一つ考えてみたいわけです。

また、棚田といえば、先ほども申し上げたように、現在は内成や天間といった市境に近い山間部が注目されています。

しかし、実は、もともと別府そのものが棚田だったのではないかと、ということ踏まえると、「温泉と住宅地」という現在の別府のイメージは、かなり変わってくるのではないかと思っています。

そのため、飯沼先生にメインで内成のお話をさせていただいたうえで、私は補足的に別府市街地の話をさせていただこうと考えたわけです。

スライドにもいろいろ写真を上げていますが、普段、石垣地区を歩いていると、稲作の痕跡が見えてきます。

たとえば、どうやって田んぼに水を回していたのか、その工夫が見えるんですね。

単に水路があるだけではなく、分水のために石や板を差し込んでいた跡が残っていたりします。

また、神社を見ても、宇佐神宮と関わる信仰の痕跡があったり、中世の石塔が残っていたりと、いろいろな痕跡が現在も見られます。

そこで、今回の発表の目的としては、日本が誇る温泉都市・別府の景観の基層に何があるのか、ということを考えることです。

さらに問題提起として申し上げれば、棚田の形成によってひらかれた中世の石垣荘という、もう一つの別府を知ること、そして長い時間軸で景観の変遷を明らかにすることで、明治以降だけで語られがちな別府の歴史ではなく、もう少し広い時代を含めて歴史を理解する機会が設けられるのではないかと、ということをお伝えしたいと思っています。

ただ、ここで一つ断っておかなければならないのは、別府には『別府市誌』という自治体史があり、何度も編さんされてきているということです。

2000年代や2020年代には、飯沼先生もかなりご活躍になったと伺っています。

つまり、歴史についてきちんと記録し、何度も本を刊行してきた積み重ねがあるわけです。

それにもかかわらず、体感としては、やはり歴史よりも観光や温泉の方が前面に出ていて、歴史への認知がなかなか深まらない、と

いう現状があるように思います。

それをどうすれば変えていけるのか、ということを考えています。

今日この話を聞いてくださった皆さんの中から、「そういえば、あの人がこんな話をしていたな」と思い出していただいたうえで、もう一度別府の景観を見ていただきたいのです。

この会場であるビーコンプラザの上にはグローバルタワーがありますので、そこから見ると別府が一望できます。

ですから、この話のあと、あるいは明日にでも登っていただいて、「ああ、そういう場所だったのか」と少し考えていただければよいなと思っています。

そういう意味で、今回は、別府の住宅街である石垣地区が棚田だった頃の話をも、ここから始めていきたいと思えます。

まず、石垣荘があった豊後国とはどのような地域だったのか、という話です。

そもそも、別府がある豊後とはどのような国だったのか、ということから見ていきます。

先ほど宇佐神宮との関わりが出てきましたが、宇佐神宮は、皆さんご存じのとおり、現在の分府市にあり、

厳密には豊前国になります。

では、その宇佐神宮が、今の豊後、つまり別府のあたりとどのような関係を持っていたのか。

これはうちの学生が作った地図なのですが、宇佐神宮の領地を分佈で示したものです。

色分けしてあって、ピンクの部分が宇佐神宮、正確にはその境内にあった弥勒寺の領地です。

これを見るとよくわかるのですが、宇佐神宮の本拠地はこのあたりにありますが、そこから国東半島を通り、別府、日出あたりまで広く影響が及んでいたことがわかります。

つまり、国東半島から別府にかけては、かなり長い期間にわたって宇佐神宮の勢力圏だったということです。

そう考えると、先ほど内成で見た弥勒寺の痕跡というのは、ちょうど宇佐神宮の影響力が及ぶ境目に位置していた、という理解ができます。

一方で、北の方には天皇家の領地があり、南の方には国司が政務を行う国府があり、さらに摂関家の領地もあるという形で、それぞれ勢力圏が分かれていました。

その中で、宇佐神宮は国東半島から別府にかけて非常に強い影響力を持っていたわけです。

そして、その痕跡は、朝見の八幡神社であったり、石垣の八幡神社であったり、現在も各地に残っています。

ここで少し、仕組みの話をして。

一つの荘園を経営あるいは支配する場合、自分たちの神様をその領地に勧請する、つまり連れていくということが行われます。

そして、その土地の人々にその神を信仰してもらう。

信仰関係を通じて関係を築き、その中で年貢を納めてもらう、という仕組みです。

学問的には「宗教的イデオロギー支配」といったりしますが、難しい言葉はさておき、要するに信仰を通じて支配の仕組みをつくるわけです。

だからこそ、宇佐神宮の領地だった場所には八幡宮が多いわけですし、石垣地区でも今なお八幡信仰が続いているわけです。

日常生活の中で宇佐神宮や石垣荘を意識することはなくても、慣習として信仰が続いている。

その中に、宇佐宮領だった頃の記憶が形を変えて残っている、と

いうことになります。

次に、別府の中心部はどこだったのか、という問題です。

その手がかりとして、田染荘の事例を出します。

私も飯沼先生と同じく田染荘が大好きですので、事例として持ってきました。

ここで注目するのが「小字」です。

大字は今でも残っていますが、小字というのは、その内部で使われていた、より細かな地名です。

田染荘の小字を地図上に示したのがこの図です。

見ていただくと、ある場所では小字が細かく、小さく区切られている一方で、別の場所では一つ一つが大きいことがわかります。

では、小字が細かく設定されている場所とはどこか。

地図を見ると、それは谷筋の平地、つまり人が生活している場所です。

ちなみに、富貴寺大堂はこのあたりにあります。

人が暮らしている場所では、日常生活の必要から、地名を細かく設定します。

誰の田なのか、どんな田なのか、どのお寺の近くか、そういった生活に結び付いた名前が必要になるからです。

一方、山の中に入ると、「何とか山」「何とか谷」というように、地名は大きく、ざっくりとしたものになります。

つまり、小字の大きさの違いは、人間活動の密度と対応しているわけです。

この考え方を別府に当てはめてみます。

『別府市誌』（1985年）附図に収録された小字を見てみると、まだ完全に復元できているわけではありませんが、少なくとも傾向は見えてきます。

ある地域では小字が非常に細かい一方で、現在の別府駅周辺や繁華街のあたりでは、小字が比較的粗いのです。

これは何を意味するのか。

現在の中心部は、もともと細かい生活空間がびっしり存在していた場所ではなかった可能性がある、ということです。

むしろ、ある程度まとまった土地が残っていたからこそ、明治以降の都市開発や繁華街の形成が可能だったのではないかと考えられます。

一方で、石垣地区は小字がびっしり設定されています。

つまり、そこにはかつて濃密な生活と耕作の空間が存在していた、ということが読み取れるわけです。

今回取り上げる石垣の一带は、かなり密に小字が設定されていて、人が活発に活動していた場所だったことがよくわかります。

そして、この石垣地区一帯に、かつて棚田が開かれていたのです。

ここで、別府の行政区分についても少し触れておきます。

古代には速見郡という郡が置かれ、その中に朝見郷という郷がありました。

この朝見郷というのは、現在の朝見地区だけを指していたわけではなく、別府市を含むかなり広い地域を含む郷だったと考えられています。

つまり、流川の先にある現在の朝見だけが朝見郷だったのではなく、もっと広い範囲を朝見郷と呼んでいたらしい、ということです。

そして、その朝見郷から分かれる形で、11世紀から12世紀頃に石垣荘という荘園が成立したと考えられています。

また、速見郡の中心的部分も石垣のあたりにあったのではないかと、『別府市誌』などでも推定されていますし、石垣荘も水田だけで200町ほどあったのではないかと、ということが史料

から知られています。

ただし、別府の中世文書を見ていくと、ある事件を除いて、石垣荘の内実がわかる史料はあまり残っていません。

その「ある事件」というのが、文永10年、1273年の「大隅八幡宮大神宝役徴収使打郷事件」です。

鹿児島にある大隅正八幡宮の修理費用を徴収するためにやって来た官使を、石垣荘の人々が追い返した、という事件です。

この事件については裁判記録が残っているのですが、それ以外には、石垣荘の実態がよくわかる史料があまり残っていません。

つまり、石垣荘という荘園が別府の中心的な場所にあったらしい、ということまではわかっているのですが、その中身については、まだ十分にはわかっていない部分が多いのです。

そこで今回は、石垣荘の歴史を解明する手がかりとして、地名や地割、道といったものに注目しながら、さらに考察を進めていきたいと思います。

のちほど私の努力の結晶をお見せしますが、別府の昔の景観を復原するのは、実は非常に大変なんです。

なぜ大変かということ、まず交通網の整備があります。

たとえば九州横断道路が通っていますし、住宅地を造成する際には道が広げられ、区画整理が行われています。

さらに住居表示が導入されたことで、昔の地名が使われなくなり、忘れ去られているという状況もあります。

ですから、現在の景観から昔の姿をイメージするのは、なかなか難しいわけです。

歴史的な地名が残っていたとしても、住民の中では次第に忘れられていく傾向があります。

そうした石垣地区の中でも、今回は比較的取り組みやすい北石垣という地区を対象にしました。

ただ、やはり別府大学の前を通る大学通りを含めて、さまざまな道路が通され、住宅地造成も行われていますので、景観はかなり変わっていました。

それでも、いろいろと大変ではありましたが、ある程度までは復原することができました。

ここで、少し空中写真をご覧いただきたいと思います。

これは1960年代の北石垣と南石垣です。

南石垣では、まだほとんど区画整理が行われておらず、このあたり一帯が水田や耕地だったことが、ぱっと見ておわかりいただけると思います。

続いて現況と見比べてみると、広い道がいろいろな場所に通され、縦横に整った区画へと変わっていることがわかります。

このあたりが実相寺山です。

石垣地区は大きく変化していて、道の形も変わっていることがわかります。

つまり、この60年ほどの間に景観は大きく変わり、耕地はほとんどなくなって、住宅地などへと変わってしまった、ということです。

それから、先ほど少しお話したとおり、私たちが知りたいのは、かつての景観です。

それを知るためには、今の地図だけでは不十分です。

そこで、明治期の地籍図などを使いながら、過去の景観を現在の地図の上に復元していくという作業を行っています。

基本的に、これらはすべて手書きの図面です。

当時は欧米の測量技術を取り入れながら測量を行い、その結果をもとに手書きで全国的に地籍図が作られました。

こうした図面は、自治体によっては法務局や税務課、教育委員会などに残されていますが、すでに失われている地域もあります。

この地籍図の情報をすべて手作業で現代の地図に写し取るのは非常に大変です。

そのため、パソコンを使いながら復元していきます。

その際に使うのがGIS、つまり地理情報システム（Geographic Information System）というソフトです。

これを使うことで、地籍図の地理情報を電子地図上に重ねて表示することができます。

データ化することで、さまざまな形で利用できるようになります。

このように、明治期の地籍図の情報をGISを使って現在の地図上に描き起こす、という作業を今回行いました。

この作業自体は、これまでもいくつか経験があります。スライドの図は、私が卒論以来研究してきた播磨の矢野荘という荘園の事例です。たつの法務局で古い地図を取得し、それを電子地図に重ねて復元しました。かなり手間のかかる作業です。それから、奈良県五條市の例でも、明治22年の地図を復元したことがあります。

そうした作業を、今回は石垣荘で行ってみた、ということです。こういうデータを作ると何が便利かという、データ形式を変換すればGoogle Mapsに読み込むことができます。そうすると、スマートフォンのGPSを使って現在地を表示しながら、目の前の景観と明治時代の景観を比較しつつ歩くことができます。

繰り返しになりますが、本当は中世石垣荘のことを知りたいわけです。しかし、明治の景観がわからなければ、中世のこともわかりません。そこでまず、明治期の北石垣地区の景観を復元する作業を行ってみた、ということです。

その成果をお見せしたいところですが、もう少しだけ前提を説明します。石垣荘の範囲は、北石垣と南石垣だろうと言われていています。今回は、区画整理があまり行われていない春木川以北、つまり北石垣地区を対象にしました。北石垣地区の中でも大学通り周辺は区画整理が進んでいるため、そこを北限として作業を進めました。資料としては、資産税課の地籍図と、地元の『今日新聞』が作成した都市計画地図の二つを利用しました。

作業の流れとしては、まず明治期の地図や関連する地図をスキャンして画像データにします。その画像に座標を与えて電子地図上に表示できるようにする、いわゆるジオリファレンスという処理を行います。その上で、耕地の区画をひとつずつ写し取っていきます。

では、その成果をお見せします。まず『今日新聞』の地図をスキャンし、位置情報を与えて表示します。その上に明治期の地籍図を同じように重ねていきます。この作業を何十枚も繰り返して、地図の情報を書き写したものがこちらです。10月10日頃から作業を始めて、毎晩少しずつ進めてきたのですが、時間がかかって、現時点ではここまでしかできていません。将来的には北石垣・南石垣すべてを復元できるように、今も作業を続けています。

図では、黄色が田、オレンジが畑、赤が家、紫が神社、緑が山や原、黒が埋葬地を示しています。こうして色分けしていくと、明治初期の北石垣村の構造がよくわかります。まず目につくのは、典型的な集村の形です。家が一か所に集まり、その周囲に耕地や山林が広がっています。つまり、現在住宅地になっている場所も、もともとはほとんどが田んぼだったということがわかります。

また、明治期の景観を復元してみると、地名と土地利用との関係も見えてきます。江戸時代には大規模な新田開発が行われましたから、その結果として水田が広がったと考えられます。一方で、八幡神社は宇佐神宮から勧請された神を祀る神社であり、地名との対応

もよく、中世以来現在地にあった可能性が高いと考えられます。

つまり、地名と土地利用のズレを考えると、北石垣地区では江戸時代以前の地名がかなり残っている可能性が高い。そして、江戸時代の新田開発によって集村化が進み、現在のような景観が形成されたのではないかと考えられます。このように、明治期の地籍図を復元し、その上で地名を検討していくことで、中世の痕跡にたどりつくことができるわけです。

さて、今後の課題です。まず、復元エリアをさらに広げて、北石垣全体を対象にしたいですし、南石垣についても同じ作業を進めたいと考えています。ただ、現時点では改変前の図面をまだ十分に入手できていないので、そのあたりをきちんと集めて、石垣地区がそもそもどのような景観だったのか、明治期、さらには近世末、江戸時代末の段階でどのような姿だったのかを、もう少しはっきりさせたいと思っています。

それに加えて、今回は時間の関係でできませんでしたが、陰影起伏図や赤色立体地図といった、地形が詳しくわかるデータと今回復元したデータとを照らし合わせたり、湧水の位置と取水の関係を調べたりといった、地理的な分析も行っていきたいと思っています。そうした分析を通して、この地域の文化的背景をもう少し深く理解したいということで、今後研究を進めていきたいと思っています。

もう一点、重要なテーマとして考えているのが石垣原合戦です。石垣原合戦は、皆さんご承知のとおり、関ヶ原の戦いの前哨戦として行われた戦いです。大友方と黒田方が争った戦いとして知られていますが、この石垣原合戦と石垣荘の景観との関係についても、今後考えていきたいと思っています。景観の中に残る痕跡を丁寧に見ていくことで、戦いの実像にも少しずつ近づけるのではないかと考えています。

以上、少し駆け足になりましたが、明治期の地籍図をもとに景観を復元し、そこから中世の石垣荘の姿を読み解こうという試みについてお話ししました。ありがとうございました。

### 【司会】

飯沼先生、赤松先生、ありがとうございました。

ここからは質疑応答の時間とさせていただきます。

ご質問のある方は、挙手をお願いいたします。

### 【参加者】

赤松先生にご質問です。

私は愛媛県から来たのですが、愛媛県でも特に南予、宇和島や八幡浜など、いわゆる柑橘の多い地域があります。非常に勾配がきつところが多く、先生のお話を伺っていて、少し関連することを思いました。

質問になっていないかもしれませんが、3点お伺いしたいと思います。

まず1点目ですが、「石垣」という地名がありますよね。この「石垣」というのは、先生がずっと調べてこられたその地域全体に、実際に石垣が多く存在していて、それが地名の由来になったのかどうか、ということです。

私は、もし海岸線沿いであれば、海岸の石を山の方へ運び上げて石垣にしたのではないかとも思ったのですが、もしそうであれば、石はもう少し丸みを帯びているのではないかと感じました。その点がまず1点目です。

2点目は、先生が上空写真などで示しておられたそのエリアについて、斜度、つまり傾斜がだいたいどの程度あるのか、ということ

です。

3点目は、先生は田んぼ、田んぼと繰り返しておっしゃっていましたが、その田んぼになる前は、どういう状態だったのか、ということです。たとえば原野であったとか、原っぱのような状態だったとか、そういった土地が時代の変遷の中で田んぼになり、その後、畑へと変わって、米ではなく雑穀のようなものを作る土地になった、というような例があるのではないかと思ったのです。

なぜこういう質問をするかといいますと、先ほど申し上げたように、愛媛の南予のみかん畑では、場所によって多少違いはありますが、ほとんどが山なりの斜面のみかんの木を植えています。しかも赤土ですから、石垣を積んでいないとどうしても崩れてしまうんですね。

それを防ぐために石垣を積んでいて、奥行きが1メートル半ほどの段々ができていくわけです。そういう田畑の変遷があるものから、今回の話とも通じるものがあるのではないかと考えて質問させていただきました。

#### 【赤松氏】

まず1点目についてですが、この地域は鶴見岳という火山を背後に抱えていて、その噴火によって石や岩が地域全体に散乱している、という地形的な特徴があります。

そうした中で、それをどう扱うかということが大きな問題だったわけです。たとえば近代以降であれば、家を建てるときに地面を掘るとたくさん石が出てきますので、それを塀として利用したりします。

また、この地域を耕地化しようとしたときにも、最初に向き合わないければならなかったのは、やはり岩との戦いだったのではないかと思います。

そういった営みを重ねる中で、「石垣」という名前がついたのだろうと考えられています。

したがって、1点目については、海岸から石を運んだというよりも、鶴見岳の方から落ちてきて地域に散らばっている石に対応するところから始まっている、ということになります。

2点目の斜度についてですが、きちんと正確に計算しておけばよかったです。スライドのこのあたりは標高70メートルほどあり、このあたりは海岸線に近くてかなり低くなっていますので、一定の傾斜はかなりある場所です。

ただ、正確な数字までは今日お示しできず、申し訳ありません。

3点目ですが、田んぼになる前の土地利用についてです。

今回お見せした田の景観は明治初頭のものですが、それ以前について見ると、たとえばこのあたりはもとは林であり、こちらは畑だったものが田になっている、ということがわかります。

別府という地名自体が「野のはずれ」のような意味を持つとも言われていますが、長い時間軸で見ると、もともとは未開発地が広がっていた地域で、それを江戸時代にかけて水田化していったものと考えています。

また、もっと南の方の地域について聞き取りをした際には、「自宅より上は雑木林だった」という話もありました。

つまり、未開発地を住宅地化していく場合もあれば、未開発地が畑になり、さらに水田になっていく場合もありますし、最初から田になっている場所もあるということで、いろいろなバリエーションがあると思います。

ただ、大学周辺などで70代くらいの方に聞き取りをすると、水田の記憶が必ずしも出てこない、ということが民俗調査の成果とし

ても出てきています。

明治初頭には水田だったとしても、やはり別府は温泉との関係もありますので、稲作に必ずしも向いた土地ではない面もあります。

それでも昔の人は米を作ろうとして水田にしていたわけですが、ある時期に畑へ転換し、それがさらに住宅地になっていった、という場合も考えられます。

一方で、水田がかなり近年まで残っていた地域もあります。

今回は棚田サミットですので、水田の話を中心にしましたが、温泉を含め、人々の生活状況に応じて土地利用は変わってきた、ということです。

ですから、景観は常に一定だと考えるべきではなく、その時々々の社会状況、経済状況、環境状況に応じて変遷していくものとして捉えていただくのがよいのではないかと思います。

#### 【参加者】

どうもありがとうございました。

#### 【司会】

ほかにご質問のある方はいらっしやいませんか。

#### 【参加者】

早稲田大学の海老澤と申します。

本日のお話、大変興味深く聞かせていただきました。

まず前提として教えていただきたいのですが、明日じっくり内成の棚田を見学させていただこうと思っています。このA3の大きな図面がありますよね。この中に、内成の棚田はだいたい9割ほど、あるいはほぼ全体が含まれていると考えてよろしいでしょうか。

#### 【発表者】

はい。9割方というより、ほぼ100%といってよいと思います。

#### 【参加者】

ありがとうございます。

それを前提に、少しお話しさせていただきたいと思います。

先ほどまで中島先生がいらっしやったと思うのですが、もうお帰りになりましたか。

あ、そうですか。中島先生にも少しお伺いしたかったのですが、中島先生がこのような棚田研究を始めた一つの契機には、さらにその前の世代の先生方による研究があったと、私は理解しております。

棚田研究には、古島敏雄という東京大学の先生の『土地に刻まれた歴史』という非常に有名な著書があり、その中で棚田の位置づけが示されました。

そこで古島先生は、主に長野県を対象に研究されていたのですが、棚田的なものは、隠田としての役割が非常に強いと論じられたんですね。

隠田というのは、為政者に知られないように隠して作る田んぼのことです。

つまり、棚田には、当時の支配者に知られずに農民たちが作っていた田んぼが多いのだ、ということをご島先生が明らかにされ、それが棚田研究の一つの画期になったわけです。

それに対して、中島先生のさらに先生にあたる方が、いや、そうではないのだと指摘された。

棚田というものは、むしろ大規模な水路が開かれ、その先に大きく展開していったものでもあるのだと明らかにされたわけです。

そして、それをさらに中島先生が細かく明らかにしていった、という流れがあると私は認識しています。

つまり、柵田にはもっと政策的な意味があって、江戸時代であれば各藩、さらに明治時代に入ってから柵田は開かれていくわけですが、そうした国家的な意味を持って開かれていった面もある、ということです。

そのときに根拠となるのが、小水路です。

柵田は実は非常に長い水路を持っていて、その水路によって開かれている水田がある、そういう柵田があるのだということが明らかにされてきました。

その代表的な事例の一つとして、大分県が非常に大きな位置を占めています。

その後、新潟県などでも同様の事例が見いだされています。

そういう意味で、柵田というものが、もともとは非常に狭い範囲の問題として考えられていたものが、より大きな枠組みの中で考えられるようになってきたわけです。

その中で、大分県は非常によい事例なのです。

本日見せていただいたこの内成の柵田のA3図面を見ても、そのことが非常によくわかります。

特に、小水路がたくさんあるという点です。これは非常に特徴的なことだと思います。

これによって、古島敏雄先生が最初に示された柵田研究の見方が、乗り越えられていったのだらうと思います。

こうした状況は、大分県南部などでもかなり見られます。市町村を越えるような長い水路がつくられ、そこから水が落とされて各柵田が成立しているわけです。

この図の中央から下の方にある水路も、おそらく最初は石城寺周辺から流された水が、さらに再利用されるような形で下流へつながっていったのではないかと、あるいは、もっと細かい場所にさらに大きな水源があって、それが下へつながっていく構造なのではないかとも考えられます。

そのあたりの用水について、明日じっくり見させていただきたいと思っています。

この特徴には、ほかにもいくつかありますが、もう一つは、ため池が見られない、あるいは少なくともここでは大きく問題にされていない、という点です。

日本では、ため池を多く作って灌漑を行う地域がかなりありますが、ここではそうした状況があまり見られない。つまり、非常に水が豊かな地域だったのではないかと思います。

ため池を多くつくっている地域の方が、比較的史料が残りやすいので、研究も進みやすいのですが、ここはそういう意味では、研究上やや難しい面もあるのかなと感じました。

一方で……。

### 【司会】

申し訳ありません。お時間の関係もごございますので、簡潔にお願いいたします。

### 【参加者】

わかりました。

もう一点だけ申し上げますと、東南アジアのバリ島にも非常によく似ているように思いました。

あちらも、ため池ではなく水路によって成り立っているところですので、視点をさらに広げていくと、ここからまたいろいろな問題

が見えてくるのではないかと考えています。

そういう意味で、内成の柵田は歴史的にも非常に大きな意味を持っているのではないかと感じた、ということです。

以上です。

### 【司会】

ありがとうございました。

貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

先生方のお話を通じて、多くの学びを得られたのではないのでしょうか。

感謝の気持ちを込めまして、先生方に皆様から大きな拍手をお願いいたします。

以上をもちまして、本日の分科会を終了させていただきます。

ありがとうございました。

## 内成の棚田の歴史と文化的景観

内成棚田の魅力



## 棚田百選に選定される

山麓や丘陵地などで見られる自然傾斜を利用して造られた水田を『棚田』と呼びます。棚田地域は食料生産をはじめ、洪水防止、水源のかん養、土砂流出防止、保健・休養の場など様々な機能を発揮しています。



平成11年(1999)度に農林水産省が認定した『日本の棚田百選』には県下より6地区選ばれており、そのひとつに『内成(うちなり)棚田』があります。

春の内成

## 初夏の内成



## 秋の内成



## 内成位置図



別府市内成



## 内成の開発史

- ▶ ①弘安8年(1285)豊後国凶田帳
- ▶ 「内梨畑 大略依為畠地、代不分明也、地頭相模四郎(北条公時)」訓み「**内梨畑** 大略畠地たるにより、代(耕作地)分明ならずなり、地頭相模四郎(北条公時)」
- ▶ ②永和元年(1375)足利義満袖判下文、永徳3年(1383)大友親世知行所領注進状案では、大友親世に得宗領「同(豊後)国内梨子村」を勲功の賞として与えている。
- ▶ なぜ、生産性の低い畠地であった内成が北条得宗領や大友宗家領となるにか。

## 内成の景観変遷

- ▶ 「内梨畑」の地名から子息すると、鎌倉時代以前は「畑」すなわち焼き畑として開発されたと推測できる。
- ▶ 鎌倉時代には「畠」と表現されることから常畠として安定的な畠となるが、面積は把握されていなかった。
- ▶ 14世紀終わりには「内梨子村」の表記にあるように「村」として把握されていることから、水田開発も始まったと理解してよいだろう。
- ▶ 棚田のはじまりは室町時代と考えられる。
- ▶ 「内成・隠山総合調査報告書」(1983年、別府市教育委員会)、『別府市誌』1(2003年)中世飯沼執筆、佐藤末喜「内成の棚田について」(『別府史談』19 2006年)など参照。

## 棚田の構造と開発

農水省・農村環境整備センターのデータによると、「平均勾配1/10・面積4l、7ha・1000枚・法面構造 石・水源川・開発起点 近世」一般棚田は近世開発のものが多い。

内成の棚田の畦畔の法面は、ほとんどが石積みである。佐藤末喜氏の考察では、「内成の棚田を守る会」の会長二宮清康氏の内成には石工、大工が古くから多く、石工はチームを組んで鹿児島方面まで出稼ぎにいったという話をもとに古くから石積技法が定着していたとしている。

石積みは、近世以降が一般的であり、中世は土坡で畦畔が造られ、傾斜角度のある棚田の造成は難しかったと考えている。

さらに佐藤氏は海老沢衷氏の棚田を考察した「荘園公領制と村落」の論考を参考に内成は「迫田型の棚田」の典型であり、迫田型は湧水(イノコ)を利用し、棚田の中でも中世からの開発が考えられる棚田のタイプとみている。その始まりは弘安図田帳の段階には遡ると考えている。

私のすでに述べたように少なくとも室町時代には棚田開発がはじまっていたことは否定しない。その証拠に、小平の山神社の長禄2年(1458)の棟札には「内梨内下尾平山神御宮之事、旦那下尾平之弁才子十郎太郎作申所也」という記録がある。「弁才子」は「弁済使」という役職であり、荘園制の中で税徴収にかかわる職からきているとすると、少なくとも鎌倉時代にはルーツをもつ役職で、ここでは米を前提にした徴収が確か考えられる。但し、石積みの展開は通常は近世以降であり、中世の棚田開発は限定されていたと考える

## 現在の棚田景観の形成

- ▶ 正保4年(1647)成立の豊後国郷帳では、日根野織部正領分として「高 四百九拾貳三合 笠和郷 内 三百拾八石六斗壹合 田方 百五拾三石八斗七升貳合 島方 内成村 木山有」と見え、内成には府内藩中郷内成組として大庄屋が置かれた。その後、元禄10年(1697)の府内藩郷帳では526石余、「天保郷帳」「旧高旧領」ともに595石余、江戸時代を通じて、石高の変化は少しずつ増えてゆく。佐藤氏と指摘するように近世の始めに水田面積の多い村となっているが、幕末までには100石ほど増加している。近世の内成は、別府市の内成より広く、七蔵司や由布市狭間の内成地区を含む範囲であり、かなり広域な村であるので、別府市内成だけをみて全体を判断することはできない。
- ▶ 佐藤氏は1500年ころには石積みの棚田景観の形成が開始され、江戸時代には今日の景観がほぼ完成したとみているが、上記のことからも、私は石積みの棚田景観は近世に入り形成されたと考えている。
- ▶ 14世紀には、原初的棚田が形成され、15、16世紀に少しずつ棚田開発が進展し、近世に最終段階として石積み棚田が形成されたと考えられる。

## 内成の灌漑図

- ① ヤマギワ用水
- ② 太郎丸がかり
- ③ 大イゼがかり
- ④ 大神峰神社がかり

(別紙地図参照)



## 石城寺水分け石

- ▶ 美しい棚田で有名な別府市内成地区の石城寺の下には水分け石と呼ばれる石があり、内成の棚田の最上流の水源となっている。ここの湧き水が左右に分かれ、一旦、沢の堰の上に落とされ、その堰から水が太郎丸やヤマギワ方面の棚田に供給される。この湧き水は、内成地区全体の棚田を灌漑する用水の象徴的存在となっている。
- ▶ そこでは毎年7月20日・12月20日に水祭りが行なわれる。ここでは内成にある6集落の総代が集まり、神事が行なわれ、田植え・収穫の感謝と豊饒を願う。

## 梨洞山石城寺之記 (明和年間)

- ▶ 豊ノ後州府城ノ西南三十里程ヲ内成郷トナス、郷ノ西北ニ一巨山有リ、名ヲ梨麗洞嶽ト曰フ、秀デテ群山ノ凝スル所ニ蔚冠ジタリ、巖巖奇絶、老樹深邃、其ノ中央ニ寺ヲ居スレ石城練若ト曰フ、乃チ人聞菩薩ノ創スル所也、十一面観世音大士モマタ聞老ノ親手デ造刻スル也、シカルニ宝龜・延暦ノ間、聞老ソノ山ニ禅坐シ大ニ三昧ニ住スル慈化救済ノ古道場也、故老ノ相伝ヘハ、此地ハ往昔水ノ乏シク郷民恒ニ以テ患トナス、聞老之レヲ愍ミ、便チ起リ錫ヲ以テ地ニ卓ケバ清水隨テ涌出リ、時ニ郷中東西ノ農夫水ノ多少ヲ争論ス、其ノ夜七尺有餘ノ三稜ノ巨石何ト無く涌出シ卓然ト自立ス、泉口ノ中心等分流ヲ東西ノ田畦ニ弥漫ス、爾来本邑ニオイテ旱損ノ憂ヒ無ク有リ、稻穀ハ登熟シ郷ヲ拳テ霑化ノ由是レヲ倍加ス、

## 石城寺



## 水分石の祭礼



水分石



ヤマギワ用水



ヤマギワ用水



ヤマギワ用水



太郎丸へ行く用水井路の堰  
【水分石の水を合わせている】



太郎丸の棚田



大神峰神社の境内の湧水



大井堰



## 大井堰かかりの水田



## 内成の大神峯神社と七社七仏

- ▶ 大神峯神社
- ▶ 一宮～七宮(勢家・七蔵司・御申・詰・小平・梶原の6山神社)と大山祇神社
- ▶ 大応寺・蓮台寺・普光寺・東蓮寺・石城寺・極楽寺・西蓮寺
- ▶ ●すべてが仁間(八幡大菩薩の応化、国東六郷山の開山)の伝説をもつ。
- ▶ 石城寺の縁起によると、仁間菩薩、大石の上で三七日間座禅す。
- ▶ 弥勒寺領由原宮との関係を想像させる。

## 内成の寺社、石造物の分布図



## 大神峰神社



## 二宮の石祠



## 石城寺



## 極楽寺跡ガラン様



## 太郎丸ガラン様



## 蓮台寺



## 内成は山間地であったが、 古代以来なぜ重要か？

- ▶ ①宇佐弥勒寺や御許山との関係。
  - ▶ 弥勒寺所領注進状に宝満寺、由原宮が見え、高崎山の裏一帯は弥勒寺と深い関係が想定される。
  - ▶ それと符合するように仁聞菩薩伝承が残る。
  
- ▶ ②古代からの交通上の要衝
  - ▶ 由布から国府、別府から大分
  - ▶ 軍事拠点高崎山との関係

## 鶴見権現 内成の交通図



第30回全国棚田（千枚田）サミット  
第2分科会発表資料

今年7年11月1日  
大分県歴史民俗学センター

## よみがえる中世石垣荘 —別府が棚田だった頃—

赤松秀亮  
(別府大学 准教授)




歴史や研究の  
詳細はQRコード

## 導入 - 1

研究テーマ：日本中世史、荘園・村落史

○荘園とは何か？  
→古代～中世（8～16世紀）全国に設けられた寺院、神社、貴族の領地。  
→中世という時代、民衆は住人として、武士は管理者（のちには所有者）として荘園に関与。  
→権力者から庶民まで幅広い階層が荘園に関わる。  
制度・社会・環境の交錯する場



これまで研究してきた荘園  
(←マップ Google Earth)

○研究の方法  
→生活の場としての荘園に注目。人々の暮らしの記録でもある景観の変遷を研究。  
中世だけを見ても地域の歴史はわからない。  
→地域史を総合的に研究する視座

## 導入 - 2

○別府の現在と歴史学的視点から見た課題

- ・別府の現在  
→年間観光客数700万人を超す観光都市（2024年）  
（平成24年9月19日「別府の湯けむり・温泉地景観」が重要文化的景観に選定）
- ・背景  
→油屋熊八に代表される明治末～昭和初期の観光地化  
敗戦後も高度経済成長とともに発展  
↑一般的に言及される別府の歴史
- ・課題  
→近代以前の歴史があまり知られていない  
（例1 長期的に見た場合、中心部の移動）  
（例2 棚田と言えば、内成や天間など境界の山間部にのみ注目）





## 導入 - 3

○本発表の目的

- ・問題提起  
→日本が誇る温泉都市別府の景観の基層に何があるのか？
- ・本報告の目的と意義  
→棚田の形成によって拓かれた中世石垣荘という「もうひとつの別府」を知る。  
景観の長期的な変遷を明らかにすることで、近代以降という短い視点で歴史を考へることも解放（近代のインパクトを再認識）。  
別府という土地のあり方への理解を深め、将来の姿を構想する素材を提供。

◎別府の住宅街、石垣地区が棚田だった頃の話のはじまりはじまり、...





## 荘園の時代、中世における豊後国

○豊後国の中世


- ・領主別に見た荘園の分布  
→①宇佐神宮・弥勒寺領、②天皇家領、③摂関家領、④国衙領、⑤その他に大別。
- ・宇佐神宮と豊後国  
→近接する国東半島を中心に宇佐宮・弥勒寺領が集中（別府市の多くは同領）。  
宇佐神宮領・弥勒寺領には八幡神が勧請。  
現在に至るまで地域における信仰の中核。  
荘園の痕跡が残る。



竹内西三「荘園分布図 下」（吉川弘次郎、1976）をもとに音韻標生地（別府大学4年）が作成した地理情報データを  
用いて作成。

## 別府市域における人の活動

○小字の大きさから考える一豊後国田染荘（豊後高田市）の場合




『田染荘の調査目録』（1987年）抜取しをもとに作成

## 別府市域における人の活動



『別府市誌』（1985年）附録

## 別府市域における人の活動



『別府市誌』（1985年）附録

## 中世石垣荘について

- 別府市域の古代
  - ・旧速見郡の行政区分
  - 別府市域には朝見郷が存在。そこから石垣荘が分立
- 中世石垣荘の成立
  - ・成立時期
  - 11世紀末or12世紀前半頃と推定
  - ・石垣荘の立地と歴史
  - 旧速水郡衙推定地
  - 規模：豊後国岡田帳に記載
  - 文永10年（1273）「大隅八幡宮大神宝役敬叙使打擲事件」を除いて、現地の内実がわかる文献史料は多くない。
  - 現在まで謎に遭った部分が多い。地名や地割、道に注目した地理的考察の可能性

## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

- 別府市域の景観復原
  - ・課題
  - 交通網の整備、区画整理、宅地や事業所等の開発に伴う地割の大幅な改変
  - 住居表示（丁目）の導入と大字・小字の廃止
  - 現況から住時をイメージするのは困難な場所が多い。
  - 歴史的な地名があっても住民の間で忘却される傾向。
  - ※旧北石垣村の一部と南石垣村は、九州横断自動車道の整備や土地区画整備事業により地割が改変。
  - 北石垣地区でも大学通りの整備をはじめ、住宅地化する際に地割は大幅に改変。

↑復原は不可能なのか？

## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる



1960年代前半の北石垣・南石垣  
(国土地理院)

北石垣・南石垣の現況  
(国土地理院)

## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる



1960年代前半の北石垣・南石垣  
(国土地理院)

北石垣・南石垣の現況  
(Google Satellite)

## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

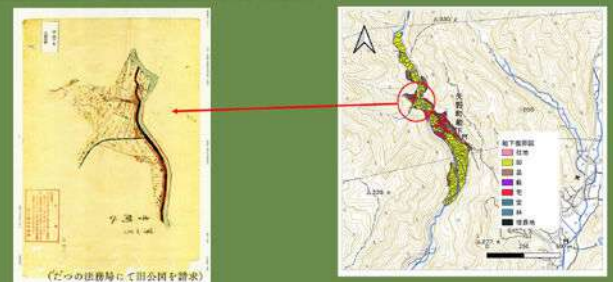
- 景観復原の方法
  - ・目的
  - 中世石垣荘の記憶に迫る
  - 少しでも古いかつ正確な地図が欲しい
- ・解決方法
  - 近代初頭に整備された地籍図
  - 別府市資産税課所蔵の地籍図をもとに復原
  - ⇔手作業での復原は困難
  - ⇒GIS（地理情報システム）の活用
  - ↑正確性高い上にデータ化で汎用性高い。



北石垣村之内四番字奥通寺之図（資産税課提供）

## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

- 復原の実例1（兵庫県相生市矢野町能下）



（どっの道標帖にて田舎図を請求）

## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

- 復原の実例2（奈良県五條市小島町） 明治22年の地籍図を復原



字地部小島村東岡田図（五條市税務課提供）

## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

- 復原の実例2（奈良県五條市小島町）作成データの活用



作成データをGoogleMapに読み込んでGPSを使えば、土地の現況と明治期の景観を見比べながら調査が可能。教育・研究以外にも様々な活用が可能。

## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

○復原方針

- ・石垣荘の荘域
- 北石垣地区・南石垣地区と推定（『別府市誌』2025年他）
- ・今回実施した作業
- 区画整備がなされていない春木川以北の北石垣地区
- 大字通りを北限に復原

・参考資料

- 資産税課提供の地籍図
- +『別府市目出町郡市計画地図』（今日新聞社、1984年版）
- 画像データに位置情報を与えて電子地図上に表示したうえで（ジオリファレンス）、耕地の区画を写し取っていく。



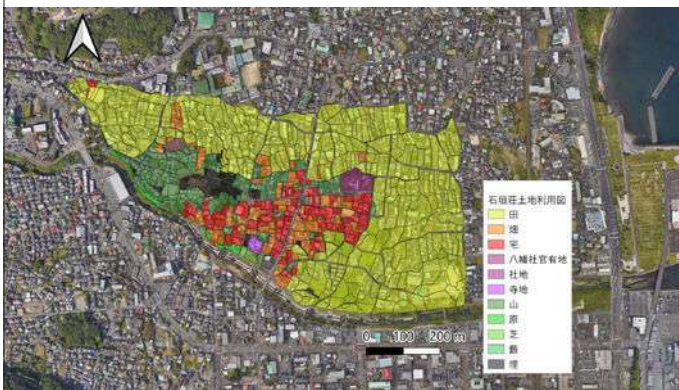
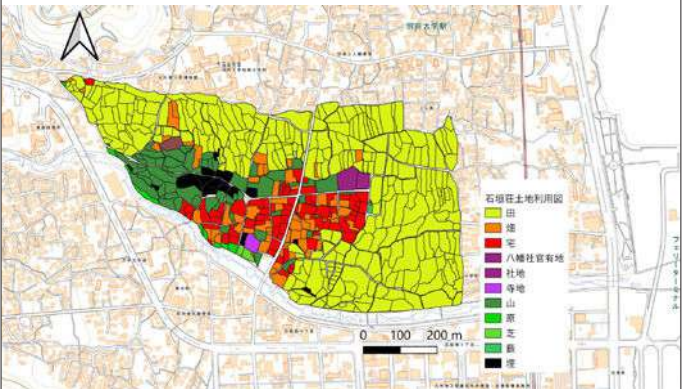
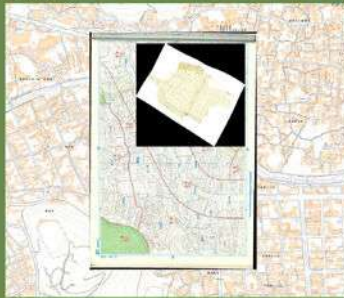
## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

○ジオリファレンスについて



## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

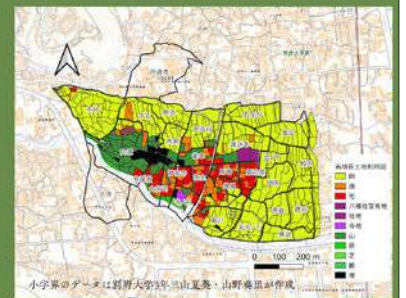
○ジオリファレンスについて



## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

○地名に石垣荘をさぐる

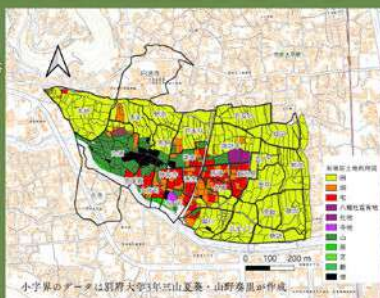
- ・近代初頭の景観
- 集落の周辺に耕地や山林が展開する典型的な集村景観。
- ・石垣八幡神社との関係地名
- 神主・神宮寺・才（祭）主・大宮司・諏訪本・馬場・宮ノ下
- ・居住地名
- 神主・大宮司・常本・馬飼・才主・鍛冶屋



## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

○地名に石垣荘をさぐる

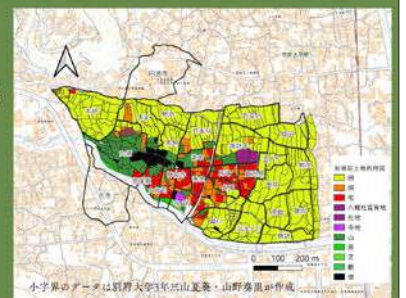
- ・地名と景観との齟齬
- 才主・馬飼・円通寺・本林・野添
- ・畑田・外園・馬場
- 人の居住が明らかな才主・馬飼・円通寺がいずれも水田化
- 本林：本は林
- 畑田：畑だった場所が田に
- 野添：野のはずれが田に
- 外園：八幡神社の外園は集落化
- 馬場：八幡神社の馬場が集落化
- ↑江戸時代：全国的な新田開発



## 地名と土地利用に中世石垣荘をさぐる

○地名に石垣荘をさぐる

- ・石垣八幡神社
- 宇佐神宮から勧請
- 社伝と地名との整合性が高いことから、中世以来現在に存在した可能性が高い
- ・考察
- ⇒前ページでの分析を踏まえると、中世以来の地名が多く残存。
- ⇒近世の新田開発以前は居住地は広範に散在し、未開発地や畑地が多い景観を想定可能。



## 課題

- ・ 復原エリアの拡大
- 現状は北石垣地区の一部のみ
- 早急に北石垣地区の完成と南石垣地区への着手
- 石垣荘域の景観復原の完成と地名分析
- ↑ 南石垣地区については区画整理事業により完全に地形が改変されているため改変前の図面を入手する必要（現時点で入手できていない）
- ・ 地形分析
- 陰影起伏図や赤色立体地図と復原成果とを照らし合わせる形での地理的分析
- ・ 石垣原合戦の研究
- 関ヶ原合戦の局地戦として戦われた石垣原合戦時の景観
- 中世最末期時点での景観を知ることができる手がかり

## 総括と展望

- ・ 石垣荘の由来
- 鶴見岳の噴出岩や土石流を用いて石垣を作ったことに起因
- 土地柄にもなつてつけられた地名
- 荘園の成立と開発
- ・ 中世時点での開発状況
- 本荘140町・別荘60町（弘安8（1285）年「豊後国國田帳」「鎌倉遺文」15701号）
- 一定数の水田が開発
- ⇔ 一面の棚田景観化は近世の新田開発
- 古代・中世・近世と膨大な時間をかけて人々が築いてきた景観
- 前近代史を読み解くことで別府市の基層がわかる
- 現在の見渡す限り住宅街という状況は長い歴史のなかでは一過性の状況



## 総括と展望

### よみがえる中世石垣荘

水田を再生することに非ず。

この土地に刻まれた“記憶”を再生すること。

温泉観光都市別府の基層にある“農と祈りの景観”を再び地図に浮かび上がらせることで、単なる温泉や観光に止まらない文化的な厚みをこの地に持たせられる。

# 農村と都市をつなぐ“おいしい交流”～棚田の風景を味に変える～

コーディネーター 大坪 史人 氏 桃山学院大学准教授

#### 【司会】

本日はお忙しい中、第30回全国棚田千枚田サミット in 別府にご来場いただき、誠にありがとうございます。

これより、第3分科会「農村と都市をつなぐおいしい交流 棚田の風景を味に変える」を始めさせていただきます。

本日は、コーディネーターとして桃山学院大学の史人先生、そしてパネリストとしてOOTSU企画の大津雄様、別府大学食物栄養科学研究科2年の多川優世様をお招きしております。

それでは早速、史人先生、よろしく願いたします。

#### 【大坪氏】

皆さん、こんにちは。

第3分科会のコーディネーターを務めさせていただきます、大坪です。よろしく願いたします。

私は、本日、大阪の桃山学院大学から参りました。

ただ、なぜ今回このようなコーディネーターを務めているのかと申しますと、もともと昨年まで別府大学に勤めており、大分の都市農村交流に長く携わってきたためです。

そうした経緯から、今回コーディネーターを務めさせていただきます。

それでは、進めさせていただきます。

本日は、簡単に、

1. 農村と都市の交流
2. わが国における農産物直売所の動向
3. 事例：太田川産直市
4. 中山間地域のフードシステム
5. その後の議論に向けて

という流れでお話いたします。

まず15分程度、私からご説明したのち、OOTSU企画の大津様にて、実際に都市農村交流に取り組まれた事例として、2つの事例について動画を見ながらお話させていただきます。

最後に、別府大学の多川さんから、これまで大学を通して都市農村交流に実際に取り組んでこられた実践者としての目線から、少しお話をさせていただき形で進めさせていただきます。

それでは、よろしく願いたします。

簡単に自己紹介をいたします。

私自身、もともと30歳のときに脱サラし、地域おこし協力隊という制度を活用して、直売所の経営をしておりました。

場所は、広島県の安芸太田町という山間部です。現在、人口5,000人ほどの町です。

そちらで実際に直売所の経営をしており、その後、大学教員になりました。

そういった経緯もありますので、最初の5分ほどだけ、少し硬い話をさせていただきます。

そのあとは、この会場では他の会場と違って、できるだけ楽しい話をしていきたいと思います。ということで、皆さんも少し寛ぎながら聞いていただければと思います。

では、始めます。

まず、農村と都市の交流ということで、こういったことが世間的にいつ頃から言われ始めたのか、少し歴史をさかのぼって見ていきたいと思います。

実際、農村と都市の位置付けという点で見ると、世界の約半数は、今でも農村といわれるような地域に暮らしています。

都市住民が農村住民を上回ったのは2007年のことであり、これはごく最近の出来事です。

つまり、現在でも多くの人々が農村で暮らしているということです。

また、2017年の世界の農業就業人口を見ると、人口の約30%が今でも農業に従事しています。

その意味で、世界的に見れば、農業は現在でも最大の産業部門であるといえます。

もちろん、先進国、たとえばアメリカやフランスなどではその割合は低いのですが、世界全体で見れば、今なお多くの人が農業従事者であるというのが現状です。

そのような中で、いつ都市と農村の交流という考え方が生まれたのかというと、ルネサンス期あたりまでさかのぼります。

このあたりは少し硬い話になりますが、イギリスのトマス・モアが活躍した時代、資本主義が実際に形成されていきました。

この時代には、都市の形成とそれに伴う問題、そして農村の崩壊がありました。

その中で、都市と農村の交流や共生が必要であるということ、トマス・モアは説いています。

その後、産業革命が起こった時代になると、ロバート・オウエンが、労働者を生きた機械のように扱うことは間違っていると、労働者農民一体論という形で、労働者保護対策の必要性を唱え始めました。

このように、都市農村交流の起源をたどると、おおよその時期、すなわちイギリスで産業革命が起こった頃に行き着きます。

その後、皆さんもよくご存じかと思いますが、ドイツの社会主義思想であるマルクスやエンゲルスが登場します。

彼らがなぜ反資本主義を唱えたのかというと、その背景には農村と都市の対立がありました。

ここが出発点になっています。

資本主義が形成され、それが世界へ展開していく中で、都市と農村の分離と対立が激化し、それがフランスやドイツ、アメリカなどにも広がっていきました。

第二次世界大戦の契機についても、もともとは都市と農村の対立的な構造に由来する部分があるともいわれています。

したがって、この二者が対立するのではなく、友好的な関係を築かなければならないということは、この時代からすでに言われていました。

そのような中で、イギリスのエベネザー・ハワードが「田園都市論」という形で、かなり深く都市農村交流について論じています。

彼は、都市と農村の二者択一ではなく、第三の選択肢として、その中間を取るような考え方を示しました。

すなわち、農村の美しさと都市の利点を融合させた生活を送る必要があります。そのためには共生が必要であると説いています。

実際、この人の思想は、その後1970～80年頃までイギリスの法制度の中にも組み込まれていきました。

イギリスは日本と同じような国土条件を持ち、もともと日本と同程度の食料自給率、すなわち40%程度でした。

それが現在では70%台まで上がってきており、その点でも非常に大きな貢献をした人物だといえます。

日本においても、かつて五千円札の肖像にもなっていた新渡戸稲造が、「貴農論」という形で、商工業偏重の思想や政策を批判しました。

そして、農業・工業・商業の共存という観点から、都市と農村を結び、地方のことを研究していく必要があると説いた人物です。

このように、歴史的に見ても、都市と農村の交流は古くから必要だとされ、ずっと言われ続けてきたことがわかります。

そうした中で、実際に私たちの社会においても、1990年代頃から都市農村交流という言葉が本格的に用いられ、進められてきました。

今回の分科会では、直売所という視点と、棚田オーナー制度のように、生産から最終的に稲刈りを行い、その後酒づくりまでつなげる形の都市農村交流、この2つについて大津氏よりご紹介いただきます。

私の方からは、まず直売所が現在直面している動向について、少しお話ししたいと思います。

直売所自体は1980年頃から存在していました。

今回の会場には農業者の方も多いと思いますが、規格外の野菜などを庭先で販売するという形も、以前からかなり多かったのではないかと思います。

それが1990年代になると、消費者の安全・安心に対する関心の高まりなどを背景に、直売所が次々とつくられていきました。

道の駅なども、その流れの中で広がっていったものです。

2000年以降になりますと、2000年に農協が全国的に地産地消の取り組みを強化するというので、ファーマーズマーケットをより活用していこうという方針を打ち出しました。

その目標のもとで、2000年以降、農産物直売は爆発的に増加していきました。

そうした中で、これは直近の直売所の運営主体別に見た指標になりますが、現在でも直売所といわれるものの半数近くは、個人の方が経営されているものです。

最近では統合も進み、農協のファーマーズマーケットも増えてきており、販売額の面では大規模化の傾向があります。

ただし、実際に中山間地域や棚田地域の直売所を見ると、どうしても小規模な直売所、たとえば年間販売額5,000万円未満のようなものを、どうやって維持していくのかが、農村部にとって非常に重要な課題になります。

私自身も、こうした課題意識を持って日頃研究を行っております。

そのような中で、指標的な分類から見ると、生産者の高齢化や後継者不足、社会の流通変化などに伴い、数多く存在する小規模な直売所の存続が難しくなっている状況があります。

しかし、中山間地域や棚田地域の住民の立場からすると、観光目線だけではなく、地域住民も取り込んだ視点で考えなければ、直売所を維持していくことはできません。

それは、農村の生活や暮らしを支える上でも、非常に重要なことだと考えています。

そうした点から、私自身が直売所の経営をしていた経験を、少しだけ紹介したいと思います。

私は、広島県北西部の安芸太田町というところに住んでいました。

そこで、年間販売額2,000万円程度の規模の直売所を経営していました。

その中で、少しスライドは飛ばしますが、もともとは観光向けの戦略を取っていました。

しかし、実際に買いに来るお客さんを見てみると、農業の方が自分では作っていない野菜を出荷のついでに買っていったり、そこに住んでいる地域住民の方が利用していたりする割合が非常に高いと感じました。

そこで、そうした実態を踏まえて地域住民向けの戦略を立て、ニンジン、馬鈴薯、タマネギといった、地域住民が日常的に使う頻度の高いものを置く直売所へと、少しずつ変えていきました。

また、こもスライドは少し飛ばしますが、中山間地域等においては、直売所の関わり方そのものが非常に重要であるという点があります。

それは生産者だけの問題ではなく、市町村の行政であったり、消費者自身の生活であったりにも関わってきます。

たとえば、買い物に行こうとしても、遅くまで働いていれば市町村内で十分に買い物ができないということもあります。

また、JAについても、広域合併や支店の統廃合、あるいはいわゆる農協販売から離れていく動きなどもあり、少し不安な部分があります。

そのような中で、直売所をハブとした連携を図っていくことは、今後の中山間地域や棚田地域を生かしていく上で、非常に重要な視点になるのではないかと思います。

そういう意味で、今回、どのようなニーズに対応していくのかという点は、非常に重要だと考えています。

そのためには、地域住民の目線や、普段から買い物をする人の目線を取り込んだ上で、戦略を考えていく必要があるのではないかと思います。

私からの紹介はこのあたりにしたいと思います。

このあと、OOTSU企画の大津さんから、1つは店舗を持たないインショップ型の直売所の経営について、もう1つは酒づくり、つまりお米づくりから酒づくり、さらにその販路にまで注目した事例について、少し詳しくお話しいただこうと思います。

それでは、私の問題はこれで終わりにしたいと思います。

このあとは大津さんに託したいと思います。よろしく願いいたします。

#### 【大津氏】

皆さん、こんにちは。

OOTSU企画の大津と申します。

何ぶん、こういう場で話すのが苦手なので、うまくいかどうかわからないのですが、自分は某百貨店に勤めておまして、それを退職したあとに関わったことを、事例として2つほどお話ししたいと思います。

今、大坪先生がおっしゃったように、1つは野菜の販売を百貨店やスーパーの中で行うというスタイルです。

普通、道の駅などは自分の店舗で運営していきますが、今回は百貨店やスーパーの中での直売所の展開について、サザンクロス野菜館の取り組みを紹介します。

それから2つ目の事例ですが、私はこれを「究極のマーケティング」と呼んでいるのですが、田植えをして、稲刈りをして、さらに杵築の中野酒造というところと連携して酒づくりをしています。

米づくりをして、その米を使った酒づくりも皆さんで行い、それを百貨店で販売するわけです。

お酒の生産時には、3,000本の予約販売を行う形式を取っています。

その3,000本の内訳は、百貨店で1,000本、それから全日空商事という空港にあるところで1,000本、さらに中野酒造で500本、そしてお客様がだいたい100人くらい来てくださっていたので、そこで500本という形です。

自分たちでつくるからこそ、マイラベルというような売り方も少

し工夫すると、その500本も売れるんです。

そうすると、もう田植えをしている時点で3,000本が売れているわけです。

つまり、販路を最初から確保したうえで生産が行えるわけで、私はそれを「究極のマーケティング」と呼び始めたのですが、それくらい今は、物を売るのが難しい時代なんです。

大体、作り手の方は「おいしければ売れる」と思っています。

そして、頭の中では「販路はここにもある、あそこにもある」と考えるのですが、実際にやってみると、なかなか売るのは難しいものです。

特にお酒の場合は、ブランド力で売れている傾向がありますので、初めて作ったお酒はなかなか売れません。私どもも名前を「イモリ谷」と付けたのですが、聞いたことのない名前ですので、なかなか売れないのです。

そこで、まず先に売れる仕組みの方を作っていた、というお話を、あとで少しさせていただきたいと思います。

私がおもともとデパートでバイヤーやマネージャーをやっていた頃の経験が、今の酒づくりや野菜の販売に役立っている、という話でもあります。

ちょうど35年ほど前のことですが、日経流通新聞の片隅に、鹿児島県の阿久根高校という農業高校の生徒が豚味噌の缶詰を作っていて、それが大変よく売れている、という記事が載っていました。

私は当時、百貨店に勤めておりましたので、休みを利用して鹿児島まで行きました。そして、阿久根高校の先生にお願いして、作業の様子や売れ方、またどういった場所で販売しているのかを見せてもらいました。

そのときに、高校生が作ったものを流通の場で売ってもいいのだ、ということに、私自身もはっと気付いたんです。

それで大分に戻って、当時、別府でしたので、山香農業高校、それから国東高校、宇佐産業科学高校の3校の校長先生にお願いしました。そして、デパートで農業高校の生徒が作った農産物を売らせてもらえませんか、とお話したところ、ちょうどその頃、学校の方も流通が大事だという考え方で、農業高校にも流通科をつくる流れがありましたので、ぜひやってくれ、ということになり、それで始めるようになりました。

金曜日、土曜日、日曜日に、1日ずつそれぞれの学校の高校生が、自分で学校の法被を着て、自分で売るといった仕組みを作りました。

お客様が、「あんた、兄ちゃん、これ、あんたが作ったんかえ」と聞かれたら、「私が作りました」ときちんと言ってください、ということだけを朝礼のときに話したのですが、もう午前中で完売するんですよ。

本当によく売れました。今では、高校生が学業の一環として生産した加工品を販売することも割とありますが、その当時、35年前ですから、農業高校の校門の前で売るといったスタイルはあっても、街に持って行って自分で売るといったのはなかったんです。

それが非常によく売れたので、私はそれがまず大きなヒントになりました。

農業高校の生徒が作ったものが売れるのであれば、普通の農家の方が百貨店に直接持ってきても売れるはずだ、と、そのとき瞬間的に思ったんです。

それから、事例1の「サザンカクロス野菜館」の取り組みの話になりますが、開設してから25年ほどになろうとしています。現在、販売高は2億3,000万円あります。出荷者はおよそ130人ほどで運

営していますが、先ほど先生がお話しされたように、デパートの食品売り場で販売しています。

また、スーパーの入口の方でも販売しています。

ですから、店舗を構えている場合と、そういう売り場の中で展開する場合とでは違いがあり、1つマイナス面を挙げるとすれば、集計した売上や、どれくらい売れているのかという様子を、生産者、つまり持ってくる人に、なかなか伝えにくいという点です。

そのほかにも、スーパーや百貨店の商品群の中で販売するわけですから、たとえばクレームがあったり、煩わしいこともあります。

たとえば、おばあちゃんが作った商品に虫が入っていた、というようなことで、クレーム対応のために走らなければならないこともあります。

ただ、百貨店などはそういう対応に慣れていきますから、すぐに菓子折りを持ってお詫びに行くとか、お客様がかなり怒っている場合にはお酒を持って行くとか、そういう機転を利かせて、さっと処理してくれるんです。

一方で、直売所の場合は、顔が見える関係だからといって、一次産業の農家の方に、お客様が名前や電話番号を見て直接電話してしまうことがあります。すると、「それはわしのせいじゃねえ」といったような言い方をしてしまうこともあって、そうなるとお客様もさらに怒ってしまいます。

ですから、そういう点は百貨店の方でばっと処理してくれるので、出す商品さえきちんとしていけば、あとは対応してもらえるとこの面があります。そういうこともあって、25年にわたって順調に売上が上がってきました。

最初の頃、農家の方が一番喜んでいただいていたのは、自分で値段を付けられる、ということでした。これが本当にうれしかったようです。

ただ、始める前に、皆さんやはり農協に入っていますので、農協さんにはきちんと筋を通しておかないといけないと思い、部長と一緒にお願いに行きました。

実は、曲がったキュウリや、少し形の悪いナスなど、農協には出せないようなものがあるので、そういうものをデパートの方で出してもらえたら売れると思います、とお話したところ、農協の組合長さんが「どうぞどうぞ、やってください」と言ってくださったんです。

それで、そこからずっと入っていけるようになりました。

最初は、土日だけやろうと思って、土日だけで始めていたのですが、もう午前中で売り切れてしまうんですよ。

本当にニーズがあったんです。農家の方は自分で値段を付けて、自分で出荷しますので、農協や市場を通しません。ですから、たとえば100円のキュウリ、2本100円のものでも、売上のうち「サザンカクロス野菜館」という会社に手数料を30%取られますが、7割、つまり70円は入ってくるので、非常に効率がよかったです。

その30円の内訳も、だいたいデパートが取るマージンが15%、それから日出町でやっているの、日出町の集荷場から百貨店やスーパーに配送しています。販売しているのは5店舗ほどです。

大分のトキハデパート、別府店、それからスーパーマーケット石垣のアテオというところに出荷しています。さらに、サンストアという石垣や亀川にあるスーパーマーケットにも1店舗出しています。

そして、一番売上が大きいのが、日出町、自分たちが出荷している地域のスーパーマーケットです。

日出町では、だいたい130人くらいの出荷者がいるのですが、そのうち8割くらいの方は、近くまで持って行けるので、日出の方に

出荷しています。

たとえば百貨店の場合、午前中で商品がなくなるという状態がずっと続いても、午後から追加で持って行くことはなかなかできません。作業をして、さらにまた車を走らせなければならないので、そこまでは難しいんです。

しかし、日出町のスーパーマーケットだけは、昼頃までに見に行行って、「売れちょんけん、父ちゃん、売れちょんけん、また持って行こうか」といった具合に、売れているならまた持って行こう、という動きになるんです。

そのあたりは、やはり売れるのであれば持って行く、ということになります。

そうすると、売上がほしい倍になるんですね。

大分の百貨店で毎月400万円売れるところが、日出町の地元の売り場になると、毎月800万円売れます。

そうすると、農家の方も、最初はおじいちゃん、おばあちゃんが出していたのですが、やはり売れるとなると、息子さんたちを呼び戻すようになります。

「もう忙しくなったけん、ちょっとあんた帰っちゃいで」と言っていて、家族を一組ずつ戻っていくんです。そうして、私が関わってもらって3年ほど経った頃には、1,000万円売れるようになった家族もありました。

1,000万円売れるようになると、子どもに帰ってきてもらわないといけないうらい、売れている状況が続いたわけです。

そういうことで、私はやはり一次産業の方は、ものは作れるのだけれども、どうやったら売れるか、というところがなかなか難しいのだと思っています。

ですから、年に1回、総会や役員会がありますので、そのときに指導をするんです。どうやったら売れますよ、という話をいろいろします。

実際に出している商品を見ても、やはりきれいでしょ。商品は、やはりきれいに作ると、お客様によく売れます。

たとえば、袋を留めるときに首のところを留めるのですが、その上が長いと見た目がよくないんです。ですから、そこはきちんと切る。ひと手間かかりますけれども、きちんと切るんです。

中に入れるものについても、最初の頃は、たとえばトマトでも大きさが全然違うものを一緒に入れていたんです。

それでも農家の方は「グラムが一緒やけん、いいやろう」と言うのですが、使う側、特に女性のお客様の立場からすると、使い勝手があまりよくないんですね。

ですから、大きいものは大きいもので同じ大きさをそろえる。小さいものは小さいものでそろえて出す。もしどうしてもそれができないのであれば、そういう使い方ができる人向けに、お徳用という形で出す。そういうやり方があるんです。

見ていただくとわかるように、非常にきれいに作っています。

それから、お客様の関心が特に高いのは、こういう値段です。特に野菜の場合はそうです。

ですから、お客様がずっと見たときに、すぐ値段がわかるようにしておかないといけません。お客様は歩きながら、だいたい4秒くらいしか見ないんですよ。

そのため、見たときに値段がぱっとわかるように、いつも整理しておく必要があります。

ただ、その整理をする人がなかなかいないので、なかなかできないんです。

本当はここで話ししようと思っていたのですが、直売所や百貨

店の野菜売り場では、人は雇うのですが、その人たちの仕事は裏でパック詰めをすることなんです。

担当者が3人いるといっても、その3人とも裏でパック詰めをして、それをカゴに入れて売り場に出す、というのが仕事です。

ところが私は、たまたま野菜ソムリエの仲間がいましたので、「販売員をする人はいませんか」とお願いして、販売専任の人を各店舗に毎日付けました。

そうすると、その人たちは勉強もしていますから、野菜の料理の仕方や保存方法はこうした方がいいですよ、といったことを、お客様とコミュニケーションを取りながら話してくれるんです。

これはこういう料理にしたらいいですね、と販売員さんが言ってくれるので、それでお客様のファンがどんどん付いていきました。

物を売るのは人に付く、とよく言われますが、野菜のような商品でも、きちんと説明してくれる人がいると、その人に聞こう、という形になるんですね。

「これ、どうやって料理したらいいかな」と、いつもその販売員さんに聞いているようでした。

そういう意味で、販売員がいるということはかなり効果がありましたし、売上がずっと上がってきた一つの大きな要因だったと思います。

それから、最初にお話ししておいた方がよかったのですが、「サザンカクロス野菜館」という会社は、最初は15人くらいで始めました。

そのとき、私はまだ百貨店の社員だったのですが、鈴木養鶏場という卵屋さんがありまして、その鈴木養鶏場の社長がサザンカクロスを立ち上げてくれて、社長をしていました。

その方は非常に哲学を持った方でして、その考え方を少しご紹介すると、企業理念としては、「農家所得を向上させよう」というのが鈴木社長のテーマでした。これは、ぜひずっと続けていきたいテーマでもあります。

それから、行動指針として、どういうふうに皆で行動していこうかということが3つありました。

1つは、「フリー、フェア、オープン」という考え方です。誰が何を出してもよい。そして、たとえばキュウリの出荷者が3人か4人いても、それは競争してください、ということです。そういう形で、自由にしてもらいました。

誰が何を出してもよい、ということで、農家の方を説得して入ってもらっています。

それから、「一人の百歩より百人の一步」という行動指針も掲げています。

1人のスターが出なくてもよいから、みんなで一歩ずつやっていこう、という考え方です。これも、皆さんに対する行動指針として挙げています。

もう1つは、「お客様のニーズをすぐフィールドへ」ということです。

これは、販売員さんが売り場にいるので、お客様の声をたくさん聞きます。その声を、ちょうど都合のよいことにスマホが出てきた時代でしたので、販売員さんにスマホを渡しておく、お客様から言われたことをすぐ農家に返すんです。

その反応が非常に早いです。これが30年前、40年前であれば、なかなかできなかったことですが、スマホをうまく活用して、写真を撮って「こういうものはないかとお客様が言っていますよ」といった話をすぐに伝えると、農家の方も本当に真面目にやってくれるので、すぐ返事が返ってきます。

また、これを何キロ欲しい、といった別注があった場合も、すぐに対応できます。

そういうことが積み重なると、信頼につながっていきます。販売員にいろいろ相談するようになるので、売上もどんどん上がっていく、ということです。

スライドを変えましょうか。

あと、そうですね。時間はどうですか。

【司会】

そのまま続けてもらって大丈夫です。

【大津氏】

いいですか。

あと1つだけ、「サザンカクロス野菜館」でやっとうまくいったことを最後にお話ししますが、「パリッとサザンカ便」というものを作りました。

これは定期便にしております、毎月1回、月末の30日または31日に荷物を作り、月初の1日に届くようにする野菜の産直便を作りました。

だいたい2,000円くらいの商品を入れて、送料はおお客様にご負担いただく形にし、請求書を同封して送る仕組みにしています。これを毎月50人くらいの方にずっと続けており、今でも10年ほど継続しています。

続いているということは、お客様が満足してくださっているということだと思いますし、やはり季節の商品も入れていきます。ミカンを入れたり、桃が入っていたり、栗が入っていたりするので、都会の方にはとても喜ばれています。

ちょうど始めてから10年になりますが、今でも続いています。

それでは、サザンカの取り組みについては、このあたりで終わりにしたいと思います。何か質問があれば、あとでお願いいたします。

2つ目の事例ですが、先ほどお話ししたように、宇佐市の安心院というところに松本という集落があります。そこの集落で米を作り、稲刈りをして、そのあと杵築の中野酒造にその米を持って行き、お酒に変えていくという仕組みを作り上げました。

これがその概要です。

これは、1年目の初めに会議をしているところです。農工商連携になります。こちらの写真が農家の方です。上の方が販売に関わる人たちです。中野酒造はこの写真の中には映っていませんが、農家と加工するところ、それから販売するところが一緒になって、その年の会議を行い、どういうふうに進めていくかを決めます。

はい、動かしてください。

そうです、ここに出ています。

今年のイモリ谷の酒づくり、今年の実行委員会をやりましょうということで、毎年4月15日に実施しています。

最終的にはこれが20年続くのですが、お客様の方にもお酒のファンができていますので、毎年とてもよく受け入れていただいています。

次をお願いします。

これが田植えの風景です。

お昼には、こういう農家の方が用意してくださる食事が出るのですが、20年近く、ずっと続けていく中で、もちろん田植えもするのですが、このお昼がとても魅力的で、皆さん毎年それを楽しみに参加してくださるようになり、だんだん人数も増えていきました。

はい。

これは稲刈りの様子です。

10月に行う稲刈りも、また募集して実施します。

そのお米は佐賀県の方で精米しており、精米した米を杵築の中野酒造に持ち込みます。

これは、12月末に行っていた仕込みができて上がったときのパーティーをしているところです。

中野酒造のメンバーと、トキハデパートのメンバー、それからイモリ谷の皆さんが集まって、最後にパーティーを行う、という流れになります。

このあと、売り場に出るようになります。

売り場では、先ほど申し上げたように、デパートで1,000本、それから全日空商事で1,000本、中野酒造で500本、お客様分が500本ということで、合計3,000本はだいたい販売先が決まっております、パーティーも行っています。

はい。

これが最後のイベントですが、トキハデパートで売っている風景です。この中で、マイラベルという、自分だけのラベルを作りにしています。田植えのときや稲刈りのときに写真を撮り、それをラベルにするのです。

これが定番の商品です。

実際の売り場では、このように販売員さんが並んで販売していますが、販売員さんも田植えに参加していますので、本当に一生懸命売ってくれます。

はい。

これは簡単な図ですが、お酒1本につき50円を農家の方に返す、という仕組みにしました。

つまり、お客様にそうした取り組みへの支援金も含めてご負担いただく形で、1本につき50円を農家に返しています。

3,000本ですから、だいたい15万円くらいを農家の方への支援金として返す仕組みを作っています。

はい。

これは農工商連携の図ですが、消費者も巻き込んで取り組んだ、という点がうまくいった要因だと思っています。

ですから、私はこれを「農」「商」「工」「消」の連携と呼んでいます。参加者がお金を出して買ってくださいのわけですから、取り組みの内容も一緒に理解してもらえ、という形で進めています。

はい、これで最後になりますが、この「イモリ谷物語」をやったおかげで、松本地区ではいろいろな広がりがありました、ということで、さまざまな提案を行っています。

それからデパート側も、イモリ谷というお酒を売ることで、いろいろなギフト商品を作ったりしていますので、デパート側にとってもメリットがあります。

また、中野酒造の方でもいろいろなつながりができました。「ちえびじん」というブランドがその主力ブランドですが、このイモリ谷というお酒も1つのアイテムとして加わっていくことで、最後の方にはこうしたギフト向けの商品としても販売できるようになり、数字も上がっています。

時間的には、だいたいよろしいですかね。

以上です。

【司会】

はい、ではこのあと、動画の方を……。

【大坪氏】

それでは、先ほど大津さんの方からご紹介いただきました、中野酒造と、地区としては宇佐市安心院町の松本地区、そこで実際に一般の方に農作業をしていただき、それを最終的に日本酒にして百貨店で販売する、という仕組みですね。

そちらについては、テレビで実際に紹介されたことがありますので、その動画を見ながら、ところどころ解説をいただきながら見ていきたいと思っています。

動画の方、お願いします。

はい、いったん少し止めさせていただきます。

実際にこのイベントを実施するにあたっては、今ご覧いただいたような会議体、つまり実際に生産し、農機を持っている生産者さん側に加えて、お酒をつくる酒蔵さん、それに伴って実際に販売する側、百貨店さんだけでなく、先ほど映っていた全日空商事さんなど、いろいろな方が加わっていたかと思っています。

このあたりについて、どういった方が携わり、どのようにして実施に至ったのか、最初の始まりの部分を少しご説明いただければと思います。

【大津氏】

先ほど「豆の力屋」というのが出てきたのですが、あそこの力屋に私も顧問として参加していましたし、中野酒造という会社にも顧問として関わっていました。

それから、デパートについては自分の出身でもありますので、バイヤー以下、みんな協力的になってくれました。

そうして、この3者が集まって、先ほどのような会議をするようになり、最初の段階から出口の部分まで、皆で共有する形になりました。

そうすると、角山商店という、お酒を販売店に卸すところがあるのですが、そこに、先ほど申し上げたパンフレットを皆さんに置いていただくんです。すると、角打ちで飲みに来たお客さんなどに説明してくれるんですね。

それを聞いたお客さんが参加してくれるようになって、だんだんと人数が増えていきました。

【大坪氏】

ありがとうございます。

実際に中野酒造さんとのつながりについて、以前、私がお聞きした中では、サザンカクロス、先ほど直売所のお話をされていましたが、あそこの関わりが最初かなり大きかったと伺っています。そのあたりはいかがでしょう。

【大津氏】

そうですね。中野酒造さんも、その頃はまだ売上がそれほど大きくなかったんで、酒粕が出るんです。その酒粕を売る場所がなかったものから、サザンカクロス青果のところに会員として入ってもらい、そこで売るようにしていました。

ですから、そのつながりが大きかったと思います。

【大坪氏】

ありがとうございます。

では、続きの方をまた見ていきたいと思っています。

はい、いったん止めさせていただきます。

実際にこのイベントは、開始されてから10年ほど続いていた

と思いますが、参加者の推移なども含めて、どのような形で広がっていったのか、少し教えていただけますか。

【大津氏】

そうですね。最初は、実は10人くらいで始めました。

先ほど出ていた全日空商事のオダさん、それから私が2、3人連れてきて、さらに中野酒造の杜氏さんが同じ蔵人を何人か連れてきたので、最初はだいたい10人くらいで始まったんです。

ただ、次の年には、その評判を聞いて50人くらいになりました。ですから、3年もすると100人は超えていました。

その後も商品は非常に順調に売れていきましたし、こうしてテレビや新聞など、マスコミも巻き込みながら進めていったので、そちらもいろいろ応援してくださって、イモリ谷を買いに来るお客さんがずっと増えていった、という状況です。

【大坪氏】

途中で、実際に参加人数が減ったりすることはなかったのでしょうか。

【大津氏】

そうですね。減ることはなかったです。

最大で150人でしたけれども。

【大坪氏】

受け入れの上限を150人として進めていった、ということですね。

はい。

それでは、このあたりは少し飛ばして、先に進みたいと思います。

今、子どもたちがかなり参加している様子が映っていたと思いますが、この動画が撮られたのは、おそらくイモリ谷物語を始めた頃だと思います。

そうすると、参加していた子どもたちも、今では大きくなって、実際にお酒を飲める年齢くらいになっているのではないかと思います。そうした方々が戻ってきて参加されるようなことはありましたか。

【大津氏】

そうですね。大分大学の学生さんや、別府大学の学生さんも来てくれていたのですが、その方たちも時々来てくれます。

それから、小学生だった子どもたちは、当時は遊ぶのに夢中でしたから、ちょうど20年ぐら経って、20歳くらいになった頃に、ぼつんぼつんとまた参加してくれるようなことがあります。

【大坪氏】

実際にそうやって若い方が定着したり、農山村に興味を持っていただけたりすることは、都市農村交流という点で非常に重要なことだと思います。

それでは、少し先に進めたいと思います。

すみません、少し待ってください。

ここからは、実際に参加された方が一緒に仕込みを行う様子です。

このような形で仕込みが行われているわけですが、ここで少し確認しておきたいのは、このイベントに参加される方は、田植え、稲刈り、仕込み体験、そして最後の試飲会と、だいたい合計4回参加されている、という形でしょうか。

## 第3分科会

### 【大津氏】

そうですね。実は、最後に農家の方にも販売の難しさを知っていただきたいと思ひまして、デパートで試飲をしていただきながら、販売にも参加してもらっていたんです。

最初は5回だったのですが、途中から忙しくなって、そこまで参加できなくなりました。それでも、だいたい田植え、稲刈り、仕込み、それからパーティー、最後は販売までしてもらう形でお願ひしていました。

ただ、実際には4回くらいの参加になっています。

### 【大坪氏】

ありがとうございます。

それでは、酒づくりのところは最後少し飛ばして、販売のところを見ていこうかと思ひます。

これが、でき上がったあとの試飲会の様子です。

はい、ということで、実際に田植えから稲刈り、そして酒づくりを通じて、都市農村交流を行っていった実例をご紹介いただきました。

大津さん、ありがとうございました。

では、いったん戻りたいと思ひます。

最後に、現在別府大学大学院に通われている多川優也さんからお話をいただきます。別府大学では長年、都市農村交流を行う授業やサークル活動がございませう。

それを踏まえて、先ほどの酒づくりについても、彼は実際に参加されています。そういった経験も踏まえながら、大学生から見た都市農村交流について、お話しさせていただきたいと思ひます。

では、お願いいたします。

### 【多川氏】

皆さん、こんにちは。

これが最後の発表になりますので、もう少しお付き合いいただければと思ひます。

別府大学の多川優也です。よろしくお願ひします。

私は、別府大学で「夢米棚田プロジェクト」という活動を行っております。

書いてあることをそのまま読むだけでは面白くないので、主な活動についてお話ししますと、大分県農業文化公園、現在のるパークで棚田に関する活動をしています。

この活動は、棚田サークルという学生のサークル活動としてスタートし、その後、世界農業遺産関連授業の一つとして実施されるようになりました。

この活動では、活動用のユニフォームがあります。今回はスーツでと言われたのですが、皆さんに見ていただきたくて、あえて着てきました。このような半袖の服で活動しています。

また、今回は持って来られなかったのですが、これ以外にも法被を活動時に使用しています。おそらくスライドの中でそのうち法被の写真も出てくると思ひますので、探してみただければと思ひます。

ということで、ここからはこのユニフォームのままで発表させていただきます。

2010年1月に、活動グループである夢米棚田チームとして、農業文化公園で活動を行うようになりました。

そして2015年4月には、大学の授業の一つとして、通年で行う授業になりました。

その当時は2単位だったのですが、その後、座学と実習を合わせた合計4単位の科目に変わりました。

また、皆さんご存じの方も多いと思ひますが、国東半島宇佐地域は、2013年5月に世界農業遺産として認定されました。

スライドには「世界農業遺産とは」と書いてありますが、これは、伝統農業や農法、生物多様性、農村文化景観などを維持・保全している世界的に重要な地域を、次世代に引き継ぐためのプロジェクトです。大分県では、国東半島と宇佐地域がその一つとして認定されています。

このように、世界農業遺産に認定されたことも踏まえて、私たちの活動の目的を長期的に設定することになりました。

1つ目は、活動を通して食農業、食農教育を実践することです。

2つ目は、地域の農業や農村の活性化につながる活動を図ることです。

3つ目は、先ほど申し上げた世界農業遺産認定地域について学び、学生の視点から独自に見出すことです。

そして4つ目は、主体性や社会性、人間関係の構築の仕方を学び、大学生活や社会に出る際の力を身に付けることです。

この4つを長期的な活動目標として設定し、私たちは活動を行っています。

昨年度の活動目標としては、このようなことが挙げられています。

この授業は、どの学科の学生でも履修できるということもあり、皆で一つの方向性を持つために共通の目標を設定しています。

また、それぞれの学部学科に応じた目標も設定しており、実際の活動を通して、自分の学部や学科での学びとどのように関連付けて挑戦できるか、ということを考えてもらえるようにしています。

私は学部時代、発酵食品学科に所属していたのですが、発酵食品学科の先輩たちが作ったものとして、「夢香米」の本格焼酎があります。

これは今はもう販売されていませんが、一時期は販売されていた。

現在の私たちの活動では、夢米棚田で育てたお米の販売なども、学生やイベントを通じて行っています。

私が在籍していた学部時代には、主に田植えや、七島イという、イグサのような大分県名産の豊表の原材料の栽培体験を行っていました。

また、クロダマルという黒豆の収穫体験や、日本酒、先ほど紹介のあったイモリ谷の日本酒用の米の刈り取り体験にも参加しました。

さらに、滋賀県や長野県の棚田サミットにも参加させていただきました。

この滋賀県の写真で入れているのは、エクスカッションで作った鍋敷きの写真です。

もしかすると、この会場の中にもその活動で一緒の方がいらっしゃるかもしれません。

ちなみに、行かれた方はいらっしゃいますか。

あ、はい、ありがとうございます。

そのほかにも、大分県農業水産祭、いわゆる農林祭ですが、別府公園で毎年10月中頃に大分県主催の収穫感謝祭のイベントが行われており、そこで別府大学もブースを出していました。

また、国東のまち歩きも行っています。

写真について、少し見ていただくと、これが活動時に着ている法被です。

これが国東のまち歩きの様子です。

そしてこれが七島イです。国東の名産で、畳表の材料になります。イグサのようなものですが、畳や高級な畳に使われており、今回は資料に入れていませんが、断面が三角形のような形になっていて、非常に耐久性が強いという特徴を持っています。

国東高校には農業科がありますので、そこの学生と一緒に植え付け体験を行ったりもしました。

これは国東での浜干しの写真です。収穫した七島イを浜で半日ほど乾かす作業を行ったあと、その七島イを使ったミサンガ作りの体験も行いました。

次をお願いします。

これは大分県農業文化公園、るるパークで田植えをしているところです。

これも、るるパークでの脱穀の写真です。

また、クロダマルの収穫体験ということで、地域の方々や、私たちの同級生、後輩たちも一緒に大学の外に出て、積極的に農業を通じた交流を行いました。

さらに、イモリ谷での活動として、仏像を見たり、何の仏像でしたかね……。

あ、仁王像を見たりしました。

また、田植えのあとに皆でお弁当を食べたり、これは稲刈りのときの写真ですが、丸く写っているのがうちの大学の英語の先生です。そうした先生方や先輩、同級生と一緒に稲刈り体験を行いました。

収穫したお米については、中野酒造さんで日本酒の仕込み体験もさせていただきました。

ここに「イモリ谷2のB」と書いているのですが、収穫したお米を中野酒造さんで日本酒にするための体験として、これは蒸米を、先ほど映像にもあった蒸米をほぐしている写真ですね。

あ、冷やしている写真です。

そして、これがお酒を混ぜている写真になります。

このように、農業だけではなく、そこに関わる製品づくりの一部についても、授業や活動の一環として体験させていただいております。

また、先ほどから何度か出てきている七島イについてですが、国東の七島イをもっと広めていくために、七島イ作家の岩切さんという方が大分県にいらっしゃるのですが、その岩切さんをお招きして、授業の一環として講演を行っていただいています。

そして、七島イや国東半島に関する基礎知識を身に付けたあと、このような形でミサンガ作りを行います。

このミサンガ作りは、その後の活動として、大分県農林水産祭における「国東七島イミサンガ作り」という企画につながっています。これを毎年、参加費無料で100名程度の方に体験していただいています。

また、テントの中には七島イの紹介や私たちの活動内容、さらに国東半島がどういう地域なのかといったことが分かるパンフレットやポスターも置かせてもらっています。

このような形で、七島イを使ったミサンガ作りを、1日100名、2日間で合計200名分行い、体験していただいています。

こうして三つ編みにして、腕に一周巻けるくらいの長さにしていきます。

小さい子どもやご家族連れの方にも来ていただいております、毎年配布券がなくなるほど、皆さんに楽しんでいただいているのではないかと思います。

これは昨年写真ですが、午前中に登壇された長野別府市長にも

視察に来ていただきました。

また、国東半島宇佐地域という世界農業遺産について、皆さんがどれだけ知っているのか、また、国東半島宇佐地域が世界農業遺産に認定されていることを来場者の方がどれだけ認識しているのかについて、アンケートも実施し、調査の一つとして行っています。

最後に、私自身がこの棚田プロジェクトに関わって学んだこと、感じたこととして、3点お話しします。

1つ目は、学生が取り組んだ棚田での活動は、単なる農業体験にとどまるものではなく、交流を通して地域の文化や自然と向き合う時間を得ることができた、ということです。

2つ目は、棚田が未来へと続いていくためには、学生や高校生、大学生といった若い世代が関わり続けることが不可欠だと感じたことです。

これは、後継者不足という問題もあると思いますが、それだけではなく、若い世代だからこそ、新しい視点から、先ほどのミサンガ作りのように、その地域の魅力や面白さ、また課題を発信することができるのではないかと感じています。

そして最後に、私たちのような活動が今後全国に広がっていけば、棚田は単なる景観ではなく、その地域の誇りとなり、また棚田を介した共通のコミュニティとして、次世代に継承されていくのではないかと、私は信じています。

ご清聴ありがとうございました。

#### 【大坪氏】

多川さん、ありがとうございました。

それでは皆さん、長時間にわたりお聞きいただき、ありがとうございました。

ここから残り20分ほどになりますが、質疑応答に入らせていただきたいと思います。

何かご意見のある方、いらっしゃいますか。

#### 【参加者】

ありがとうございます。滋賀県から来ました。

大津さんに少し質問なのですが、日本酒について、私も今年、自分で作ったお米で日本酒を作ろうと思っていて、来年以降はそういう形で人を巻き込んでやっていきたいと考えています。

そこで、今取り組まれている日本酒プロジェクトについて、参加者の参加費がどうなっているのか、また、どのような形でお酒がもらえるのか、もらえないのか、どのような参加者の方が関わっているのか、金銭的なことも含めて教えていただきたいです。

また、150名が一度に集まるとのことでしたが、キャパシティというか、受け入れ体制がどのようになっているのかも教えてください。

#### 【大津氏】

まず、私どもの組織では、150人くらいの集客が限度だと考えておりました。

米作りを行うイモリ谷には、「イモリダニクラブ」という組織がありまして、若い方や女性部の加工グループがあります。その2つのチームが一緒になってお客様をお迎えます。

150人までが目いっぱいだったのは、お昼の食事を出す関係で、グループのメンバー20人ほどで対応できる人数が、おおよそ150人くらいだったということです。

それから参加費については、大人1,000円、子ども500円をいた

## 第3分科会

だいていました。

最後の方には、少し安すぎたかなとも思いましたが、20年間、一応その金額で最後までやっていました。

【参加者】

ということは、1年間のお酒づくり、つまり米作りから初しぼりまでを、1年間1,000円で行っていたということでしょうか。

【大津氏】

いいえ、毎回1,000円いただいていた。

農業や酒づくりの体験に食事を含めて、1回1,000円で提供する形です。

【参加者】

毎回1,000円ずつ支払って、先ほどもお話があったように、お酒を買うのは欲しい方だけ、ということですか。

【大津氏】

はい、そうですね。

購入については、体験の際に予約を取ります。

でき上がったときに何本必要か、という形で予約をいただいています。

【参加者】

でき上がって、試飲してから決めるわけではないのですか。

【大津氏】

予約の時点では、まだお酒自体ができ上がっていないので、その段階では試飲はできません。

【参加者】

予約は、どのように取っているのですか。

【大津氏】

最初の田植えのときや稲刈りのとき、それから酒づくりのときと、毎回新しい方が体験に来られますので、申込用紙の中に「予約を希望する方は何本必要か」を記入する欄を設けて、そこで記入してもらっています。

その本数を取りまとめて、中野酒造でお酒ができ上がったら、酒販店、いわゆるお酒の間屋さんですね、そこに1,000本が行きます。

そして、予約をされた方には、お店の方へ取りに来てもらうようお願いする形になります。

支払いについては、デパートのお酒売り場で行います。たとえば「私は10本注文しました」というように、名前が分かっていますので、中野酒造の方で「何々さんが何本、何々さんが3本」という形で売り場の方へお渡ししています。

【参加者】

ということは、販売はお酒屋さんが行うのですか。

【大津氏】

はい、そうですね。

販売は百貨店と、体験イベントに参加している酒販店で行っています。

参加していないと、このお酒のよさを十分に説明できないじゃないですか。どういうふうにしたのかという話もできませんので、参加した人しか販売できないようにしています。

ですから、たとえば何々酒店で買う方は、そこへ行っていただくことになります。

そのため、「どこへ取りに行きますか」ということもあわせて確認しています。

たとえば、10本をデパートで受け取る、というような形ですね。

【参加者】

簡単に、どういう流れなのか教えてください。

【大津氏】

そうですね。

たとえば中野酒造がトキハデパートに1,000本持って行くとしめます。

その中で、一般のお客様には、トキハが通常どおり販売しますので、そのまま買っていただけます。

一方で、たとえばその1,000本のうち800本分について予約が入っていたとします。

そうすると、その800本は予約された方に販売し、残りの200本は一般の方にも販売可能にする、という形です。

1本あたり、四合瓶で1,600円くらいです。

それをデパートにお支払いいただくので、購入方法としては通常の買い物と同じです。

【参加者】

実は私も農家なのですが、今回お酒を作るにあたって酒蔵さんと話している中で、お米を仕込んで作ってもらい、その委託料、作業料として40万から50万円を支払って、でき上がったらそれを全部持って帰ってください、というようなやり方だったんです。

そうすると、自分自身で売らなければならなかったんですね。

【大津氏】

そうですね。

【参加者】

それで、一般酒類小売業免許や通信販売酒類小売業免許なども申請しながら、販売許可を取ったんです。

【大津氏】

はい。

【参加者】

本来であれば、販売する人も含めたプロジェクトチームを作るというのが、すごく有効なことなのだなと感じました。

【大津氏】

そうですね。

やはり、それぞれが自分たちの得意な部分を担った方が、お互いにとってよいんですね。

中野酒造は作る方、売の方はデパートが担う、というように役割分担していく形です。

【参加者】

一般の参加者が関わるのが、そうした販路拡大につながっているのか、それともイベント性や話題性をつくるのが狙いだったのか、そのあたりはどのようなのでしょうか。

【大津氏】

やはり、話題性ですね。

はい。

マスコミも取材してくれますし、そうやって広がっていきます。本来、最終的には中野酒造のブランドである「ちえびじん」が売れていけばよいわけです。

ですから、この商品自体の本数をどんどん増やすということはしていません。

【参加者】

一緒にやってくれる酒蔵さんを見つけることが大事なのですね。

【大津氏】

そうです、そうです。そのとおりですね。

【参加者】

農家には、1本につき50円のお金が入ってくるのですか。

【大津氏】

はい、そうですね。

お米代と、それとは別に入ります。

【参加者】

お米代以外にも、ということですか。

【大津氏】

はい。お米代とは別に、1本あたり50円です。

【大坪氏】

整理すると、お米の買い取り費用は中野酒造が支払って、さらに売上の中から1本当たり50円を農家さんに寄付する、支援金のような形になっています。

【参加者】

3,000本ということは、15万円ですね。

【大津氏】

そうですね。

お米代に加えて、15万円という形になっています。

【参加者】

なるほど。

つまり、それは最終的にお客さんが払っているわけですね。

【大津氏】

はい。1本1,600円です。

【参加者】

ありがとうございました。

【大坪氏】

では、次の方をお願いします。

【参加者】

本日は貴重なお話をありがとうございました。

愛知県の四谷の千枚田から来ております、ヤマグチと申します。販売や流通、生産が一緒になって取り組むというのは、ものすごく重要なのだなと思いながら聞いておりました。

実は私も、そこまで大きな組織は作っていないのですが、酒蔵さんにお米を入れて、寄付金をいただいて、お酒をお配りするという形で取り組んでいます。

目的としては、やはり榎田が高齢化や過疎化によってどんどんなくなっていく中で、人が入ってくるようなイベント性を持たせて進めていきたい、という思いがあります。

その上で質問なのですが、というより、今日はお酒を持ってきましたので、もし興味のある方がいらっしゃれば、交流会で私を見つけて試飲していただければと思っています。

質問としては、この150人という多くの方が来られて、地域の農家さん、田んぼをやっている方々が、20年続けてこられた中で、普通であれば過疎化や休耕が進んでしまうような状況も起きると思うのですが、この活動によって農家さんや農業がどのように変化していったのか、その点をお聞きしたいと思います。

【大津氏】

そうですね。

イモリ谷には、先ほど申し上げた「イモリダニクラブ」という組織がありまして、少し若手の方々、若手といっても60代ですが、そうした方々が中心になっています。

その活動の中で、お酒づくりだけではなく、ホテル祭りなど、さまざまなこともやっていますので、いろいろな人が入ってきます。

その中で、移住してきた方も数人いらっしゃいます。

1つは、「ばおばお」というパン屋さんで、岐阜県から移住して来られました。

もう1人は東京から来られた方で、そこで納豆づくりをしています。

そうすると、参加者の方々が来ることで、そうした商品の売上も上がっていきます。

さらに、百貨店側からも、「その納豆が売れるのであれば、うちでも扱わせてください」という話があるようになります。

今ではデパートでもそれを販売していますし、よく売れています。生活が成り立つくらいには売っています。

【参加者】

移住された方もいて、そこで商売も成り立っているのですね。

【大津氏】

そうですね。

【参加者】

そこにまた人が来て、という循環が生まれているわけですね。

【大津氏】

はい、そうですね。

【参加者】

田んぼの面積などは、変わっているのでしょうか。

【大津氏】

田んぼの面積は変わっていないですね。

はい、変わっていません。

【参加者】

面積自体は変わっていないのですね。ありがとうございます。

【大坪氏】

実際に変わっていないということ自体が、こうした棚田地域においては、維持できているという意味で非常にすごいことだと思いますので、今お話しいただいた点を少し私の方でまとめさせていただきたいと思います。

実際に農地が維持されているということ、そしてこれは研究として私も関わった中で話題になったことですが、今でいう「農村RMO」のような、地域の一組織として、初期の段階から多くの地域のベンチマークになっていて、視察にも来られていたという点があります。

つまり、1990年代からこのような取り組みがなされている、という点が非常に大きいのだと思います。

さらに、先ほどの支援金制度によって、15万円ほどの支援があるということで、農業の継続にも少なからず役立っていたのではないかと思います。

それに加えて、間接的な効果として、観光客の増加や若い人たちの雇用の創出、メーカーとの連携、百貨店への販売など、さまざまな効果があった、ということになるかと思います。

では、ほかに質問のある方はいらっしゃいますか。

それでは、そちらの方、お願いいたします。

【参加者】

浜松市から来ました。よろしくお願ひします。

大学院生の多川さんにお伺いしたいのですが、非常に若い方のグループを組織されていると伺いました。

実は、私たちの浜松市でも、同じように若い人たちの力を結集することが言われておまして、たとえば農業系大学の学生さんたちがイベントに参加したり、あるいは別府大学と同じように県立大学が棚田で耕作に取り組んでくださったり、お米の販売をしたりと、地域住民としては非常に心強く感じています。

そのうえで伺いしたいのは、棚田の耕作者といえばイベント、という形で、こうしたサミットのような大きな大会が30回も開催されていますが、若い学生さんたちの間で、ほかの大学の同じような志を持った方々と連携する機会は、これまであったのでしょうか、ということです。

【多川氏】

ご質問ありがとうございます。

そうですね。私たちの活動としては、まず別府大学は、他大学と継続的に連携しているわけではないですね……。

【大坪氏】

以前、大分大学さんと一緒にやったことはありました。

それこそ、大津さんが先ほど説明されたイベントとは別に、田植

えから酒づくりまで行った別の地域のイベントに、同じような形で参加していたことはあります。

【多川氏】

ということですね。

ただ、先ほどスライドにもあったとおり、私たちはどちらかというと、農業高校の学生さんと一緒に何かをさせていただくことが多いです。

ですので、大学と大学との交流というよりは、大学と地域、そして高校生を交えた活動を、今は大事にして取り組んでおります。

ありがとうございます。

【参加者】

お二人とも、ありがとうございます。

これは今後への要望でもあるのですが、夢として、大学版の棚田サミットのようなものができたらいいなと思っています。もちろん、ハードルは高いと思いますけれども。

ぜひそこを目指しながら、まずは今お話しくださったような高校生との連携などを進めていただければと思います。そうすれば、もしかしたら高校生の方々が、別府大学に入りたいという志望動機にもつながるかもしれませんし、6年がかりの取り組みになるかもしれません。

また、できれば同じ地域の学生さんたちとも、そういったイベントを開いていただけたら、夢が広がるのではないかと思います。

これからも、ぜひ頑張ってください。

【多川氏】

ありがとうございます。

【大坪氏】

ほかに何かございますでしょうか。

【参加者】

大坪先生にお伺いしたいのですが、今日も午前中から後継者不足という話がずっと出ていました。何十年も言われてきたことですね。

後継者が増えないから外部の人と関わらしましょう、という方向性なのだと思うのですが、そもそもなぜ後継者が増えないのかをお聞きしたいです。

私自身も移住して脱サラして就農したのですが、多川さんのような若者目線で見るときに、就農したくなる農業のあり方や条件について、学生と先生それぞれの目線から教えていただきたいと思います。

【多川氏】

では、私から先にお話しさせていただきます。

私自身、出身が農業高校ということもあり、高校に入ったときには農業に興味がありました。

ただ、実際に農業高校での授業や活動を通して感じたこととして、農家というのは、個人でやるとなると、経理から災害時の対応まで、かなり多くの負担や業務を個人で抱えなければならない、ということがありました。

そういった現実を知ったことで、私自身、農業を本当に仕事にしていくとなると、かなり厳しいのではないかと感じました。

しかも、棚田は景色や景観は本当に素晴らしいですし、そこにいらっしゃる方々も温かくて面白い方が多いのですが、台風などの被害によって、夏場に何かが起きれば秋にはもう米が取れない、作物ができない、翌年以降も畑が元に戻らない、というようなリスクもあります。

そういった点から、やはり農業を仕事にしていくのはかなり厳しいのではないかと、ということを実感しました。

【参加者】

率直に、非常によいご意見をありがとうございます。

【大坪氏】

私からもお話ししますと、先ほどの多川さんの意見は、私にとっても非常に参考になるものでした。

私は今、大阪の天王寺、あべのハルカスがあるような都会の大学におりますが、その前は別府大学に勤めていました。その違いを感じることがあります。

別府大学にいたときは、むしろ地方の大学だからこそ、こういう農業に学生はすごく興味があるのではないかと、思って着任しました。

ところが、実際に見てみると、思ったほど地方の学生の方が興味を示さなかったんです。

理由を聞いてみると、小学校や中学校の頃からそういう体験をずっとしてきたので、わざわざ大学に入ってまでやりたくない、という声がありました。

あるいは、そうした活動に参加している学生であっても、農業をプロの仕事として考えると、先ほどの話にもあったように非常にきつくて、将来的にもう少し年齢を重ねてからなら考えられるかもしれないが、現時点ですぐに、たとえば3年後に結婚して、というような将来像を描けない、ということもありました。

一方で、都会の学生は、よく知らないからこそ、農業体験をするにとっても楽しそうに参加したり、あまり深く考えずに、実際にやってみたいと思う学生もいたりします。

その違いは、少し感じています。

また、中山間地域や棚田では、どうしても経営面積を大きく増やすことが難しいという事情もあります。

そうした中で、独自のブランディングや加工など、いろいろな方法を取りながら、それでもきちんと生活できる、儲けられる、ということを示していくことが、まず1つ重要な視点だと思います。

その意味で、今回この場に大津さんをお招きしてお話いただいたのも、販路、つまり出口戦略の部分が非常に重要だからです。

実際に百貨店で勤務され、こうした都市農村交流のイベントを開きながら農家さんに貢献されている大津さんにお話いただくことになったのも、そうした理由があります。

そういった点から、若い人たちが農業に興味を持っていないかという、決してそうではないと思います。

ただ、現状として、大学で学びながら、さらに奨学金も返していかなければならない、という中で、なかなか生活のビジョンが持てていない、というのが課題だと思います。

私たち教える側としても、そういった現実を踏まえながら、たとえば10年に1人でも就農する学生を送り出せたら、それは本当に素晴らしいことだと思っていますし、そういう学生を育てていきたいという思いを強く持っています。

【参加者】

海外ではどうなのでしょう。

皆、リスクを分かった上で覚悟して就農しているのでしょうか。海外の若い農業者というのは、どういう状況なのですか。

【大坪氏】

そこまで詳しくは分かりませんが、海外といっても土地や地域によってかなり違うのではないかと思います。

たとえばアメリカであれば、家族経営で大規模農地を持っているケースもありますので、実際に就農することへの不安が日本とは同じではないかもしれません。

【参加者】

日本では、田舎の農家は「こんな苦しいことはせんでいいから、外に働きに行きなさい」という話で、みんな外に出てきたわけですよ。

でも、継いでいくということは、やはりしっかりした仕事なんだと分かって、子どもたちが継いでいく、そういう流れがあってもいいのではないかなと思うんです。

なぜ日本ではこんなに農家が減っていくのか、今日話を聞いていて疑問に思いました。こんなに素晴らしい方々がいるのに、と思いついて。

【大坪氏】

今後とも、私どもも考えていかなければならない課題だと思っておりますが、ぜひ皆様のお力添えもいただければと思います。

それでは、そろそろ時間になりましたので、こちらでいったん司会の方へお返ししてもよろしいでしょうか。

【司会】

大坪先生、ありがとうございました。

今一度、大坪先生、大津様、多川さんに拍手をお願いいたします。

これにて、第3分科会「農村と都市をつなぐおいしい交流 棚田の風景を味に変える」を終了いたします。

本当にありがとうございました。

第30回 全国棚田・千枚田サミット in別府  
2025年11月1日（土）  
第3分科会（14:30～16:30）

## 農村と都市をつなぐ“おいしい交流” 一棚田の風景を味に変える一

大坪 史人（桃山学院大学）

## OUTLINE

1. 農村と都市の交流
2. わが国における農産物直売所の動向
3. 事例：太田川産直市
4. 中山間地域のフードシステム
5. その後の議論に向けて

## OUTLINE

1. 農村と都市の交流
2. わが国における農産物直売所の動向
3. 事例：太田川産直市
4. 中山間地域のフードシステム
5. その後の議論に向けて

## 1. 農村と都市の交流

### ・農業的世界（農村）の位置づけ

世界の都市人口が農村人口を初めて上回ったのは2007年である  
現在も世界全体としてみれば、約半分の人々が都市的世界ではなく農業的世界で暮らしている

▶農業的世界で暮らしている人口は、国民所得水準の低い開発途上国においてとりわけ多い

【農村】

この用語は、様々な法律で使用されているが、特に定義はされずに用いられている。

ただ、概念としては「農業的な土地利用が相当の部分を占め、かつ農業生産と生活が一体として営まれており、居住の密度が低く分散している地域」と捉えられている

## 1. 農村と都市の交流

### ・世界的に農業は最大の産業部門

・2017年では就業人口の約30%  
が農業に従事

・フランスやアメリカの場合、農業就業人口の割合は1～3%ほど

・中国やインドなどでは50%を超える

・表1-1に明記されているタンザニアをはじめ、国民所得水準が特に低いサハラ砂漠以南の国々では70～80%が農業に従事

表1-1 総人口および就業人口に占める農業の割合（2017年）

	農村人口		農業就業人口	
	実数(千人)	総人口比(%)	実数(千人)	総就業人口比(%)
日本	10,791	7	2,282	3
中国	592,560	42	391,135	27
インド	889,217	66	283,577	45
ロシア	37,017	26	4,142	6
フランス	12,879	20	721	3
アメリカ	58,216	18	2,249	1
ブラジル	28,654	14	8,096	10
オーストラリア	3,447	14	316	3
タンザニア	28,367	87	17,265	87
全世界	3,416,074	45	930,453	29

【出典】FAOSTAT, 2018年7月  
注：農業就業人口は林業、漁業も含む。

## 1. 農村と都市の交流

### ・農村と都市の交流＝都市農村交流はいつから言われだしたのか？

いつ	だれ	どこ	なに	どうした
1478 -1535年	トマス・モア	イギリス	ユートピア	・都市の形成と問題の激化、農村の荒廃 ・理想の国にあつては都市と農村の交流・共生が必要と指摘
1771 -1858年	ロバート・オーエン	イギリス	工業村	・「生きた機械」たる労働者の保全こそが生産力の増進となり、大きな利潤を生むと主張 ・労働者保護対策の必要性を説き、めざすべき社会の具現化として「工業村」を提唱 ・都市と農村・農業と工業との両全、工場労働者も農業労働に携わる「労働者農民一体論」を提唱
1818 -1883年	マルクス	ドイツ	社会主義による都市と農村の対立廃止	・社会主義による都市と農村対立の廃止、両者の融合発展の未来像を示唆、階級支配の崩壊 ⇒①都市の拡大のせいで悲惨な状況に追いやられる労働者、他方で農村からの人口流出と農業・農村の衰退を生み出す社会の批判と打開案の提示 ②都市と農村の対立・不均等発展、その経済的基礎としての工業の拡大と農業の衰退を固定・不変としてとらえるのではなく社会発展に伴って両者の対立の止揚と結合が可能になることを展望 ③農産物の適正処理の妨げ、都市と農村の結合が資源循環を可能とするを指摘した。
1820 -1895年	エンゲルス			

『都市と農村より』筆者作成

## 1. 農村と都市の交流

### ・農村と都市の交流＝都市農村交流はいつから言われだしたのか？②

いつ	だれ	どこ	なに	どうした
1850 -1928年	エベネザー・ハワード	イギリス	田園都市論	・都市と農村の二者択一ではなく、第三の選択（活動的な都市生活の利点と農村の良さが融合した生活形態） ⇒都市と農村の共生のための法整備に影響を与え、都市と農村の融合、都市空間と農村空間の共存、永久住み地の設置による都市の拡大の制限、地産地消、こみの興隆化（⇒循環型社会の形成）当時の日本でも議論
1854 -1938年	カワレッキーレーニン	イギリス	都市による農村の搾取解消論	・農業と工業の間の不可欠な適合関係と相互依存性を破壊させないことが農業・農村発展に不可欠とし、「農業人口と非農業人口の混合と融合」、「農業人口と非農業人口との生活条件の接近」を進める
1870 -1924年	新渡戸稲造	日本	農農論	・商工業備置の思想と政策批判と農業、工業・商業の共存と均衡ある発展が不可欠とし、農業を興ぶ必要性と地方研究の展開の必要性を説いた
1771 -1858年	エルンスト・フ・シューマッハー	イギリス	スモール・イズ・ビューティフル	・石油危機を経て、都市の肥大化による生活環境の悪化や資源の枯渇といった危機に直面している現代工業文明とその根拠を転換・打開するために「健康と美と持続性」を追求し、大切にすべき社会・産業・技術を提起 ⇒農業の存在目的を明確に提示し、中間技術の考え方を展開 『都市と農村より』筆者作成

## OUTLINE

1. 農村と都市の交流
2. わが国における農産物直売所の動向
3. 事例：太田川産直市
4. 中山間地域のフードシステム
5. その後の議論に向けて

## 2.わが国における農産物直売所の動向

### ・直売所の設立動向

表2-1直売所の設立動向

年代	参加者・団体	動向
1980年代	個人を中心とした集落組織、生産者グループ、農協女性部会等	・規格外商品の出荷 ・無人や庭先販売も多数あり ・参加農家による当番制による運営が多い
1990年代	農協共販による市場出荷対応が難しくなった高齢農家層	・消費者の安全に対する関心の高まり ・参加農家、直売所販売高の増加 ・直売所数の増加と経営規模の拡大
2000年以降	ファーマーズマーケット等農協直営型の直売所、道の駅、民間事業者の参入	・2000年農協全国大会での直売所を通じた地産地消の取組み強化 ・2005年食料・農業・農村基本計画において、「地産地消の取組の一環」として、「直売や加工等の活動を促進」することが明記 ・2009年「農産物地産地消等実態調査」結果発表

個人を中心とした運営から、消費者側の安全志向の高まり、生産者側の高齢化等による参加のしやすさもあり1990年代から直売所数は増加。2000年以降は、農協も直売所を地産地消の拠点と位置づけや道の駅等の増加により観光や都市農村交流の拠点としても期待されている。

## 2.わが国における農産物直売所の動向

### ・直売所の分類（運営主体）

表2-2-農産物直売所あたりの各指標

運営主体	総数		他の農家の農産物の取り扱い					
	事業体数	年間販売金額	事業体数・割合	自都道府県産販売金額・割合	その他・割合			
①農家（個人）	10,070	65,941	1,550	15.4%	7,650	12.2%	1,630	2.6%
②農家（法人）	660	26,986	170	25.8%	5,255	20.0%	1,649	6.3%
③会社等	1,740	108,678	610	35.1%	25,554	25.0%	5,981	5.9%
④農業協同組合	2,220	384,327	2,220	100.0%	297,992	84.9%	52,904	15.1%
⑤その他	7,700	501,966	7,700	100.0%	387,919	90.4%	41,276	9.6%
総計	22,390	1,087,897	12,250	54.7%	724,370	74.6%	112,700	11.6%

資料：農林水産省「6次産業化総合調査報告」（2022年度結果）  
注：（ ）内は総計に占める各項目の構成比（%）

研究対象としては、生産者を含む地域住民および地方公共団体・第3セクターが運営する「地域づくり型直売所」、ファーマーズマーケットに代表される大型の「農業協同組合型直売所」、スーパーに代わる新たな業態としての「民間事業者型直売所」が主である。また、個人農家などが設置した「個別経営型直売所」が設置数は非常に多い。

## 2.わが国における農産物直売所の動向

### ・直売所の分類（立地条件）

- ①消費地立地型  
都市近郊に立地し、消費地に比較的近い平日・休日の利用者数の差が小さい
- ②観光地立地型  
観光地（農村部）に立地するため、休日の利用者数が格段に多い
- ③アンテナショップ型  
産地が消費者に認知されている場合に可能な形態

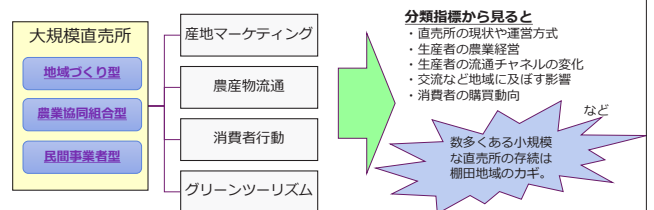
消費地からの距離、経営の目的に応じて主に3つの形態に分類でき、研究されてきた。

### ・小規模直売所の定義付け

年間販売金額が5,000万円未満の有人で常設の店舗であり、定期的に販売が行われる施設

## 2.わが国における農産物直売所の動向

### ・小括



担い手の高齢化・後継者不足などから農村集落機能の低下、交通手段を持たない買い物弱者の増加等も懸念される農村地域の暮らしを支える小規模な直売所の機能と展開方法について考察する。

## OUTLINE

1. 農村と都市の交流
2. わが国における農産物直売所の動向
3. 事例：太田川産直市
4. 中山間地域のフードシステム
5. その後の議論に向けて

## 3.事例：太田川産直市

- 調査地域の概要
- ✓広島市の北西約30km
- ✓面積341.89km<sup>2</sup>
- ✓2004年加計町、戸河内町、筒賀村が合併
- ✓人口約4,932人、高齢化率52.9%
- ✓広島県で最も人口が少ない町



表3-1安芸太田町の購買店舗

分類	件数
個人商店	2
スーパーマーケット	2
農協購買店舗	4
道の駅	1
農産物直売所	3
コンビニエンスストア	3
ドラッグストア	1
ホームセンター	2
その他(専門商店)	17
計	35
内、青果物販売店	12

表3-2安芸太田町の人口推移

	世帯数(世帯)	総人口(人)	高齢者数(人)	高齢化率(%)
2005年	3,636	8,693	3,528	40.6%
2010年	3,453	7,735	3,349	43.3%
2015年	3,267	6,895	3,277	47.5%
2017年	3,200	6,591	3,216	48.8%

安芸太田町人口情報より筆者作成

聞き取り調査より筆者作成

## 3.事例：太田川産直市

### ●調査地域の農業概要

⇒基幹的農業従事者の約90%が65歳以上の高齢者（70代後半～80代前半が主力）  
1ha未満の経営耕地の農業者が約90%

表3-3年齢別基幹的農業従事者数（人・%）

人数	割合	高齢者			小計	割合	総計
		65～74歳	75～84歳	85歳以上			
30	10.3%	98	133	29	260	89.7%	290

表3-4安芸太田町の経営耕地規模別農家数推移

経営耕地面積	経営耕地なし	0.3ha未満	0.3～0.5	0.5～1.0	1.0～1.5	1.5～2.0	2.0以上	計
経営耕地面積	2	157	106	19	6	6	6	295
経営耕地販売額	販売なし	50万円未満	50～100	100～200	200～300	300～500	500以上	計
規模別農家数	73	192	17	6	2	1	1	295

表3-5農産物販売金額1位の部門別経営体数

種別	雑穀・いも類・豆類	露地野菜	施設野菜	果樹類	花き・花木	その他の作物	酪農	肉用牛	養豚	計
196	1	12	2	15	1	1	1	2	1	232

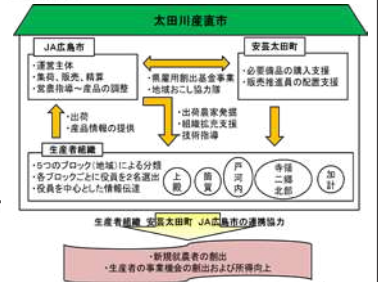
2015農林業センサスより筆者作成

## 3.事例：太田川産直市

### ●設立背景

- ✓2010年4月から営業開始
- ✓戸河内IC周辺整備事業に伴う、JA支店統合を契機とし、町内に点在する青空市の集約
- ✓JA広島市戸河内支店内に店舗を設営（道の駅周辺開発事業）  
⇒観光客向けの販売戦略
- ✓安芸太田町より設立資金の補助
- ✓2012年度より生産者組織による経営に完全以降し、POSシステム導入

### ●組織図



### 3.事例：太田川産直市

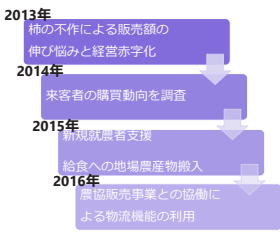
- 年間販売額と来客数の推移
- 販売額・来客数ともに右肩上がり

図 年間販売額と来客数の推移



太田川産直市提供資料より筆者作成

- 経営方針の転換
- POSシステム導入による



### 3.事例：太田川産直市

- 地域別の販売額

表3-6太田川産直市の販売高 (2012-2013年)

【2012年～2013年】 ※全体的には横ばい	2012			2013				
	間買	加計	戸内内	J A	間買	加計	戸内内	J A
葉菜類	815,380	111,210	1,754,380	275,240	842,490	202,450	1,796,640	206,350
果菜類	651,760	130,140	1,780,920	275,460	738,730	86,430	1,980,120	296,970
根菜類	65,110	39,660	654,980	-	146,840	99,930	726,010	22,440
土物類	153,030	115,830	1,102,810	-	198,870	93,210	1,233,760	-
山菜	65,520	34,090	77,020	-	120,910	24,900	67,700	-
果実物	796,470	259,630	1,087,440	735,800	131,710	175,190	908,140	919,870
穀類	416,500	-	804,400	-	203,300	-	868,800	-
加工品	184,770	1,279,170	1,809,270	278,420	265,120	1,431,700	2,294,920	250,690
畜	19,950	2,850	79,580	-	9,980	100	102,700	-
魚	375,880	347,460	233,120	-	482,640	272,398	196,268	-
その他	16,100	263,450	156,190	0	13,220	143,300	200,120	0
たまご	-	-	28,980	-	-	-	17,400	-
きのこ類	13,840	195,200	121,980	21,210	23,100	198,500	215,920	85,040
地域別合計	3,573,410	2,778,690	9,671,070	1,586,130	3,176,910	2,738,100	10,608,490	1,781,360
総計	17,609,370	-	-	-	-	18,294,860	-	-

提供資料より筆者作成

2012年から赤字経営に突入。2013年の柿の不作により次年度の観光客離れの懸念。経営戦略の見直しの必要性に迫られる。

### 3.事例：太田川産直市

- 地域別の販売額

表3-7太田川産直市の販売高 (2014-2015年)

【2014年～2015年】 販売額は大幅増	2014			2015				
	間買	加計	戸内内	J A	間買	加計	戸内内	J A
葉菜類	903,050	143,040	1,809,880	262,660	1,115,455	459,360	2,002,680	662,570
果菜類	874,670	190,330	2,151,520	403,820	1,058,260	193,260	2,372,990	853,050
根菜類	212,130	49,420	782,520	17,300	314,610	136,040	786,260	117,470
土物類	218,080	121,480	1,152,860	34,750	295,130	159,470	1,296,680	178,940
山菜	214,540	45,150	61,830	-	207,135	31,880	149,970	7,440
果実物	1,038,820	464,400	979,250	762,970	720,740	409,120	1,305,130	1,140,490
穀類	260,300	-	927,190	-	369,900	-	855,300	34,500
加工品	334,610	1,413,930	2,363,360	212,310	254,160	1,422,210	3,101,870	703,230
畜	13,860	930	150,850	-	6,100	150	90,440	43,020
魚	392,970	227,330	146,700	5,220	426,740	215,180	189,380	31,400
その他	1,000	148,550	202,470	0	7,400	143,950	266,310	45,920
たまご	-	-	11,510	-	-	-	3,360	70,310
きのこ類	14,590	122,450	436,270	128,840	13,360	182,900	651,000	259,150
地域別合計	4,478,620	2,927,320	11,176,210	1,827,870	4,788,990	3,353,520	13,074,370	4,147,490
総計	-	-	20,410,020	-	-	25,361,370	-	-

提供資料より筆者作成

観光客向けの戦略と地元住民を意識した戦略立案

### 3.事例：太田川産直市

- 地域別の販売額

表3-8太田川産直市の販売高 (2016年)

【2016年】 前年からの販売額的大幅増	2016			
	間買	加計	戸内内	J A
葉菜類	900,710	1,119,800	1,924,950	1,582,300
果菜類	1,000,360	201,450	2,158,680	1,617,140
根菜類	247,125	71,360	746,470	657,860
土物類	339,340	85,100	1,432,120	448,900
山菜	221,860	29,880	212,420	3,740
果実物	908,830	1,208,520	1,610,240	2,402,540
穀類	283,000	-	761,600	-
加工品	184,530	1,434,760	2,794,590	376,660
畜	10,400	-	66,990	53,120
魚	346,140	126,320	198,140	80,840
その他	17,780	85,570	223,790	5,400
たまご	-	-	1,200	111,020
きのこ類	-	12,900	598,270	651,840
地域別合計	3,640,615	4,375,660	12,729,460	7,991,360
総計	-	-	28,737,095	-

提供資料より筆者作成

### 3.事例：太田川産直市

- 持続的な経営を行っていくための経営戦略

- 【観光客向け戦略】→成長分野
  - メディア戦略と近隣地域のイベントへの参加
  - 福岡坊柿の機能性の解明と販売補助による生産量の強化(行政連携)
- 【地域内業者向け戦略】→経営基盤分野
  - 新規就農者の確保(農協連携)
  - 給食・配色ボランティアへの地場農産物の納品と掛売りの実施(行政連携)
  - 地域内のスーパー、農協購買店舗、個人商店、飲食店への販売
- 【地域住民向け戦略】→地域内インフラ機能
  - 近隣市町村の農産物の販売(農協連携)
  - 営業日数を増強

### 4.中山間地域フードシステム

農業地域類型 (注1)	基準指標 (注1)	該当地域を調査する市町村数 (注2)
都市的地域	居住地に占めるDID面積が5%以上で、人口密度500人/ha以上又はDID人口2万人以上の市町村及び旧市区町村。	900
平地農業地域	居住地に占める宅地面積が60%以上で、人口密度500人/ha以上の市町村及び旧市区町村。ただし、林野率が90%以上のものを除く。	754
中間農業地域	耕地率が20%未満で、都市的地域及び山間農業地域以外の市町村及び旧市区町村。	980
山間農業地域	林野率が80%以上かつ耕地率10%未満の市町村及び旧市区町村。	730

https://www.maff.go.jp/kyoushin/kyoushin/syuhun\_seisaku/about/kyoushin/

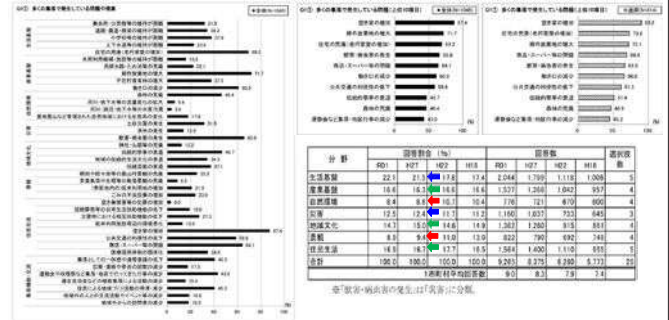
### 4.中山間地域フードシステム

#### 4.中山間地域フードシステム

調査対象	調査対象市町村 合計	過疎地域			非過疎地域			
		過疎	みなし 過疎	一部 過疎	非過疎	非過疎	計	
調査対象 現市町村数	1,945 (100%)	644	25	145	814 (100%)	18	213	231 (100%)
過疎 <sup>※1</sup> のみ、他の地域指定なし	127 (12.2%)	115	1	11	127 (15.6%)	-	0	0 (0.0%)
過疎 <sup>※1</sup> +他の地域指定あり	705 (36.3%)	529	24	134	687 (34.4%)	18	18	18 (2.6%)
農山山村	582 (30.0%)	427	23	117	567 (29.2%)	15	-	15 (2.2%)
離島	77 (4.0%)	54	0	23	77 (3.9%)	0	-	0 (0.0%)
半島	149 (7.7%)	120	4	25	149 (7.7%)	5	-	5 (0.7%)
特別重要	173 (8.9%)	146	9	18	173 (8.9%)	0	-	0 (0.0%)
他の地域指定のみ	213 (10.9%)	-	-	-	-	-	213	213 (30.2%)
農山山村	147 (7.6%)	-	-	-	-	-	147	147 (7.6%)
離島	34 (1.7%)	-	-	-	-	-	34	34 (1.7%)
半島	45 (2.3%)	-	-	-	-	-	45	45 (2.3%)
特別重要	28 (1.4%)	-	-	-	-	-	28	28 (1.4%)

※1 原則的「過疎」には現在過疎地域に指定されている市町村のほか、旧過疎市町村(活性化法で過疎地域に指定されていた市町村)を含む。  
 ※2 東日本大震災に伴う発生事故被災地のうち、前回調査時点で全域が避難指示区域にあつた市町村は今回も調査対象とした。  
 ※3 活性化法では過疎地域に指定されているが現在は非過疎地域であり、他にいずれの地域指定も受けていない市町村は調査対象外とした。

#### 4.中山間地域フードシステム



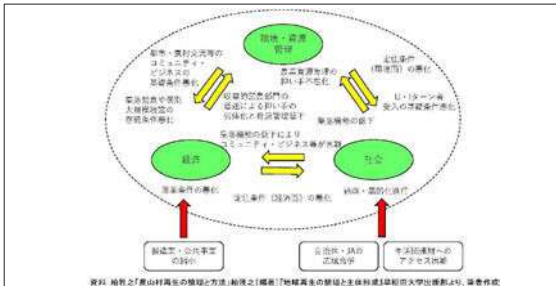
#### 4.中山間地域フードシステム



#### 4.中山間地域フードシステム



#### 4.中山間地域フードシステム

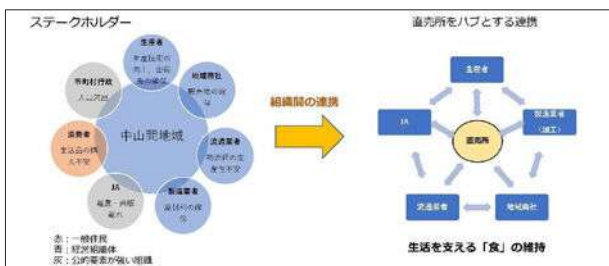


#### 4.中山間地域フードシステム

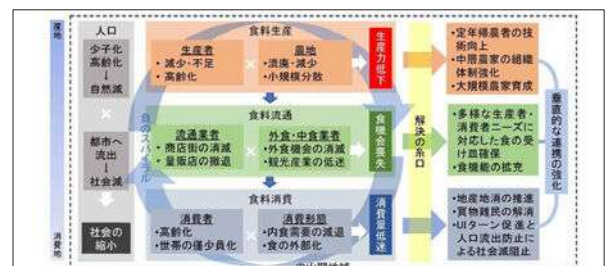


このため、中山間地域におけるフードシステムの見直しには、新たな店舗を開設しての改善は難しい。現状の関係組織での連携の強化やサービス内容の見直しなどにより改善していく必要がある。

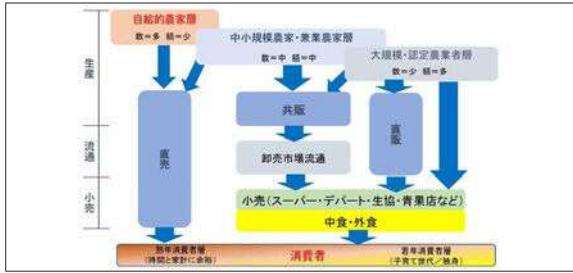
#### 4.中山間地域フードシステム



#### 4.中山間地域フードシステム



## 4. 中山間地域フードシステム



## 5. その後の議論に向けて

### ・消費者のニーズ

1. 地域住民  
✓ 日常の買い物を行いたい
2. 地域内の給食・飲食店  
✓ 地場農産品を使いたい
3. 観光客  
✓ 安く新鮮な野菜の購入  
✓ 特産品

### ・対応策

- 品揃えの強化
- 常時野菜が置いてある店舗  
⇒ 生産者もお客様
- 地域内における食の拠点機能  
⇒ 流通チャネルの確立
- 販売価格の安定
- 特産品の生産増  
⇒ 新規顧客の獲得

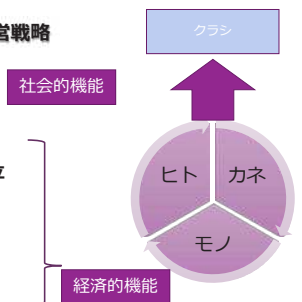
## OUTLINE

1. 農村と都市の交流
2. わが国における農産物直売所の動向
3. 事例：太田川産直市
4. 中山間地域のフードシステム
5. その後の議論に向けて

## 5. その後の議論に向けて

### ・持続的な経営を行っていくための経営戦略

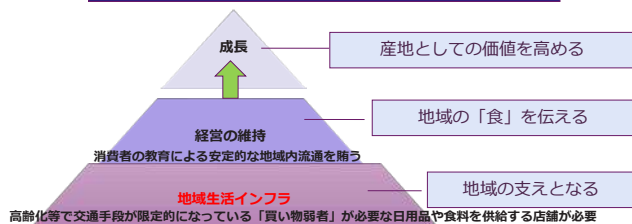
1. 地域住民向け戦略→CSR  
✓ 地域内インフラの確保  
✓ 農村における生活の維持
2. 地域内業者向け戦略→経営基盤強化  
✓ 地場農産品の地域内流通チャネルの確立  
✓ 食育効果
3. 観光客向け戦略→成長戦略分野  
✓ 新規顧客獲得の取り組み  
✓ 農産物のブランド化  
✓ 生産量の確保



## 5. その後の議論に向けて

### ・農村社会における小規模直売所の運営戦略 経営を維持し、その存在意義を高めるには

3 階建ての運営戦略をたて、社会的意義をうみだす必要性



## 参考資料

1. 研究背景
2. 研究目的・課題・方法
3. わが国における農産物直売所の動向
4. 太田川産直市の概況
5. 太田川産直市の販売状況からみた経営戦略
6. アンケートによる消費者行動調査
7. 総括

## 5. 太田川産直市の販売状況からみた経営戦略⑥

### ・個別農家の対応：地域業者向け定期販売者A氏

- ✓ 70代女性（配偶者80代、息子40代）
- ✓ 直売所での販売高は常に上位
- ✓ コメを中心とした複合経営
- ✓ 町内でも約10%しかいない1ha超を経営する農業者
- ✓ 出荷先は、  
コメは農協出荷と町内観光ホテルに直接販売  
漬け物を中心に直売所で販売
- ✓ 2015年から保健所による衛生/販売指導を導入し、漬け物の生産量が増加
- ✓ A氏の漬け物は、町内の飲食店からの需要も高く観光用のB級グルメに使用

A氏の漬け物出荷ルート

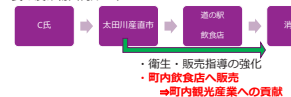


表5-4A氏の直売所販売高（円）

	2012	2013	2014	2015	2016
農業業種	19,270	26,830	34,200	61,010	43,260
果菜類	42,710	81,700	132,060	122,880	112,900
果実類	101,750	53,150	63,100	67,020	77,550
穀類		317,000	118,240	215,400	321,000
その他	21,940	71,000	46,990	42,690	57,960
加工品	554,520	880,600	957,450	1,077,690	1,153,220
計	1,693,560	3,399,880	2,399,940	2,999,090	4,892,470
計	740,190	1,430,280	962,040	1,586,690	1,765,890

提供資料より筆者作成

## 5.太田川産直市の販売状況からみた経営戦略⑦

- ・個別農家の対応：新規就農者B氏
  - ✓20代男性
  - ✓2013年から広島市およびA広島市の新規就農者支援事業である「ひろしま活力農業」経営者育成事業の広域連携による近隣市町村への就農者第一号
  - ✓町内出身⇒農業大学⇒活学研修生を経て就農
  - ✓ほうれん草を中心にハウス7棟（2015年度末）と露地野菜約10aを経営
  - ✓出荷先は、ハウス栽培分は直売所経由町内給食出荷、露地栽培分は農協出荷
- ・個別農家の対応：新規就農者C氏
  - ✓20代男性
  - ✓2014年から「ひろしま活力農業」研修生になり、B氏の勧めで安芸太田町で就農
  - ✓出身は広島市
  - ✓小松菜を中心にハウス栽培、今後アスパラガスの改植を進める予定

### 町内給食センター（3カ所）

2014年までは個人商店（市場買い付け）とスーパーから購入  
ほとんどが町外産



表5-5B氏の給食販売高（円）

	2015	2016
ほうれん草	228,720	689,470
みず菜	42,220	8,010
小松菜	41,310	
その他	50	51,030
計	314,315	750,526

表5-6C氏の給食販売高（円）

	2015	2016
小松菜		177,290
提供資料より筆者作成		

新規就農者の支援と給食での地産比率向上  
就農者間の品目の棲み分け

## 6.アンケートによる消費者行動調査①

### ・来客者に対するアンケート調査

目的：2015年度から運用している戦略の効果測定

実施日：2016年9月3日（土）、9月17日（土）、10月25日（火）、11月8日（火）  
休日、平日2日ずつ実施。

回答数：100組

- 設問項目：①性別、②年齢、③お住まい、④だれと一緒に来たか、⑤来店頻度  
⑥目当ての商品、⑦購入金額、⑧購入した中で満足した品物  
⑨営業希望曜日、⑩満足度、⑪意見（記述）

アンケートは、3つの部門から構成している。  
1つ目は、性別や年代、居住地などの属性を図るもの。  
2つ目は、利用頻度や満足度、購入金額といった顧客の利用実績を図るもの。  
3つ目に、希望の開店時間や目当ての商品といったニーズを探るものである。

## 5.太田川産直市の販売状況からみた経営戦略⑧

### ・農協の対応：地域住民向け販売

- ✓2015年から販売量を大幅に増加⇒入荷ルートはスライド35で説明
- ✓日常的に使う「にんじん・玉ねぎ・じゃがいも」を農協管内より導入（表中、赤部分）
- ✓隣の地域（旧芸北町）の産品の受け入れ/連携（表中、青部分）
- ✓少量でも受け入れ⇒正常な価格設定機能を担保する（安すぎたり高すぎたりしないように）
- ✓店舗内に空になるのを選ける

表5-7農協経由の販売  
（点数：点、販売高：円）  
提供資料より筆者作成

品目	2012年		2013年		2014年		2015年		2016年	
	数量	販売高	数量	販売高	数量	販売高	数量	販売高	数量	販売高
野菜類	2,504	275,240	2,115	206,930	2,220	262,660	5,510	602,570	10,130	1,892,200
果実類	1,424	275,460	1,540	296,670	2,313	403,820	4,568	853,050	7,387	1,617,140
肉類	978	327,260	710	161,000	830	272,220	1,330	344,920	2,860	673,780
魚介類	-	-	187	22,440	114	17,300	60	7,170	3,440	657,820
干物類	-	-	-	-	119	34,750	870	178,340	2,330	448,920
加工品	-	-	-	-	-	-	161	52,240	1,602	232,360
その他	-	-	-	-	-	-	248	53,430	1,294	156,790
計	1,472	735,800	1,847	919,870	1,568	762,970	3,247	1,149,690	7,170	2,469,540
果実類	1,304	651,470	1,594	797,000	935	561,390	885	542,220	3,055	1,109,660
肉類	980	276,420	839	250,690	897	214,310	1,144	703,230	1,071	316,660
魚介類	899	176,700	589	170,400	436	127,680	751	221,580	2,469	177,050
干物類	111	21,210	311	85,040	717	126,840	1,330	299,150	3,447	657,280
その他	-	-	-	-	25	5,220	763	162,280	537	143,120
計	6,492	1,586,130	7,039	1,781,360	7,832	1,827,870	18,600	4,147,490	35,942	7,991,360

## 6.アンケートによる消費者行動調査②

### ・アンケート結果（属性情報）

- 【性別】
- ✓女性客が約80%
  - ✓休日は、家族で来客が10%程度見られる
- 【居住地】
- ✓町内からの来店客が約60%を占める
  - ✓残りの3割は近接する広島市からの来客
  - ✓休日のほうが町内の比率が高い
- 【年代】
- ✓全体の約70%が60～70代に集中している

表6-1性別

	性別			複数
	男	女		
平日	15%	85%	0%	0%
休日	15%	73%	12%	0%
計	15%	78%	7%	0%

表6-2居住地

	居住地			
	町内	広島市	県内	県外
平日	50%	35%	5%	10%
休日	60%	25%	10%	5%
計	56%	29%	8%	7%

表6-3年代

	年代					未回答
	30代	40代	50代	60代	70代	
平日	5%	15%	8%	23%	45%	5%
休日	3%	7%	18%	40%	27%	3%
計	4%	10%	14%	33%	34%	1%

メインの顧客は、町内在住の60～70代の女性

## 6.アンケートによる消費者行動調査③

### ・アンケート結果（利用実績情報）

- 【居住地×利用頻度】
- ✓町内からの顧客の約7割は週1回以上来店
  - ✓広島市からの来客は、利用頻度はまちまち
  - ✓その他の県内外の地域は当然ながらごく小數

表6-4居住地別における利用頻度

	利用頻度							
	週1回以上	月1回以上	月1回以下	はじめて				
町内	41	73%	10	18%	5	9%	0	0%
広島市	8	28%	9	31%	9	31%	3	10%
その他	1	7%	4	27%	5	33%	2	13%
計	50	50%	23	23%	19	19%	5	5%

- 【居住地×購入金額】
- ✓町内、広島市問わず大きな差異はなし
  - ✓町内の顧客のほうが若干ながら購入金額も大きい

表6-5居住地別における購入金額

	購入金額							
	千円以内	千円～二千円	二千円～五千円	五千円以上				
町内	20	36%	27	48%	8	14%	1	2%
広島市	12	41%	11	38%	5	17%	1	3%
その他	5	33%	8	53%	2	13%	0	0%
計	37	37%	46	46%	15	15%	2	2%

- 【満足度】
- ✓全体的な満足度については、約8割の方に「満足」又は「大満足」と答えている
  - ✓自由記入欄には「いつも新鮮な野菜が置いてあるので、買に来るのを楽しみにしています」といった声の他、「品数（種類）を多く」「地元の商品を充実させてほしい」「店舗が分かりにくい（国道から見えない）」「表側に看板や旗の設置」との意見もあった。

表6-6満足度

	満足度					未回答
	大満足	満足	普通	もう少し	不満足	
町内	18	56	21	2	0	2
広島市	5	33	8	5	2	1
計	23	89	29	7	2	3

## 6.アンケートによる消費者行動調査⑤

### ・持続的な経営を行っていくための経営戦略の順位付け

- ①【地域住民向け戦略】→地域内のインフラとしての機能（社会的意義）
  - ✓近隣市町村の農産物の販売（農協連携）
  - ✓営業日数を増強
- ②【地域内業者向け戦略】→安定販売
  - ✓給食・配食弁当への地場農産物の納品と掛売りの実施（行政連携）
  - ✓地域内のスーパー、農協購買店舗、個人商店、飲食店への販売
- ③【観光客向け戦略】→集客と生産量の確保
  - ✓メディア戦略と近隣地域のイベントへの参加
  - ✓祇園坊柿の機能性の解明と販売補助による生産量の強化（行政連携）
  - ✓新規就農者の確保（農協連携）

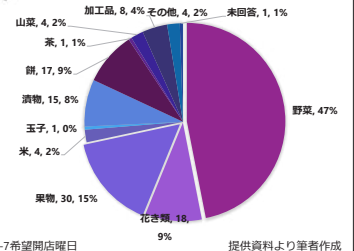
地産地消戦略

成長戦略

## 6.アンケートによる消費者行動調査④

### ・アンケート結果（ニーズ調査項目）

- 【目当ての商品】
- ✓顧客の9割以上が野菜の購入を目標
  - ✓近くの花屋（道の駅完全仕入れ販売）と比べて、安価で販売されている、墓参りなどで必要度が高い花き類も人気
  - ✓漬物・おもちといった加工品も人気
  - ✓果物が高い数字である一方、山菜は非常に低い数字となっている（アンケート時期に依存）



- 【希望営業日】
- ✓休日の営業が過半数
  - ✓特に、遠方からの来客はこの傾向が強い
  - ✓町内の顧客については、比較的今まで通りの営業日でよいとの意見も多かった
  - ✓町内の30～50代の顧客は、営業日を増やして欲しいとの意見も見られた

表6-7希望開店曜日

月	希望の開店曜日						
	火	水	木	金	土	日	振日
10	26	13	17	12	50	46	32
6							

## 6.アンケートによる消費者行動調査⑥ 地域住民戦略

- ・過疎地域における買い物難民対策
- ・2016年度より農協の集荷ルートを逆輸送し、運送チャネルを設定

集荷ルート  
運送会社⇒①各集荷場⇒②大町物流センター⇒③農協五日市



表6-8農協経由の販売  
（販売高：円、経比率：%）  
提供資料より筆者作成

年度	販売高	経比率	
2012年	17,609,300	1,586,130	9%
2013年	18,293,860	1,781,360	10%
2014年	20,410,020	1,827,870	9%
2015年	25,361,370	4,147,490	16%
2016年	28,765,170	7,991,370	28%

## 6.アンケートによる消費者行動調査⑦ 地域内業者戦略

- 経営基盤の強化→安定的な収益確保の取り組み
- 給食、配食ボランティアサービスへの販売
- 地域内のスーパー、農協購買店舗、個人商店、飲食店への販売



新規就農者の売り先確保と食育効果  
地域内の認知度アップ  
休業時の青果物の安定供給

地域内における「食」の拠点機能

49

## 6.アンケートによる消費者行動調査⑧ 観光客向け戦略

- 成長戦略→集客と生産量確保の取り組み
- 祇園坊柿のブランド化
- 祇園坊柿の機能性開発 (行政、観光協会、大学の3者連携)
- 補助事業の立案 (行政と連携) → 1kgあたり30円補正 (表は上乗せ分を含まない)
- 隔年結果の傾向は見られるものの、生産量および単価は上昇
- 観光客の認知度アップと集客効果



表6-9販売額と推定販売量

	渋柿			あわせ柿			total	
	販売量(kg)	販売額(円)	単価(円/kg)	販売量(kg)	販売額(円)	単価(円/kg)	販売量(kg)	販売額(円)
2012年	2,417	526,340	218	1,298	539,430	416	3,714	1,065,770
2013年	120	32,000	267	312	166,200	532	432	198,200
2014年	3,123	829,440	266	1,543	629,110	408	4,665	1,458,550
2015年	2,638	759,820	288	1,184	570,400	482	3,821	1,330,220
2016年	2,861	889,150	311	1,660	853,420	514	4,521	1,742,570

提供資料より筆者作成

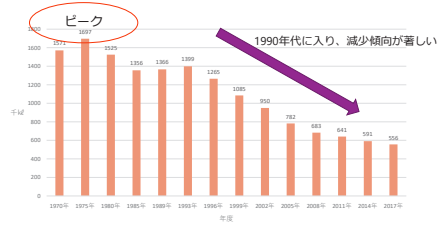
## OUTLINE

1. 研究背景
2. 研究目的・課題・方法
3. わが国における農産物直売所の動向
4. 太田川産直市の概況
5. 太田川産直市の販売状況からみた経営戦略
6. アンケートによる消費者行動調査
7. 総括

51

## 3.清酒業界の動向と流通システム

清酒及び合成清酒の販売(消費)数量の推移



資料：農林庁「酒レポート平成31年3月」より筆者作成

## 3.清酒業界の動向と流通システム

清酒製造業者数の推移



資料：農田英紀「日本酒輸出のメソッド」より引用作成

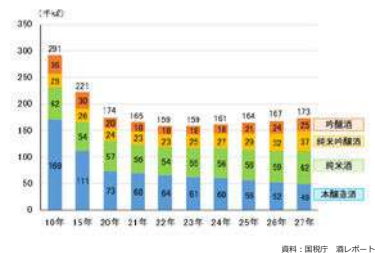
## 3.清酒業界の動向と流通システム

・中小酒蔵の生産・販売における歴史

- 1.1940年代 戦中の三倍増醸酒の製造  
⇒戦中のコメ不足のため、少量のコメで大量に生産できる酒の生産
- 2.1950～60年代 清酒製造の増加  
ビールやウィスキーの消費が増加
- 3.1970年代 有名蔵への桶売り  
⇒清酒製造量がピークに達し、純米酒を生産販売する酒蔵が出だす
- 4.1980年代 自社ブランドへの転化  
⇒70年代の技術転化から、地酒ブームへ  
需要がなくなり廃業に追い込まれることもあり、酒蔵軒数は減少  
大手の技術力向上による大量生産体制も追い風となる
- 5.1990年代 特定名称酒制度の導入

## 3.清酒業界の動向と流通システム

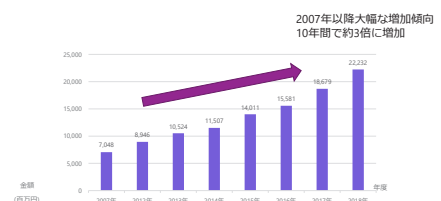
特定名称酒の種類別出荷量の推移



資料：農林庁 酒レポート

## 3.清酒業界の動向と流通システム

清酒輸出額の推移



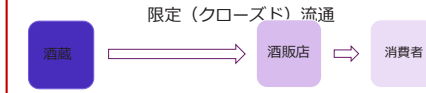
資料：日本酒組合中央会HP ([https://www.japansake.or.jp/sake/pdf/20190207\\_yushutsusougaku.pdf](https://www.japansake.or.jp/sake/pdf/20190207_yushutsusougaku.pdf)) より作成

### 3.清酒業界の動向と流通システム

#### ・清酒の流通システム

中小規模の酒蔵は、有名蔵への桶売りから自社ブランドの確立へ移行  
多くの蔵が自社での営業まで手が回らないことから特約店に直接取引をする限定  
流通が今なお残る

中小規模の酒蔵の製造・販売にはこの限定流通が大きな役割を占めている



### 3.清酒業界の動向と流通システム

- ・限定流通の特徴
  - ①役割分担の明確化
  - ②卸業者を通さないメーカー直送
  - ③特約店の販売計画に基づいた仕入れ



- ・限定流通システムと中小酒蔵の経営における課題
  - ①特約店との年間仕入れの矛盾
    - ⇒計画に沿った年間仕入れを行っても、計画通りに販売できない可能性がある。
    - 売れ残りにより、品質低下や値引き販売を招くことも考えられる。販売計画を定期的に改めるか、仕入れスパンを短くするなどの対策が必要となる。
  - ②特約店の後継者不足
    - ⇒特約店によっては店主の高齢化による後継者問題があり、酒蔵は販路を改める必要が出てきた
  - ③酒蔵のブランドイメージの形成
    - ⇒酒蔵は銘酒だけではなく、他の商品も売れなければならない

## OUTLINE

1. 研究背景
2. 研究目的・課題・方法
3. 清酒業界の動向と流通システム
4. 小規模酒蔵の製造・出荷動向  
～N社を事例として～
5. 百貨店との連携による都市農村交流
6. まとめと考察

### 4.小規模酒蔵の製造・出荷動向 ～N社を事例として～

#### 有限会社中野酒造

創業 1874年  
所在 群馬市山崎町

- 事業内容
- ・酒類製造業
  - ・日本酒・リキュール・酒粕焼酎
  - ・酒粕物の製造
  - 酒粕を使用した酒粕物

#### 歴史

- ・1980年代～2000年代初め 主力商品：安価なバック酒等
- ・6代目に代替わりした後、主力商品：特定名称酒「ちえびしん」



資料：中野酒造株式会社提供  
<http://www.nakanoshin.com/0101.html>

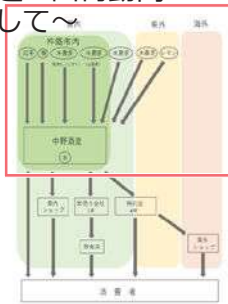
### 4.小規模酒蔵の製造・出荷動向 ～N社を事例として～

#### 〈原料流通〉

- ・山田錦(その他うるち米も使用)
- 県内5割・県外5割
- ↓
- 地元の契約農家からの直接買付

#### 〈地域産業としての課題〉

- ・地場産米への切り換え
- ・自社での生産
- ↓
- 地域との協働体制の強化



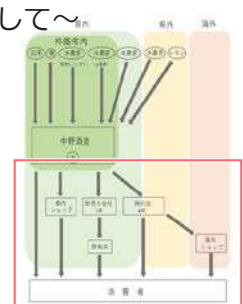
### 4.小規模酒蔵の製造・出荷動向 ～N社を事例として～

#### 〈販売経路〉

- ・特約店・特約卸50軒  
(内、大分5軒)
- ・販売地域比率  
大分県5割・九州1割  
九州外3割・海外1割  
⇒特約店を通じた販売

#### 〈特徴的な点〉

- ・全ての販売を限定流通で行なっている
- ・特約店先は自らの営業では増やさない



## OUTLINE

1. 研究背景
2. 研究目的・課題・方法
3. 清酒業界の動向と流通システム
4. 小規模酒蔵の製造・出荷動向  
～N社を事例として～
5. 百貨店との連携による都市農村交流
6. まとめと考察

### 5.百貨店との連携による都市農村交流

- ・都市農村交流における連携地域イモリ谷の紹介

#### 純米酒イモリ谷酒造り実行委員会 連携企業

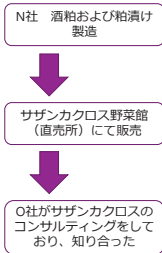
- 酒造り 有限会社中野酒造 (N社)  
販売 株式会社トキ八 (T社)  
・福岡県酒販等の2次卸及び酒販店
- デザイン 全日空商事  
企画 OOTSU企画 (O社)



- ・大分県 宇佐市 安心院町 松本集落
- ・安心院町の中でも四方を山に囲まれた集落
- ・約50戸 150人ほどが生活
- ・2003年から交流を開始
- ・今年で20年目を迎える

## 5.百貨店との連携による都市農村交流

### ・経緯



当時バック酒（有名蔵の桶売り）から自社での銘酒への切り替えを考えていたことからO社とコンサルタント契約し販路の拡大を依頼した。

その結果、都市農村交流イベントを通して「イモリ谷」を販売することで、「イモリ谷」を製造するN社の知名度を上げ、N社こだわりの「ちえびじん」の売り上げに繋げる仕組みを考案した。

## 5.百貨店との連携による都市農村交流

### イベント内容

- ・田植え（6月）
- ・稲刈り（10月）

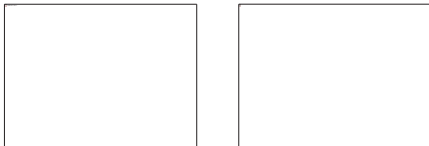


- ・松本地区の農家の指導の下、ヒノヒカリを30a作付けする
- ・田植え時にマイラベル作成のための写真撮影を行う
- ・参加者は、一般参加者（マイラベル）、株式会社トキハのバイヤー、酒販店主が参加
- ・参加者数と購入本数、および1次卸（一般参加者にとっては小売り）となるトキハの受け取り店舗を確定する

## 5.百貨店との連携による都市農村交流

### イベント内容

- ・酒仕込み（11月）
- ・初しぼり（12月）



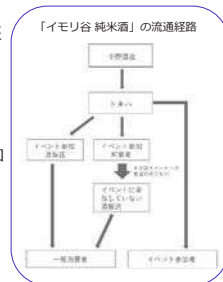
- ・毎年3,000本の製造に設定し、計画的に販売（4合瓶換算）
- ・「イモリ谷」はイベントに関わった人しか販売できない仕組みになっており、参加者には卸売業者や酒販店、バイヤーもおり、全体の10～20%に当たる。
- ・イベントに参加した卸売業者は、他の酒販店に販売可能であるが、販売した酒販店には、イベントへの参加を呼びかけ販売先を広げる取り組みを行っている
- ・価格は、720mlは1,600円、1800mlは2,600円

## 5.百貨店との連携による都市農村交流

### イモリ谷の流通経路

・宇佐市安心院町松本でコメづくりから「イモリ谷」という純米酒を通るイベント

- ・毎年3,000本の製造に設定し、計画的に販売  
⇒完全予約販売
- ・『イモリ谷』はイベントに参加した人しか販売できない  
⇒参加者の10～20%は卸売業者や酒販店、バイヤー
- ・1本につき50円はイモリ谷農家への支援金となる  
⇒お金が循環する仕組み



## 5.百貨店との連携による都市農村交流

### ・都市農村交流による効果

#### N社における直接的な効果

- ・百貨店とのパイプを形成
- ・新たな販売経路の創出
- ・県内外から注目を浴び、ほかの銘酒へも普及
- ・雇用の拡大

#### N社における間接的な効果

- ・知名度向上による原材料仕入れの県内・地元への転換
- ・地元産の農産物を使用した新商品の展開
- ・都市農村交流の横展開による県内酒蔵の代替わりや連携商品の開発へ
- ・地域のまちづくりに寄与

⇒嗜好品としての日本酒だけでなく、日本酒を媒体として原料のコメや地域のことも情報発信

## 5.百貨店との連携による都市農村交流

### ・都市農村交流による効果

#### 地域農業における直接的な効果

- ・H16全国農林水産祭むらづくり部「天皇杯」受賞
- ・RMOとして地域自治組織の初期段階でのベンチマーク
- ・支援金制度による農業の継続

#### 地域農業における間接的な効果

- ・知名度向上による移住者
- ・大手メーカーとの提携によるワインの製造
- ・観光客の集客
- ・農家レストランへの展開
- ・若い人の雇用の確保

## 5.百貨店との連携による都市農村交流

### ・都市農村交流による効果

#### 百貨店における直接的な効果

- ・酒蔵や酒販店との関係性の構築  
⇒通常とは逆のルートでの販売網の構築  
百貨店での酒販概念の大きな変革
- ・ふるさとギフトとしての販売やアビール
- ・地元メディアによる地域貢献アビール
- ・売上貢献、販売促進貢献

#### 百貨店における間接的な効果

- ・販売員のCSR活動としての利用や食品に関する理解の促進
- ・消費者とのふれあい
- ・取引先の紹介や連携による製造店への貢献

## OUTLINE

1. 研究背景
2. 研究目的・課題・方法
3. 清酒業界の動向と流通システム
4. 小規模酒蔵の製造・出荷動向  
～N社を事例として～
5. 百貨店との連携による都市農村交流
6. まとめと考察

## 6.まとめと考察

### 中小規模の酒蔵にとっての限定流通の位置づけ

- ・ 役割分担の明確化  
⇒ 酒蔵は製造に徹して酒販店がプロモーションを担う
- ・ 卸業者を通さないメーカー直送  
⇒ 価格競争に巻き込まれることなく販売
- ・ 特約店の販売計画に基づいた仕入れ  
⇒ 蔵側 販売計画量の定期配送、製造調整がしやすい  
店側 卸売業者を挟まないためオープン流通に比べて小売手数料が高い



### 限定流通システムと中小酒蔵の経営における課題

- ・ 特約店との年間仕入れの矛盾
  - ・ 特約店の後継者不足
  - ・ 酒蔵のブランドイメージの形成
- } **新たな流通経路を考える必要がある**

## 6.まとめと考察



### 限定流通の課題への対応

- ・ 特約店との年間仕入れの矛盾
- ・ 特約店の後継者不足
- ・ 酒蔵のブランドイメージの形成



- ・ 新たな流通ルートの確保  
⇒ 通常とは逆のルートでの販売網の構築
- ・ 商品・地域・製造者理解の促進  
⇒ 「イモリ谷」はイベントに関わった人しか販売できない仕組み
- ・ 清酒を媒体として原料のコメや地域のこと情報発信  
⇒ 地域農業との運動制





トキハカード 来年7月と12月の2回払い手数料0クレジットセール開催中!

お歳暮ギフトセンター

トキハの体にやさしい贈り物  
お持ち帰りギフト  
お持ち帰りギフト  
お持ち帰りギフト  
お持ち帰りギフト

食品から家庭用品まで厳選329点  
送料無料でギフト

トキハの体にやさしい贈り物  
お持ち帰りギフト  
お持ち帰りギフト  
お持ち帰りギフト

食品から家庭用品まで厳選329点  
送料無料でギフト

品情報 11月30日(木)・12/6日(水)

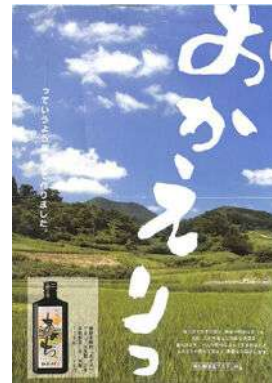
TOKIP

大分県内「棚田百選」の新米揃い踏み

お米の味を堪能  
お米の味を堪能  
お米の味を堪能

お米の味を堪能  
お米の味を堪能  
お米の味を堪能

お米の味を堪能  
お米の味を堪能  
お米の味を堪能



イモリ谷物語

イモリ谷物語  
イモリ谷物語  
イモリ谷物語

イモリ谷物語  
イモリ谷物語  
イモリ谷物語

イモリ谷物語  
イモリ谷物語  
イモリ谷物語

余谷物語

余谷物語  
余谷物語  
余谷物語

余谷物語  
余谷物語  
余谷物語

余谷物語  
余谷物語  
余谷物語



# 究極のマーケティング

—農・商・工・消連携—

# イモリ谷物語

—米作りから酒造り そして販売まで—



## 取り組みにかかわった人々

安心院松本集落米作り：荷宮英字、井福英一、中津留茂  
他 松本地区の皆さん  
酒造り責任者：杵築中野酒造 代表 中野勢三  
杜氏・蔵人：杜氏 小野東一 他蔵人一同  
販売責任者：県内榊トキハ 萩本健策 他一同  
県外福岡酒販  
安心院みのりや酒店大澤定則  
体験学習：大分大学宮町教授他学生一同  
別府大学立松先生他学生一同  
一般参加：お客様一同  
デザインコーディネーター：戸田裕(全日空商事)  
企画コーディネーター：OOTSU企画 大津雄慈  
事務所：杵築市街中野酒造 中野敦之

主催者：純米酒イモリ谷酒造り実行委員会

## イモリ谷物語打合わせ会議



イモリ谷米分・中野酒造・トキハデパート・コーディネータが今年の純米酒イモリ谷について計画を立てる。



会議は毎年3月後半 この年はマスコミが密着取材

## ステージ1 安心院松本イモリ谷 田植え 6月

安心院松本地区イモリ谷苦楽分の農家の方々の指導で今年の酒造りの酒米ひのひかりの田植えが始まる。泥まみれの子供たち、泥で文字書く学生。今年は何と外国からも参加者がいる。



今年は2列に並んで1反5瀬を皆で稲を植えてゆく



マイラベルになる写真だからいい顔で"パチリ"。



まるで一日だけの農家レストラン作る女性陣も気合が入るスローフード田舎料理が大人気



## ステージ2 安心院松本イモリ谷 稲刈り 10月

6月にみんなで植えた苗が大きく成長し黄金に染まった稲穂が目の前に広がるイモリ谷苦楽分の農家の方から指導を受け稲刈りが始まる。農作業後スローフードのお昼ご飯が楽しみ



10月上旬今年も黄金色に実った酒米の収穫が始まる



イモリ谷苦楽部の方の指導で稲を刈る"けがをしないように"。



汗をかいた後のごはんはおいしい



## ステージ3 杵築中野酒造 仕込み 11月

ステージは杵築の酒蔵に移る。10月に収穫したイモリ谷産ひのひかりが精米され5分付に磨かれて入荷。ぐっと冷え込んだ酒蔵から酒米を蒸す湯気がもくもくとあがる。参加メンバーは紙をタオルでぎゅっと巻き、手にうちわを持って蒸し米を待つ。



ぐっと冷え込んだ仕込みの朝は蒸し米からもくもくと湯気があがる



蒸し米をうちわであおぎ温度を下げタンクに仕込む



杜氏さんの指導で權をつく



## ステージ4 杵築中野酒造 初絞りパーティー

仕込から約1ヶ月12月初旬に純米酒イモリ谷が完成する初絞りのセレモニーの後、新酒披露パーティーがJASSのライブとともに杜氏・蔵人のあいさつより始まる。杜氏・蔵人の酒造りに感謝して大きな拍手が生まれる



初絞りを楽しむ会はまず杜氏・蔵人の酒造りを讃えるセレモニーから始まる



自分で作ったお酒を自分で飲みます。さいわいけれどじんわり温まる



パーティー会場は竹燈籠の道が続く



## ステージ5 純米酒イモリ谷 一斉発売

県内販売担当トキハデパートを初め、県外販売担当全日空商事、福岡地区販売担当福岡酒販、それぞれ一斉に各地区で発売。イモリ谷農家の方、中野酒造杜氏実行委員会が応援販売に参加、マイラベルを見る参加者の顔がうれしそうでも満足。一年間お疲れ様でした。



米を作ったイモリ谷代表荷宮さん、お酒を作った中野酒造杜氏の小野さんを始め実行委員がトキハ大分店別府店で販売



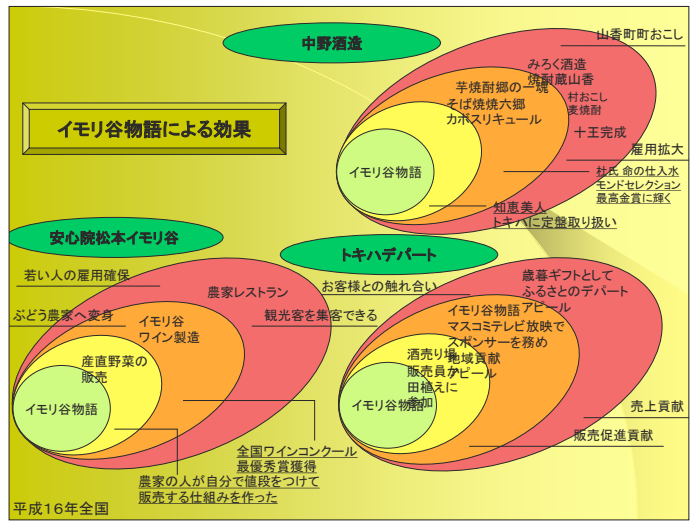
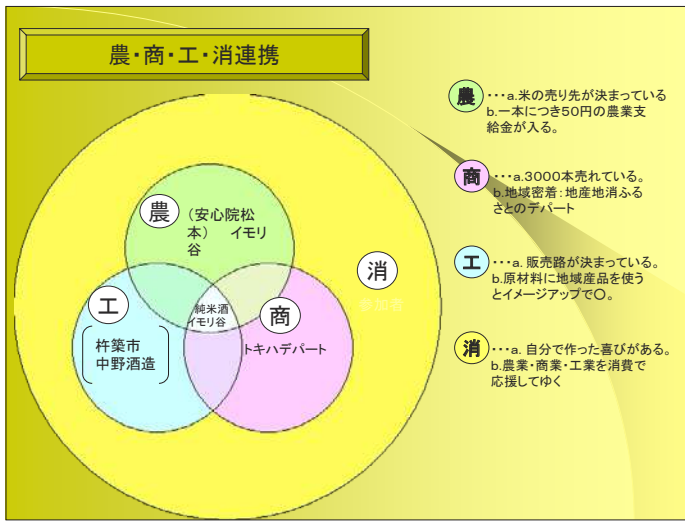
試飲販売をしながら今年の味を楽しむ



イモリ谷のマイラベルは予約のみ



トキハ本店地下お酒売場に純米酒イモリ谷が並ぶ





「別府大学夢米（ゆめ）棚田プロジェクト」のあゆみ

- ・2010年1月上旬：活動グループの名称を「別府大学夢米(ゆめ)棚田チーム」と決定（学生アンケート調査結果を受け、学長と相談）
- ・2010年1月14日：別府大学、大分県、大分農業文化公園による「大分農業文化公園棚田プロジェクト」と協定締結
- ・2013年5月：「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐地域の農林水産循環」認定
- ・2015年4月：**教養科目群学際科目「世界農業遺産体験学習」(通年2単位)を新設**
- ・2016年4月：上記科目を通年4単位に変更

活動の長期的目標

- ①活動を通し、食農教育を実践する。
- ②地域の農業、農村の活性化につながる活動を図る。
- ③世界農業遺産に認定された国東半島・宇佐地域について学び、大分県の魅力を学生の視点から独自に発見する。
- ④主体性や社会性、人間関係の構築の仕方を学び、大学生活ならびに社会に出る際の力をつける。

昨年度の活動目標

- ・全体的な活動 アクティブラーニング～世界農業遺産を知ってもらうために～
- ・**授業としてだけでなく各学科での学びを発展的させる活動を行っています！**
- ・発酵食品学科 夢米焼酎のPRを通して世界農業遺産の認知度を上げよう

夢米（ゆめ）棚田プロジェクトとは①

- ・若者の農業、農山村、環境問題、食と農に対する関心を高めることを目的に、大分県・別府大学・大分県農業農村振興公社の三者が連携して事業を展開。
- ・2010年にプロジェクト協定を締結し、大分農業文化公園の棚田で**ヒノヒカリ**を植え付けから収穫まで農業体験を行っている。
- ・世界農業遺産と組み合わせて近代化の中で失われつつある伝統的農業や農法、生物多様性、農村文化、農業景観などをどの様に伝え残すか学生主体で取り組む。

学生のサークル活動としてスタート。後に授業プログラムへ。

国東半島・宇佐地域の世界農業遺産認定

2013年5月30日「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐地域の農林水産循環」が、国際連合食糧農業機関（FAO）から世界農業遺産（Globally Important Agricultural Heritage System 略してGIAHS）に認定された。

世界農業遺産とは：  
食糧の安定確保を目指す国際組織「国際連合食糧農業機関（FAO）」が、近代化の中で失われつつある伝統的農業や農法、生物多様性、農村文化、農業景観などを維持保全している世界的に重要な地域を次世代に引き継いでいくため2002年に開始されたプロジェクト。

林浩昭『世界農業遺産について』より引用

昨年度の活動目標

- ・全体的な活動 アクティブラーニング～世界農業遺産を知ってもらうために～
- ・史学文化財学科 次の世代へ受け継ぐために、活動を継続して行う
- ・国際経営学科 若者とアグリカルチャー経営を結びつけるためにはどうするか
- ・食物栄養学科 自分たちが米について理解して、米の良さを知ってもらう
- ・発酵食品学科 夢米焼酎のPRを通して世界農業遺産の認知度を上げよう

過去の先輩たちは…

本格焼酎 別府大学夢香米（ゆめ）の完成（平成28年4月）  
3/11/2016

## 在籍時の主な活動内容

- 田植え
- 七島藺植え付け体験 & 浜干し
- くろだまる（黒豆）播種体験
- 日本酒用米刈り取り体験（いもり谷）
- 滋賀県棚田サミット
- 長野県棚田サミット
- 大分県農林水産祭
- 国東市街歩き



## 写真で見る今までの活動

### 国東市まち歩き



### 七島藺①



### 七島藺②



国東高校の学生と共に植え付け体験を行う様子。

### 七島藺③



七島藺の浜干し

### 大分県農業文化公園（るるパーク）での活動①



### 大分県農業文化公園（るるパーク）での活動②



クロダマル収穫



いもり谷での活動



いもり谷での活動～稲刈り～



中野酒造さんにて、日本酒仕込み体験



中野酒造さんにて、日本酒仕込み体験



七島蘭作家、岩切千佳さんの講演



大分県農林水産祭での活動①



大分県農林水産祭での活動②



### 大分県農林水産祭での活動③



### 大分県農林水産祭での活動④



### 棚田プロジェクトで学んだこと・感じた事

- 私たち学生が取り組んだ棚田での活動は、単なる農業体験ではなく、交流を通し地域の文化や自然と向き合う時間でした。
- この経験を通じて、棚田が未来へと続いていくためには、私たち若い世代が関わり続けることが不可欠だと感じています。
- 私たちの様な活動が全国に広がれば、棚田は単なる景観ではなく、地域の誇り・共通のコミュニティとして次世代に継承されていくと信じています。

ご清聴ありがとうございました！

## 第4分科会

## スマート農業で次世代に残したい農の豊かさ

コーディネーター 濱 侃氏 千葉大学助教

【濱氏】

皆様、こんにちは。

おおむね時間となりましたので、ただいまより第4分科会「スマート農業分科会」を始めます。

本日のテーマは、「スマート農業で次世代に残したい農の豊かさ」です。

これから2時間ほど、皆様にお付き合いいただければと思います。

私は、第4分科会のコーディネーターを務めます、千葉大学大学院園芸学研究院助教の濱と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

最初に、私の名前をご覧になって、「何と読むのだろう」と思われた方も多いかと思いますが、「侃」と書いて「あきら」と読みます。

この漢字で「あきら」と読む方に会われたことがある方はいらっしゃいますか。

何人かいらっしゃいますね。

名前の由来ですが、「侃々諤々（かんかんがくがく）」という熟語から取られています。

似た言葉に「喧々囂々（けんけんごうごう）」がありますが、「喧々諤々（けんけんがくがく）」と言われることがあります。

ただ、本来は「侃々諤々」が正しい表現です。

それが、私の名前の由来になります。

私は山口県宇部市の出身で、海を挟んだ向かい側が大分県になります。

もともと私は、農業を専門にしていたわけではありません。

地理が好きで、大学では地理学を学びました。

当時のテーマは、地下水、特に火山島の地下水のような内容でした。

その後、千葉大学の地球科学科に進みましたが、ちょうどその頃、ドローンが非常に普及し始めていました。

ドローンを使った研究を行う中で、ちょうど測りやすい対象として稲や水田を扱うようになりました。

そのため、私は博士号を持っていますが、博士（農学）ではなく、博士（理学）というのが自分のバックグラウンドになります。

その後、いくつかのポストドクを経て、現在は千葉大学園芸学部で助教を務めています。

専門分野としては農業気象学で、どこが栽培適地になっているのか、これから温暖化によって作物生産がどうなっていくのか、といったことを扱っています。

また、もともとの専門である地理学や、「物を測る」という分野も専門としており、生物測定学やリモートセンシング、つまり人工衛星などのデータを活用する研究も行っています。

このように、先進的な技術で植物を測ることが、私の専門になります。

そのような人間が、今回コーディネーターを務めます。

園芸学部という名称は少し特殊ですが、実際には農学部にかかなり近いものです。

大きな違いは、畜産があるかないかです。

畜産があると農学部、畜産がないと園芸学部、という違いになります。

千葉大学の園芸学部には、このようなキャンパスがあります。

園芸学部ということで、庭園のような空間もあり、季節になると大変きれいなツツジが咲きます。

そのような環境の中で、私たちは研究を行っています。

今回はスマート農業の分科会ですので、まずはスマート農業について簡単に説明したいと思います。

スマート農業とは何かというと、定義はいろいろありますが、基本的には先端技術を活用する農業のことです。

ロボットや人工知能、通信技術などを使って、農業をより効率的に、よりスマートにしていくものです。

期待されているのは、経営の合理化や生産性の向上であり、少人数で高効率に管理することが目指されています。

例えば、農林水産省の資料にもありますが、自動運転や作業負担の軽減、センシングなどがスマート農業の代表的なイメージです。

ロボットトラクター、水管理の自動化、自動で動く草刈機、ドローンの活用、タブレットでの栽培管理情報の確認などが、その具体例になります。

スマート農業という言葉は、皆さんも耳にされたことがあると思いますが、実はその取り組みはもう10年以上前から始まっています。

2013年頃には、「スマート農業の実現に向けた研究会」が立ち上がり、精密農業なども含めた取り組みが進められてきました。

その後、農業データを活用するWAGRIのような仕組みが整備され、2019年にはスマート農業実証プロジェクトが全国で始まりました。

さらに、2024年には関連する制度が法律化されるなど、大きな動きが起きています。

つまり、スマート農業は、すでに10年以上の積み重ねがある取り組みです。

その一方で、皆さんの身の回りを見たとときに、スマート農業が本当に普及しているのかと考えると、さまざまな思いがあるのではないかと思います。

スマート農業実証プロジェクトは、2019年から始まっていますが、当初はスマート農業を知ってもらうための実証事業として、水田からスタートしました。

そこから畜産や園芸にも広がり、さらに導入を促進する制度へと展開し、現在では、これをどのように海外へ展開していくかという段階にまで発展しています。

実際、全国各地でスマート農業実証プロジェクトが進められています。

水田作では地域ごとの採択件数も多く、最初の年は69件、その後55件と推移しています。

件数は減ってきているものの、日本全国でスマート農業の実証が行われており、皆さんの身近な場所でも何らかの取り組みが進んでいるかもしれません。

今回のテーマの背景として、スマート農業が強く意識しているのは何かというと、農業における担い手不足や生産者の高齢化、とりわけ人手不足だと思っています。

ただ、この人手不足は、もはや農業だけの問題ではありません。

日本全国、あらゆる産業に共通する課題だと言えます。

しかも、少子高齢化が進む中で、この問題は今後さらに深刻になっていきます。

人がどんどん少なくなっていく状況です。

例えば、帝国データバンクの整理した資料を見ると、人手不足を感じている企業の割合は、建設業で70%を超え、物流でも高い数値を示しています。

全業界でも半数を超え、農業でも言うまでもなく深刻な状況にあ

ります。

そうした中で、私たちに求められているのは、単に人が減るから仕方がないと受け止めるのではなく、少なくとも現状を維持し、できればさらに良くしていくことだと思います。

人が少ない中で、どうやってそれを実現していくかが、大きな課題です。

そのために、デジタルトランスフォーメーション、つまり先端的なデジタル技術によって人手不足を補っていかうというのが、スマート農業の基本的な考え方だと私は思っています。

ただ、今回のような棚田サミットの場合で考えると、これまで一般的に語られてきたスマート農業というのは、機械を導入しやすい、平坦で広大な農地を前提としたものが多かったのではないかと思います。

そうした場所では、機械化や自動化の効率がよく、導入もしやすいからです。

しかし、棚田は明らかにそうした条件とは異なります。

そのような中で、一般的なスマート農業の考え方を、そのまま棚田に当てはめてよいのか。

また、経済性や収益性を中心に考える方向性も、棚田には必ずしもなじまないのではないかと、個人的には感じています。

ただし、スマート農業でできることは、それだけではありません。

技術革新によって、省力化や高効率化が図られるだけでなく、安全性の確保につながる可能性もあります。

そうした技術をうまく活用できれば、棚田の維持に役立つのではないかと思います。

棚田は、食料生産の場であるだけではありません。

景観としても大切であり、人にとって残したい風景であり、地域の誇りでもあります。

そうした地域の風土や農の営みを支える場が棚田なのだと思います。

その営みを支える技術基盤として、新しい技術をうまく取り入れていく。

それですぐに何か解決するわけではないかもしれません。

しかし、それを支える助けになる可能性を秘めているのが、スマート農業ではないかと考えています。

私が考えているのは、「次世代に残したい」ということです。

それは、単なる農業生産の話ではなく、農業が持っている豊かさそのものです。

自分でおいしいものを作り、誰かに食べてもらい、「おいしい」と言ってもらえること。

そうした誇りやプライドも含めて、農の豊かさだと思います。

その豊かさを残すための取り組みとして、スマート農業を考えています。

今回、「次世代に残したい農業の豊かさ」というテーマで、2人の方に話題提供をしていただきます。

1人は、鹿島建設の山田様です。

鹿島建設では、皆さんが思い描くようなスマート農業の先端機材を棚田に導入しながら、棚田でどのようにスマート農業を活用できるのかということに、早い段階から取り組まれてきました。

その実際の事例を皆さんに聞いていただくことには、大きな意味があると感じています。

もう1人は、千葉大学の石大さんです。

気象データなど、今ではさまざまなビッグデータが使えるようになってきています。

その中で、日本の米を考えたときに重要なのは、やはり味ではないかと思っています。

主食そのものの味にここまでこだわるのは、世界的に見るとかなり珍しいことです。

そのような日本独特の風土を考えるうえでも、産地の特性を見ることは大切です。

しかも、今後ますます気象データの整備が進む中で、それが可能になってきています。

そうした取り組みについても、皆さんに聞いていただければと思います。

その後、総合討論とまとめを行います。

皆さんもすでに感じておられると思いますが、スマート農業だけで何か解決するわけではありません。

それぞれが営んでいる農業の現場には、それぞれの課題があり、それぞれに直面している問題があると思います。

それをどうすれば少しでも解決できるのか、どのような方法があるのかを、本日の話を聞きながら考えていただければと思います。

そのうえで、皆さんに自由で活発な議論をしていただき、それぞれが抱えている課題に対して、「こうすれば少し明るくなるかもしれない」と感じられるようなものを持ち帰っていただける分科会にできればと考えています。

それでは、早速ではありますが、このあと鹿島建設の山田さんから、「棚田でのスマート農業の取り組み」についてご発表いただきたいと思っています。

### 【山田氏】

ご紹介にあずかりました、鹿島建設サステナブルソサエティラボの山田と申します。

どうぞよろしくお願いいたします。

私からは、ご覧のテーマでご報告、ご説明をさせていただきます。

先ほど先生からお話があったとおり、現在、日本でスマート農業は非常に広がりつつありますが、その大部分は主に平地の大区画、たとえば水稲であれば1枚が数ヘクタールあるような大きな圃場（ほじょう）で広がっていると理解しています。

そうした中で、私もこのような場で何度か説明する機会がありましたが、「スマート農業を棚田で」と言った瞬間に、非常にアウェー感があるというか、「そんな狭いところで」「そんな条件の悪い場所で」「スマート農業を入れても難しいのではないか」といった雰囲気を感じる事が多くありました。

ただ、今日は午前中から非常に力強い皆さんのお話や、感動するようなお話も伺い、やはりこの棚田を何とか残していかなければならないという熱い思いを共有できたことで、本当にホームに戻ってきたような気持ちになっています。

こうして、棚田に関わる皆さんの前でお話する機会は、なかなかありませんでしたので、今日はとても話しやすいと感じています。

では、前置きはこれくらいにして、話を進めさせていただきます。

私が現在活動しているのは、新潟県十日町市です。

非常に雪が多い地域で、冬場には3メートルから4メートル積もるような豪雪地帯です。

いわゆる魚沼産コシヒカリの産地として知られている場所です。

私たちは、星峠地区と、主に本日ご紹介する三ヶ村地区で活動しています。

三ヶ村地区では、「ふれあいファーム三ヶ村」という農事組合法人が中心となっています。

いわゆる農業を請け負う法人ですが、比較的若い方々が中心となって立ち上げた法人です。

法人自体は土地を持たず、この地域の農地オーナーから土地を借り受けて、水稻栽培を行っています。

この法人は非常に意識が高く、エコファーマーの認定を受けているほか、このあとご紹介するスマート農業の導入にも取り組んでいます。

さらに、国が定める自然共生サイトであるOECMの認証も受けており、自然にやさしい地域管理にも積極的です。

加えて、水田のJ-クレジットにも取り組んでおり、水田の適切な管理を通じて気候変動の緩和に貢献しながら、収益向上にもつなげようとしています。

本当に先進的な取り組みに意欲的な地域だと感じています。

ただ、先ほど先生からお話があったとおり、この地域でも人口はどんどん減っています。

農地オーナーの方々も、もともと三ヶ村地区に住んでいた方が十日町駅前へ転居して通い農家になっていたり、東京や大阪へ移ったり、場合によっては海外へ行かれたりしており、なかなかコミュニケーションが取りにくくなっている状況があります。

地域の課題については、皆様がお話されている内容と重なる部分も多いと思いますが、この地域特有の事情もあります。

最近特に大きかったのは、近隣で営農を請け負っていた農業法人が、高齢化を理由に「もう来年からはやりません」と撤退することになったことです。

地区としては、これまで任せていた仕事をどうするのかという話になりますが、結局、受け手がいなければ委託することができません。

そうすると、必然的に休耕地が生まれます。

そして、一度休耕地になると、誰かが新たに引き受けてくればよいのですが、現実にはそのまま耕作放棄地になっていくことが多いという問題があります。

また、先ほどから話が出てるように、生産性の向上だけではなく、安全性も大きな課題です。

棚田は本当に山間部にありますので、田んぼで作業していても一日中誰にも会わないことがあります。

人よりも熊やイノシシに会うほうが多いくらいです。

そのような場所で1人で作業していて、万が一体調を崩してしまったら、どうにもなりません。

今なら携帯電話で助けを呼べばいいではないか、という話もあるかもしれませんが、この地域では携帯電話も圏外です。

おそらく、皆様が活動されている棚田の中にも、同じように携帯圏外の場所が多いのではないかと思います。

実際に、この地域では80代の方も現役で作業されていますし、1ターンで来られた女性の方も仲間として加わっています。

そうした方が、万が一体調を崩したとき、どうするのかという問題があります。

実際、4～5年前には、ご高齢の方が倒れられ、誰にも気づかれないまま4時間その場でうずくまっていたという事故もありました。

それ以来、2人作業をせざるを得ない場面も出てきましたが、ただでさえ人手が足りない中で、2人作業になるとさらに効率が落ちます。

それでもカバーしきれず、耕作放棄につながることもあります。

さらに、棚田の所有者が1人に集約されているわけではなく、さ

まざまな方がさまざまな枚数を所有しています。

どなたかが休耕地になってしまうと、その周囲の草刈りや水路管理を、周辺で営農している方々が引き受けざるを得ない状況になります。

そうすると、本来なら自分のところだけを管理すればよかったのに、草刈りや水路管理の手間が一気に増え、それがまた耕作放棄につながっていきます。

加えて、今年の台風もそうですが、近年は災害が激しくなっており、地すべりが起きて道路が封鎖されることもあります。

以前であれば「すぐ復旧しよう」という話になったのかもしれませんが、最近では「どうせ復旧しても後継ぎがない」「あと4～5年しか続けられないかもしれない」という、非常に悲しい声も出てきています。

そうした問題に、どう対応していくかが問われています。

もちろん、スマート農業だけで、こうした課題がすべて解決するわけではありません。

それでも、スマート農業が棚田の再生や、棚田を持続的に営んでいくための1つの支援策になる可能性はあるのではないかと考えています。

私たちは、「住み続けられる棚田地域づくり」というコンセプトのもとで活動しています。

棚田そのものを維持するためには、その地域に人が住み続けられる仕組みを考える必要があるのではないかと考えています。

棚田については、皆様のほうがよくご存じだと思いますが、改めて確認しますと、平地の水田と比べて、棚田は形が不整形で、道路や水路の条件も厳しく、面積も非常に狭いという特徴があります。

平地の水田であれば、道路や水路が整備され、圃場の形も四角く、大型機械も使いやすい。

一方、棚田は形がいびつで、それが美しさにもつながっているわけですが、機械作業という観点では非常に厳しい条件です。

数アールしかないような圃場も珍しくありません。

そのため、大型機械の導入が難しいなど、機械化にさまざまな制約があります。

また、防災の面でも、一般に水田が耕作放棄されると、地すべりのリスクが6倍に高まるというデータもあります。

一方で、ボランティアや企業のCSR活動で営農を支援する取り組みも各地で行われていますが、それだけで解決できる問題ではないとも感じています。

ここで、防災の話を少し申し上げます。

私たちが活動しているもう1つの場所、星峠という地区では、棚田の広がる場所が新潟県の地すべり指定区域とほぼ重なっています。

つまり、棚田はもともと地すべりリスクの高い場所に立地しているということです。

棚田の歴史を考えると、かつて農家の次男、三男の方々が新田開発として山に入り、水田に適した場所を探しました。

当時はブルドーザーやバックホウのような機械が使えない時代だったので、地面から水がしみ出ているような場所、つまり水が確保できる場所を棚田の適地として選んだと考えられています。

この地域では、特にその傾向が強いです。

しかし、水がしみ出るといことは、水の確保には都合がよい一方で、地すべり地帯とも重なっているということです。

つまり、棚田は災害リスクの高い場所に立地しているとも言えます。

逆に言えば、営農を続け、柵田として維持しているからこそ、防災リスクを低減できているという見方もできるのではないかと思います。

研究でも示されていますが、柵田として耕作されている水田は、代かきによって止水性が高まり、雨が降っても水がゆっくりとしか浸透しません。

さらに、法面の草刈りや補修も行われるため、地盤が安定しています。

一方、休耕田になると、代かきもしないため止水性が低下し、水がどんどん入り込むようになります。

モグラやネズミも入り、草刈りもしなくなるため、西日本なら石積み、東日本なら土坡が崩れやすくなり、地すべりリスクが高まっています。

そして、一度そうになってしまうと、元に戻すには非常に大きな労力が必要になります。

そうした意味でも、柵田は柵田として守っていく必要があると考えています。

柵田には、食料生産や水の供給といった供給サービスだけでなく、防災のような調整サービスもあります。

田んぼダムのように、雨が降った際に一時的に水をため、下流域の水害リスクを軽減する機能もあります。

また、土砂災害や地すべりの防止、近年問題となっている気候変動の緩和にも役立っています。

こうした調整サービスは、非常に大きな役割を果たしています。

さらに、見落とされがちですが、文化的サービスも大きな価値を持っています。

日本人の生活文化は、しめ飾りや稲わら、はさかけの風景など、稲作と深く結びついています。

私たちが活動している地域では、「田毎の月」という文化があります。

三ヶ村の隣の三ツ山地区では、毎年「田毎の月観月会」が開かれています。

月が出ると、田んぼに月が次々と映り、蛍のように移動していく、本当に美しい風景が見られます。

しかし、耕作放棄が進めば、水を張らなくなるため、この観月もできなくなってしまいます。

この観月会のために、都会へ出た人が戻ってきて道を整備したり、地域の高齢者が上がりやすいよう協力したりと、地域全体で支えています。

テレビ局も取材に来るような、本当にすばらしい文化です。

このような価値は、簡単に定量化したり金銭化したりすることはできません。

それでも、一度失ってしまうと、二度と元に戻せないものです。

だからこそ、何らかの対策が必要であり、そのためにスマート農業が役立つのではないかと考えています。

防災の面でも、私たちは土木建築会社として、本業の防災技術者とともに研究を進めています。

十日町市三ヶ村の田んぼが耕作放棄された場合、下流域の水害リスクがどの程度上がるのかについて、現在3年間にわたってデータを取っています。

田んぼだけでは影響が限定的でも、ため池とセットで考えると、豪雨時のピーク流量を抑える効果が非常に大きいことが、毎年のモニタリングで見えてきています。

そうした点でも、柵田の機能は非常に重要だと考えています。

また、生物多様性についても、自然共生サイトへの登録を目指して生物モニタリングを進めています。

しかし、防災機能については、三ヶ村の皆さんが一生懸命に営農し、水をしっかり止めているからこそ、下流域の人々が水害リスクの低減という恩恵を受けているにもかかわらず、そのことが十分に認識されていません。

私たちは、これは一種のフリーライド構造ではないかと考えています。

もちろん、多面的機能支払交付金のように税金による支援はありますが、十分とは言えません。

下流域が受けている恩恵に対して、どうやって公平に収益や金銭的メリットを柵田側へ還元していくかは、大きな課題です。

実際、損害保険会社の方からも、「柵田を守ることで水害が減り、保険金の支払いが減るのであれば、そこにお金を払ってもよいのではないか」といった意見も出ています。

本当に、さまざまな立場の人たちと意見交換をしながら進めていかなければならない話だと思っています。

少し前置きが長くなりましたが、もう1つ、柵田のマネタイズという意味で、J-クレジットの話があります。

これは2023年に制度が始まりました。

水稲栽培では中干しを行います。その中干し期間を通常より7日間延ばすと、メタンを発生させる菌の活動が抑えられます。

その結果、削減されたメタン分が温室効果ガス削減の効果としてクレジット化されます。

そして、そのクレジットを、炭素を大量に排出している電力会社やエネルギー企業などが買い上げる仕組みになっています。

これも本当に微々たるものではありますが、柵田の収益を上げる一つの手段にはなっています。

また、この中干し期間延長の方法は、実は圃場整備されていない場所のほうが非常に有利です。透水性が悪い田んぼほど係数が高くなり、たくさんのクレジットが発生できるような制度設計になっていますので、そういった面からも柵田は有利ではないかと思えます。

この話も長くなってしまいますので、このくらいにしておきますが、今お話ししたように、さまざまなことに取り組みながら、私たちが柵田が持続できるように、住み続けられる柵田づくりのために総力戦で進めています。その中で、一番可能性が高く、また効果が大きいのが、スマート農業技術の導入ではないかと考えています。

細かい技術の話は、この次以降のページでご説明していきます。技術については、お手元の資料でもお配りしていますし、各種報告会やWebなどでも公開していますので、ご関心のある方は個別の技術についてもご覧いただければと思います。

私自身、この取り組みを始めてから非常に感じていることがあります。先ほど濱先生からもご紹介があったとおり、スマート技術さえ入れればよい、というものではありません。例えば、長野でうまくいったスマート技術が、私たちのいる新潟でそのままうまくいくとは限りませんし、逆に新潟でうまくいっているものが大分ではうまくいかかもしれません。本当に条件次第だということです。

その条件というのは、斜度であったり、水利施設の状況であったり、担い手がどういう方なのかといったこともあります。ただ、それだけではなく、これから営農していく方々、あるいは今現在営農されている方々が、どういう柵田にしていきたいのか、その思いをどう重ねていくかということにも関わっているのではないかと考えています。

私たちは、このスマート農業技術について、「こんなに良い技術

があります」「これをやれば大きく時間が削減できます」「楽になります」といった形で一方的に押しつけても、うまくいかないということを、この6年間で非常に学ばせていただきました。

この地域は、冬の間は雪に埋もれて何もできませんので、その時期にワークショップを行っています。本当にベテランで地域のことをよく知っているご高齢の方から、地元の小学生まで、少ないながらも次世代の方にも入ってもらって、それぞれに「自分たちの田んぼを、棚田を、どうしていきたいか」という意見を出してもらっています。

ご高齢のベテランの方からは、「昔はこうだった」とか、「ここでは実はおいしい山菜が採れる」といった話も教えていただきながら、どういう棚田にしていくのか、そしてどういう技術があれば助かるのか、あるいは安全性も含めて何が課題なのかということ、みんなで共有しながらスマート技術の導入を進めているところで

す。ワークショップをやってみると、私たちは小さな集落なので、皆さんお互いに情報を共有しているのかなと思っていたのですが、意外にも、地域の方でもお隣の方が何をしているのか分からない、隣の農家がどういう作付けをしているのかよく分からなかった、ということもありました。そうした意味でも、コミュニケーションや情報共有は非常に重要だと感じています。

ここから実際のスマート農業の話に入ります。私たちは令和2年度に、農林水産省のスマート農業事業に採択され、2年間その事業を行いました。ただ、その前にも農政ルネッサンス事業という別の枠組みがあり、そこでもスマート農業に取り組んでいました。また、その農水の事業が終わった後も、自主研究として現在まで継続し、スマート農業を使うことでどの程度生産性が上がるのかというデータを取り続けています。それを、防災に関するデータなどとも合わせて蓄積している状況です。

資料にあるとおり、経営栽培から耕起整地、雑草防除まで、営農体系に沿ってさまざまな技術を試しています。本当に「これは使える」と言えるものもあれば、「これは導入コストに対して効果が低すぎる」と、逆にお叱りを受けたものもあるという状況です。

まず、スマート農業を導入するうえで大きな課題となったのが通信網です。先ほど申し上げたとおり、この地域は携帯電話が圏外です。通信会社にもいろいろお願いしましたが、携帯圏内にするのは難しいということでした。棚田地域には、こうした場所が多いと思います。

そこで活躍したのが、LPWAという通信網です。これはローパワー・ワイドエリアの略で、非常に少ない電力で動かせる通信方式です。小さな太陽光パネルを付ければ動くような仕組みで、センサー兼受信機のようなものを田んぼに一定間隔で設置し、それ自体を通信ネットワークとして使っていきます。

こうした仕組みをつくることで、遠隔操作や、水位の確認、各種データの取得といったことが可能になります。つまり、このLPWAが、さまざまなスマート農業技術の土台になっているということです。

それ以外にもいくつかの技術がありますが、最初に取り組んだのは、安全面に関するものでした。携帯電話が圏外なので、事故があったときに連絡が取れないという問題があります。そこで、建設現場などでも使われているような見守り技術を応用し、あるメーカーにお願いして専用端末を作ってもらいました。

最初は腕時計型で試したのですが、汗をかいて作業にならない、水の中に手を入れる作業もある、といったことから、これは無理だ

ということで、首から下げる方式に変更しました。そこにいくつかボタンが付いていて、SOSボタンや、「そこまで緊急ではないけれど少し相談があるので寄ってほしい」といったボタンを押すと、テキストメールで仲間に伝わる仕組みをつくりました。これは非常に評判が良かったです。

実際に「使って良かった」というだけでは説得力に欠けるので、避難訓練のような実験も行いました。以前、ご高齢の方が4時間ほど発見されなかった事故があったため、それと同じような状況を想定し、ダミーの病人役の方に棚田の見つかりにくい場所へ行ってもらい、SOSボタンを押してもらいました。そして、ボタンが押されたから何分で救援に行けるかを、2回ほど検証しました。

確か、1回は30分程度、もう1回は10分程度だったと思います。そのくらいであれば十分対応可能ではないか、という感触でした。この仕組みのポイントは、ボタンを押すと、その人がどのセンサーの近くにいるかも一緒に通知される点です。ですので、そのセンサー周辺を探せば、SOSを求めている人を見つけることができます。

次に、水管理に関する話です。給水、排水、水位観察に関わる技術です。水位や水温を監視するセンサー、自動給水装置なども試しました。たとえば、自宅にしながらスマートフォンで「この田んぼに水を入れる」と指示すると、自動でゲートが開き、水が入る。逆に「もう十分入ったから閉める」と指示すると止まる、といった仕組みです。

ただ、この自動給水装置は、メーカーが製造をやめてしまいました。おそらくコスト面の問題もあったのではないかと思います。一方で、非常に役に立ったのは水位の管理です。

棚田は、平場の圃場と違って、小さな田んぼが分散して点在しているため、水の見回りが非常に大変だという声がありました。実際に農家の方に同行すると、毎朝4時に起きて軽トラックで自分の圃場を巡回し、朝4時から8時過ぎまで、朝食前に水の見回りをするという状況でした。

しかも、ほとんどの田んぼは問題なくても、棚田では1枚1枚、透水性や止水性が異なります。水が抜けやすい田んぼもあれば、そうでない田んぼもある。そのため、すべてを確認しなければならぬのです。これを2日から3日かけて一巡するような形で回っており、非常に多くの時間が割かれていました。

ところが、このセンサーを付けたことで、家の近くの圃場は目で見れば済みますし、とくに遠くの圃場、山の向こう側にあるような見に行くのが大変な場所については、現地まで行かずに管理できるようになりました。その結果、非常に大きな時間削減につながり、その時間を別の作業、たとえばトラクターの点検などに充てることができるようになりました。これは非常に喜んでいただきました。

ただし、この地域は豪雪地帯なので、冬になるたびにセンサーを取り外し、また取り付けなければならないという課題があります。また、アライグマにかじられることもあり、「色を変えたほうがいいのではないか」といった話も出ています。そうした課題を抱えながら進めているところです。

実際に、水管理の回数は、多いところでは8割程度減りました。ただし、これも条件によります。棚田であっても、拠点からすべての圃場が見渡せるような場所であれば、現地に行かずとも確認できるため、こうした技術は不要かもしれません。一方で、林があったり、山を越えなければならなかったり、見えない圃場が多いような場所では、非常に役立つ技術だと思います。したがって、棚田ごとの状況によるものとして理解していただければと思います。

次に、ドローンについてです。ドローンは、導入すれば早く、安

定していて、非常に便利です。ただし、導入には操縦資格の取得や初期費用も必要になります。そこで、2つの法人でシェアして導入する形を取っています。

この地域では、実はドローンを導入せざるを得ない事情もありました。もともとはラジコンヘリの業者に農薬散布などを依頼していたのですが、「棚田地域は面積も狭く、お金にならない」ということで撤退してしまったのです。そうなると、その周辺産業の撤退によって、農作業が一気に大変になります。そこで、自分たちでドローンを導入して対応しようということになりました。

導入後は、三ヶ村だけでなく、周辺地域からも「うちでも飛ばしてほしい」という依頼が来るようになり、それが新たな収益にもつながったと聞いています。

また、ドローンは葉色診断にも活用しています。夏場の施肥をどうするかという場面で、平地の田んぼであれば、土壌や生育状況が比較的そろっているのでも、「この圃場にはこれくらい施肥しよう」「こちらは今回は不要だろう」と判断しやすいのですが、棚田は切土や盛土が多く、同じ圃場内でも生育に差が出やすいという特徴があります。

稲が育ってくると、圃場の真ん中に入って葉の色を見るのは難しくなります。これまでは道路際の見やすいところだけを見て、「この圃場は施肥しよう」「この圃場はいらない」といった判断をしていたそうです。

しかし、ドローンで上空から撮影することで、たとえば中央部は十分に分げつしているから施肥は不要、際だけ施肥しよう、といった細かな判断ができるようになりました。これによって、費用の削減にもなり、作業負担の軽減にもつながったと聞いています。

次に、均平化の話です。棚田では、田寄せによって人力で田んぼを広げてきた経緯があり、盛った土は沈みやすく、切った場所は比較的安定するため、どうしてもでこぼこになりやすいという問題があります。さらに、この地域は雪が非常に重いので、その影響もあります。

そこで、まずは不陸、つまりでこぼこ状態を可視化するというところを行いました。一般的には、水を張って高低差を見る方法が取られますが、水を張った後に土を動かすのは非常に大変です。何度もトラクターで代かきのような作業をしなければならず、負担も大きくなります。

そこで、あらかじめ高さを把握したうえで、建機用の小型ブルドーザーを使い、1センチ未満の精度で仕上げる実験を行いました。すると、毎年不陸が生じていた田んぼでも、3年前に施工した場所はいまだにかなりきれいな状態を保っており、非常に喜んでいただいています。こうした技術も、合う場所には非常に有効だと感じています。

一方で、法面の除草については、うまくいかなかった代表例があります。当時導入したラジコン草刈機は、法面の傾斜がきつすぎると、少し濡れているだけで滑ったり転がったりしてしまい、かえって時間がかかってしまいました。そのため、この時点では断念しました。

ただし、高齢者や女性の方々も担い手として大切な戦力になっていく中で、刈払機ではなくラジコン草刈機であれば作業しやすいのではないかと、大きな期待が寄せられていました。

そこで現在は、ラジコン草刈機が使える圃場自体に改良できないか、という方向で考えています。たとえば、U字溝の開渠だと避けながら草刈りをしなければなりません。暗渠にできれば非常に作業しやすくなります。ちょうど一昨年、新潟県が棚田再生事業を立

ち上げてくださり、その中でスマート農業に対応した圃場へ改良していただけることになりました。

このように、スマート農業は単体で完結するものではなく、圃場条件そのものを見直すことも含めて取り組んでいく必要があると考えています。

私たちが今、非常に面白いと感じているのは、実はここから先の話につながるのですが、私たちの会社では現在、宇宙開発、すなわち宇宙での建設事業にも取り組んでいます。

これから50年先を見据えて研究開発を始めたところなのですが、月に基地をつくり、人間が永続的に暮らしていくためには、やはりこうした緑や生態系、自然の存在が不可欠です。

コンクリートに囲まれたような環境の中で1年間過ごすというのは、非常に厳しいことですので、そうした自然的な要素がどうしても必要になります。

その中で、今、棚田で私たちが集めているさまざまなデータが活用できるのではないかと、意見交換を始めたところです。

つまり、棚田というのは、一見すると最も古い形というか、非常にアナログなものに見えるのですが、もしかすると一周回って、時代の最先端にある存在になっている可能性もあるのではないかと感じています。

少し長くなってしまいましたので、このあたりは簡単に申し上げますが、昔の棚田というのは、自然資源を最も上手に活用する仕組みであり、自然資本を生かす代表的な存在だったのではないかと思っています。

一方で、今の社会は、せっかく持っている自然資源を放棄してしまい、その結果として自然資本が損なわれています。

それによって、経済活動そのものが大きく制約を受けているのが、今の時代なのではないかと考えています。

やはり、棚田のように、もともと存在しているながら、その価値がまだ十分には分かっていないものを守ることによってこそ、私たちの経済活動も維持でき、持続可能なものにしていけるのではないかと考えています。

そういう意味で、本当に最後になりますが、現状としては、やはり所得が低く、担い手が不足しており、皆さんの善意に頼って成り立っている部分も少なくありません。

しかし、そのままでは耕作放棄地が増え、地域の産業もさらに低下していく、というのが今の現状だと考えています。

そして、防災面も含めて状況が悪化していく中で、スマート農機だけではなく、さまざまな手法を組み合わせる総力戦で取り組むことで生産性が上がり、1人が管理できる棚田の面積や範囲も広がっていきます。そうして収入が上がれば、地域に住み続ける人も増え、防災面でも良い方向に働き、地域そのものが元気になるのではないかと。そうした仮説のもとに、今このような活動を進めています。

少し長くなりましたが、私からのご報告は以上です。

ありがとうございました。

### 【濱氏】

山田さん、ありがとうございました。

本当に、ご自身が取り組んでいる棚田を心から大切に思っておられることが伝わってくるお話でしたし、棚田の歴史から実際の導入事例まで丁寧にお話しいただきました。

せっかくの機会ですので、今回、山田さんのお話をお聞きになって、何か聞いてみたいことなどがありましたら、ぜひ挙手をお願いいたします。

このあと、もう1件発表があった後に、総合討論やまとめの時間もありますので、そのときでも構いません。

今の段階で何かお聞きになりたいことがある方は、ぜひお願いいたします。

【質問者】

ご発表ありがとうございました。

東京農工大学の野口と申します。

通信ネットワークのLPWAについて少し質問なのですが、これは用途として、今後スマート農機などを使っていくにあたってのネットワーク構築、という理解でよろしいでしょうか。

【山田氏】

まさにそのとおりです。

先ほどの説明が少し不十分でしたが、見守りシステムも、SOSボタンを押しても携帯圏外では届かないところを、LPWAで拾って携帯網に載せ直し、他の方に届ける仕組みになっています。

また、水位センサーも、水が10センチとか12センチといったデータが取れていても、それを飛ばす手段がなければ意味がありません。そこでLPWA網を使い、そのネットワークを経由して一度インターネット上にデータを上げ、そこからデータを取り出して、自宅スマートフォンから確認できるようにしています。

つまり、スマート技術の基本は、個々のセンサーが取った状況を離れた場所でも把握できることにあります。たとえば、今ここにも新潟の水位を見ることができず、極端なことを言えば、海外旅行中でも水の状況が分かるわけです。そうなれば、「隣の人に少し水を入れておいてもらえませんか」とお願いすることもできます。そうした点が非常に大きな利点だと思っており、私たちはまず最初にLPWAの整備から始めました。

【質問者】

ありがとうございます。

関連してもう1点お尋ねします。

スターリンクのような通信手段については、今後活用される可能性があるのでしょうか。また、LPWAは通信容量が限られていると思いますが、そのあたりはどのようにお考えでしょうか。

【山田氏】

ありがとうございます。

まさにその点は、私たちも次の開発段階だと考えていて、スターリンクについては今、実験を始めたところです。正直に申し上げると、使えるのであればスターリンクのほうがはるかに良いです。

ただ、やはり非常に高額です。もともと棚田は収支が厳しい中で、スターリンクの通信費を継続して負担できるのかという課題があります。安全見守りシステムのような用途については、もしかするとそちらのほうが適しているかもしれませんが、現時点ではまだコスト面で見合わないと感じています。今後、どこかでうまく移行していくことになるのではないかと考えています。

また、LPWAの通信容量が非常に限られているというのも、ご指摘のとおりです。そのため、音声通話のようなものはなかなか難しいです。一方で、水位や温度のような数値データであれば容量が小さいので、問題なく送信できますし、SOSの際も音声ではなくテキストメッセージにすることで、容量を抑えて送ることができます。

その意味では、少し工夫が必要であり、それが使いにくさでもあ

るのですが、一度設置してしまえばコストがゼロ円になるという強みがあります。そこが、この仕組みの大きなメリットだと思っています。

【濱氏】

ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

【質問者】

本日はありがとうございます。

単純な疑問としてお伺いしたいのですが、鹿島さんのような日本を代表するスーパーゼネコンが、このように棚田を対象に研究活動へ取り組まれている動機について、また、これからこの成果を踏まえて御社でどのように研究成果を活用していくのか、その点を教えていただけないでしょうか。

【山田氏】

ありがとうございます。

端的に言えば、私自身が棚田を好きだった、ということに尽きるのかもしれませんが、ただ、それだけでは答えにならないと思いますので、もう少しきちんとお話しします。

私たちのラボは、会社から「持続可能な社会を研究する」というテーマを与えられており、現在は棚田と森林を研究対象にしています。日本の国土の約7割を占める森林についても、実は棚田の問題と森林の維持管理の問題は密接に関わっています。本日は詳しくご紹介しませんが、三ヶ村でも山のオーナーが森林を十分に管理できていないため、落ち葉が田んぼに入って大変だったり、日陰ができて支障が出たりといった問題があります。そのため、この両方を一体的に考えていかなければならないと思っています。

結局のところ、私たちの考え方としては、今ある棚田、すなわち非常に価値の高い棚田が保全され、維持されていることによって支えられている何かがあり、その棚田が失われることによって、じわじわと影響が出てくるのではないかと考えています。

先ほど申し上げたように、たとえば上流部で棚田がなくなること、下流域の水害リスクが高まる、といったこともあると思います。

そうしたことを見越して取り組んでいかなければならないと考えています。

必ずどこかで関連しているはずですし、逆に言えば、それをマネタイズする、つまり収益化していくことは、私たちのような民間企業が比較的得意とするところでもあります。

もちろん、私たち自身の収益ということもありますが、それ以上に、農家の皆様がきちんと収益を上げられるようなビジネスモデルを考えることが、私たちのミッションだと考えています。

その点については、私たちだけで進めるというよりも、皆さんと意見を合わせながら、一緒に考えていかなければならないところだと思っています。

実際、私たちも最初はCSR活動として、ボランティアの形で取り組んでいました。

今も継続してはいますが、社員が田植えに行ったり、稲刈りを手伝ったり、そういった活動を行っていました。

ただ、それではどうしても本当に小さな面積しか対応できないんですね。

その一方で、すぐ横ではどんどん休耕地が広がっていくという現実を目の当たりにしました。

そうすると、やはりこれはビジネスとして成り立たせる、あるいは通常の産業として組み立てていかなければ、どうにもならないのではないかと感じるようになりました。

そのため、かなり長期的な視点にはなりますが、棚田を防災インフラとして位置付けていくこと、そしてその結果として、場合によっては保険会社がそこに対してお金を支払うような仕組みも考えられるのではないかと考えています。

もちろん、そのためには私たちがきちんと提案できるような形にしていかなければなりません。

そうしたことをミッションとして、今、仕事に取り組んでいるところです。

### 【濱氏】

ありがとうございました。

非常に興味深いお話だったと思います。

それでは、次の話題提供に移ります。

続いては、千葉大学の大石さんからご発表いただきます。

気象データとお米の食味との関係について、よろしく願いいたします。

### 【大石氏】

皆様、はじめまして。

千葉大学大学院修士1年の大石耕太郎と申します。

本日はよろしく願いいたします。

私は大学院での修士研究として、気象条件とお米の食味がどのような関係にあるのかについて解析を行っています。

今回は、気象データについて全国規模のビッグデータを用いながら、実際にお米の食味とどのような関係があるのか、その解析の流れを皆さんに知っていただければと思っております。

本日の目次は、このようになっております。

まず、私がどのようなルーツを持ち、なぜこのお米の研究に至ったのかという点を知っていただき、その後、第2章、第3章、第4章と、私の研究の内容について詳しくお話ししたいと思います。

まずは自己紹介です。

私は千葉大学大学院園芸学研究所に所属しておりますが、出身は大阪府豊能郡能勢町です。

能勢町がどのようなところかといいますと、大阪の地図で見ると最北端に位置しており、「大阪のてっぺん」などと呼ばれています。

その能勢町にも、実は棚田が有名な地域がありまして、「長谷の棚田」という、棚田百選にも選ばれている棚田があります。

皆さん、ご存じの方はいらっしゃいますかね。

ありがとうございます。

そんな私ですが、実家は米農家で、私はその一人息子です。

実際に家の田んぼでは「きぬむすめ」を育てており、このような田んぼで栽培しています。

今年は新しく、「ゆうだい21」という品種にも挑戦してみました。

この「ゆうだい21」は、最近、食味コンクールなどでもよい評価を受けている品種なのですが、実際に作ってみた感想としては、草丈が140センチほどになり、私の首くらいまでくるような高さになる品種でした。

おいしいお米が取れるという期待がある一方で、栽培のしやすさという点では、あまり評価が高くない品種でもあります。

今回は、四日市での大雨が記憶に新しいかと思いますが、そのとき大阪でも大雨が降ってしまっていて、実が十分に充実する前に倒れて

しまったんです。

そのため、今年は一粒一粒が小さくなってしまい、来年はあまり使わないかもしれない、という話を親としていました。

私は昔から、実家のお米はとてもおいしいと感じていました。

そして、棚田のお米がおいしいと言われている理由についても、感覚的にはそう思うのですが、実際にはうまく説明できない、ということを感じていました。

それで、科学的な根拠を知りたいと思い、千葉大学に進学することにしました。

今、「きぬむすめ」と「ゆうだい21」という品種をご紹介しますが、3年前までは「キヌヒカリ」を使っていました。

このキヌヒカリをやめた理由としては、温暖化や夏の猛暑の影響で、お米に白未熟粒が増えてしまったことがあります。

家庭で食べる分には、そこまで大きな影響はないのですが、実際に消費者に販売するとすると、品質の悪いお米はどうしてもビジネスになりません。

これが今後も続いていくと考えると、やはりキヌヒカリは作り続けられない、ということになり、使用をやめました。

これまで行ってきた作付計画や品種の選定を見直す必要があるのは、私の家だけではなく、全国的にも喫緊の課題として扱われていることではないかと思っています。

ここ2年のお米の価格高騰や、今後さらに気候変化が進んでいくことを考えると、栽培環境とお米の品質の間にあるメカニズムは、必ず理解しておかなければならないのではないかと思います。

また、今は収量の話がニュースでもよく取り上げられていると思いますが、先ほど濱先生をご紹介いただいた際にもあったように、食味も必ずセットで考える必要があるのではないかと私たちは考えています。

そこで、米の食味と気象条件との関係がどのようになっているのかを解析することを、研究テーマとするに至りました。

では、おいしさを評価するとなったときに、統計で扱うためには数値化する必要があります。

「おいしさ」というものは非常に複雑なのですが、それをどのように数値化していくのか、という点についてご紹介したいと思います。

おいしさを評価している団体としては、「食味試験」を行っている団体があります。

大きく分けて2つあり、日本穀物検定協会と、米・食味鑑定士協会です。

どちらも似たような食味試験を行っていますが、対象としているものが異なります。

日本穀物検定協会は、各県や各地域など、地域ごとのサンプルを対象においしさを評価しています。

一方で、米・食味鑑定士協会は、個人の生産者を対象にしているという点が大きく異なります。

この違いについて、少し詳しくご紹介します。

まず、日本穀物検定協会の場合です。

こちらは「食味ランキング」という形で、先ほど申し上げたとおり、各地域の代表的な産地のお米を評価しています。

各地域には、それぞれ代表的な産地があると思いますが、その産地のお米を取り寄せて、専門家の方々が実際に食べ、基準となるお米と比べてどのようなおいしさの違いがあるのかを評価します。

そして、その結果を特A、A、A'といった形でランク付けしていきます。

こちらは2018年のデータですが、新潟や北信越など、いわゆる日本の米どころとされる地域では特A評価を受けており、そこからだんだん緯度が下がっていくにつれて、黄色の地域はAランク、赤い地域はA'ランクというように、南へ行くほど評価が低くなる傾向が見られました。

このデータを見て、私たちは、明確に緯度が下がるにつれて評価が下がっていることから、そこには必ず地域差があり、やはり気象条件と強い関係があるのではないかと推測しました。

ちなみに、特A評価を受けたお米は、米袋にこのように記載することができます。

その結果、消費者の方は「これはおいしいお米だ」と安心して買うことができますし、ブランド化や販売時の市場価格上昇も期待できるため、今後、おいしいお米を評価していく上では非常に重要な要素になってきます。

ただし、おいしさに点数をつけるということについては、実際に食べて評価するだけだと、どうしても採点者の主観が入りやすく、非科学的な要素も多くなってきます。

また、同じAランクと評価されているお米の中にも、そのランク内でよりよいものとそうでないものがあり、ばらつきが生じてしまいます。

さらに、先ほど申し上げたように、各地域で1つだけサンプルを取って評価しているため、地域内でのばらつきや、広域的なデータが十分ではありません。

そのため、統計的な正当性という意味では、やや弱い部分があり、食味ランキングのデータを用いて統計解析を行ったり、食味評価のモデル化を行ったりするのは難しいのではないかと考えました。

これまでは、この食味ランキングのデータを用いて、気象条件と食味評価の関係を何とか解析できないかと考えていたのですが、新たに「米・食味分析鑑定コンクール」というものを知りました。

こちらは、腕のある個人の生産者が対象になっており、しかも全国各地から集まるため、サンプル数が非常に多いコンクールです。

昨年は4,500を超えるサンプル、2年前は5,300弱のサンプルが集まっています。

人の手で食味試験を行うとなると、どうしても人手が足りなくなりますので、このコンクールでは「食味分析計」という機械が用いられています。

食味分析計では、お米を機械に入れることで、その成分を推定します。

具体的には、タンパク質、アミロース、脂肪酸度という3つの指標をもとに、そのお米がどれくらいおいしいかを評価しています。

では、なぜこのタンパク質、アミロース、脂肪酸度の3つがおいしさと関係しているのかについて、ご説明します。

まず、タンパク質についてです。

タンパク質が多いお米は、炊飯したときにデンプンの糊化を阻害し、水分吸収が低下することが知られています。

その結果、タンパク質が多いお米は食べたときに硬くなりやすく、評価が低くなる傾向があります。

次に、アミロースについてです。

アミロース含有率という名称ですが、実際にはアミロースとアミロペクチンの比率を指しています。

アミロースとアミロペクチンはどちらもデンプンの一種ですが、アミロペクチンが100%になるともち米になります。

そこから、だんだんとうるち米になるにつれてアミロースの割合

が増えていき、さらに割合が高くなると、インディカ米のような性質に近づいていきます。

イメージしやすいかと思いますが、アミロースが低いほど粘り気が強くなり、逆にアミロースの割合が高いと、粒立ちのよいお米になります。

一般的には、アミロース含有率が低い方がもちもちしていておいしい、という評価が最近は多く見られます。

最後に、脂肪酸度です。

脂肪酸度は、貯蔵している間に品質が低下していく、いわゆる古米化の指標になります。

新米は、炊いたときにとてもよい香りがしますが、収穫してから時間が経つにつれて、その香りはだんだん弱くなっていきます。

これは、お米に含まれる香り成分が酵素によって分解されていくためです。

脂肪酸というのは、その香り成分が分解された後に生じる成分です。

つまり、脂肪酸度が高いということは、それだけ分解が進んでいるということであり、その分、評価が低くなる関係にあります。

ただし、今回については脂肪酸度は収穫後の時間経過が大きく関係する指標になりますので、気象条件とは少し切り離して考え、今回はタンパク質とアミロースについて主にお話ししていこうと思っています。

先ほどの機械は、再現性と利便性に優れた食味推定を可能にするもので、タンパク質やアミロースの含有率という数値データをもとに、「どのくらいおいしいか」を点数化するための式が使われています。

こちらはその一例で、桜田らによって発表された式では、アミロースとタンパク質がそれぞれ低いほど評価が高くなる、という形になっています。

今回はこの式を用いて、全国の食味マッピングを行っていこうと考えています。

今回は、米・食味鑑定士協会から、産地サンプルをどこで取ったのかというデータと、食味計による「そのお米がどれくらいおいしかったか」という結果について、2020年から2024年度までの5年分のデータを提供いただきました。

これを用いて、その産地の気象データと、タンパク質、アミロースとの関係性を実際に解析していこう、という形になります。

それでは、実際にどのような関係になっているのか見ていきたいと思います。

まず、先行研究より、アミロースとタンパク質がどのような要因によって決定されているのかを示した図になります。

アミロースについては、品種の影響が非常に大きいことが知られています。例えば、ミルキークイーンのような低アミロース米は近年よく知られていますが、このように、もともとアミロースを作りにくい品種もあるほどで、品種によって決まる割合が非常に高いことが分かっています。

そのほかの要因としては、施肥が数パーセント程度影響し、さらに気象条件、特に登熟期の気温などの影響があることが知られています。

一方で、タンパク質については、品種の影響はそれほど大きくありません。その代わりに、施肥、特に窒素を多く入れるとタンパク質の割合が高くなることが知られています。また、それ以外の要因として、こちらも気象条件が関わってきます。

今回は、品種の影響が非常に大きく出てしまうため、いただいた

データの中からコシヒカリに限定し、品種の影響をできるだけ除いたうえで、その中で特に気象条件、たとえば気温などがどのように関係してくるのかを分析しました。

まず、いただいたデータを県別に整理し、アミロース含有率の平均値を地図上に示してみました。色が濃いほど値が高く、薄いほど低いという見方になります。

これを見ると、関東地域や静岡など、太平洋側ではアミロース含有率が低い傾向が見られました。一方で、九州では色が濃く、値が高い地域が見られました。

次にタンパク質について見てみると、逆に日本海側で値が低く、西日本の暖かい地域では高くなっている傾向が見られました。予想としては、標高の高い地域では低くなるのではないかと考えられ、そのような関係性もうかがえました。

このような傾向を踏まえたうえで、実際にはどのような気象要素と関係があるのかを、統計を用いて分析していきました。

手法としては、相関分析とPLS回帰という方法を用いました。統計の説明は難しくなりすぎないように簡潔にしますが、まず相関分析では、気象データと、アミロースやタンパク質といった食味成分との関係を見ます。つまり、気温が上がるにつれて値も上がるのか、あるいは逆に、気温が上がるとアミロース含有率が下がるような負の相関があるのかといったことを、各気象データについて調べていきました。

そのうえで、特に関係が強かった項目について、PLS回帰を用いて、どの要因が食味成分に強く影響しているのかを明確にしていきました。

気象データについては、農研機構が提供しているメッシュ農業気象データを使用しました。これは、日本全国の農地に関して、1日ごとの平均気温や降水量などを記録したもので、予測値なども提供されているシステムです。ここから、日平均気温、最高気温、最低気温、そして最高気温と最低気温の差である寒暖差などのデータを取り出して使いました。

ただ、栽培期間中の平均気温といっても、実際にどの時期の気温が効いているのかは分かりません。そこで、お米の生育ステージごとに分けて分析しました。具体的には、幼穂形成前の栄養成長期、幼穂が形成されて出穂するまでの幼穂形成期、実際に穂が出る出穂期、そして出穂後にお米へ糖やデンプンがたまっていく登熟期の4つに分け、それぞれの時期の平均的な気象条件と食味成分との関係を見ていきました。

まず、アミロースについては、大きく2つの指標が強く反応しました。

1つ目は、幼穂形成期の寒暖差です。寒暖差とは、先ほど申し上げたとおり最高気温と最低気温の差であり、夜の気温が低いほど大きくなる指標です。この寒暖差が大きいほど、アミロース含有率が高くなるという正の相関が見られました。

もう1つは、出穂期の最高気温です。こちらは逆に、気温が高くなるにつれてアミロース含有率が下がっていくという負の相関が見られました。

さらに、PLS回帰によって、どの指標の優先度が高いかを整理すると、6つの指標が特に重要であることが分かりました。その中でも、出穂期前の寒暖差や栄養成長期の最高気温、そしてマイナス方向に強く影響していたのが登熟期の最高気温でした。先ほどの説明と同様に、登熟期の最高気温については負の相関が見られました。

次に、タンパク質について見ていくと、こちらは出穂期の気象条件が強く影響していることが分かりました。日射量や平均気温がと

もに高いときに、タンパク質含有率も高くなっていることが見えてきました。

また、PLS回帰によって特に関係が強い指標を見ると、出穂期前の寒暖差が再び重要な要素として出てきました。これは、先ほどアミロースでも出てきた指標ですが、タンパク質については逆に、含有率を下げる方向に寄与していることが分かりました。

一方で、タンパク質含有率を増やす方向に影響していたのは、登熟期の平均気温や登熟期の日射量でした。

では、なぜこのように、登熟期の平均気温や出穂期前の寒暖差が反応してくるのかについて考察してみました。

まず、呼吸に注目しました。寒暖差が大きい環境では、日中の光合成は十分に行われつつ、夜間の呼吸量が少なくなるという特徴があります。お米の実にデンプンが蓄積していくためには、日中に作られた同化産物を、夜間にどれだけ消費せずに残せるかが重要になります。

そのため、寒暖差が大きい、特に夜温が低い条件では、日中に作られたデンプンを夜に消費しにくくなり、結果としてお米の中に蓄積しやすくなると考えられます。これによって、相対的にタンパク質の割合が下がることも説明できます。

また、登熟期の平均気温や日射量が高いと、光合成が進み、同化産物が増えるため、それがお米の充実にも影響している可能性があります。

一方で、アミロースについては、出穂期前の寒暖差や栄養成長期の最高気温は、光合成量を増やす方向に働くため、プラスに影響していると考えられます。しかし、登熟期の最高気温については、光合成を行う酵素に悪影響を及ぼすため、アミロースの含有率を下げる方向に寄与することが分かりました。

逆に、タンパク質のほうに関しては、出穂期前の寒暖差によってデンプンの割合が増え、その結果、相対的にタンパク質の含有率が下がることが考えられました。

なぜそのようなことが起こるのかという点について、もう少し考察してみます。

まず、呼吸に注目しました。

寒暖差がある場所では、日中に光合成が十分に行われる一方で、夜間の呼吸量は少なくなるという特徴があります。

お米の実にデンプンが蓄積していくためには、日中にためたデンプンを夜の間にどれだけ消費せずに残せるか、ということが重要になります。

寒暖差が大きい場所では、昼間はしっかり光合成が行われ、夜は気温が下がるため呼吸量も少なく抑えられます。

気温が高くなるほど呼吸の速度は上がっていきますので、夜が涼しい場所ほどデンプンが残りやすいという特徴があります。

そのため、寒暖差が大きい場所では、夜間の無駄な消費が少なく、デンプンがしっかり蓄積されやすい、つまり実が詰まりやすいということが考えられます。

次に、最高気温、平均気温、日射量といった指標についてですが、これらは光合成と関係しているのではないかと考えています。

先ほどの結果では、最高気温や日射量はタンパク質を増やす方向に働き、逆にアミロースを減らす方向に影響していることが分かりました。

これはなぜかという、光合成を行う葉緑体の中には、二酸化炭素を体内に取り込んで糖に変える働きに関わる酵素がありますが、この酵素は高温との相性があまり良くないことが分かっているからです。

つまり、気温が高くなりすぎると、光合成に関わる酵素の働きが低下し、その結果として、アミロースの蓄積に不利な条件になると考えられます。

その一方で、タンパク質の割合については、デンプンの増減とのバランスの中で相対的に変化している可能性があると考えています。

以上のことから、気象条件、とくに寒暖差や気温、日射量といった要素が、お米の食味成分に大きく関わっていることが分かってきました。

今後、持続的においしいお米を生産していくことを考えると、中山間地域での生産が重要になってくるのではないかと思います。

温暖化が進むと、おいしいお米を生産できる地域は、だんだんと標高の高い場所へ移っていくと考えられます。

そうなったときに、中山間地域、とりわけ棚田の重要性は、ますます高まっていくのではないかと思います。

中山間地域で限られた面積の中で稲作を続けていくことを考えると、棚田は必ず重要な鍵になると思います。

その意味でも、棚田を保全していくことの重要性が、今回の分析結果からもうかがえるのではないかと考えています。

まとめになりますが、まず、お米の食味は、アミロースやタンパク質の含有率によって説明することができます。

そして、今回の統計解析によって、アミロースについては出穂期前の寒暖差や最高気温などが影響していることが分かりました。

出穂期前や成長期の最高気温に関しては、光合成量を増やす方向に働くため、プラスの影響があります。

一方で、登熟期の最高気温については、光合成を行う酵素に悪影響を及ぼすため、アミロースの含有率を下げる方向に寄与することが分かりました。

また、タンパク質については、出穂期前の寒暖差によってデンプンの割合が増え、その結果として相対的にタンパク質の含有率が下がることが考えられました。

また、登熟期の平均気温や日射量についても、同様の理由から、デンプンの含有率が下がり、相対的にタンパク質の割合が増えるのではないかと考察しました。

棚田が持つ気象条件、例えば日射条件のよさや平均気温の低さは、食味をよくする方向に寄与していると考えられます。これが、棚田米のおいしさであると言えるのではないかと思います。

私の研究における個人的な目標としては、現時点ではまだ推定精度が十分ではないため、機械学習のような複雑な統計手法を用いて精度を高めていくことがあります。

また、今回はコシヒカリに限定して検討しましたが、実際にはコシヒカリを作っている地域は一部に限られると思います。したがって、異なる品種でもどのような関係が見えてくるのか、今後さらに推定していきたいと考えています。

さらに、地球温暖化に伴って、お米の仕組みがどのように変わっていくのかという点についても可視化し、実際においしいお米を持続的に作るためには、どのような対策を講じていくべきかといったことについても示唆できればよいと考えています。

今回は食味のみ注目してお話しましたが、標高が高い場所では、どうしても収量が減ってくると思います。

そのため、今後は食味と収量の関連性、両者の関係を模索しながら、収量と食味の両方を確保できる場所とはどういうところなのか、という点を明らかにしていきたいと考えています。

本日はありがとうございました。

【濱氏】

はい、大石さん、ありがとうございました。

このように、これまで定説のように言われてきたことがあります。例えば、山側のお米はおいしくて、海側のお米はあまりおいしくない、といったような話です。

そうしたことについても、気象データをはじめとする各種データが活用できるようになり、さらに、こうしたデータを誰もが使えるようになってくれば、なぜおいしいのかという点を科学的に証明していくことも、少しずつ可能になるのではないかと思います。

それでは、この発表に関して何か質問のある方は、挙手をお願いいたします。

【参加者】

鹿児島から参りました、イイノと申します。

ご発表ありがとうございました。

アミロースと寒暖差のデータのグラフについて、相関性に少し疑問がありました。ただ、最後のまとめのところで光合成というお話があったので、もしかすると日照量をファクターに入れることで、もう少し相関性が強くなるのではないかと考えたのですが、その理解でよろしいでしょうか。

間違っているという意味ではなく、どうなのだろうと思いついて、質問させていただきました。

【大石氏】

そうですね。真ん中に書いてあるとおり、今回は平均気温、最高気温、最低気温に加えて、日射量と日照時間も、説明変数として統計解析の中で実際に利用しています。

今回用いたPLSという手法は、重要度の高い項目だけを使ってモデル化する点に特徴があります。

日射量が多いと平均気温も高くなる傾向があるため、気象条件の中には相関が強い項目が多く含まれていると思います。

似たようなデータを同時に入れてしまうと、多重共線性といって、モデルの説明力が下がってしまうことがあります。ですので、PLSでは、似たような要素は整理したうえで、重要度の高いものだけを解析に使うという考え方になります。

そのため、今回は日射量が統計的には選ばれなかった、という解釈が適切かと思えます。

データ解析としては、まず一義的に影響の強い説明変数を用いて統計化した方がよいのではないかと考えています。

ありがとうございました。

【濱氏】

ありがとうございます。

はい、ありがとうございます。

ほかに質問、コメント等のある方はいらっしゃいますか。

それでは、お願いします。

【参加者】

福岡から来ました。

おいしいお米の要因として、水についてお伺いしたいです。高いところの水と平野部の水とでは、平野部の水は入れ替わる頻度が低く、高いところの水は常に流れているので、入れ替わる頻度が高いと思います。

また、水温にも違いがあると思いますが、このあたりの要因は、

おいしいお米を作るうえで関係があるのでしょうか。

【大石氏】

ありがとうございます。

まさに水についても、今後扱っていきたいと考えています。

ただ、今回は気象データが比較的簡単に入手できるという点と、水に関するデータは入手しにくいという点がありましたので、まずは気象データだけで解析を行ってみようという段階でした。

また、私の研究もまだ始まったばかりですので、今後の課題として、水のデータをどのように集めていくかということも考えていきたいと思っています。

今後は、水の水データについても集められるように頑張っていきたいと考えています。

【濱氏】

はい。

ありがとうございました。

はい、ありがとうございます。

先ほどのご質問はとても面白い視点だと思いましたので、少し補足させていただきます。

水温を決める要因には、当然ながら気温の影響があります。ですので、このデータを解釈する際には、水温という視点も含まれてくると思います。

例えば山間部では、気温が低いという印象があります。そこから出てくる地下水は、おおむねその地域の平均気温に近い温度になりますので、山の方が水温は低くなると考えられます。

水温が低いと、今度は地温も低くなるのではないかと思います。地温が高い場所と低い場所では、生物の活動量が異なります。例えば、土壌中の微生物の活動量にも差が出てきます。

微生物が活動することで、植物が吸収できる形の窒素が生まれますので、そうした部分にも影響してくるはずですよ。

このように、かなり複合的な要素が関わってくるのではないかと思います。そうした点も含めて、彼はこれからさらに考察を深めていくのではないかと考えています。

ほかに質問のある方はいらっしゃいますか。

【参加者】

ご講演ありがとうございました。

ちょうどこのスライドに関してですが、生育段階ごとの影響を調べていらっしゃったと思います。生育段階のデータ、つまり、この時期にこの生育段階になっているというデータは、どのように取得されたのでしょうか。

【大石氏】

はい。

これは、私の研究の中で最初に最もつまづいたところでもあります。同じ時期で一律に見てしまうと、北の地域と南の地域では、どうしても大きなずれが生じると思います。

そこで、お米の生育を予測するモデルというものがありまして、農研機構から出されているものを用いました。

そのモデルを使って、移植日ごとに、どの時期にどの生育ステージになるのかを予測しました。高性能なPCを用いて大量に解析し、その中で、収量が最も大きくなるタイミングに対応する移植日のデータだけを使って、この地域ではこの移植日に植える、という形で設定しました。

で設定しました。

つまり、移植日ごとに、この時期に植えた場合にはこのステージがこの日付ごろに来て、このくらいで成熟し、その結果、どの程度の収量が見込めるかということが、シミュレーションモデルによって分かるので、その中から最も収量が大きくなるタイミングのデータを採用する、という流れで、こうした栽培期間を設定しました。

【参加者】

ありがとうございます。

【濱氏】

はい。

ありがとうございます。

皆さんにも馴染みのあるもので言うと、桜の開花なども、どのようで見ているかということ、有効積算温度、つまり気温がどのくらい積み重なっているかという考え方があります。お米についても、少し違いはありますが、同じような考え方があります。

彼は、そういった考え方をを使って、自分が用いている気象データから、各地点ごとにその値を計算した、ということになります。

それでは、ほかに質問やコメントはありますか。

あと1件ほどお受けできますが、よろしいでしょうか。

それでは、この後引き続き、総合討論ということで、少しまとめて兼ねて、皆さんとお話ししていきたいと思っておりますので、そちらに移らせていただきます。

それでは、残り時間もあと15分ほどとなりましたので、総合討論に移っていこうと思います。

今回、皆さんにお聞きいただいたテーマはスマート農業でしたが、思っていた以上に、先進的な農業技術の紹介というよりも、それぞれの皆さんの思いやバックグラウンドが伝わる内容だったのではないかと思います。

今、農業が好きであること、自分の地域を愛していること、そうした思いが皆さんにも感じていただけたのではないかと思います。

やはり、農業にはスマート農業という側面がある一方で、地域の風土を維持する役割もあります。ここでいう風土とは、文化も含めた地域全体のあり方のことですが、そうした面についても、皆さんに実感していただけたのではないかと思います。

そのうえで、総合討論として私が感じたのは、今回のお話を聞いていると、スマート農業というのは、自分の田んぼが好きだ、自分の地域が好きだ、という思いを極めていくための技術でもあるのではないかと、ということです。

こんなこともできる、自分の地域をここまで深く追究できる、という意味では、ある意味では少しオタク的だと思いますか、そうした側面も感じていただけたのではないかと、思います。

その一方で、やはり経済的な話も必要だと思います。最後に山田さんへの質問にもありましたが、そこは避けて通れない部分ではないかと、思います。

豊かさというのは、価値としてはなかなか測りにくい面がありますし、それぞれが大切にしているものも異なります。ですので、持続可能性を考えるうえでは、やはり経済の話も必要になってくるのだらうと思います。

例えば一つには、そうした取組が担保する安心・安全や、トレーサビリティの話もあるのではないかと、思います。これはあくまで私の考えですが、そこに価値が生まれるのではないかと、思っています。

これだけこだわって作っている、この人が作っている、というこ

とが見えること自体が、付加価値の一つになるのではないのでしょうか。

先ほど味のお話もありましたが、おいしいということがきちんと担保されている、そうしたものが、皆さんの農業を支える仕組みに変わっていくのではないかと思います。

棚田でスマート農業を進める場合には、そうした側面が特に強いのではないかと感じています。

その中で、私が少し分からないと感じているのは、未来の農業です。皆さんそれぞれに思い描く農業の形があると思いますが、棚田の未来の農業として、どのようなことが考えられるのか、ということです。

これから先、10年後、20年後に棚田の農業がどうなっているのか。スマート農業も2013年頃からと言われて、今ちょうど10年ほど経っていますが、山田さんは棚田の10年後、20年後について、どのようなビジョンをお持ちでしょうか。どのようになっていると予想されますか。

#### 【山田氏】

ありがとうございます。

まさにトレーサビリティの話もありますし、信頼性という点では、私たち消費者の立場からすると、食の安全性も非常に気になる場所だと思います。

議論にも出ていましたが、私たちが入っている三ヶ村は棚田で、しかも最上流にあります。山からの天水を自分たちで掘ったため池にため、そこから水を引いているため、本当に最上流の水を使っているわけです。

そこには混じり気のない水があり、その点でも認定を受けていますし、すべてではないにしても、一部では完全無農薬の農法で作られているという状況です。

一方で、私は平場でも、自分で田んぼを借りて4アールほど、水稲をまったく機械を使わずに作っているのですが、当然、家族のために作っているものですから、薬を使わずにやっていました。

ただ、実際には隣の田んぼから水が入ってきますし、周囲の方がどのようなやり方をしているかによって、自分がどれだけ頑張っているにしても太刀打ちできないところがあります。

そうした制約条件があるというのが、平場の圃場のデメリットではないかと思っています。

そういう意味で申しますと、やはり、ないものねだりの部分もあるかと思っています。平場のような合理性や、一気に作業ができる効率の良さというのは、棚田ではなかなか望めないところではあります。

しかしながら、棚田には棚田ならではの価値があり、先ほどもお示しいただいたように、おいしい棚田米が生まれる理由として、寒暖差があること、日当たりが良いことが挙げられます。日当たりについては、山の条件によって厳しい場所もありますが、それでも大きな要素の一つです。さらに、最上流で混じり気のない水が得られる点も重要です。

こうした要素を、どのようにPRしていくかが重要ではないかと考えています。棚田のイメージで購入してくださっている方もいらっしゃると思いますが、今後は、先生方が取り組まれているような科学的データを用いて、数値として示したり、ビジュアルで伝えたりすることが、より効果的ではないかと思っています。

例えば、私たちが取得している水温データなどを可視化し、消費者の方にも見ていただくことで、一緒に稲の成長を見守るような体験ができれば、よりワクワク感が生まれますし、棚田で農業をやっ

てみたいという方も増えていくのではないかと、本日のお話を伺いながら感じました。

ありがとうございます。

#### 【濱氏】

山田さんのお話も踏まえながら、私自身が考える10年後、20年後の棚田農業についてですが、やはり担い手不足は避けられない問題であると考えています。

その中で、思いを持った方々が、あえて苦勞を引き受けるような形になっていくのではないかと思います。例えば、老後の楽しみとして、あるいは自分の育った地域に戻って農業に取り組むといった形です。

これまで耕作放棄地が増えても、他人の田んぼであるため手を出せなかったものが、今後は費用をかけずに参入できるようになるなど、環境が変化していく可能性もあります。家庭菜園の延長ではなく、実際の田んぼで稲作に取り組むような、より本格的な形が広がっていくのではないかと思います。

そうした意味で、棚田は経済とは少し異なる形で、文化的・社会的な価値として残っていくのではないかと考えています。

一方で、スマート農業の進展により、平場の広大な農地では、収益性の高い農業がさらに発展していく可能性もあります。

実際、先日仙台に伺った際にも、米の価値が上がっていることから、これまで8町歩で営農していた農家が10町歩まで拡大し、さらに力を入れていくという動きが見られました。

このように、誰でも取り組める趣味的な農業の延長と、収益を追求する農業という形で、ある意味での分化や特化が進んでいくのではないかと考えています。

会場の皆様の中で、10年後、20年後の農業について何かイメージをお持ちの方はいらっしゃいますでしょうか。

#### 【参加者】

私自身は、2町半で40枚ほどの田んぼを耕作しています。先ほど山田さんの資料では、きれいに整備された四角い田んぼが多く見られましたが、私のところはほとんどが未整備で、曲がった田んぼばかりです。

そのため、現在の自動走行トラクターのように、A点とB点を設定して直進・往復する方式では、隅まで耕すことができません。実際に使おうとすると、端が残ってしまったり、田んぼから落ちてしまったりする状況です。

ですので、これは希望になりますが、自動車の自動運転のように、カメラで田んぼの形状を認識し、縁に沿って自動で走行してくれるような技術が開発できればよいと考えています。

また、センシングドローンによる生育状況の把握や、農業用ドローンによる可変施肥などにより、品質の均一化や食味の向上は今後必須になると思います。

しかし、現場では担い手不足や高齢化が進んでおり、水管理が大きな課題となっています。中山間地では、水源地まで数百メートルを歩かなければならず、しかも整備されていない素掘りの水路が続いているため、高齢者にとっては非常に危険です。

そのため、監視カメラを設置し、タブレットなどで水位や状況を確認しながら、水門の開閉を遠隔操作できる仕組みが普及すればよいと考えています。

ただし、現状ではコストが非常に高く、水門1基で約800万円、さらにカメラ5台と年間のランニングコストが100万円といった試

算があり、小規模な農家では導入が難しい状況です。

これらがより安価になればよいと考えています。

以上です。

【濱氏】

ありがとうございます。非常に現実的なお話であり、導入コストの問題は大きな課題であると改めて感じました。

【山田氏】

コストの問題はおっしゃるとおり重要です。私たちも、スマート農業実証というモデル事業で支援を受けたことで実現できた部分があります。また、今回の圃場整備についても、県の事業として進めていただいたことが大きいと考えています。

ただ、これを個人の責任やコストベネフィットで判断するのは限界があるのではないかと感じています。棚田を国民共有のインフラとして捉えるのであれば、道路と同様に、税金によって整備されるべき部分もあるのではないのでしょうか。

私たちの地域には観光客も多く訪れます。高級車で訪れて写真を撮り、場合によってはゴミを残して帰る方もいますし、夜間に車が田んぼに突っ込んで被害が出たこともあります。

しかし、その方々は地域のホテルや飲食店で消費をしており、地域経済には貢献しています。

そう考えると、農業は日本の基盤を支える重要な産業であり、一定の範囲までは行政が責任を持って整備し、その上で個人の努力に委ねるという形が必要ではないかと考えています。

【濱氏】

ありがとうございます。お話を伺うと、スマート農業は大規模農地だけでなく、人手不足や高齢化が進む中山間地域にこそ必要な技術であると感じます。

【参加者】

私は週末のみ農業に取り組んでおり、5反程度の規模で、地域の棚田のNPO活動にも関わっています。

農業をされている方であれば、それぞれの課題は日々の作業と直結していると思いますが、棚田においては獣害被害が非常に大きな問題です。

それを一旦置くとしても、一定規模の棚田であれば、トラクターや田植機、バインなどで基本的な作業は可能です。ただし、法面や畦の草刈りなどの作業は依然として負担が大きい状況です。

その中で、私が最も苦勞しているのは雑草です。特に外来種の増加により、田植え後に急速に繁茂する雑草への対応が非常に大変です。

小さいうちは対応できますが、ある程度成長したものをどう処理するかが大きな課題で、多くの場合は手作業に頼らざるを得ません。

自動草刈機のような技術もありますが、実際のところ十分に対応できているとは言えません。この点について、何か解決策があれば教えていただきたいと思っています。

【山田氏】

展示会などでは、海外製の大型自動草刈機などが数多く紹介されていますが、実際の水田内の雑草対策については、依然として難しい部分が多いのが現状です。

私が知る限りでは、ドローンにレーザーを搭載し、カメラで稲と

雑草を識別して、雑草のみを焼くという技術も開発されていますが、実用化にはまだ課題が多いと感じています。

ただ、この問題意識は多くの方が共有しており、今後イノベーションが起こる可能性は十分にあると思います。

【濱氏】

ありがとうございます。

【山田氏】

一点補足させていただくと、圃場の均平化によって水管理を安定させることも、雑草対策の一つになります。以前はそれすら難しい状況でしたので、こうした基盤整備も含めて総合的に取り組む必要があると考えています。

【濱氏】

ありがとうございます。

それでは、非常に活発な議論となりましたが、時間となりましたので、本分科会はここで終了とさせていただきます。

スマート農業に取り組まれている皆様は、客観的な手法を用いながらも、生産者に寄り添い、農業そのものへの理解と愛着を深めているように感じました。

このように、対象を深く知ることが誇りにつながるという姿を体現されているお二人であったと思います。

このような形のスマート農業も、一つの在り方として非常に意義があると感じました。

本日は自由な議論となりましたが、皆様のご協力により、本分科会を無事に運営することができました。心より御礼申し上げます。

最後に、ご登壇いただいたお二人に拍手をお願いいたします。

ありがとうございました。



## 話題提供・事例紹介

### テーマ:スマート農業で次世代に残したい農の豊かさ

よりゆき  
鹿島建設株式会社 技術研究所 山田 順之 氏  
「棚田でのスマート農業の取り組み紹介」

こうたろう  
千葉大学大学院園芸学研究科 大石 耕太郎 氏  
「気象データを活用した米の食味とその地域差の解明」

#### 総合討論・まとめ

参加者で活発に議論を行い、それぞれの課題について考えるような場  
参加者がそれぞれ解決策を考え、持ち帰るような分科会

10

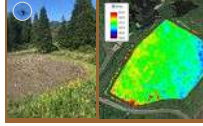
【初年度実証成果】 まつだい棚田バンク、ふれあいファーム三ヶ村 (新潟県十日町市)

実証課題名: 棚田地域の多様な条件不利圃場におけるスマート農業技術を活用した持続可能な営農技術体系の実証  
経営概要: 17.7ha (水稲17.7ha) うち実証面積: 水稲17.7ha  
まつだい棚田バンク 農業部門構成員9名 (その他27名)  
ふれあいファーム三ヶ村 社員1名、パート・アルバイト4名

#### 導入技術

- ①経営・栽培管理システム、②作業者見守りシステム、③ドローン計測による圃場高低差把握技術、④ICT建機による均平作業、⑤水温・水位監視システム、⑥自動給水装置、⑦電動リモコン草刈機、⑧ドローン撮影による葉色数値化システム、⑨ドローンによる農薬散布

#### ③圃場高低差把握技術



#### ④ICT建機による均平作業



#### ⑥自動給水装置



#### 目標

作業時間20%短縮、燃料費の5%削減、収量10%・整粒歩合5%向上、作業者の安心度向上と農作業事故ゼロの達成、緊急連絡可能な情報通信環境整備 (通信圏外ゼロの達成)

### 1 初年度の実証成果の概要

- 経営・栽培管理システム導入による作業者間連携強化、データ共有等、経営改善に資する効果を確認
- 生産者の安心度向上につながる水管理システム通信網を活用した作業者見守りシステムを実現
- 水温・水位監視システム活用による作業時間短縮効果26%を確認
- ドローンによる農薬散布により、従来作業と比較して70%程度の短縮効果を確認

### 2 導入技術の効果

#### 経営・栽培管理システム

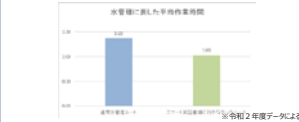
- 分散した圃場におけるグループ作業時の細やかな作業指示、作業時の写真やコメントによるフィールドバンクを行うことで、作業者間の連携強化を図ることができた。
- 作業困難箇所の記録機能などを活用した情報共有ができており、新人教育や対策検討等、経営改善に資する効果を確認することができた。

#### 作業者見守りシステム

- 水温・水位監視システムの通信網を活用し、圃場に作業者が入った際のバイタル情報 (心拍、血圧、歩数) を作業者間で共有する機能を実現。
- 安心度向上につながるとの生産者の評価を得た。

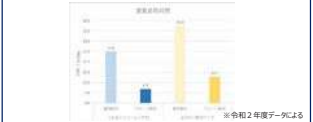
#### 水温・水位監視システム

- 水管理作業時間短縮効果26%を確認 (水位確認のために移動する距離が減少)



#### ドローンによる農薬散布

- 農薬の混合、運搬など間接作業も含め、従来作業との作業時間を比較したところ、73%・66%の短縮効果が認められた。



### 3 今後の課題・展望

- 定型テキスト送信、SOS信号送信機能など、実用性を高めるための作業者見守りシステムの改良
- 生産者が手軽に行えるドローン高低差測定の実現のための改良
- 使用方法の検討、利用可能マップの作成等による電動リモコン草刈機の利用頻度の向上
- コロナウイルスによる設置遅延や長梅雨の影響を受けた自動給水装置、葉色数値化システムの確実な実施

#### 問い合わせ先

鹿島建設 (株) 山田 順之 (Email: yoriyuki@kajima.com)

スマート農業分科会

---

**ビッグデータに基づく  
気象条件と米の食味の関係性の解析**

---

千葉大学大学院園芸学研究所 大石耕太郎  
2025年11月1日

[ 目次 ]

---

- 01 自己紹介  
研究に至るきっかけ
- 02 おいしさを数値化する  
成分による味覚の感じ方の違い
- 03 気象条件が与える影響  
成分の蓄積メカニズム
- 04 まとめ・質疑応答  
総括・今後の目標
- 04 まとめ・質疑応答  
総括・今後の目標



01

**自己紹介**

研究に至るきっかけ

[ 自己紹介 ]

大石 耕太郎

千葉大学大学院園芸学研究所  
生物環境気象学研究室

2002年生まれ 22歳 修士1年  
出身：大阪府豊能郡能勢町



[ 自己紹介 ]

ルーツ： 大阪・能勢



ながたに  
長谷の棚田 #日本の棚田百選



https://www.town-of-nose.jp/access

[ 自己紹介 ]

➢ 米農家のひとり息子

栽培品種：きぬむすめ  
今年は“ゆうだい21”にも挑戦しました

**自分の家の米がうまい！！**

ただ、なぜ美味しいのかはわからない  
科学的な根拠が知りたい



[ 自己紹介 ]

➢ 3年前まではキヌヒカリも作っていた・・・

温暖化、夏の猛暑 → 白未熟粒増加 品質維持の難しさ

慣例的な作付け計画の見直し **喫緊の課題**

- # 米の価格高騰
- # 将来の気候変化への対策

→ 栽培環境と米の品質のメカニズムの解明

収量だけでなく“味”も重要ではないか

02

**おいしさを数値化する**

成分による味覚の感じ方の違い

【おいしさを数値化する】

---

食味試験



日本穀物検定協会  
URL: <https://www.kukoku.or.jp/foods.html>



米・食味鑑定士協会  
URL: <https://www.sachin-hakobai.or.jp/>


【おいしさを数値化する】

---

日本穀物検定協会の場合：食味ランキング

コシヒカリ産地と食味評価  
(穀物検定協会、2018)

明確に地域差がある



各地域の代表的な産地の米を評価  
→ 地域単位の結果

食味試験：  
エキスパートによる官能評価  
基準米との比較によるもの

「特A評価を受けた地域で作った米」  
→ ブランド化、市場価格の上昇

【おいしさを数値化する】

---

日本穀物検定協会の場合：食味ランキング

ただ、おいしさに点数をつける：主観的、非科学的

同じAランクでも“ばらつき”がある：非連続性

広域のデータがない：統計の正当性

→ 統計の利用・モデル化はむずかしい...

【おいしさを数値化する】

---

米・食味鑑定士協会の場合：米・食味分析鑑定コンクール

▶ 腕利きの個人生産者が対象

全国各地から集まる → サンプル数が多くなる

2023：4,952サンプル、2024：4,585サンプル

人の手による官能試験だけでは、足りない

食味分析計の導入

米の成分測定により、食味を推定する



食味分析計 静岡製機

【おいしさを数値化する】

---

米・食味鑑定士協会の場合：米・食味分析鑑定コンクール

食味分析計

近赤外光を用いた分析により、  
米の品質に関わる成分および食味を推定する

タンパク質含有率

アミロース含有率

脂肪酸度



食味分析計 静岡製機

【おいしさを数値化する】

---

タンパク質含有率

タンパク質含有率が高い米ほど食味は低下する  
炊飯時、デンプンが糊化を阻害し、水分吸収が低下  
→ 硬く、バサバサとした食感に

アミロース含有率

アミロースとアミロペクチンの比率  
低 ねばりけ ←→ 粒立ち 高

脂肪酸度

脂肪酸度は貯蔵中の品質低下（古米化）を示す  
新米の脂肪酸度が低いほど食味が良好  
玄米の脂肪酸度が上昇すると「香りが鈍化する」傾向

稲津穂 (2023) 北海道産米の品質改善に関する研究 農学科学, 20(1), 191-197.

【おいしさを数値化する】

---

再現性・利便性に富んだ食味の推定

$$y = -0.1522 \times x_1 - 0.6804 \times x_2 + 8.1948 \quad (\text{桜田ら, 1988})$$

$x_1$ ：アミロース含有率、 $x_2$ ：タンパク質含有率

米・食味鑑定士協会より  
サンプルの産地と食味計の結果  
のデータ提供（5年分）

広域かつ栽培技術の変動が小さいデータ

03

---

気象条件が与える影響

成分の蓄積メカニズム

---

[ 気象条件が与える影響 ]

食味に関わる米の理化学的特性値に及ぼす品種、施肥の影響度(寄与率)



→ “コシヒカリ” に絞って品種の影響を除去

[ 気象条件が与える影響 ]

➢ アミロースの分布傾向

- 太平洋側で低いが、九州では高い **最高気温?**

➢ タンパク質の分布傾向

- “日本の米どころ” で低く、西日本で高い **平均気温?**

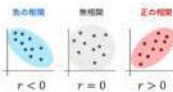
実際はどの気象要素と関係性があるのか

→ 統計を用いた分析

[ 気象条件が与える影響 ]

統計手法

1. 相関分析：気象要素と各成分の相関関係



2. PLS回帰（部分的最小二乗法）：

「どの要因が最も食味成分に影響しているか」を明確に

→ 重要な要素のみを用いた推定式の作成

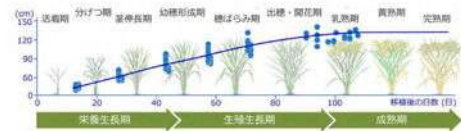
[ 気象条件が与える影響 ]

材料：気象データ

農研機構 メッシュ農業気象データ

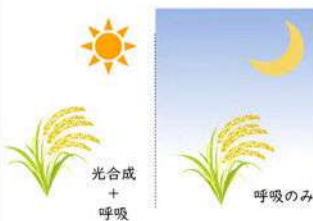
→ 日平均気温、最高気温、最低気温、寒暖差、降水量、日射量、日照時間

栄養生長期、幼穂形成期、出穂期、成熟期 **ステージごとの平均値**



[ 気象条件が与える影響 ]

考察：呼吸



1. 寒暖差

光合成量は多く、呼吸量は少なく

気温が高いと糖の消費量が多い

(寒暖差 → デンプンの無駄づかいが少ない)

相対的なタンパク質含有率の低下

[ 気象条件が与える影響 ]

考察：光合成



2. 最高気温

3. 平均気温・日射量

炭素固定活性の低下

アミロース合成活性の低下

呼吸量の増加 相対的なタンパク質増加

光合成効率の適温：25～30℃

(作物生理学の基礎, 平澤ら)

4. 日照時間：長いほど糖が蓄積されやすい

04

棚田の気象条件と食味

棚田と平野部の比較

[ 棚田の気象条件と食味 ]

棚田の特徴的な気象条件：中山間部

1. 寒暖差が大きい
2. 日当たりのよさ
3. 過剰高温を避けられる

光合成産物の蓄積効率を最大化

棚田米がおいしい理由



【 棚田の気象条件と食味 】

実際に大分を見てみると...

1. 標高が上がるにつれて、食味評価が高くなる
2. 特に沿岸部は夜温が高くなるため、評価が低い

持続的なおいしい米生産

中山間部での生産が重要  
棚田の保全の重要性



△：別府市内の棚田

11月2日 (日)

## A 内成棚田コース

(昼食なし)

[参加費] 2,000円

〈コース〉

ビーコンプラザ→内成棚田→ビーコンプラザ



## B 2つの棚田を巡るコース

(昼食付)

[参加費] 3,000円

〈コース〉

ビーコンプラザ→堂面棚田→ご昼食(みょうばん湯の里)→  
内成棚田→ビーコンプラザ



## C 2つの棚田と志高湖を巡るコース

(昼食なし)

[参加費] 2,000円

〈コース〉

ビーコンプラザ→大所棚田→志高湖→東山棚田→  
ビーコンプラザ



## D 堂面棚田と別府観光コース

(昼食付)

[参加費] 3,000円

〈コース〉

ビーコンプラザ→堂面棚田→ご昼食(みょうばん湯の里)→  
アフリカンサファリ→ビーコンプラザ



## E 別府観光と天間棚田コース

(昼食付)

[参加費] 3,000円

〈コース〉

ビーコンプラザ→別府ロープウェイ→ご昼食(おにやまホテル)→  
天間棚田→ビーコンプラザ



## F 天間棚田と別府観光コース

(昼食付)

[参加費] 3,000円

〈コース〉

ビーコンプラザ→天間棚田→血の池地獄→ご昼食(おにやまホテル)→  
海地獄→ビーコンプラザ



## G 地獄めぐり・地獄蒸しコース

(昼食付)

[参加費] 5,000円

〈コース〉

ビーコンプラザ→別府地獄めぐり→ご昼食(地獄蒸し)→  
地熱観光ラボ縁間→ビーコンプラザ



## 【共同宣言】

## 内成棚田の会 川島 千明



皆さん、おはようございます。

ゆうべ、温泉にゆっくり浸かれましたか。

おいしい料理、召し上がっていただけましたか。

今から本日エクスカッション等がある、あるいは帰るという方もいらっしゃると思うんですけども、残りの別府の滞在をどうぞ楽しんで欲しいと思います。

「内成の棚田とむらづくりを考える会」通称、現「内成棚田の会」の事務局の川島千明です。

私は茨城県古河市に生まれ、関東平野のど真ん中で東京圏内の通勤通学は当たり前、中心市街地の衰退、農地の宅地化などを目の当たりにしながら満員電車で揺られ日々の生活に追われ、高校生まで生活していました。

中心市街地の活性化や地域おこし、観光の要素を活用したまちづくりなどに興味を持ち、当時開学して間もない関東にはない特色を持った大学の存在を知り、浪人生活を経て19歳のとき大学進学のために初めて別府に来て、環境の違いすべてにとっても驚いたことを今でも鮮明に覚えています。

なんと別府はすごいところなのだろうと。

大学生活では各地から集まった仲間とともに多様な価値感や文化・多文化共生を知り、地域おこしとは何か、観光によるまちづくりの課題は何なのか、そういう分野を研究し観光立国の1つであるスペインにも調査へ行き、地域づくりへの明確な答えは出ないまま、卒業後その進路にさまよい納得のいかないまま別府に残ることを決め、24歳のとき当時お世話になっていた大学の教授が、内成地域での研究活動をするということで一緒に参加することになり、仕事をしながら大学の教授や学生と一緒に当時住んでいた亀川から内成に通うという生活が始まりました。

内成という地域に関われば関わるほど、通えば通うほ

ど、内成の人たち生活している人々に魅了され、内成に行く日を少しでも増やしたくて、当時の仕事の休みを週休2日から3日に変えてもらい、時間さえあれば内成に行っていました。

そんななか29歳のとき、このまま通いながら内成地域に関わることの限界を感じ始めていました。

兼業しながら地域のことに取り組む内成の人のたくましい姿を見ながら、まだまだ知らないことが多すぎて内成に住まなければだめだと思うようになり、仲良くしていた内成の方に話をしたところ空き離れの蔵を紹介していただきました。

30歳のときに晴れて内成住民となり、喜んでいたのもつかの間、農業の「の」の字もわからない私は真似事のように田んぼや畑などをやってみましたが、中山間地域という場所に住んだこともなく、機械も農地もない、農作業もやったこともない、そんな私は到底1人では何もできず多くの人から支えながらも、豊富な地域資源がある内成の人との暮らしはとても楽しく生活し、このままでいいなあと考えていたものでした。

40歳を迎えたとき、病気になりました。

生きづらさを感じていた私は長生きしたくないと思っていて、今が楽しければいい、そんな気持ちで日々を送っていたこともありましたが、病気になったときは、生きることに前向きではなかったのに死への恐怖心が一気に上がり頭が真っ白になりました。

私は農家の子どもではありません。

農地もなく、機械もなく、まして中山間地で生きる人々について、24歳のとき内成に出会うまで知ることもありませんでした。

すいません。

川島の祖父より前の先代の方は当時住んでいた湖畔の

水の汚染により農地も住むところもなくし、今の私の実家の周辺に移り住んで農業をしていました。

時代の変化とともに、農地はほとんどなくなってしまいました。

病気になって気づきました。

農業を知らない私にも、農家の血を流れているということ。

先祖代々守れない土地があるということ。

農地が失われてしまうこと。

守っていくべき、最高の場所に出会えたことを。

そして体の一部を失っても、私の体の中には自然に向き合いながら、自然とともに生きようとするエネルギーがみなぎっていて、内成という場所で生活していたら気力も体力も精神的にも満たされ、自分が生きている、いや、生かされているということを実感しました。

この10年間子どものときから内成で仕事をしている、60代70代、80代90代、そんな人たちとまざって草刈や共同作業、一緒に出てきましたが藁をも掴む思いで背中を追いつつ、懸命についていったつもりです。

草刈り機の使い方、農業を知らない私に厳しくも優しく教えてくれるその姿はとてすてきで、話を聞かされたときに自然とともに生きている皆さんの知恵や昔話、農業への姿勢はとてワクワクするものです。

また、中山間地域という耕作にも厳しい条件の中、内成の人たちは効率のよい1人農業をしているということにとて驚きました。

私はそれを人に、友達に自慢したくてしょうがありません。

子どもの頃の話や、ときに見せる少年のような顔つきで作業中に果樹やら、ちぎって食べるそんな姿を見ると何だかほほえましいです。

後継者がいないという彼らにとって、縁もゆかりもない農業も知らない私は誰もいないなら私がやってみよう、そんな気持ちでいつも取り組んでいます。

みんなからすれば、まだまだひよっこで手がかかる存在だと思いますが、そして本当は皆さんに後継者、自分の子どもたちがいることも知っています。

今更言えないかもしれませんが、胸の奥にしまっている思いを後継者となる息子、娘、その子どもに伝えてはどうでしょうか。

言えないときは小言のように私に言っていただけ

ば、一緒に伝えるすべを考えたいと思います。

そしてもう1つは内成という地で、5年後も10年後も20年後も過ごしていくにあたり、どんな将来像を描いているのか、教えて欲しいと思っています。

この選択肢の多くある時代に私は茨城から別府、内成へと移住し、どこかふわふわと地に足がついていないところもありましたが、42歳の私は病気を機に気持ちを改め、別府という大きな町ではなく、人口150人ほどでみんなの顔がよくわかり、米をつくり内成への思いをとて強い思いを抱いている人がいる、そんな地で生きていくと決めたものです。

例えるなら内成の人口約150人の人が、丈夫な稲藁を内成にあるイチヨウの木ほどの太い稲藁を、とてその藁は頑丈なんです、私はその藁に離れまいとしがみついています。

その藁を切るかどうか皆さん次第です。

いらないと藁を切られてしまえば私の役目、命は尽きることとなるでしょう。

でも、藁が細くなって一本になっても私は絶対に手放しません。

これから皆さんが80代90代を迎えていくにつれて、1枚でも田んぼが続けられてよかった。

内成に生まれてよかったと、皆さんの顔に笑顔と安堵の顔が見えたとき、私の地域活性化についての問いの答えが見えると確信しています。

私は内成の皆さんとともに生き、ずっと、ずーっとこの先も背中を追っていきたく思いますのでご指導よろしくお願ひします。

全国から集まった皆さん、中山間地域で生きる皆さん、サミットが始まって30年が経過しましたが皆さんの地域のその後はどうでしょうか。

課題の解決ができていますか。

課題の解決のためにそれぞれの地域に生き、維持している皆さんがどうしたいのか、誰のための米づくりなのか。

あるいはしたくないことやできないこと、もって考えてみてください。

皆さんが一生懸命に先祖代々の土地をどうにかこうにか、時代に翻弄されながらも維持してきたからこそ今があります。

当たり前の景色は生きてきた場所が違えば見方は違い

ます。

環境が変化しても、その条件の厳しい中山間地域で先祖代々受け継いだ土地土地へ、現代の技術や機械を活かして組み合わせながら、それぞれが懸命に作るからこそおいしいお米となっています。

この観光温泉都市の別府にも、昔は農地がありましたが開発が進み山間地に広がるだけとなりました。

私が来た20年もの間、農地は減少し休耕田や遊休農地が増えてきています。

中山間地域に住む皆さんは、何十年もかけて農地を守ってきたわけですが、地域以外の人たち、つまり農地を失った人たちがようやく守らなければならないものがあると気づき始め、何とかしようと奮起しているんです。

自分の体の中に眠る、農地への思いがふつふつと上がってきている人が増えている、そんな世の中です。

その内容は中山間地域で生きている人の考えるものとはかけ離れているかもしれません。

だからこそ中山間地域に生きる人がもっと夢や希望、課題、何でも思うことを発信することでその溝は埋められ、あらゆる関係団体が一般の市民が、農業を知らないそんな人たちがともに歩んでいける可能性があります。

私の中には、この胸の奥に忍ばせた個人的な思いをこのような場で語っていいものかと不安に駆られることもありましたが、本サミットにおいて、このような役を任命していただいた多くの方に、言葉では表せないほどの感謝の意を込めて共同宣言を読み上げます。

#### 第30回全国棚田サミット共同宣言案。

棚田は、先人たちから受け継いだ貴重な遺産であると同時に、未来世代へと引き継ぐべき国民共有の財産です。棚田の未来は、私たち一人ひとりの想いと行動にかかっています。この別府の地で新たに芽生えた絆を大切に育み、全国の棚田地域の発展に向け、想いと願いを込めて、ここに宣言します。

一つ、私たちは、棚田地域振興法の理念に基づき、地域の実情に応じた持続可能な棚田の保全と活用に取り組みます。棚田地域の未来を担う多様な人材の確保と育成に努め、地域内外からの新規就農者の受け入れを図ります。同時に、地域住民、行政、企業など多様な主体との

連携を強化し、幅広い層の参画を促すことで、棚田の多面的機能を最大限に発揮させるとともに、棚田地域の活力を高めます。

一つ、私たちは、棚田での農業生産性向上と労働負担軽減のため、スマート農業の導入を進めます。同時に、先人たちから受け継いだ伝統的な農法や知恵を大切に継承し、新旧の技術を融合させた持続可能な棚田農業を目指します。

一つ、私たちは、都市住民や観光客など、多様な人々が棚田地域と関わる機会の創出に取り組みます。農業体験、エコツーリズム、教育旅行の受け入れなどを通じて、棚田の魅力を広く発信し関係人口の拡大と地域経済の活性化を図ります。

一つ、私たちは、気候変動がもたらす影響に適応し、棚田の防災・減災機能を強化する取り組みを進めます。伝統的な水管理技術の継承と現代技術の融合により、災害に強い棚田づくりを推進し国土保全に貢献します。

令和7年11月2日、第30回全国棚田サミット、以上、宣言いたします。

## 【次期開催地挨拶】

静岡県浜松市市長 **中野 祐介**



皆さん、こんにちは。  
次回開催地であります静岡県浜松市の市長を務めております、中野祐介でございます。  
ただいま長野別府市長から協議会旗をしっかりと引き継がせていただきました。  
今回の第30回棚田サミットは、大変すばらしい大会として開催されました。  
私どもも、この別府市の皆様に負けないよう、次回開催に向けてしっかりと準備を進めてまいりたいと考えております。  
今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。  
それでは、私ども浜松のPRをさせていただきたいと思っております。  
まず最初に、浜松のまちの紹介、そして棚田の紹介を動画にまとめておりますので、そちらをご覧くださいと思います。  
それでは、よろしく願いいたします。  
はい、ありがとうございます。  
私ども浜松市は、政令指定都市の一つでございます。  
浜松といいますと、よく「ものづくりのまち」と言われます。  
ホンダ、スズキ、ヤマハなど、浜松から生まれ、世界企業へと成長した企業が数多くございます。  
しかしながら、実は農業という点におきましても、浜松市は大きな特徴を持っております。  
農業産出額は、全国の市町村の中で第6位という、全国有数の農業都市でもございます。  
温暖な気候、豊富な水、豊かな土壌、そして全国でも有数の日照時間。  
農業を営むうえでも大変恵まれた土地、それが浜松でございます。  
そうした浜松には、特徴的な棚田が三つございます。  
いずれも「つなぐ棚田遺産」に登録されている棚田でございます。  
まず一つ目は、大栗安の棚田でございます。  
急傾斜地に高く積まれた石積みが特徴的な棚田で、棚田のすぐ横には茶畑が広がり、静岡県ならではの風景を形づくっております。  
続いて、久留米木の棚田でございます。  
こちらは、今からおよそ10年ほど前になりますが、大河ドラマ「おんな城主 直虎」にも登場した場所でございます。  
村人を助けた竜宮小僧の伝説が今も語り継がれている

棚田でございます。  
そして三つ目が、白檀の棚田でございます。  
こちらは、一度荒廃してしまった棚田を、約20年前に市民の力によって復田した棚田でございます。  
遠くに浜松の中心市街地を望むことができる絶景の棚田でもございます。  
本日は、この三つの棚田をこれまで大切に守り、つないでこられた保全会の皆様、総勢20名の皆様がここ別府にお越しくださっております。  
それでは、浜松のPR隊の皆さんに壇上へ上がっていただきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。  
少し人数が多く、上がるのに時間がかかっておりますが、大丈夫でしょうか。  
はい、ありがとうございます。  
さて、来年開催されます第31回棚田サミットでございますが、令和8年11月14日、15日の2日間、浜松駅すぐのアクトシティ浜松において開催を予定しております。  
皆様、どうかお忘れのないよう、ぜひメモをしていただき、ご予約を入れていただければと思います。  
先ほどのPR動画にもございましたが、浜松にはすばらしい棚田はもちろんのこと、さまざまな観光名所がございます。  
そして何より、鰻や餃子をはじめとしたおいしい食べ物もたくさんございます。  
多くの魅力をご用意して、皆様のご来訪を心よりお待ちしております。  
どうぞ来年、ぜひ浜松へお越しいただきますようお願い申し上げます。  
結びにあたりまして、今回の第30回という記念すべき棚田サミットの開催にご尽力されました実行委員会の皆様、長野市長をはじめとする別府市、大分県の皆様に、心から敬意と感謝を申し上げます。  
また、本日ここにお集まりの棚田を守り、つないでいくという思いを同じくする皆様が、これからはますますお元気で活躍されますことを心よりお祈り申し上げます。  
以上をもちまして、次期開催地、浜松市からのごあいさつとさせていただきます。  
来年、浜松で皆様をお待ちしております。  
どうぞよろしく願いいたします。  
ありがとうございました。

## 【お礼の挨拶】

第30回全国棚田千枚田サミット実行委員会 会長

別府市長 **長野 恭紘**



皆さん、おはようございます。

第30回サミットは、記念すべき節目の大会となりましたが、ここまで皆様ご満足いただけておりますでしょうか。

はい、ありがとうございます。

少し無理に拍手をお願いしたようで大変恐縮ではございますが、残すところ、この後の現地見学会、いわゆるエクスカージョンのみとなりました。

振り返りますと、この準備は1年ではなく、1年半以上前から始まりました。

棚田関係者の皆様をはじめ、農業者、生産者の皆様、そして私ども市役所も、ほぼ全庁体制に近い形で取り組み、さらに民間の皆様のお力もお借りしながら、ようやくここまでたどり着くことができたという思いでいっぱいでございます。

やはり、これだけの大会を開催するというのは大変なことでもあります。

しかし同時に、大きな充実感も感じております。

全体会では、中島先生のお話を拝聴し、改めてその奥深さを実感いたしました。

正直なところ、中島先生のお話の真髄は、やはり3時間ほどかけて伺わないと十分には理解できないのではないかと感じた次第であります。

今回、時間の関係でかなり内容を短縮させていただいたことについては、大変申し訳なく思っております。

ぜひまた機会がありましたら、中島先生のお話をゆっくりとお聞きする機会があればありがたいと感じておりますし、今後そうした機会が生まれることにも期待をしております。

また、分科会におきましても、スマート農業をはじめ、ICTを活用した最先端の農業技術、そしてこれから

棚田をどのように守り続けていくのかという課題について、非常に深い議論が交わされたのではないかと感じております。

大変充実した会議になったのではないかと感じております。

さらに交流会では、想像以上の盛り上がりがありました。

これはまさに、ご参加いただいた皆様お一人お一人が会場を盛り上げてくださったおかげであり、まさに絆を感じる、心が一つになった交流会であったのではないかと感じております。

そして先ほどの共同宣言、千明さんのお話を伺い、胸に深く響くものがありました。

最近では年齢のせいか、少し涙もろくなりまして、その思いを聞きながら、この気持ちを私たちはどのように実現していくのか、それはまさに私たちの責任でもあるのだと改めて感じたところでございます。

一人の市長として、また一人の政治に携わる者として、何とかこの千明さんの思いに応えていきたい。

そのような決意を新たにいたしました。

棚田が抱える問題というのは、実は棚田だけの問題ではないと感じております。

例えば別府市でも、人口11万人のまちではありますが、すべての産業において担い手不足が進み、地域の役員を担う人がいない、自治会への加入者が減っているなど、さまざまな課題が存在しています。

こうした課題に対して、どのように具体的な対策を講じていくのか。

別府市でも取り組んでいるところでございますが、棚田というのは、そうした地域課題を凝縮した象徴的な場所なのではないかと感じました。

しかし逆に言えば、棚田の課題を解決していくことは、地域全体の課題を解決していく大きなきっかけにもなるのではないかと実感しております。

ぜひ千明さんの思いに応えていきたい。

そして、棚田という場所から地域課題に切り込んでいく。

そのような取り組みを進めていきたいと考えております。

昨日も申し上げましたが、10年先では遅いと思いません。

しかし、3年では短すぎる。

そこで5年という区切りを設け、この5年間の中で、皆様が希望を見出すことができるような成果を具体的に生み出していきたい。

そのためにも、それぞれが役割を分担しながら、一步一步着実に取り組んでいきたいと決意しております。

今回、協議会を含めると3日間という短い時間ではありましたが、同じ思いと課題を共有する皆様がここに集まり、共に考え、語り合うことができました。

この経験こそが、次の行動への大きな力になるのではないかと思います。

今日が終わりではありません。

今日がキックオフだと、私たちはそう考えております。

ここから、それぞれの地域で、一人一人ができることを考え、具体的な一歩を踏み出していく。

その行動こそが大切であると思っております。

ぜひ皆様とともに、確かな一歩を踏み出していきたいと思えます。

最後に、この第30回サミットの開催にあたり、ご尽力いただきました棚田関係者、農業関係者、そして多くの関係者の皆様に、心より感謝と御礼を申し上げます。

また、先ほど協議会旗を引き継がれました、浜松市の中野市長へ、この思いをしっかりと引き継がせていただきたいと思えます。

どうやら、前回大会の実行委員長が協議会会長になるということで、私も自動的に会長になる予定でございますので、今後もしっかりと皆様の活動を見届けてまいりたいと思っております。

最後になりますが、昨日の交流会の締めくくりでも行いました言葉が、今の私たちの気持ちにぴったりではないかと思っております。

猪木さんの「道」という言葉でございます。

その言葉を紹介した後、皆様と一緒に「1・2・3・棚田！」で締めくくりたいと思います。

それでは、少し恐縮ではございますが、皆様ご起立をお願いいたします。

それでは「道」を読ませていただきます。

この道を行けばどうなるものか。

危ぶめば道はなし。

踏み出せば、その一足が道となり、その一足が道となる。

迷わず行けよ。行けばわかるさ。

「いくぞー！」

「オー！」

「1・2・3・棚田アー！」

ありがとうございました。



第30回  
全国 **棚田** サミット in 別府   
千枚田

～ 棚田でウエル 想いと願いをコメて ～

第30回全国棚田（千枚田）サミット実行委員会事務局  
〒874-8511 大分県別府市上野口町1番15号（別府市役所 農林水産課内）  
TEL:0977-21-1133 FAX:0977-23-0552